

# TRANSFORMABLE TYPE MS/MOA

双葉社MOOK

**GREAT  
MECHANICS**  
メカニクス  
スペシャル



モビルスーツ  
全集⑩

可変モビルスーツ/  
モビルアーマー  
BOOK

## 可変モビルスーツ モビルアーマー BOOK



TRANSFORMABLE TYPE 双葉社MOOK

# MS/MMA

**GREAT MECHANICS**  
プラモデルメカニクス  
スペシャル



モビルスーツ  
全集⑩

可変モビルスーツ/  
モビルアーマー  
BOOK

## 可変モビルスーツ モビルアーマー BOOK

MSZ-006 Zガンダム、ORX-005 ギャプラン、NRX-044 アッシマー、  
MSZ-010 ZZガンダム等、可変モビルスーツ／モビルアーマーたちを徹底解説!

ニュータイプ専用MS専門書

一冊まるごと

## 可変MS/MMA本

MSZ-006 Zガンダム  
MSA-005 メタス  
RX-110 ガブスレイ  
RX-139 ハンブラビ

ORX-005 ギャプラン  
NRX-044 アッシマー  
PMX-000 メッサーラ  
AMX-003 ガザC

MSZ-010 ZZガンダム  
RAS-96 アンクシャ  
RGZ-95 リゼル  
ZM-S08G ゾロ etc



TRANSFORMABLE TYPE 双葉社MOOK

# MS/MOA

**GREAT  
MECHANICS**  
プラモデルメカニクス  
スペシャル



モビルスーツ  
全集⑩  
可変モビルスーツ/  
モビルアーマー  
BOOK

## 可変モビルスーツ モビルアーマー BOOK





# C o n t e n t s

006 Introduction

008 カラー設定画&イラストラインアップ

014 可変MS可変MAが活躍した戦場

018 **ティターンズ系  
可変機の光と影**

020 **各種機体解説**

メッサーラ／アッシマー／ギャブラン／  
サイコ・ガンダム／ガブスレイ／  
ハンブラビ／バウンド・ドック／  
サイコ・ガンダムMk-II

034 コラム  
ティターンズテスト部隊と可変機開発

036 **エゥーゴ系の  
可変MSの根幹「Z計画」**

038 **各種機体解説**

メタス／メタス改／  
ガンキャノン・ディテクター／Zガンダム／  
Zガンダム3号機／Zプラス／ZII／  
プロトタイプZZガンダム／ZZガンダム／  
Sガンダム

054 **ネオ・ジオン系の  
可変MSの発展と衰退**

056 **各種機体解説**

ガザC／ガザD／ガ・ゾウム／パウ／  
カプール／ジャムル・フィン／ガザE／  
リバウ／シャンプロ

068 **地球連邦軍系可変MSが  
模索した新たな道**

070 **各種機体解説**

リ・ガズィ／リゼル／デルタプラス／  
リ・ガズィ・カスタム／ガンダムデルタカイ  
／デルタガンダム／デルタガンダム式号機

080 コラム  
宇宙世紀0150年代の可変MS事情

084 **THE対決**

●Zガンダムvsギャブラン  
●デルタプラスvsリゼル  
●ZZガンダムvsパウ  
●ガザCvsハイザックvsネモ  
●ハンブラビvsメタス  
●サイコ・ガンダムMk-IIvsSガンダム

090 可変機の武装

094 可変モビルスーツ&モビルアーマー  
短すぎた“時代のあだ花”

098 検証  
可変モビルスーツ／可変モビルアーマー  
その戦略的・戦術的意義とは？

102 可変MS設定資料

124 可変MS&MAスペック一覧













## モビルスーツの イノベーションとして登場し 瞬く間に消えていった 可変モビルスーツ／モビルアーマー

可変モビルスーツ、モビルアーマー。  
その登場は、作品としての『機動戦士  
ガンダム』シリーズと、作品世界観であ  
る「宇宙世紀」の歴史軸の中、ともにエ  
ポックメイキングといえる出来事だった。  
作品面では、79年から放送された『機  
動戦士ガンダム』の続編にあたる『機動  
戦士Zガンダム』（85年）の製作に際して、  
モビルスーツにさらなるインパクトを与  
える要素として、さらに当時人気のあっ  
た『超時空要塞マクロス』（82年）や『戦  
え！ 超ロボット生命体トランスフォー  
マー』（84年）などの作品に、キャラク  
ター商品力などで対抗するために登場し  
たという経緯があった。

一方で、作品内では、可変モビルスー  
ツの登場で、よりスピーディーでバラエ

ティに富んだ戦闘シーンが展開され、「ガ  
ンダムブーム」以降のロボット作品とし  
ては、より時代にあった画作りがなされ  
ていた。また、デザインという意味でも、  
新人デザイナーが数多く起用投入され、  
その変形ギミックもあいまって、新しい  
モビルスーツ像が構築されていった。

これらの新しいモビルスーツのデザイ  
ンは、これまでのガンダム世界のイメー  
ジを壊しかねないものもあった。しか  
し、「ムーバブル・フレーム」という設  
定などにより補完され、可変という一見  
無駄にも思える機能を、説得力のある形  
で世界観にフィットさせ、以後に続く『ガ  
ンダム』シリーズの中では、定番の一つ  
になっていった。

しかし、こうして誕生した変形モビル







スーツの数々は、そのデザインが斬新すぎたのか、従来の『ガンダム』のファンからは、その反応は必ずしも良いものではなかった。「子供っぽく（あるいは玩具っぽく）見えたのである。

しかし、プラモデルなどの製品の販売面では好調であり、次回作で続編にあたる『機動戦士ガンダムZZ』（86年）が製作された。これはひとえに新しい世代のファンたち（つまり、玩具やプラモデルのメインターゲットである小中学生）を掴んだということでもあり、変形モビルスーツはガンダムワールドの拡大に役買ったと言って過言ではないだろう。

『ガンダムZZ』では、変形からさらに合体の要素が加わることになる。そもそも、オリジナルの『機動戦士ガンダム』でも、ある意味、当時の作品のセオリーであった変形、合体の要素は取り入れられていた。それ自体は作品世界観に沿うものであったともいえるし、結果的に変形合体の要素は現在の作品に至るまで受け継がれており、新作の『ガンダム』作品に、変形モビルスーツは必ずといっていいほど登場している。

そういった経緯を鑑みても、可変モビルスーツという存在は、現在に至るまでのモビルスーツの魅力の一端を表し続けているともいえるのだ。

本書はそんな可変モビルスーツ、可変モビルアーマーが登場する宇宙世紀作品、その曙にして最盛期である宇宙世紀0087年のグリプス戦役時代（機動戦士Zガンダム）を中心しつつ、宇宙世紀0150年代頃を舞台にした『機動戦士Vガンダム』（93年）あたりまでの可変機たちをまとめたものである。

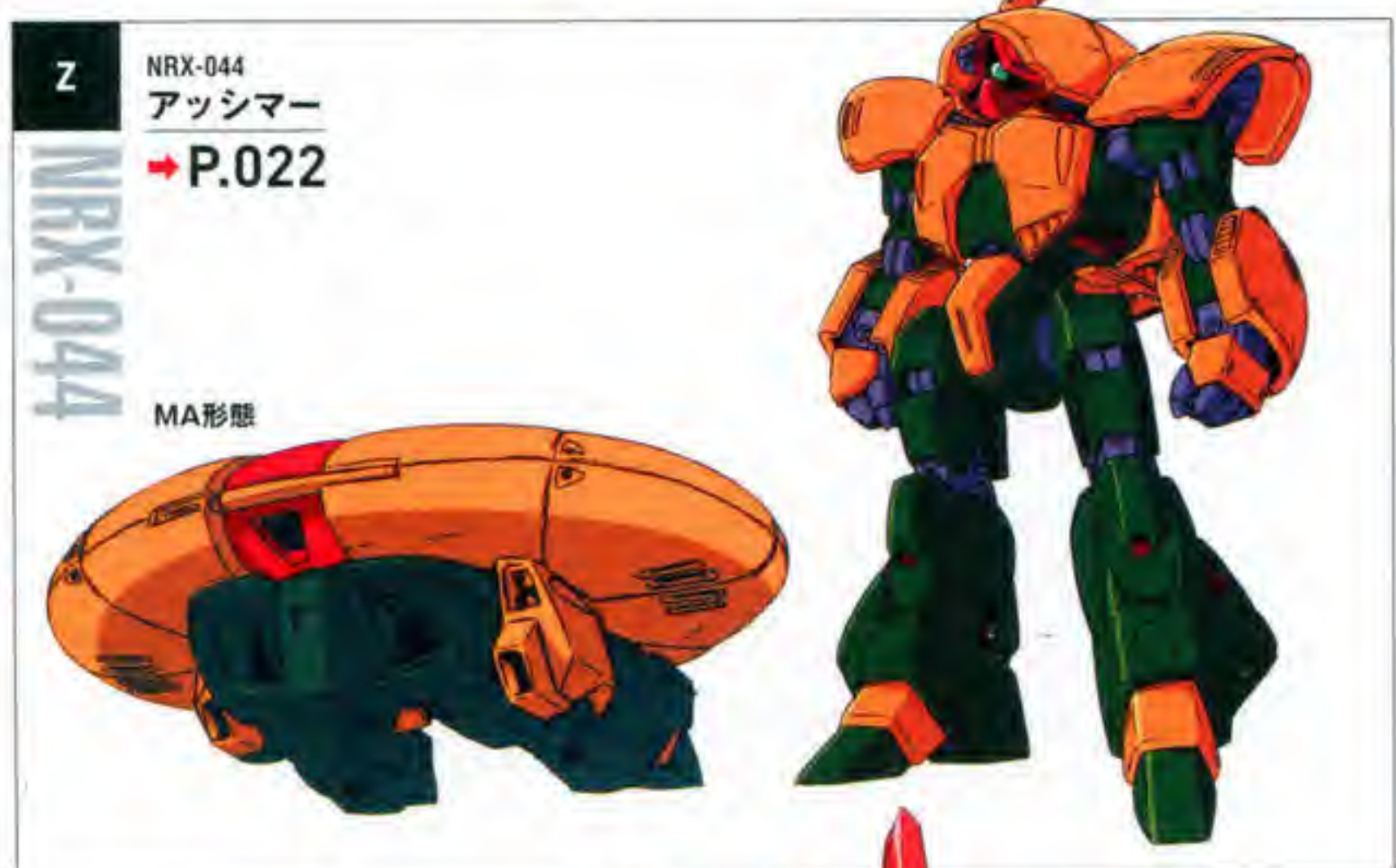
可変モビルスーツの流れを概観することとは、作品内の宇宙世紀の設定においては、その技術的流行を追うことにもなるし、作品ごとでは、作られた年代によるデザインの流行の変化や、各メカデザイナーたちの試行錯誤の跡を見ることができらるだろう。ともすれば子供っぽくなりかねない「変形MS」は、いかに生み出され、発展しガンダム世界に根を張っていったのか。それは35年を超える「ガンダム史」の一部を紐解くことであり、またアニメロボットの歴史を見ることがもあるだろう。



# カラー設定画&イラスト ラインナップ

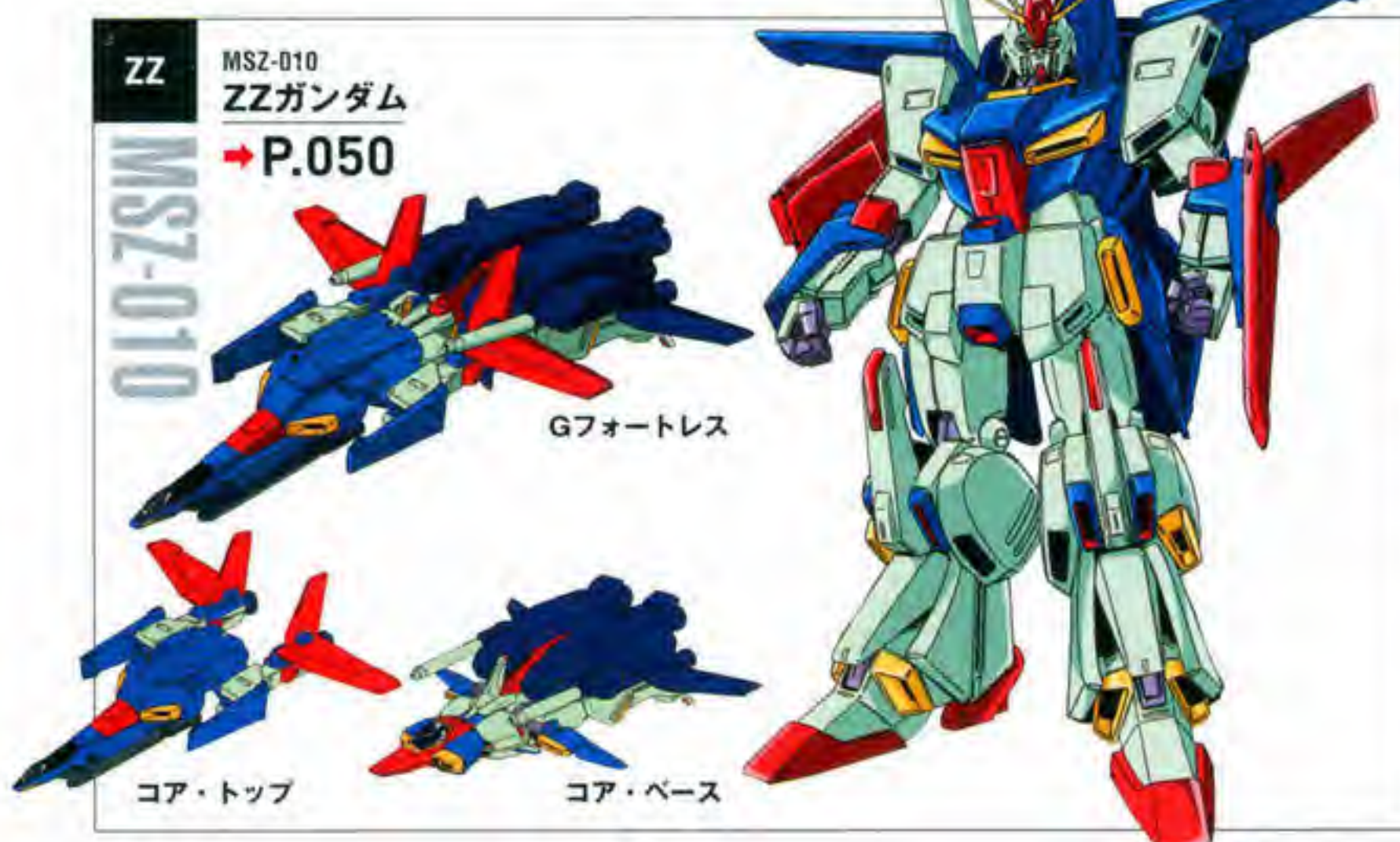
このページでは、各ガンダムシリーズに登場した可変モビルスーツと可変モビルアーマー、ならびに関連する機体のカラー設定画とイラストを掲載する。並びは映像作品から先に、MSVなどの関連企画の順で、それぞれ登場年代で区分している。本誌内で解説している機体については対応ページ数を付記した。

※なおページ欄外には、それぞれアイコンの対応作品を掲載（基本的に初出作品とする）。



アイコンの説明：[Z] …機動戦士Zガンダム、[ZZ] …機動戦士ガンダム ZZ、[逆] …機動戦士ガンダム 逆襲のシャア、[F91] …機動戦士ガンダム F91、[V] …機動戦士Vガンダム、[UC] …機動戦士ガンダム UC、[EV] …ガンダムイボルブ、[ZMSV] …Z-MSV、[ZZMSV] [CMSV] …ZZ.CCA-MSV、[GDF] …ガンダムダブルフェイク アンダー・ザ・ガンダム、[MM] …M-MSV（ミッシングモビルスーツバリエーション）、[セ] …ガンダムセンチネル、[AOZ] …ADVANCE OF Z ティターンズの旗のもとに、[UMSV] …UC-MSV（機動戦士ガンダム UC モビルスーツバリエーション）、[GAME] …SDガンダム G ジェネレーション3







F91

RXR-44  
ガンタンク  
R-44

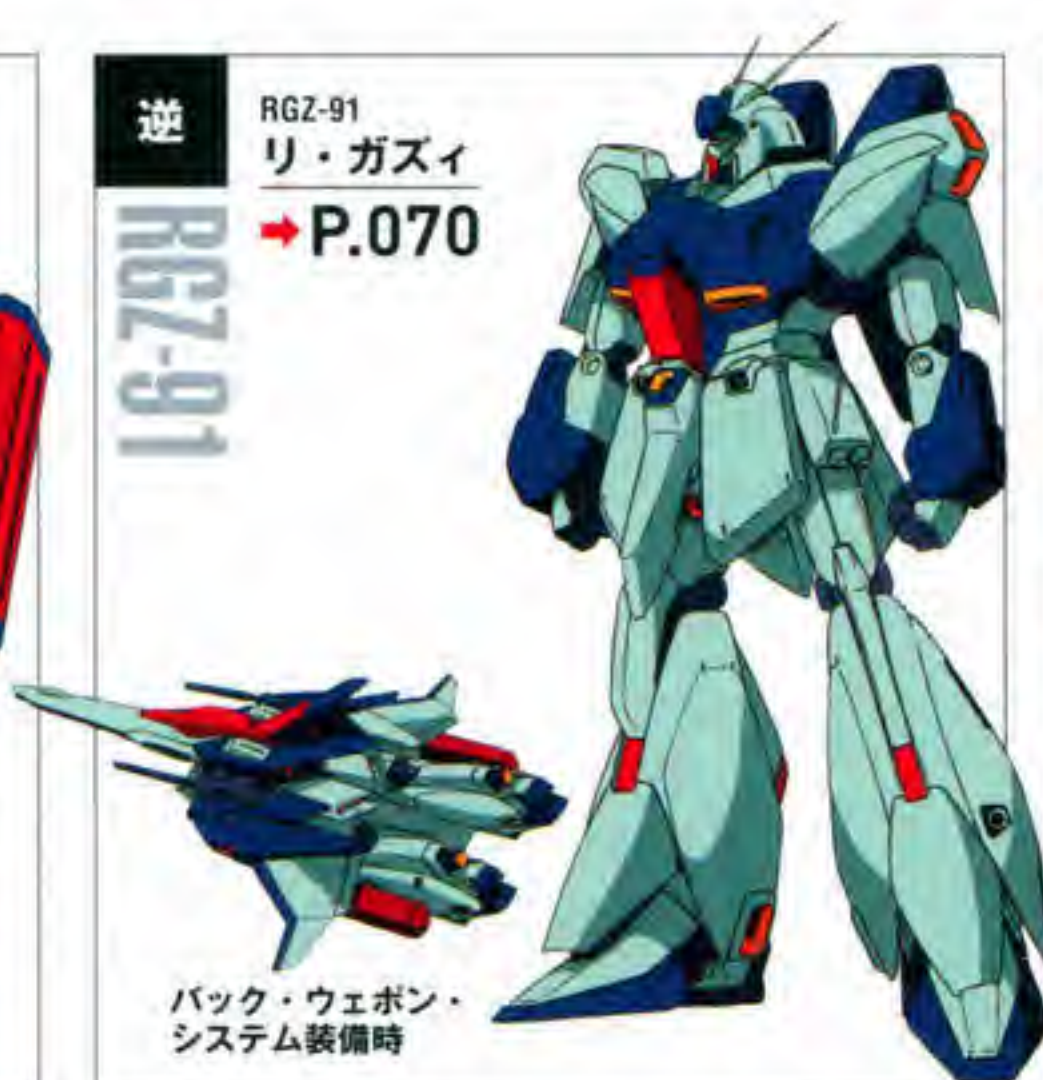
RXR-44



逆

RGZ-91  
リ・ガスィ  
→ P.070

RGZ-91



ZZ

AMA-01X  
ジャムル・フィン  
→ P.065

AMA-01X



V

ZM-S08G  
ゾロ クロノクル・  
アシャー専用機

ZM-S08G



V

LM312V04+SD-VB03A  
Vダッシュガンダム

LM312V04+SD-VB03A



V

LM312V06  
Vガンダムヘキサ

LM312V06



V

LM312V04  
ヴィクトリー  
ガンダム

LM312V04



F91

ZMT-D15M  
ガルガイユ

ZMT-D15M



V

ZM-S09G  
トムリアット

ZM-S09G



V

ZM-S08G  
ゾロ

ZM-S08G



V

LM314V23  
V2バスター  
ガンダム

LM314V23



V

LM314V21  
V2ガンダム

LM314V21



V

ZM-D11S  
アビゴル

ZM-D11S









UC

AMA-X7  
シャンブロ  
→ P.066

AMA-X7



UC

MSA-005K  
ガンキャノン・  
ディテクター

MSA-005K



UC

RAS-96  
アークシャ  
→ P.023

RAS-96

MA形態



UMSV

RGZ-95C  
リゼルC型  
ディフェンサー  
bユニット

RGZ-95C



UMSV

RGZ-95C  
リゼルC型  
ディフェンサー  
aユニット

RGZ-95C



UC

AMX-008  
ガ・ゾウム

AMX-008



UC

MSZ-006A1  
Zプラス

MSZ-006A1



UC

RGZ-95C  
リゼルC型  
ゼネラル・レビル配備機

RGZ-95C



MMSV

MSZ-009  
プロトタイプ  
ZZガンダム  
→ P.049

MSZ-009



CMSV

RGZ-91B  
リ・ガズィ・カスタム  
→ P.076

RGZ-91B



ZMSV

MSA-005K  
ガンキャノン・  
ディテクター  
→ P.041

MSA-005K



ZMSV

MSA-005S  
メタス改  
→ P.040

MSA-005S



ZMSV

MSZ-008  
Z II  
→ P.048

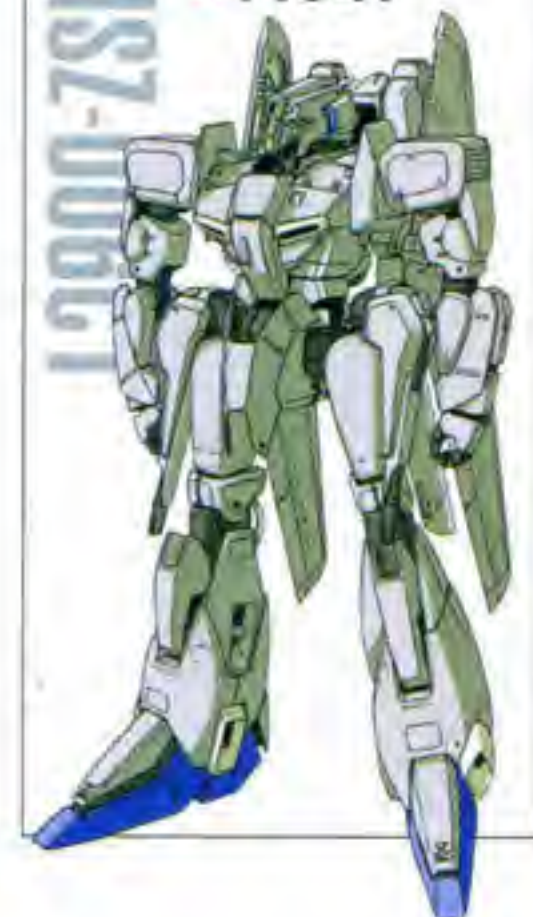
MSZ-008



セ

MSZ-006C1  
Zプラス (C型)  
→ P.047

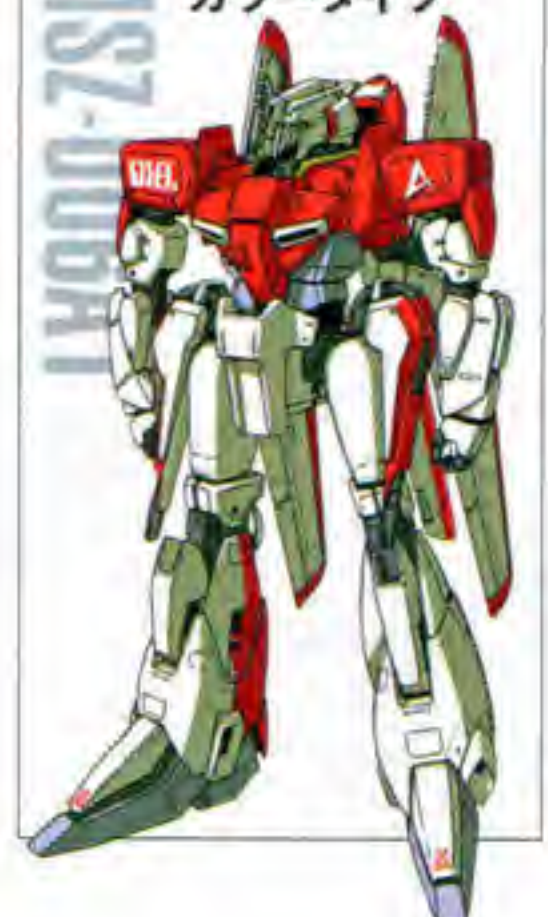
MSZ-006C1



セ

MSZ-006A1  
Zプラス (A型)  
テスト機  
カラータイプ

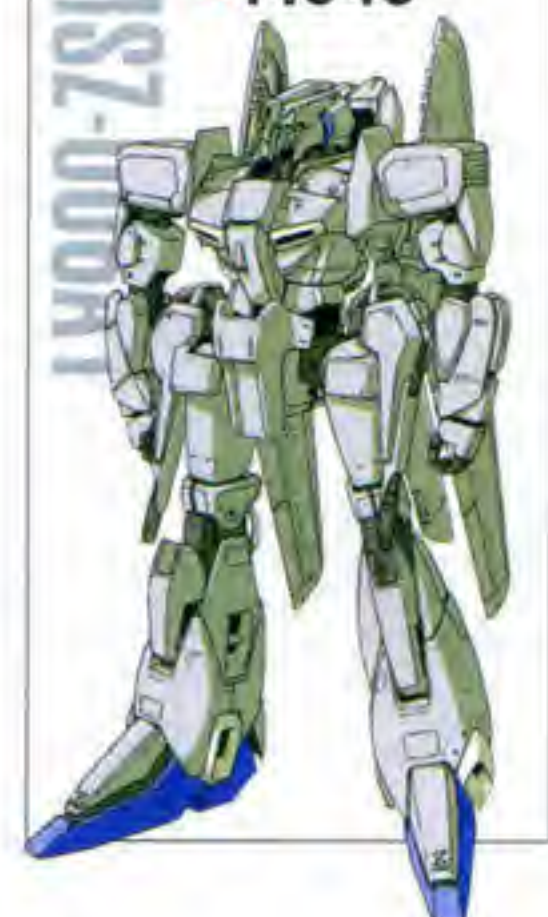
MSZ-006A1



セ

MSZ-006A1  
Zプラス (A型)  
→ P.046

MSZ-006A1



ZZMSV

FA-010A  
スーパー  
Gフォートレス

FA-010A



GAME

MAK-005S  
ギャプラン改

MAK-005S





**A0Z** NRX-044 (R)  
試作アッシマー  
TR-3 [キハール]

地上用

宇宙用

**GDF** AMX-003S  
ガザC改

**セ** MSA-0011 [Ex1]  
Ex-Sガンダム  
→ P.053

**セ** MSA-0011  
Sガンダム  
→ P.052

**A0Z** ORX-005  
ギャプランTR-5  
[ファイバー]

MA形態

**A0Z** RX-107  
TR-4  
[ダンディライアン]

MA形態

**A0Z** ORX-005  
ギャプランTR-5  
[フライルー]

MA形態

**A0Z** ORX-005  
ギャプラン  
TR-5  
[アドバンスト・  
フライルー]

**UMSV** MSN-001-2  
デルタガンダム  
式号機  
→ P.079

**UMSV** AMX-107S  
リバウ  
→ P.065

**UMSV** MSN-001K  
ガンダム  
デルタカイ  
→ P.077

ウェイブ・  
ライダー形態

**UMSV** MSN-001  
デルタガンダム  
→ P.078

ウェイブ・  
ライダー形態



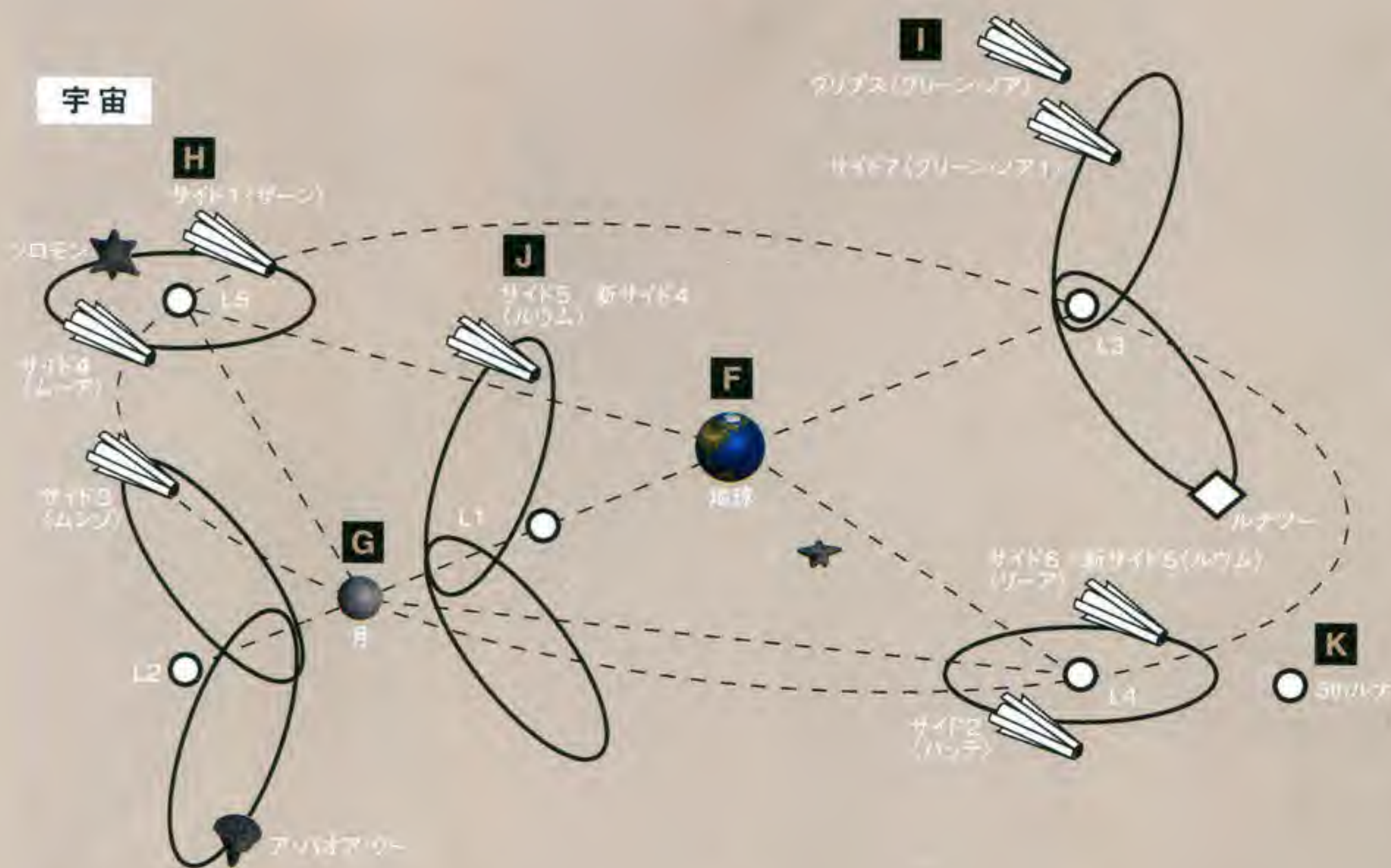
# 可変機の戦場

ムーバブル・フレイムの隆盛により、グリプス戦役を境にモビルスーツの一大トレンドとなった可変モビルスーツ。様々な性格の機体が開発され、それらは地域を問わず投入されることもあった。

## 地上



## 宇宙



### J サイド5 新サイド4

密閉型の工業用コロニー、インダストリアル7のあるサイド。「ラブラスの箱」を巡る戦いが繰り広げられた。

### K 5thルナ

資源衛星。シャアの反乱（第二次ネオ・ジオン戦争）において、落下により地球寒冷化を狙うシャアの標的となった。

### G 月周辺

フォン・ブラウン市など月面都市がある。月で補給や退避を行いたい部隊が襲撃を受けることしばしば。

### H サイド1（ザーン）

シャングリラやムーン・ムーンといったコロニーのあるサイド。第二次ネオ・ジオン抗争で戦いの地となる。

### I グリプス2

コロニー、グリーン・ノアのひとつをティターンズがコロニー・レーザーに改造。これを巡る戦いが行われた。

### D ダカール

地球連邦政府の議会がある地（宇宙世紀0087年代）。政治的重要性から反政府的組織の攻撃目標となる機会が多い。

### E 香港

アジアにおける経済的な重要性の高い都市。カラバ（エウーゴ）に対して協力的なルオ商会の本拠地。

### F 地球衛星軌道

時代を問わず、大気圏突入をめぐる攻防が幾度も行われてきた場所。可変機の活躍の場のひとつ。

### A トリントン

コロニー落としによって大打撃を受けたオーストラリアにある、地球連邦軍の基地。存続しているが辺境扱い。

### B フロリダ

ケネディ宇宙港を持つ宇宙への玄関口。HLV打ち上げを巡ってエウーゴとティターンズが戦った。

### C デブリン

第一次ネオ・ジオン戦争時にハマーンの手にによってコロニー落としが行われた地。市民に大被害が出た。



## U.C.0096 ダカール強襲

地球に降下したガランシェール隊から地球連邦軍の目をそらすため、『袖付き』はジオン公国残党軍に陽動を打診。ニューギニアに本拠を置くヨナム・カークス率いるカークス隊はこれに応える形でシャンプロをはじめとするモビルスーツ部隊をダカールに派遣した。ダカールを強襲した残党軍の部隊は、シャンプロ以外旧式機が多かったが、ダカールの守備隊（こちらもあまり新鋭機とはいえない）を相手に奮戦。シャンプロはメガ粒子砲を市街地に発射し、街は大きな被害を受けている。



↑シャンプロの性質上水路を取らざるを得なかったため、同行したモビルスーツはカブールなど水陸両用機が多かった。

### 【E】ニュー・ホンコン

## U.C.0087 ホンコン・シティ遭遇戦

ホンコン・シティに居を構えるルオ商会の手引きで補給を受けるべく、太平洋を渡ってきたカラバのアウドムラ。そこにムラサメ研究所のサイコ・ガンダムとフォウ・ムラサメを配下とする地球連邦軍のベン・ウッター隊が攻撃をしかける。巨大なモビルアーマー（フォートレス）が空を飛び、カラバの隊と戦闘を繰り広げるといふ事態に。ホンコン・シティは混乱に陥った。



→サイコ・ガンダムの可変機構は「空に浮かぶ異形の要塞」として視覚的に恐怖を与える効果もあった様子。

### 【C】ダブリン

## U.C.0088.10 ダブリン攻防戦

地球連邦軍高官の隠れ家として機能していた保養所・通称ぶな屋敷のあるダブリンに、コロニー落としを企てるハマーン。それとは別に連邦軍高官と接触しようとしていたアーガマは、アリアス・モマの率いるパウを中心としたモビルスーツ隊と交戦となる。さらにコロニー落としの際、間隙で情報をカラバよりキャッチ、被害を少しでも食い止めるべく市民の救援に向かうが、市民の脱出を阻害し被害を拡大させたいネオ・ジオンの部隊と交戦に。その中にはネオ・ジオンが回収、修復したサイコ・ガンダム Mk-II の姿もあった。



↑パウ（量産機も）はサブ・フライト・システムなしで空中戦を行うも、分離合体することはなかった。



↑飛翔し（調子を崩していた）ZZガンダムを追尾するサイコ・ガンダム Mk-II。

### 【B】フロリダ～サンフランシスコ

## U.C.0087.5 北米上空戦

ジャブロー攻略戦が事実上の失敗に終わったエウゴは、カラバの協力のもとにフロリダ・ケネディ宇宙港から宇宙へ人員や物資の打ち上げを図る。そこへ追撃の任を受けたブラン・ブルターク少佐率いる地球連邦軍のモビルスーツ部隊が到着、交戦となる。アッシマーやギャブランといった新鋭機を投入した連邦軍（+ティターンズ）により、エウゴはリック・ディアス（ロベルト機）を失うなどの被害が出た。さらにブラン隊は奪取したスードリで、北米を西に横断するカラバのアウドムラを追撃する。



↑本来は高高度戦闘用の迎撃機であるギャブランも、強化人間である。ロザミアの操縦によって投入された。その速度は圧倒的。



↑サブ・フライト・システム対可変機という構図といえるが、1G下において可変機が絶対的に優位とはいきれなかった。

### 【D】ダカール～アフリカ

## U.C.0087.11 ダカール奪還戦

ダカールの連邦議会を占拠し、中継で全地球に向けてティターンズの横暴を暴露し、自分たちのシンパを得ようとするエウゴ。連邦議会の警備にはティターンズのアッシマーなどがあがっていたが、エウゴの行動に感化されるティターンズパイロットも現れてしまう。なお、アッシマーは本来地球連邦軍の装備だが、ティターンズにも導入されていたことがわかる。



## U.C.0088.6 ダカール侵攻

地球に侵攻したハマーン・カーン率いるアクシズは、艦隊をダカールに展開し制圧、無血開城させネオ・ジオンを名乗った。アーガマはカラバと連携しハマーンの部隊を追撃するために、再び宇宙へ上がることができなくなることを承知で地球に降下する。アフリカ西海岸に降下したアーガマは、カラバと共同でダカールを挟み撃ちにすべく砂漠を縦断していく。一方のネオ・ジオンもジオン公国残党軍などと結託しつつ、これを迎え撃った。この一連の作戦においてZZガンダムやパウなど複雑な可変機が過酷な環境の中で運用されている。



↑ZZガンダムは海中でカブールと戦うほどの場所を選ばないハイパフォーマンスを発揮。しかしメンテナンスにはかなりの苦勞があった。ネオ・ジオンはパウの試験機を持ち込んだが、戦闘で失われている（パイロットのグレミーは無事）。



U.C.0096 **ガランシェール & ネエル・アーガマ掃討戦**

ブライトの手引きにより、衛星軌道上で待つネエル・アーガマとランデブーすることができたガランシェール隊。しかしラプラスの箱に関わった者たちを秘密裏に抹殺すべく遣わされた最新鋭艦ゼネラル・レビルとその艦載モビルスーツ、リゼルC型がネエル・アーガマとガランシェールに迫る！状況を察知して救援に来たフル・フロンタルのシナンジュの前に手痛い損害を受け、退却せざるを得なかった。



↑数では圧倒的に勝っていたが、やはりシナンジュのような規格外の機体+パイロット相手では辛い。

**[H] コロニー・シャングリラ**

U.C.0088 **ガザの嵐隊迎撃戦**

コロニー・シャングリラに寄港中のアーガマを追撃する任を帯びたアクシズ（ネオ・ジオン）のマシュマー。その配下であるバンバ、ピアノ、ワイムの3人は新鋭機であるガザDにトリオで搭乗しガザの嵐隊を編成。アーガマに仇討ちを仕掛けるも返り討ちに会う。港を脱したアーガマをなおも追うマシュマーであったが、今度はラビアン・ローズから運び込まれた最新鋭機ZZガンダムの前に敗北した。



↑マシュマーのハンマ・ハンマを圧倒的なパワーで粉碎するZZガンダム。メーシオンという煙幕を使う技を持っていたが、予定通りに機能しなかった。



↑ガザの嵐隊はガザ・ストーム・フォーメーションという煙幕を使う技を持っていたが、予定通りに機能しなかった。

**[H] コロニー・ムーン・ムーン**

U.C.0088 **ムーン・ムーン潜入戦**

ラビアン・ローズで修理を終えてなお物資の足りないアーガマは、旧式コロニーのムーン・ムーンに寄港する。そこは光族と呼ばれる独自の文化を持つ人々の住むコロニーだったが、そこで同じく寄港していたアクシズのエンドラ隊と戦闘となる。エンドラ側も新鋭艦と新鋭モビルスーツ、パウを投入し、ZZガンダムとパウという当時最新鋭可変機同士の戦いが行われた。



↑ガザCとキャトルという、作業機械を祖先に持つ（キャトルはそのものだが）戦いも。



↑グレミー・トトがハマーン・カーンより受領してきた新鋭機パウ。この時点では顔合わせ的な戦いであった。

**[A] トリントン基地**

U.C.0096 **トリントン基地攻防戦**

ユニコーンガンダムが示した「ラプラスの箱」の座標がトリントンであることを受け、ジオン公国残党軍ヨム・カークスは世界各地の同胞に協力を要請、共同で基地襲撃を企てる。そこには連邦軍を恨むロニ・ガーベの駆るシャンプロの姿もあった。迎撃にあたったロンド・ベル隊のモビルスーツ隊にはデルタプラスも配備されており、ガランシェールから降下してきたユニコーンガンダムとともに、トリントン近郊の市街地を蹂躞するシャンプロを止めるべく戦った。



↑△ダカールで威力を見せつけたシャンプロは、ロニの憎悪により破壊の限りをつくす。なお、トリントン基地には連邦カラーのガンキャノン・ディテクターなどが配備されていた。

**[F] 地球衛星軌道**

U.C.0087.5 **テンプテーション遭遇戦**

一年戦争後、左遷され定期シャトルの艦長をしていたブライト。そのシャトル・テンプテーションはグリーン・ノアの難民を乗せ航行（漂流）していたが、その間近で木星圏から帰還したシロッコのメッサーラとエウゴのモビルスーツ隊との戦闘が開始される。MA形態でその速度と何よりパイロットであるシロッコのプレッシャーは、カミーユやクワトロらを苦しめた。結局、シロッコ曰くメッサーラの性能テストだったため、ほぼ戦果はなく両者引き分けている。



↑実際に大型の機体であるメッサーラだが、相対したニュータイプにはスペック以上に大きく見えた（感じた）ことだろう。



↑ただの定期シャトルを追いかけて回すことが性能テストになると思えないが……クワトロらの出現を予感していたのか。

U.C.0087 **キリマンジャロ陽動作戦**

ティターンズのキリマンジャロ基地を攻略する作戦を立てたカラバとエウゴ。地上から攻めるカラバをカバーする陽動として、アーガマはキリマンジャロ上空の衛星軌道上で作戦展開。ヤザン率いるハンブラビ隊と戦闘になるが、チームプレーと初見の装備「海ヘビ」によってクワトロの百式が大気圏に落下してしまう。カミーユのZガンダムがウェイブ・ライダーに変形し百式を載せ地上に降下することで事なきを得たが、危機一髪であった。



↑ウェイブ・ライダーに大気圏突破能力がなければその後の歴史は変わっていたかもしれない。



↑ハンブラビはスペック上、平凡な機体ながらアーガマ隊のエース2機を相手に善戦した。



## U.C.0096 インダストリアル7遭遇戦

「開けられれば地球連邦に重大な影響を与える」というラプラスの箱の鍵となるモビルスーツ、ユニコーンガンダムの譲渡について、コロニー、インダストリアル7で会談を行うビスト財団とネオ・ジオン残党「袖付き」のガランシェール隊。しかしこの情報は察知されており、箱と鍵の譲渡を阻止すべくロンド・ベル隊のリゼル部隊が武力介入する。これにガランシェール隊も応戦し、インダストリアル7に大きな被害を出すことになった。



↑コロニーの近くため射撃武器を使わず、複数で格闘戦を挑み翻弄して倒すという戦法を披露したリゼル。



↑リゼルはニュータイプ専用機であるクシャトリヤに挑む。ファンネルが使いにくいコロニー内ではそれなりに戦えた。

## U.C.0096 「ラプラスの箱」を巡る争い

「ラプラスの箱」のありかがインダストリアル7のコロニービルダー・メガラニカと判明。ロンド・ベル隊（およびエコーズ&ガランシェール隊）と「袖付き」は箱の奪い合いとなる。「袖付き」は己の持てる戦力すべてを出しきるかのように、保有する旧式機も投入した。そこにはガザDやガ・ゾウムのほか、2人乗りで改造されたバウもあった（計画本来の姿に戻ったといえる）。



↑かつての花形であった可変機も今は昔。それに加えて一種超常的な戦闘能力を持つユニコーンガンダム（これも一種の可変機が）が相手ではさすがに分が悪い。それでも、残党特有の気迫でネェル・アーガマを苦しめた。

## U.C.0093.3 5th ルナ落下阻止作戦

地球を人の住めない地にすることで、地球人類をすべて宇宙に移住させようと企むネオ・ジオン総帥シャア・アズナブル。手始めに小惑星5thルナを地球連邦政府のあるラサに落下させる作戦を敢行したが、これを阻止にかかったロンド・ベル隊のアムロ・レイとモビルスーツ戦となる。アムロはシャアに「情けないモビルスーツ」と呼ばれたり、ガズィに搭乗していたが、ニュータイプ専用機のヤクト・ドーガを相手に互角以上の戦いを展開した。



↑バルーンの大量放出などで手練手管を見せたアムロ。しかしシャアのサザビーまでヤクト・ドーガの加勢に来たため、結局落下を防ぐことはできなかった。

## U.C.0087 フォン・ブラウン攻防戦

月面のフォン・ブラウン市を制圧するティターンズのアポロ作戦はシロッコの功により見事成功する。この戦いではジェリドとマウアーに与えられた試作機ガブスレイや、ヤザンが搭乗する宇宙空間仕様のギャブランといった可変機が参加していた。また、月と軌道を同じくするサイド2近辺では、ティターンズがアーガマの追撃戦を展開。この戦いでマウアーは戦死するが、ジェリドがあと一歩で撃沈というところまでアーガマを追い込んだ。



↑マウアー・ファラオの死によって覚醒し、アーガマに特攻をかけるジェリド・メサ。カミーユ・ビダンもたじろぐ気迫であった。



↑ティターンズのガブスレイとほぼ同時期に、アーガマにはZガンダム及びメタスが配備されている。可変機全盛時代の幕開けだ。

## U.C.0088 アーガマ奪取作戦

グラナダへ入港したアーガマに対し、スパイ、セシリア（偶然にもアーガマクルーのトールズと幼なじみであった）を潜入させ情報収集を図るゴットン隊。アーガマ奪取計画を立てガザC、ガザD、さらにはガ・ゾウムを投入し作戦を実行するも、セシリアの離反によって計画は失敗に終わった。



↑強力な爆弾を抱えたままガ・ゾウムにしがみついたセシリアに気づかず、セシリアの自爆によって母艦もろとも吹き飛ばされゴットン隊は壊滅する。

## U.C.0088.2 グリプス2攻防戦

メールシュトローム作戦によってアクシズよりグリプス2（コロニーレーザー）を奪取したエウゴはティターンズとアクシズの攻撃を受ける。ティターンズ、エウゴ、アクシズという3つの勢力が入り乱れる戦いとなったが、最終的にはエウゴがグリプス2によってティターンズ艦隊を消滅させるという形で決着がつけられる（アクシズは一時撤退した）。この最終決戦にはZガンダムやバウンド・ドックをはじめとするグリプス戦役の花形ともいえる高性能な可変機が入り乱れて戦い、多くのパイロットと機体が失われた。



↑随一のニュータイプ能力を持つカミーユの力を具現化するZガンダム。勝者ではあったが犠牲も大きかった。



↑バウンド・ドックのような可変機やニュータイプ専用機キュベレイなど、ハイスペックな機体が跋扈した。



# ティターンズ系 可変機の光と影

地球連邦軍のMS開発の流れに、旧ジオン公国系の技術が入り混じり、様々な工廠が乱立した  
グリプス戦役期。ティターンズのMSは、特に技術的な融合が顕著な機体が数多く登場した。

## 戦後の混乱が MSの多様性を生む

一年戦争はこれまでの戦争の常識を覆し、兵器体系を一変させた。これは言うまでもなく機動兵器MS、MAの登場によるものだが、戦後においてもその影響力は継続していく。戦後、ますます盛んになったMS開発により、各地に開発拠点が数多く設立された。それも純粋な連邦軍技術を受け継ぐものばかりではなく、旧ジオン工廠の接収、さらにニュータイプ研究所や、民間企業アナハイム・エレクトロニクス（AE）社なども加わり、混沌化していった。

異なる技術の融合は新たな創造へと結びつき、戦後7年が経過したグリプス戦役期には、実に多様な機体が登場した。中でも可変MS、可変MAは、これまでにない潮流を生み出したカテゴリーといえる。技術的な見地から、ムーバブル・フレームの誕生はMS、MAの設計に自由度を与え（最初期のアッシマーは除く）、これまでMSが採用していたセミモノコック方式のフレーム構造からは、想像もできない複雑な機構を持つ機体が開発された。とはいえず宇宙世紀の技術者たちは、なぜMS、MAを変形させようと考えたのだろうか？ 地上用としてはMSが抱える根本的な弱点の克服が目的で

あったと考えられる。特にMSは一年戦争時点から、重力下における行動範囲に関しては大きな問題を抱えており、ド・ダイヤスなどのサブ・フライト・システムの研究が早い段階で行われていた。高い汎用性を生み出し、AMBACにも寄与する人型という構造も、こと地上に関してはデメリットを内包していたのである。可変機の研究の一端として、重力下における飛行能力を付与された機体が誕生するのは、自然の流れだったのかもしれない。

可変MS、可変MAの黎明期では、地球圏における地球至上主義の集団であるティターンズが強い権限を得ていたことが、その登場に多大な影響を及ぼしている。地球至上主義者がもつとも恐れること、それは「宇宙からの侵略」であり、それを防ぐことは最優先事項だった。

初期に開発されたNRX-044アッシマーやORX-005ギャプランなどは、迎撃専用の機体というコンセプトであり、具体的にはエウーゴ（もしくはジオン残党）による降下作戦に對抗する戦力を想定していた。一方、エウーゴ側が気圏突入能力を持つ、MSZ-006 Zガンダムを押し進めていたことから元々、可変機黎明期は両勢力の様々な思惑が技術という形となって垣間見える。

グリプス戦役期に可変機を開発した

連邦系ティターンズの工廠が送り出した機体を紐解くと、その多くはニュータイプ研究所製であることがわかる。前述のアッシマーやギャプラン、そしてバウンド・ドックはオークランド、オーガスタ研究所が中心となり、サイコ・ガンダムシリーズはムラサメ研究所が開発を進めていた。

こうした状況は、サイコミュ・システム搭載機に限らず、ハイエンドな性能を持つ機体に関してもニュータイプ研究所で開発をある程度請け負っていたことを想像させる。ジャブローやルナツーなどの工廠は大量生産の主力機に充て、ニュータイプ研究所ではより試験的な機体の開発が進められていたと考えると自然だ。

この世界の優秀な技術者は、ニュータイプ研究所が、あるいは民間のAE社を目指すという流れが生まれていたのかもしれない。

## 異端の天才シロッコの MS開発へのアプローチ

こうした潮流と一線を画すのが、シロッコが手掛けた機体群である。類まらないニュータイプ能力を持ち、パイロット、指揮官、指導者としても優れた資質を備えたシロッコは、MS開発においてもそのセンスを発揮した。常に木星の重力圏の存在を意識するというシロッコは、「過剰なまでにスラス



## ムラサメ研究所

経歴や開発された機体から紐解くと、特にサイコミュ・システムと強化人間の研究に特化した研究所であることが想像できる。開発した機体もサイコ・ガンダム系に限られており、オーガスタ&オーランド研究所のように、一般向け機体の開発はあまり行われていなかったようだ。

MRX-010

サイコ・ガンダムMk-II

MRX-009

サイコ・ガンダム



## オーランド研究所 & オーガスタ研究所

オーガスタ研究所は、ニュータイプ用（サイコミュ非搭載）として開発されたRX78-NT1（ガンダムNT-1）アレックスの開発などを行い、後にオーガスタ系と呼ばれる系列機体を生んだことで知られる。こうした研究の成果を反映したハイエンド機の開発を行っていたと考えられる。純粋なニュータイプ専用機としては、バウンド・ドックが目立つ程度である。

ORX-005  
ギャプラン



NRX-044  
アッシーマー



NRX-055  
バウンド・ドック



## ジュピトリス系

純粋にシロツコがジュピトリス艦内で開発したのは、可変MAのメッサーラのみであるが、ガブスレイ（ルナツー工廠）、ハンブラビ（セダンの門工廠）とも開発地は異なるものの、その設計にはシロツコが携わっているという。構造的に関連性はないが、その異彩を放つ構造やシルエットはシロツコの系譜といって差し支えないだろう。

PMX-000  
メッサーラ



RX-110  
ガブスレイ



RX-139  
ハンブラビ



ターを装備した高機動な機体」ということを主眼に開発を行っていた。これは彼にとつて最低限クリアすべき条件程度でしかなく、開発された機体（数こそ少ないが）に目を向けると、驚くほど共通項は少なく、機体ごとにコンセプトや形状が異なっている。これは彼が木星船団に長く所属したこと、MS開発のセオリーや時流から外れていたこと、その結果常識に囚われない自由な発想が可能だったということなのだろう。

あえてシロツコが開発に関与した機体群をカテゴライズするなら、「戦闘能力向上を目指した可変構造の採用」という点が挙げられるだろう。MS形態では実現できない、もう1つの攻撃パターンを持たせること。これはPMX-000メッサーラにしても、RX-110ガブスレイや、RX-139ハンブラビにしても、MS、MA形態では異なる攻撃手段を付加していた。こうした変形システムを攻撃アクションの1つとして盛り込む考え方は、エースパイロットが戦場を支配し、少数によるMS戦が中心だったグリプス戦役期には合致したコンセプトであったといえる。

登場初期の可変機こそ、行動範囲の拡大という点を重要視されていたが、機体に対する理解が進むうち、様々な方向性、可能性が模索され始めた結果であるのかもしれない。こうして振り返ってみると、可変へのアプローチは画一的なものではなく、「MS（MA）にもう1つの能力を持たせることができる構造」と考えると腑に落ちるのではないか。





## Pilot File

## 主なパイロット



## パプテマス・シロッコ

木星船団ジュピトリスのキャプテン。非常に野心家でMSの独自開発を行い、ニュータイプとして、またMSパイロットとしても優れた資質を持つ天才肌の男。

## レコア・ロンド

元々はゲリラ出身のエウゴのパイロットだがシロッコと関わることで離反。ティターンズの毒ガス作戦などでメッサーラに搭乗している。



## MESSALA

PMX-000

## メッサーラ

## Spec

頭頂高:23.0m 本体重量:37.3t 全備重量:89.1t ジェネレーター出力:4,900kW スラスター総推力:96,000kg センサー有効半径:11,300m 装甲材質:不明 武装:ビーム・サーベル×2、9連装ミサイル・ポッド×2、メガ粒子砲×2、腕部クロー×2、他

①頭部／ボディとほとんど一体化しており、搭載しているセンサーはモノアイ式だ。木星の環境にはモノアイが適しているのか。

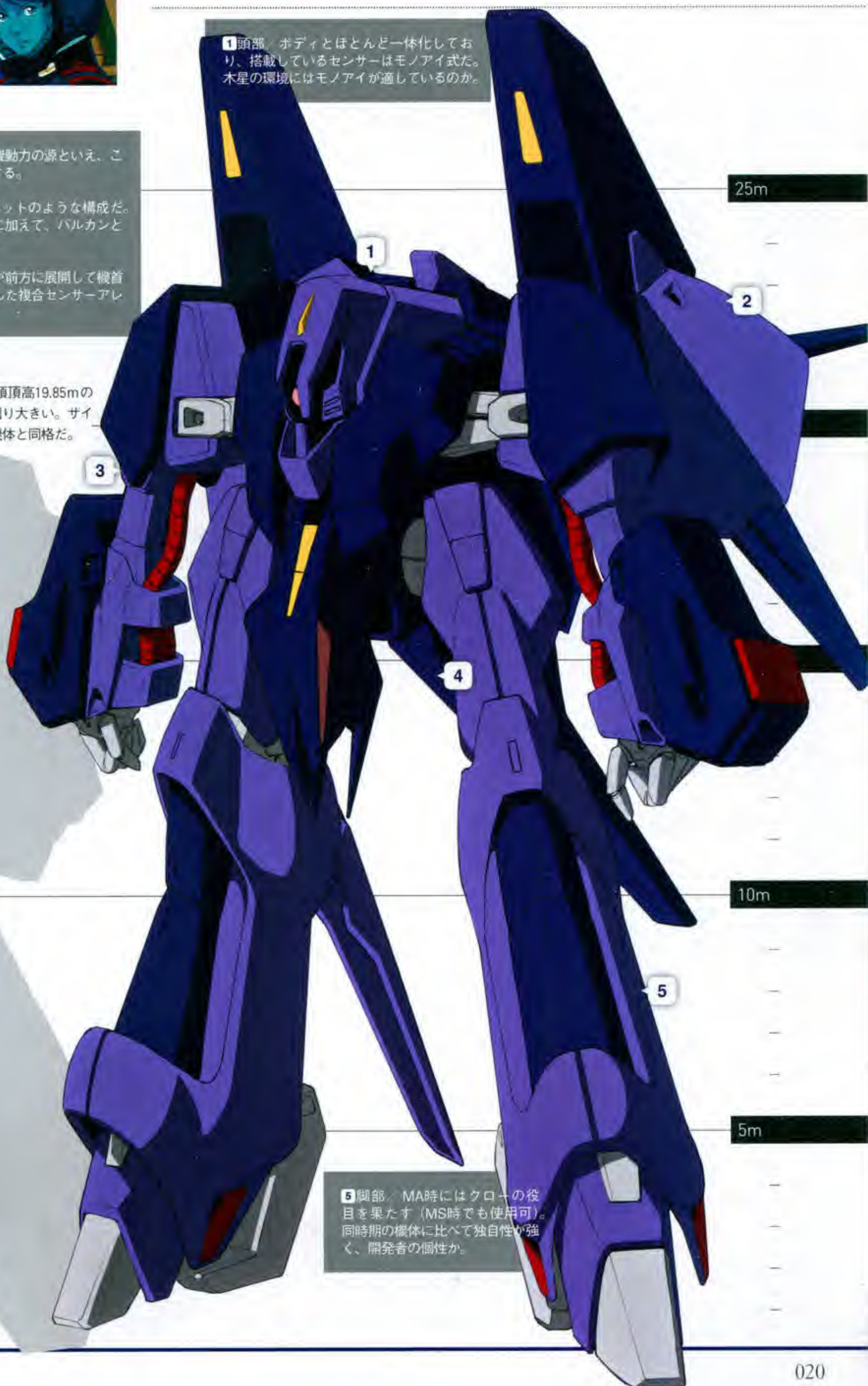
②連装スラスターユニット／本機の高機動力の源といえ、これを含めたMS時の全高は30.3mに達する。

③腕部／肩を含めた腕部分は武器ユニットのような構成だ。特に前腕部は通常のマニピュレーターに加えて、バルカンとグレナードを内蔵したクローを備える。

④腰部／MA形態時、腰部分のパーツが前方に展開して機首となる。この部分は超高速機動に対応した複合センサーアレイも兼ねる。

## MSとのサイズ対比

メッサーラ（MS時）の頭頂高は23m、頭頂高19.85mのZガンダム（シルエット）と比べて一回り大きい。サイズでいえば第二次ネオ・ジオン戦争時の機体と同格だ。



⑤脚部／MA時にはクローの役目を果たす（MS時でも使用可）。同時期の機体に比べて独自性が強く、開発者の個性が。



## 武器・装備



## メガ粒子砲

メッサーラの主武装で背部スラスターユニットの先端に搭載される。内蔵ジェネレーター直結式で戦艦の主砲並みの高い出力を誇る。またジョイント・アームを介してスラスターユニットを可動させることで、一定の射角を確保することも可能だ。

## 肩部ミサイルポッド

9連装マイクロミサイルを格納する。MS時には肩部に、MA時は機体の両サイドに位置する。両形態で発射可能だ。他にバルカンやグレネードといった実体弾兵装も備えている。おそらく対MS戦の牽制用だろう。



## MA形態



機体カテゴリーを考えると、これが本来の姿といえるだろう。巨大な連装スラスターユニットの推力が高速戦闘を可能にする。MAとしては小型の部類だが、時代的には大型だ。

## PICK UP!



ブライトが乗るシャトル、テンブレーションに対し、シロッコはメッサーラを駆り襲撃。高い機動カとスピードでクワトロ(シャア)の百式とカミーユのガンダムMk-IIを攪乱、接敵してMS形態になり翻弄する。

これまで戦っていた相手とは次元の違う異質さにカミーユは驚く。搭乗者(つまりはシロッコ)のプレッシャーも相当なようである。可変機の有用性が証明された瞬間でもあった。



シロッコの下に寝返ったレコアは、ティターンズによるサイド2の21パンチ・コロニーへの毒ガス作戦のためメッサーラで出撃。コロニー守備隊を撃破して作戦を成功へと導いた。

しかし現場へ急行してきたアーガン隊と交戦になるが、元仲間同士という遠慮なのか、戦闘は中途半端な結果に終わる。そして対峙したカミーユは、メッサーラの陰に、戦死したはずのレコアの気配を感じ取り、激しく動揺する。

## 木星圏という環境に適応した高機動タイプの可変MA

メッサーラは最初期の可変MAの一つで、木星帰りの男こと、パプテマス・シロッコ自らが設計、開発したワンオフの専用機だ(後に彼以外にも搭乗する)。彼がキャプテンを務める木星往還船ジュピトリスの船内で製造されたという。本機はよく「木星圏の強い重力下での運用を想定した」という説明がなされるが、これはどういうことか。スペックを単純にみるとスラスター総推力はMSZ・006Zガンダム(総推力11万2600キロ)に及ばず低いことがわかる。しかし、本機の場合、その推力のほとんどを背中の連装スラスター

ーに集中している点がポイントだ。確かにZガンダムは可変により、スラスターに一定の指向性を持たせられるが、機体各所に分散配置されたスラスターすべてをウェイブ・ライダー時の加速に回せるわけではないだろう。それに対し、おそらく姿勢制御も含めたほとんどの機動を、高出力かつ大型の連装スラスターで賄おうという本機は、より加速力に特化していると思われる。実際、通常MSでは追撃不能な加速力をみせている。こうした無茶にみえる設計は、厳しい使用環境を念頭に置いただけでなく、ある種の実験的要素もあるだろう。

また汎用性(戦況への対応力)を保し、高機動戦を得意とするMA形態から、MS形態への変形機構も搭載している。この点も開発者の慎重な性格と「抜け目のなさ」がうかがえる。機体の可変機構や機体構造についての詳細は不明な点も多いが、本機の元々の着想は、木星圏で使用されている作業機械に戦闘用の武装を施し、そこにMSへの可変機構を加味したものといわれる。要は「環境に対応した機械をシロッコが自分用にカスタマイズした」というのがメッサーラの正体なのかもしれない。

そして、当然のことながら木星よりも重力が緩い環境の地球圏で本機を用すれば、オーバースペック気味になり、加速力が驚異的に見えても、なんら不思議ではないのである。だが、実質的にシロッコ専用機といえる本機は、彼以外の搭乗者(レコア・ロンド、サラ・ザビアロフなど)の操縦では満足いく戦果は挙げられなかった。極端な性格の機体ゆえ扱いが難しいのかもしれない。

シロッコがティターンズに入り、本格的に活動を始めると、本機はその役目を終える。以後は他のパイロットが搭乗するにとどまり、同系列の後継機などの開発がされることもなく、他の可変機同様に、姿を消している。

そして時代の先を見据えていたシロッコは、可変機よりも機体レスポンスを重視した、より高機動な専用MS、PMX・003ジ・0へと乗り換えるのだった。





Pilot File

主なパイロット



ブラン・ブルターク

連邦軍パイロットで階級は少佐。所属する北米ニュータイプ研究所と共にティターンズへ合流し、エウゴのアウドムラ追跡のため本機で出撃した。高い操縦技術を持ち、部下からの信頼も篤い。



# ASSHIMAR

NRX-044

## アッシマー

Spec

頭頂高:19.3m 本体重量:41.1t 全備重量:63.8t ジェネレーター出力:2,010kW

スラスター総推力:68,200kg センサー有効半径:10,200m

装甲材質:チタン合金セラミック複合材 武装:大型ビーム・ライフル

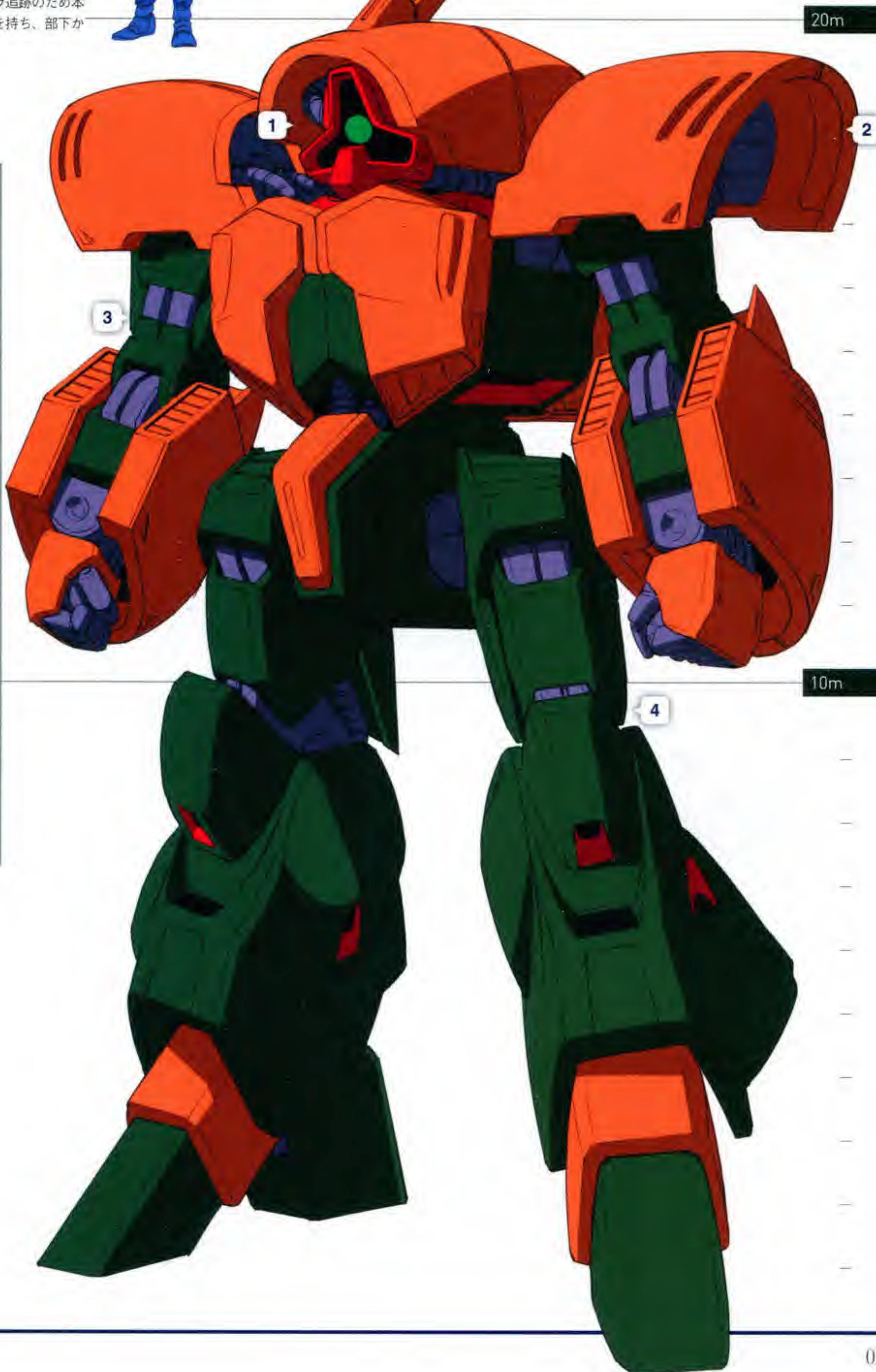
**1** センサー 頭部のセンサーはモノアイ式だが、被弾時や非常時でも機能を維持できるようにサブセンサーを備えている。モノアイの色は少数派のグリーン系。

**2** ボディ MS時の外装形状（特に上半身）は、MA形態を前提とした曲面構成のデザイン。本来ならば全身の変形が望ましいと思われるが、当時の技術的限界だろうか。

**3** 可変機構 各部の可変機構にはマグネット・コーティングが施されている。これにより、わずか0.5秒という短時間で変形が可能だが、一部に内部フレームが露出する部分がある。

**4** 脚部 上半身のリフティングボディの効果と、メインスラスターとなる脚部の熱核ジェット・エンジンにより、1Gでの飛行が可能である。機動性もかなり高い。

**5** 装甲材 チタン合金セラミック複合材製の装甲を採用する。ガンダリウム合金ではないが強度面に問題はないようだ。







### 大型ビーム・ライフル

アッシマー専用のビーム・ライフルで、MA形態時には機体下部に装着され飛行しながらの射撃が可能である。出力2.6MWと標準的だが、アッシマーの飛行能力を阻害しないよう空力を考慮した流線型のフェアリングが施されている。

### MA形態



上半身とバックパックで形成される円盤型のフォルムは、機体全体で揚力を生むリフティングボディ構造を採用しているためであり、見た目よりも航空機としての能力は高い。また脚部に位置する熱核ジェット・エンジンの効力も相まって、大気圏内でも長い航続距離を有している。

## COLUMN TMSへと進化

### RAS-96 アंकシャ

アッシマーの後継機といえ、第二次ネオ・ジオン戦争後にアナハイム・エレクトロニクス社で開発された。量産機のジェガンと共通規格の部品を採用するなど、機体構成や開発方針などはリゼルにも似ている。コストダウンを図りながら、高い飛行能力などはそのまま継承している。それなりの数が作られたようで、ガルダ級超大型輸送機などに配備されている。

#### Spec

頭頂高:22.3m 本体重量:28.3t  
全備重量:43.9t  
ジェネレーター出力:2,200kW  
スラスター総推力:79,600kg  
センサー有効半径:14,200m  
装甲材質:ガンダリウム合金  
武装:60mmバルカン砲×2、  
ビーム・サーベル×2、  
ムーバブル・シールド・  
バインダー×2、他

### MA形態

## 実用的飛行能力を持ち 量産もされた高性能機

一年戦争においてジオン公国軍が展開した、地球降下作戦を防げず大きな被害を被った地球連邦軍にとって、軌道上から来襲する敵降下部隊をいかに迎撃するかは課題といえた。

MSを載せ高高度迎撃戦を行うには、サブ・フライト・システム(SFS)では能力が足りず、従来兵器であるセイバー・フィッシュなどの高高度戦闘機だけでは、その担当する高度域が極端に短いため、バリエーションを使用したMSの直接降下には対応しきれない可能性もあった。

必要とされるのは、大気圏内で航空

機並みの機動力と攻撃力、MS並の空間戦闘能力であった。本来ならば高高度を行く航空戦闘機とSFS+MSで分担されるミッシェンが統合でき、これにより柔軟な運用ができる。こうした思想により、開発されたのが本機とORX-005ギャプランである。中でも本機の場合、ギャプランよりは低高度をその主戦場に想定されていたと考えられる。

NRX-044アッシマーには熱核ジェット・エンジンが採用され、機体もMA時に機体全体で揚力を発生するリフティングボディとなっている。本体のスラスターによる推力とブースターの装着により大気圏離脱まで考えられていたギャプランとは一線を画し、

大気圏内の運用が重視されている。

多くの可変機が次世代技術のムーバブル・フレームの延長線上に存在したのに対し、本機は、従来テクノロジータンとモノコックフレームをベースとしており、可動部分にマグネット・コーティングを施すことで素早い変形を可能としている。一方、重量は一般的なMSよりも重くなることは否めず、高いジェネレーター出力や、スラスター推力を与え、重量増の解消を図ったのが伺える。MA的な直線方向の機動性(航空機としての機動性)と、大火力重視というのは、まさに、本機が可変MAであることを物語る。

実際のアッシマーは、結果的にSFSという制約を受けない機体とな

ったため、戦場を選ばない迅速な作戦行動が可能になり、地上での有効な戦力となった。また、比較的長い航続距離は、半永久的に高空を飛行し哨戒を続けるガルダ級の艦載機としても最適であった。

本体重量が重いというのも、あまり欠点にならなかったようであり、このあたりは機体特性をパイロットがいかに理解しているか、ということも関わってくるのだろう。

半ば必要により大パワーを与えられ、無理やり可変機となった観のある機体だが、その考え方自体が正しかったことは、可変MSとして再設計されたRAS-96アंकシャという後継機が開発されたことでも証明されている。





## Pilot File

# 主なパイロット

## ロザミア・バダム

オーガスタ研究所の強化人間。心肺機能や反応速度が強化されている。戦闘力が高い反面、強化人間に共通して情緒不安定の傾向といえる。



## ヤザン・ゲーブル

ティターンズのMSパイロット優れた操縦技術を持ち凶暴で野獣のような性格。戦闘自体を楽しむタイプ。ギャプランはあまり性に合っていなかったようだ。

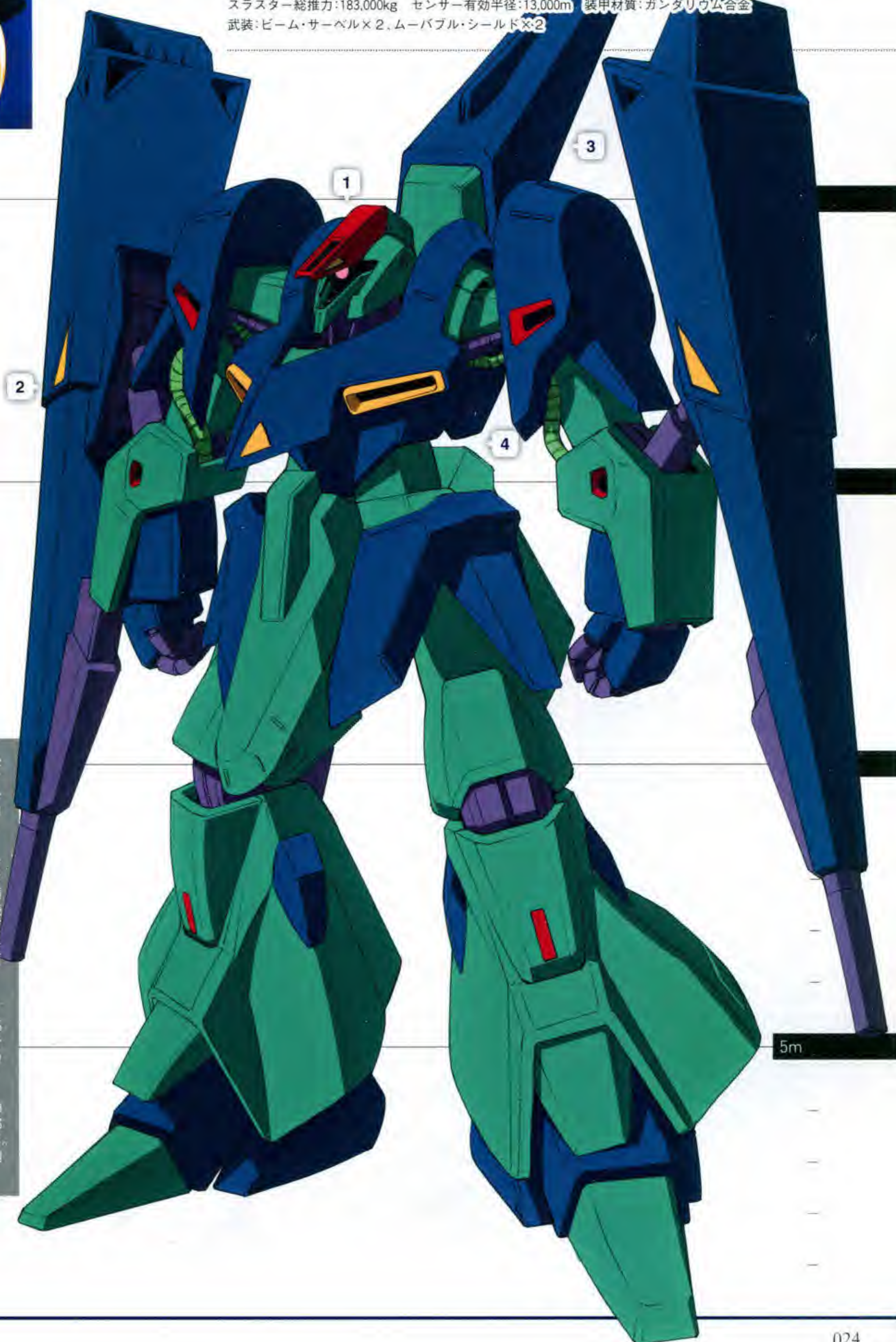
# GAPLANT

ORX-005

# ギャプラン

## Spec

頭頂高:19.8m 本体重量:50.7t 全備重量:94.2t ジェネレーター出力:3,040kW  
スラスター総推力:183,000kg センサー有効半径:13,000m 装甲材質:ガンダリウム合金  
武装:ビーム・サーベル×2、ムーバブル・シールド×2



**1** 頭部 / モノアイ式センサーを採用。モノアイのカラーは伝統的なピンク。後部にはMA時のコクピットハッチがある。

**2** ムーバブル・シールド・バインダー / ビーム・ライフルとスラスターを備えた防御装置。本体接続基部がフレキシブルに可動するので、複雑かつトリッキーな戦闘機動が可能となる。

**3** メインスラスター / ギャプランの高機動、高加速力の源。これと全身のスラスターによる推力で飛行能力を得ている。

**4** 可変機構 / 腰部を軸に展開し脚部などは背部スラスターと統合される。変形システムとしては割とシンプルな構成。

5m





### ビーム・ライフル

両腕（肘）部に装着した2基のムーバブル・シールド・バインダーの先端にはビーム・ライフルを装備する。機体のジェネレーターに直結されているためエネルギーCAPのレスポンスが高くビームの出力も大きい。



### ビーム・サーベル

一撃離脱など高機動戦闘を中心に考えられたギャブランは、近接戦闘をほとんど想定していない。しかし、そうした近接戦も考慮してビーム・サーベルを装備している。標準的な規格で、腰のサイドアーマーに収納される。

### MA形態



胴体前面の胸部と腰部のアーマーがせり上がり機首形状となる。一見すると航空機風にみえるが、翼はなく揚力はほとんど発生しない。このため本体のスラスターの推力で飛行を行う。ブースターを後部に装着することで航続距離を伸ばすだけでなく大気圏離脱も可能となる。

### PICK UP!



シャトル基地へと向かうエウゴ（カラバ）のアウトドラを追撃するため、ギャブランに搭乗したロザミア率いるMS部隊が急襲。カッツはガンダムMk-II（+ド・ダイ改）で出撃するが、ギャブランの動きに付いていくことができない。撃破まであと一歩と迫るギャブランだったが、シャアとカミーユが駆けつけ及ばず。乗り替わったカッツからカミーユのガンダムMk-IIに取りつかれ、撃墜されてしまった（ロザミアは脱出）。強化人間特有の不安定さが垣間見えた瞬間だった。



ティターンズの戦艦アレキサンドリアには、ヤザン・ケープルとともにギャブランが配属されていた。高い機動力と高速戦法、そこにヤザンの高い操縦技術が加わり、戦闘においてエウゴを幾度となく苦しめた。

当初、モニターの一部に死角が見つかるが、その後の戦闘で解消されているところを見ると、おそらく初期トラブルの類なのだろう。

搭乗者のヤザン曰く「動きの硬い機体」で、しばらくすると彼は本機からハンブラビへと乗り換えている。

## 大気圏内飛行も可能な 超高加速迎撃機

ORX・005ギャブランは、ごく初期に開発された可変MAで、開発元については諸説あり、ニュータイプの研究をしていた「オーガス研究所」、もしくは「オークランド研究所」ともいわれ、強化人間の使用を視野に入れた高機動タイプの機体である。

同じ黎明期の可変MAであるNRX・044アッシマーも、オークランド研究所で開発されていたとされているものの、本機とは大きく性格の違う機体となっている。

アッシマー同様、大気圏突入作戦に対する迎撃任務を視野に入れられてい

るが、本機は航空機的な技術を導入しているアッシマーに対し、空力的な飛行能力は最低限しか考えられていない。ひとくちに飛ぶといっても翼などの揚力にあまり依らず、極端といえるほどの高いスラスター推力で飛ぶのである。そのコンセプトは、さながら高空まで推力で上昇し、あとは滑空して降下するロケット機、もしくは攻撃機能のついた人間ミサイルともいえた。

戦闘機動もムーバブル・シールド・バインダーを機体両サイドに装着して無理やり行う構造で、またも大気圏内での運用を行うには、強化人間の高い身体能力は必須といえた。また、ジェネレーター出力も同時代機に比べても高く、搭載火器もビーム兵器主体な

がら、機動性、攻撃力の高さなどは、まさに旧ジオン公国軍の地上版MAさながらという性格の機体である。

しかし、前述したように本機のパフォーマンスを1G下で十二分に発揮するには、その強烈なGに対し、パイロットの身体機能が追い付かなかった。このことから本機は、むしろ強化人間のスペックに合わせて能力も設定されたと考えるべきだろう。いかにもニュータイプ研究所製らしい機体といえる。

一方でスラスター機動は推進剤を大量に消耗するため航続距離や稼働時間は極端に短く、これを補うため追加ブースターを装着するなど、運用には様々な制約が伴った。

こうした性格の機体であるからして、

高高度迎撃や高火力を利用した高速での一撃離脱にはうってつけで、強化人間以外でも使用できるように改修され、少数が量産されている。

極端な高推力機というコンセプトは大気圏内では極めて特殊な用途に用いられるが、宇宙空間において、むしろ時代に求められていたので、運用範囲はより広がったと思われる。ただ、初期の機体にはシステムの不具合もあり、現場の兵士からは不満も漏れ聞こえている。おそらく、操縦にはかなりの練度を必要としたのだろう。

しかし、本機のコンセプトはMSZ・006Zガンダムなどの後の可変機の主流となる考えであり、それをいち早く取り入れていたのである。





## Pilot File

## 主なパイロット



## フォウ・ムラサメ

ムラサメ研究所で4番目に作られた強化人間。失った記憶を取り戻すため、サイコ・ガンダムに搭乗。ニュー・ホンコンでカミーユと運命的な出会いを果たすが、それが悲劇を生む。



## PSYCHO GUNDAM

MRX-009

## サイコ・ガンダム

## Spec

頭頂高:40.0m 本体重量:214.1t 全備重量:388.6t ジェネレーター出力:33,600kW  
スラスター総推力:168,000kg センサー有効半径:10,200m 装甲材質:不明  
武装:ビーム砲×10、拡散メガ粒子砲×3、小型メガ・ビーム砲

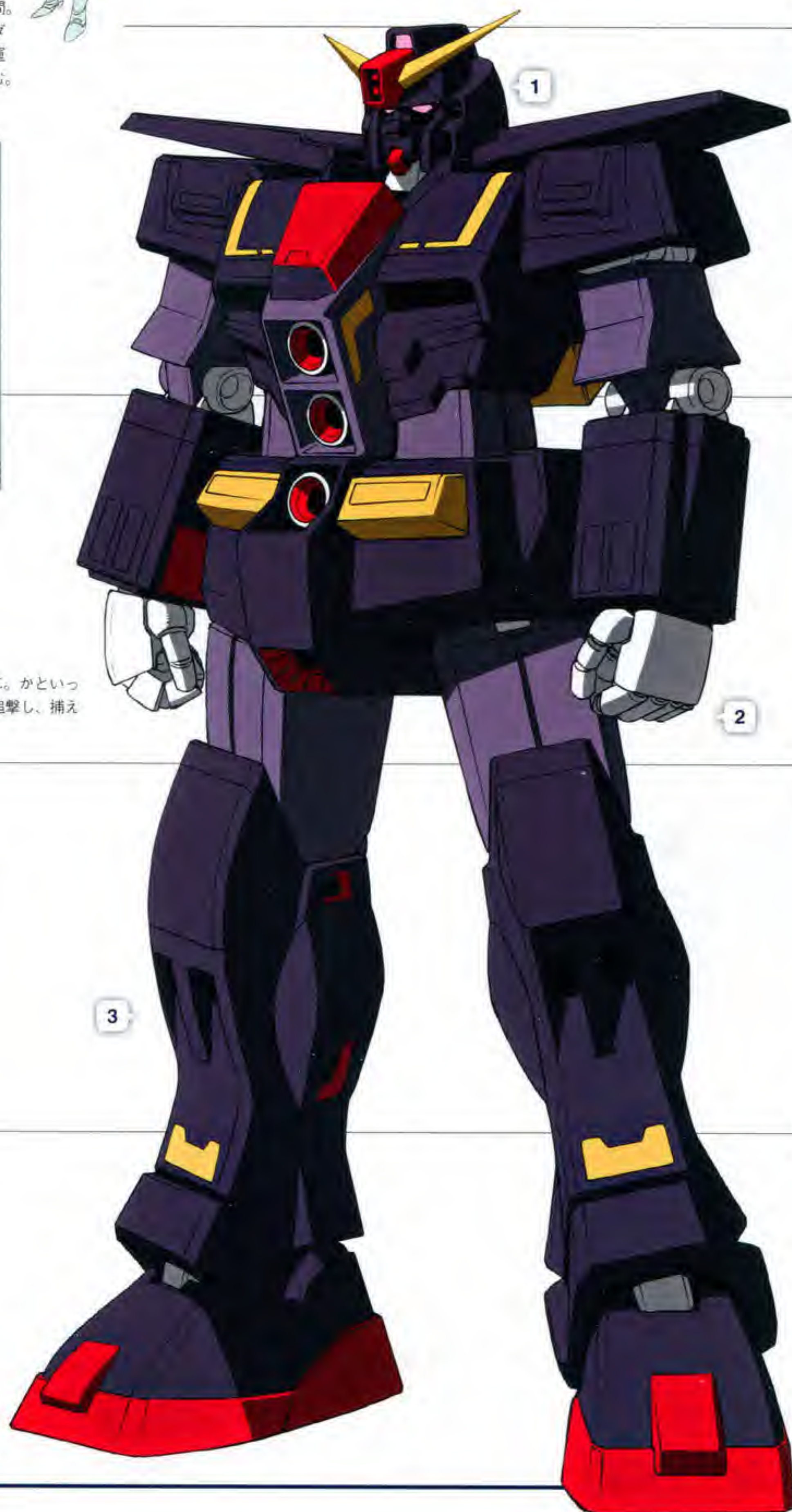
**1** 頭部 通常のMSとは異なり、頭部にコクピットを備える。これも大型MAならではの構造の違いだろう。これはジオン公国軍のジオングから影響を受けているという説もある。

**2** 指 五指すべてがビーム砲で、これもジオングを思わせる。さらに胸部の拡散メガ粒子砲と組み合わせて広範囲攻撃が可能。また腕部は格闘用で、実際にガンダムMk-IIを捕獲した。

**3** 脚部 通常MSとは異なり膝から脛にかけては巨大な装甲と可変用フレームなどで構成され、モビル・フォートレス時の前面装甲を担う。

## MSとのサイズ対比

MS形態では、通常のMSの倍近いサイズに。かといって動きは鈍重ではなく、ガンダムMk-IIを追撃し、捕えてみせるほどの機動性を発揮した。





## 武器・装備



## 拡散メガ粒子砲

腹部に3門装備される大型の拡散メガ粒子砲。モビル・フォートレス形態でも使用可能。一撃の威力というよりは、広範囲の大多數の敵に対して用いられる。



## ミノフスキー・クラフト

ミノフスキー物理学を応用し、物体を浮上させる効果を得る。艦船やサイコ・ガンダムのような大型の機体を飛行させるために、なくてはならない装置。



## サイコミュ・システム

サイコ・ガンダムの特徴として、機体すべての制御にサイコミュ・システムを採用している。そのため、パイロットへの負荷は、過大なものとなっている。

## モビル・フォートレス形態



サイコ・ガンダムのMA形態だが、実はこのモビル・フォートレスが基本運用形態。ボディをスライドさせて膝を折りたたみ、移動要塞のようなシルエットになる。モビル・フォートレス形態時には、ミノフスキー・クラフトが作用して飛行が可能。その巨体はガルダ級にも搭載するのは難しく、運搬時は機体下部に懸架されていた。

## PICK UP!



サイコ・ガンダムのパイロットとして、カミーユと運命的な出会いを果たしたフォウ・ムラサメ。その行く末は、TVシリーズと劇場版では異なる。ニュー・ホンコンでのフォウは、カミーユたちを宇宙へと送るために、自らを犠牲にしてスードリに搭載されているブースターを発進させた。TVシリーズでは、その後再調整を受けてカミーユの前に立ち上がるが、劇場版ではスードリから落下しそのまま命を落としている。



ニュー・ホンコンでの戦闘後、フォウはキリマンジャロ基地で調整を受け、再び戦士としてカミーユと対峙した。記憶を失ったフォウと、再び戦うという数奇な運命に絶望するカミーユ。さらにジェリドの復讐心を取り返しのつかない悲劇を生んでしまう……。フォウはジェリドの駆るパイアランのビーム・サーベルに、サイコ・ガンダムの頭部コクピットごと貫かれ、命を落としてしまうのだった。

要塞級のニュータイプ専用機  
漆黒のガンダムタイプ

ガンダムの名を冠する機体としては、異例の大型可変MAとなったMRX-009サイコ・ガンダム。それは、地球連邦軍初のサイコミュ・システム搭載機でもあった。

一年戦争において、ジオン公国軍が開発したサイコミュ・システムは、連邦軍にとっても大きな脅威となった。その直接の契機は、コンペイトウ（旧ソロモン）駐留軍を、姿も見せずに襲撃し、多大なる戦果を挙げたニュータイプ専用機、MAN-08エルメスの存在であった。10年進んでいるといわれるジオン公国軍の技術は、連邦軍優勢

の戦況下においても、大いなる恐怖の対象であった。戦後、連邦軍では盛んにニュータイプの研究が行われたことは当然の結果だろう。そういった状況下で、連邦軍関連の研究機関の1つであったムラサメ研究所では、サイコミュ・システム搭載型MSの開発と、その生体ユニット、強化人間の開発が並行して進められた。そうして完成したのが本機である。

外観こそガンダムだが、頭部コクピットや腕部のビーム砲などは、旧ジオンの技術系譜を思わせる。頭頂高4メートルを超える巨体はサイコミュ搭載のためと言われる。エルメスも全長80メートル以上、全高40メートルという巨大さだが、戦後の連邦軍でもシステ

ムの小型化は難しかったらしく、これが現時点での技術的限界であった。

本機はミノフスキー・クラフトにより飛行能力を獲得しモビル・フォートレス形態での移動が基本である。これはガルダ級にも搭載できない巨体ゆえ、運用上欠かせない機能だろう。一方、戦闘時はMS形態が基本といえる。グリプス戦役ではニュー・ホンコンの襲撃や、キリマンジャロ基地の防衛など、地上の拠点攻略、防衛用として大いに能力を発揮した。大型ゆえにきわめて高いジェネレーター出力による強力な火器と、機体制御にサイコミュを用いて、高い運動性能を確保し、さらにIフィールド装備で防御力も高い。本機はいわばコンセプト的には「連邦版パ

ーフェクト・ジオング」だが、戦闘能力はMA-08ビグ・ザム並みだったといえる。それはまさに、理想の機体になりうる力を秘めていた。

そういった究極ともいえるコンセプトの機体に、ガンダムの名と外見を与えるのは当然かもしれない。ガンダムは一年戦争の象徴的存在であり、旧ジオン残党にとっては恐怖の象徴であった。そしてニュータイプ機としても広く知られ、連邦軍がプロバガンダとして「ガンダム」を用いるのは、RX-178ガンダムMK-IIという前例もあり、決しておかしくはない。そしてそれ以上にニュータイプ機であることと、革新的な機体であることに意味があるのかもしれない。





## Pilot File

## 主なパイロット



## ジェリド・メサ

ティターンズ所属のMSパイロットで階級は中尉。優れた資質は持っていたが、ガンダムMk-II強奪事件で生まれたカミーユとの因縁、確執に捕らわれていた。機体の乗り換えも激しい。



## マウアー・ファラオ

ティターンズの女性パイロット。階級は少尉。ジェリドの実直な性格を美点と認めてパートナーとしてジェリドを支える存在となっていた。Zガンダムとの戦いでジェリドをかばって戦死した。

## GABTHLEY

RX-110

## ガブスレイ

## Spec

頭頂高:18.5m 本体重量:32.6t 全備重量:56.2t ジェネレーター出力 1,800kW  
スラスター総推力:125,200kg センサー有効半径:10,900m 装甲材質:ガンダリウム合金  
武装:バルカン砲、ビーム・サーベル×2、フェダーイン・ライフル、脚部クロー×2、他



**1** 頭部 / アンテナや細くなった顎部分などデザインはどこか昆虫的で本機のMA形態に通じるところがある。額中央の膨らみ部分にバルカン砲を一門装備する。

**2** 肩部メガ粒子砲。砲身基部が自由に可動して広い射角を持つ。至近距離で自機の周囲の敵に向けての射撃も可能で、攻防両面で有効なビーム兵器だ。

**3** 脚部。下腿部のフレームは装甲から突出させてクローアームとすることができる。MA形態だけでなくMS形態でも使用が可能で、かき爪で敵を引き裂くなど近接戦闘で威力を発揮する。

**4** スラスター。機体各部の装甲内部には姿勢制御用に計22基。補助用バーニアが計16基設置。これらを最大限駆使することにより従来機を凌駕する高い運動性を獲得している。





### フェダーイン・ライフル

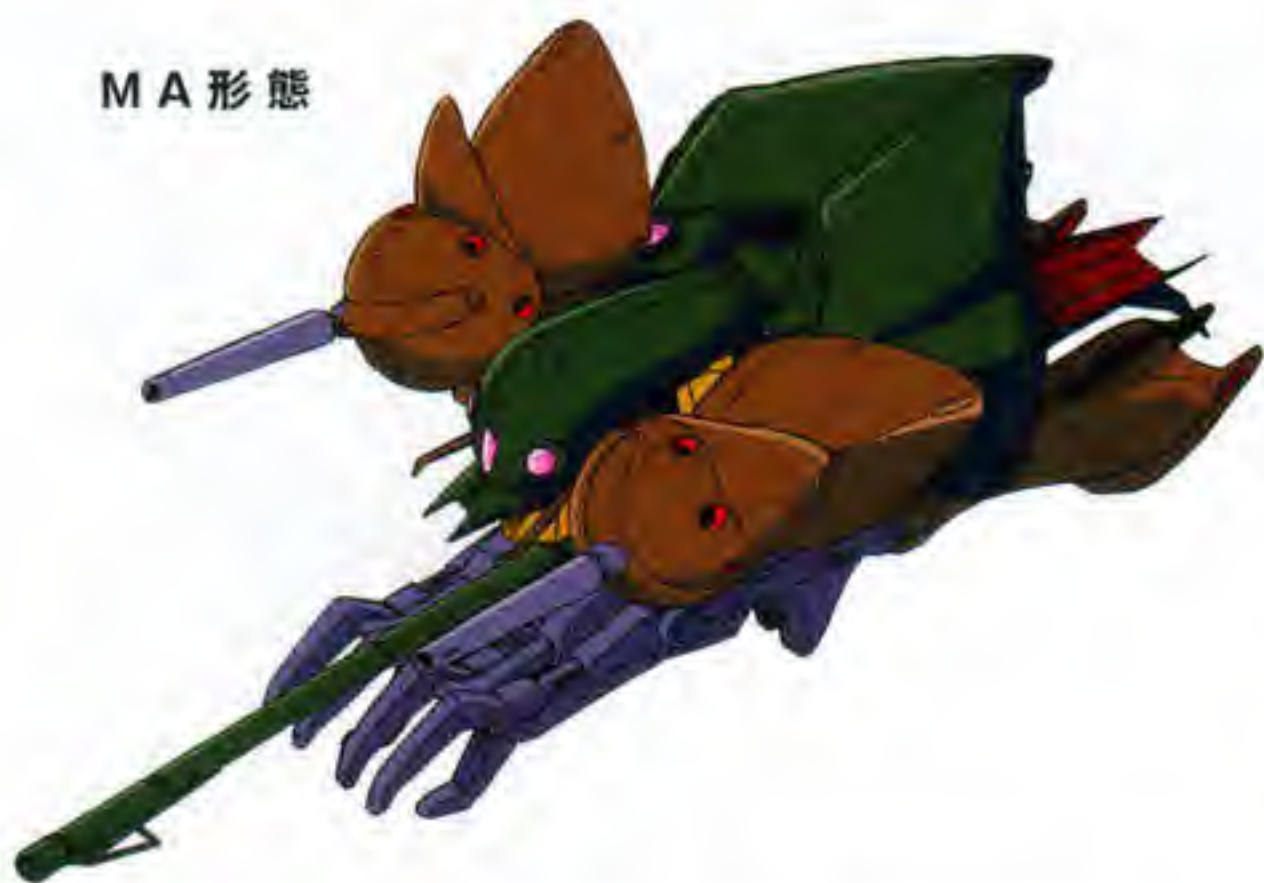
携帯式ビーム兵器で非常にバレルが長い。MA形態では腹部にマウントして使用する。フェダーインとはアラビア語で「戦士」を意味する。ビームを調整してビーム・サーベルのように使用もできる。ガブスレイ専用でなく他の機体でも使用された。



### ビーム・サーベル

接近戦用の兵器。両前腕部の袖部分のアーモア内側に2本ずつ、合計4本を装備する。出力などは通常MSと同規格のものらしく、機能などは変わらないようだ。形成するビーム刃の色はイエロー系。

### MA形態



ガブスレイをもっとも印象付けるMA形態。まるでセミや甲虫といった昆虫を想起させるデザインで、他の可変機と比べても異彩を放っている。本体の装甲を前面に集中させ、フェダーイン・ライフルや肩部メガ粒子砲を前方に向け突撃する。クローによる格闘戦もこなせる。

### PICK UP!



エウゴのアーガマ隊への奇襲作戦が実行され、出撃するジェリドとマウアーのガブスレイ。2機のコンビネーションによる連携攻撃でZガンダムを追い詰めるが、一瞬の隙を突かれ反撃され、ジェリドのガブスレイに攻撃が迫る！

その瞬間、マウアーの機体が縦となって庇った。それによりマウアー機は大破。愛する人を失い復讐を誓うジェリドは、アーガマに特攻をかけるが、ZガンダムとガンダムMk-IIに阻止された。



新型のガブスレイは、ティターンズの戦艦ドゴス・ギアに配備された。パイロットに指名されたジェリド・メサとマウアー・ファラオによる運用テストが行われ、その途中、パプテマス・シロッコのメッサーラが割り込み、ジェリドたちの腕試しをした。実際の戦闘ではエウゴのアーガマ追撃戦に投入された。カミーユのガンダムMk-IIを中破する活躍を見せたが、Zガンダムの介入を受け被弾し、撤退を余儀なくされた。

昆虫型のMA形態が特徴的。シロッコ設計の可変MS

RX-110ガブスレイは元々、パプテマス・シロッコが原案設計をしたものといわれ、彼がティターンズに加わる際に持ち込んだ手土産の一つとされる。実際の開発は連邦軍のルナツー基地で行われ、短期間で試作機の製造、初期テストを経て実戦に投入された。

本機の可変機構は特徴的でMA形態時には、下半身のフレームが外へと露出し、脚部周囲の装甲とは別体となる構造だ。これによりMSとMAの中間のような形態になることが可能で、露出した脚部フレームは多目的クローとして機能した。

これはムーバブル・フレーム構造を活かし、変形にとどめることなくフレームの特性を他機能に利用しようとする、新たな実験的要素とも考えられる。それに伴いMA形態のシルエットは独特の形状で、全体の可変機構も複雑極まりない。

一方、機体のポテンシャルは、可変機といえどもMSに分類されるため、搭載するジェネレーターは標準的な出力。スラスタ・推力の数値はかなり高く、実戦における動作から、パフォーマンスとしては、これで十分という考え方なのだろう。また機体の特徴として火力が極めて大きい、という点が挙げられる。同時代の機体と比べても、かなり強力な部類であり、特に携帯式

のビーム兵器、フェダーイン・ライフルの最大出力は6・6MWと破格の数値といえ、両肩のメガ粒子砲と合わせると相当な威力を誇る。

だが、先に挙げたように本機に搭載されているジェネレーターは標準的な出力である。このため、高出力ライフルの使用は、機体に過大な負荷がかかるような最大出力の射撃などは、ある程度の制限があったと思われる。

このように、通常MSのサイズ（18メートル級）に極端な機能を付加した機体というのは、どのようなものなのか。それは、一撃離脱攻撃に特化していたと考えられる。つまり、ジェネレーター出力のほとんどを機体制御ではなく、火力に注ぐのである。脚部の

クローも、MAで接敵した際の近接戦用装備を考慮してのことだろう。

可変機の発想は、MAにMSの能力を付与することから始まっているが、本機は、MSにMAの攻撃力と機動力を持たせるといって、逆アプローチの機体といえる。同時期のZガンダムも同様コンセプトの可変MSだが、こちらは両形態のバランスを重視している。結果的に、Zガンダムの方が本機より15%も軽く、こうした差は、実際の戦場では大きく作用したに違いない。いずれにせよ本機は過渡期的な機体であり、試作機であるRXナンバークからは脱却できず、制式採用されずに終わった（その点ではZガンダムも同じといえなくもない）。





## Pilot File

## 主なパイロット



## ヤザン・ゲーブル

ティターンズのMSパイロット。ニュータイプではないが、その技術力、戦闘力は非常に高く、ニュータイプを追い詰める場面も多々あった。戦闘自体を楽しむ戦闘狂で荒々しい性格。



## HAMBRABI

RX-139

## ハンブラビ

## Spec

頭頂高:19.9m 本体重量:34.6t 全備重量:56.9t ジェネレーター出力:1,540kW

スラスター総推力:59,800kg センサー有効半径:10,020m 装甲材質:ガンダリウム合金

武装:ビーム・サーベル×2、背部ビーム・ライフル×2、フェダーイン・ライフル、海ヘビ、他

**1** 頭部 両肩装甲と一体となった頭部デザインで、先端は鋭く尖った形状。顔の正面や後頭部と両肩合わせて計5基のモノアイを装備。

**2** クロー 前腕部には格闘戦用クローが備わっている。その際、マニピュレーターの手首は腕部に収納もできる。

**3** スタビライザー 左右に広げた2枚の大きなフィン、放熱板だけでなくAMBACによる姿勢制御でも効果を発揮。

**4** 脚部 膝の関節部は二重構造で可動範囲が非常に広い。腰部分のスカート・アーマーは変形に支障がないように前面と両サイドにしかない。

**5** テールランス MS時には名前のごとく槍（ランス）のように使用でき、MSの装甲を貫く強度もある。



20m

10m

5m



## シンプルな変形機構で 量産化を狙った可変MS

RX・139 ハンブラビは、RX・110 ガブスレイと同様、ジュピトリスのキャプテン、パプテマス・シロッコが、ティターンズ参加時に提供した設計図を元に開発された可変MSといわれる。

その開発ナンバーは、ゼダンの門(旧ア・バオア・クー要塞)の試作機を表す「13」と、そこで開発された9番目の機体として「RX・139」の型式番号が与えられている(ガブスレイの開発はルナツー工廠)。複雑な可変機構を有するガブスレイとは異なり、このハンブラビの変形システムは、脚部

を折りたたむだけのきわめて単純化された機構だ。この対照的な2機種を、なぜシロッコは開発したのか。

本機を性能スペック面で追うと、実に驚くべき存在なのがある。それは、カタログデータでは見るべきところほとんどないに等しいのである。ジェネレーター出力は平均的で、スラスター推力はむしろ低い。

当時の旧式化したつつあるRGM・79 RジムⅡと比べても、ジェネレーター出力は同等(同規格品か?)、重量は10%ほど軽い、推力はむしろ劣るのだ。相対的にもそれほど差がないのだ。もちろんムーバブル・フレーム、ガンダリウム合金といった第三世代機としての要件を満たしているものの、あ

まりに貧弱といえば貧弱だ。しかし、この機体を実戦ではMSZ・006 Zガンダムに劣らぬ能力を発揮し、時として上回ることもあった。これには機体特性をよく理解し、的確に運用したパイロットで部隊長を務めたヤザン・ゲーブルの力が大きかっただろうが、機体の潜在性能も高かったといえるだろう。

実際、ヤザン隊は3機編隊で「海ヘビ」や「クモの巣」といった特殊兵器を駆使して敵を翻弄していた。このような装備は、本来なら近接戦闘用の機体に取り付けられるべきもので、それは同時に敵に対し、常に優位な位置を取らねば成り立たない戦法である。そして、それを実行できるだけの能力が

本機にはあったということだ。そこにハンブラビの特性も見えてくる。本機はおそらく、操縦しやすさを最優先した機体かもしれない。単純な変形も、前面投影面積を小さくし被弾率を低下させる効果が高い。これにスラスターの加減速を加えて、急加速、急減速を行い、素早く敵の懐に飛び込むのだ。

あくまで仮定の話だが、本機のように、カタログスペック上は凡庸に見えても、じつは優秀な機体というのは、戦場で何より大事な搭乗員や運用面の「扱いやすさ」を実現するため、技術的信頼性の高いものを最優先にして開発が行われていた、と考えることもできるのである。

### 背部ビーム・ライフル

背中から2本突き出ているハンブラビのメインの射撃兵器。可動式である程度の射角変更が可能。ユニットそのものは本体に直結されている。

### 海ヘビ

先端にスラスターを内蔵したユニットにはワイヤーが繋がっていて、それを射出し敵に巻き付け電撃を加える。これにより電子機器やパイロットにダメージを与える。

### クモの巣

複数の機体による連携で、ワイヤーネットをクモの巣状に展開し、そこに敵を追い込み感電させる。一種のトラップ兵器。集団で運用する海ヘビといえる。

### MA形態

ハンブラビのMA形態への変形方法の手順は、人間をエビ反りさせるような恰好で、あまり複雑な変形は行っていない。MA時は背中のテールランスも伸び、エイのようなシルエットとなっている。

### PICK UP!



ヤザンの搭乗機というイメージが強いハンブラビだが、彼が乗る前、じつは最終調整のテストが行われており、同じシロッコの部下、サラ・ザビアロフがその任に就いていた。シロッコの命により月のフォン・ブラウン市へ潜入工作を行う彼女の護衛部隊にもハンブラビが用いられていた。そうした調整を踏まえてヤザン以下、ラムサス・サハ、ダンケル・クーバーが搭乗することになるが、その搭乗機がサラたちのテスト機かは定かではない。



ヤザン隊長率いるハンブラビは、3機小隊で行動することが多く、対峙するエウゴのZガンダムなどは苦戦を強いられることもあった。中でもレコア・ロンドが搭乗したメタスを大破させ、捕らえた彼女をシロッコの下に連れ去っている。

またヘンケン・ベッケナーが指揮する戦艦ラーディッシュの撃沈や、カツ・コバヤシの乗るコア・ファイター(Gディフェンサー)を撃破に追い込むなど、数多くの戦果を挙げている。





# BOUND DOC

NRX-055

## バウンド・ドック

### Spec

頭頂高:27.3m 本体重量:82.7t 全備重量:129.4t ジェネレーター出力:2,260kW スラスター総推力:145,800kg センサー有効半径:9,840m 装甲材質:ガンダリウム合金 武装:ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、脚部クロー、他

一際異彩を放つデザインのニュータイプ専用の変換MA。NRX-055バウンド・ドックは、ティターンズのニュータイプ専用可変MAだ。開発は連邦軍(ティターンズ)と、それに与するニュータイプ研究所(施設はオーガスタ、オークランドなど諸説ある)で進められた。MS時の全長も30メートル前後と巨大で、上半身は左右非対称の構成と独

自色が強い。その機体サイズにしても、搭載するサイコミュ・システムの影響などは明らかだが、それでもMRX-009サイコ・ガンダムより小型化を達成している(もともとサイコ・ガンダムよりかなり能力を限定されている可能性は高い)。

可変機構も独特で、MSの上半身が下半身のスカートアーモに収容され、左腕部のシールドで蓋をする格好で、全体のシルエットはカブトガニや甲殻

類を想起させるユニークな形状だ。このカートアーモに装甲を集中させ、防御力の強化を図ったのかもしれない。実際のところ、本機は実験機の域を出ておらず、その途上、やむなく実戦投入されたというのが正しいだろう。グリプス2(コロニー・レーザー)宙域の戦闘で、ジェリド・メサ搭乗機(元はロザミア・バダム搭乗機)が、エウーゴ陣営と戦ったが、機体が喪失したため、実力のほどは判然としない。

### Pilot File

#### 主なパイロット



#### ジェリド・メサ

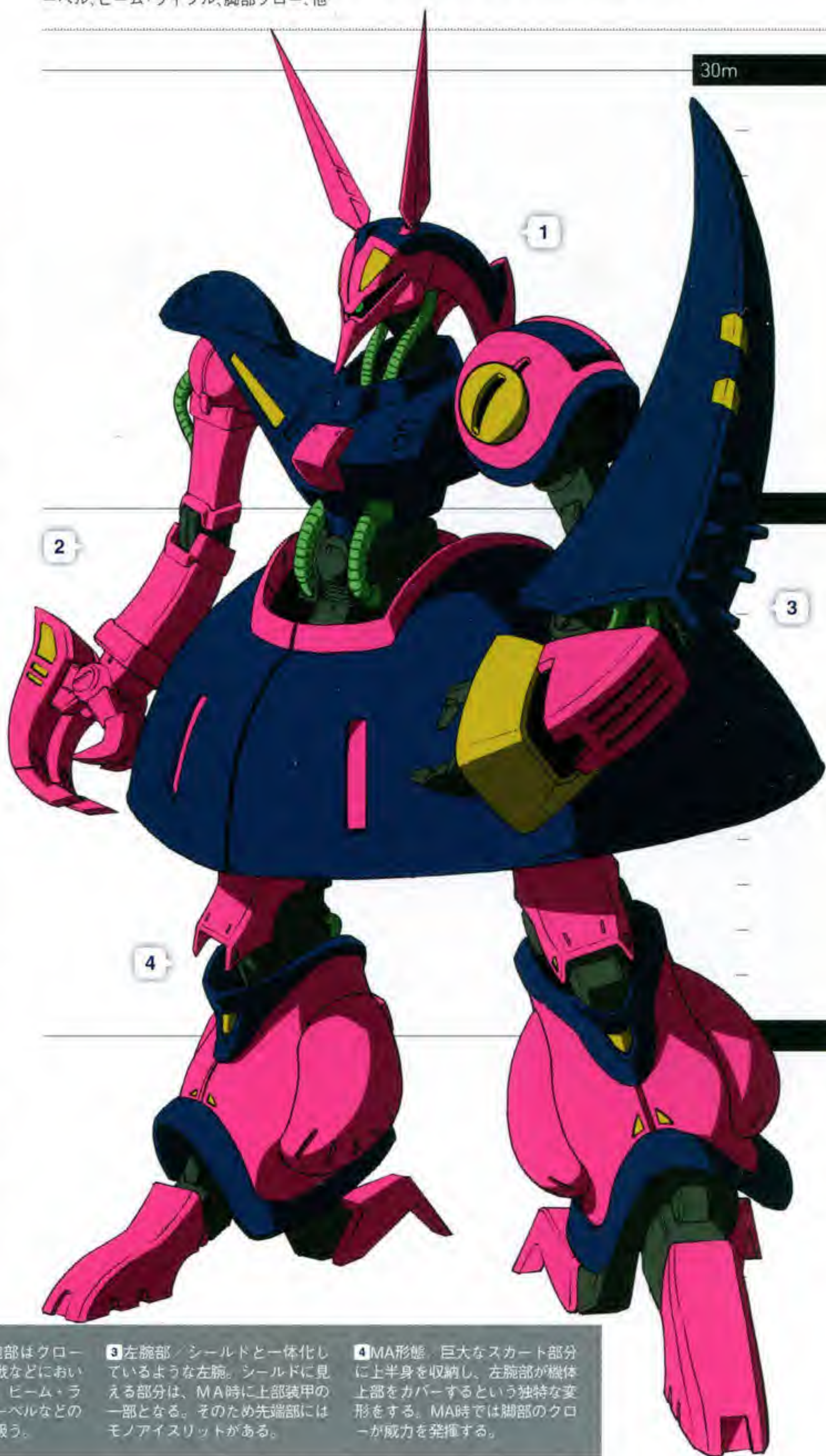
最愛のマウアーを失い復讐の炎を燃やして、ニュータイプ専用機であるバウンド・ドックで出撃。最期は奮戦虚しく、ラーディッシュの爆発に巻き込まれて散った。

1 頭部/突き出た2本のブレードアンテナ(?)に、鼻先がすぼまったフェイス部の形状は、まるでキツネか犬を彷彿とさせるデザイン。モノアイ式センサーを採用。

2 腕部クロー/右腕部はクローを備えている。格闘戦などにおいて威力を発揮するが、ビーム・ライフルやビーム・サーベルなどの携行兵器は左腕部で扱う。

3 左腕部/シールドと一体化しているような左腕。シールドに見える部分は、MA時に上部装甲の一部となる。そのため先端部にはモノアイスリットがある。

4 MA形態/巨大なスカート部分に上半身を収納し、左腕部が機体上部をカバーするという独特な変形をする。MA時では脚部のクローが威力を発揮する。







# PSYCO GUNDAM Mk-II

MRX-010

## サイコ・ガンダムMk-II

### Spec

頭頂高:39.98m 本体重量:187.8t 全備重量:283.9t ジェネレーター出力:19,760kW スラスタ総推力:244,240kg センサー有効半径:16,230m 装甲材質:ガンダリウム合金 武装:サイコミュ式ビーム・ソード×2、メガ拡散ビーム砲、リフレクター・ビット、他

巨大なサイコ・ガンダムが  
火力増強で進化する

MRX-009サイコ・ガンダムの後継機として改修されたのがMRX-010サイコ・ガンダムMk-IIだ。モビル・フォートレス形態への変形や、MS時には40メートルという大型サイズなど、基本的な構成は踏襲している。つまりミノフスキー・クラフトでの飛行移動、拠点攻撃／防衛が主眼と考え

れば、ロザミア・バダム搭乗時、本機を宇宙に配備したのは、適した運用法ではなかったかもしれない。その後、ネオ・ジオンに接収・改修されプルツィが搭乗し、ダブリンへ投入された。これこそが本来の運用方法だろう。武装面での改修が著しく、中でもリフレクター・ビットの搭載がポイントだ。これは本体のビームを反射させ、擬似的なオールレンジ攻撃を実現するサイコミュ式兵装だ。さらに腕部（手

首）にビーム刃を形成し、分離射出するサイコミュ式ビーム・ソードなど近接戦闘へも配慮がされている。スペック面からも扱いやすさと機動性アップを目指していたことがわかる。だが、パイロットに過度の負担を強いる機体特性に変わりはなく、プルツィのように割り切って戦闘に臨む、安定した状態の強化人間を得ることで、ようやく本来のポテンシャルを発揮できたといえる。

### Pilot File

#### 主なパイロット



#### ロザミア・バダム

オーガスタ研究所出身の強化人間。ギャプランやバウンド・ドッグなどに搭乗。精神に大きなダメージを負い、一時はカミーユを兄と信じ込まされていた時期もあった。



①頭部／サイコ・ガンダムと同様コクピットとなっている。カミーユに狙撃されるなど、やはりウィータポイントに。

②メガ拡散ビーム砲。腹部のビーム兵器もサイコ・ガンダムと同様。リフレクター・ビットとの併用で攻撃範囲は拡大。

③腕部／サイコミュ式で分離し遠隔操作武器として使用可能。手首部分を折りたたみ、ビーム・サーベルも形成する。

④脚部、可変構造もサイコ・ガンダムを踏襲。だが膝部にスタビライザーが設けられ、小型メガ粒子砲も増設されている。



# ティターンズ テスト部隊と 可変機開発

開発機関のつながりが  
技術の進化を促す？

一年戦争終戦後の、MS開発は旧ジオン系のメーカーを吸収合併し、技術開発力を大幅に向上させ急成長を遂げるアナハイム・エレクトロニクス(AE)社と、地球連邦軍工廠、ならびに各研究所の2つの系統に大別できた。AE社は各ディビジョン(というよりは社内別会社の趣だ)に別れて独自にMS開発を行い、連邦軍においても接收した旧ジオン公国軍系の工廠などの施設を利用するなどして、MS開発や生産拠点は増加した。

そして、開発環境以外に政治的な要

因もMS開発に影響を与えていた。それは宇宙世紀0083年のデラース紛争に端を発する、連邦軍内におけるスペースノイドの排斥とアースノイド至上主義の風潮だ。この流れの中で生まれた組織が、ティターンズである。

そのため、ティターンズにおいてはスペースノイドとつながりの深いAE社とは距離をおき、連邦軍工廠主導で自らが運用するためのMS開発を進める傾向が強かった。RGM-79Qジム・クウエルは、オーガスタ研究所製のRX-78NT-1(ガンダムNT-1)アレックスを参考にルナツー工廠で製造され、ティターンズが採用した量産機である。この機体は部分的にムーバブル・フレームに近い構造が採用され、後のグリプス工廠におけるRX-178ガンダムMK-II開発の礎となったとされる。この分野ではAE社より連邦軍工廠の方が技術は進んでいたようだ。ただ、ティターンズのこの「独立独歩」的気風も薄まったのか、グリプス戦役期にはAE社製のRMS-108マラサイを採用するといった変化も見られてはいる……。

このような経緯もあり、ティターンズとニュータイプ研究所との繋がりも深かった。さらにはジム・クウエルの後継ともいえるガンダムMK-IIは、グリプスの工廠で開発されるなど、連邦軍工廠同士の横のつながりも存在し

RRX-107  
TR-4  
[ダンディライアン]



ハイザックをベースに開発されたRX-107ロゼットにジム・クウエルの大気圏突入用モジュールを装着した形態。大気圏突入形態・MA形態・MS形態の3つの形態をとれる(厳密には可変機というよりも可変移行機が正しい)。開発自体はAE社が行った。

NRX-044  
試作アッシマー  
TR-3[キハール]



試作中のアッシマーをティターンズが徴収し、可変機構の検証を行った機体。脚部をプロペラントタンク化した宇宙仕様から、さらに独自に1G下での運用に主眼をおいた仕様変更がなされた(連邦軍のアッシマーとは異なる)



## ガンダムMk-IIを ティターンズが開発したワケ

本格的にムーバブル・フレームを採用したガンダムMk-IIを先んじて配備できたティターンズ。これもMS開発に関する情報を各機関がある程度共有し、効率化できたおかげだろう。後に本機の実質的量产機とされるバーザムがグリプス工廠からはるか遠いニューギニア工廠で開発されるというのも外部からは一見不可解だが、内部的には筋の通った話なのだろう。

### RX-178 ガンダムMk-II (ティターンズカラー)

#### Spec

頭頂高:18.5m  
本体重量:33.4t  
全備重量:54.1t  
ジェネレーター出力:1,930kW  
スラスター総推力:81,200kg  
センサー有効半径:11,300m  
武装:頭部バルカン・ボッド、ビーム・ライフル、ビーム・サーベル、ハイパー・バズーカ



た。ティターンズ、連邦軍工廠、各研究所間で一種のMS開発ネットワークが形成されていたのだろう。ティターンズがAE社に先んじてムーバブル・フレーム（ひいては可変機）技術を開展できたのは、このネットワークあってこそ、という可能性は高い。

さらに、それら新技術を盛り込んだ機体をテストする専門部署も存在した。ティターンズテストチーム（T3）は、ティターンズが開発したMSの実用試験専門部隊である。T3が試験・改良を行った機体は多岐に渡っている。そこには将来的に有望とみえる機体を各開発機関からピックアップし、それらをT3が検証、フィードバックを行うという図式がみえてとれる。このよ

うな形にすれば、実機の開発は効率よく行える。さらに、ティターンズが有力なMSを独占する意味においても、一定の効果が見込める。

ORX-005ギャプランやNRX-044アッシーマーなどは連邦軍が開発した機体だが、ティターンズが有力と認めてテスト運用したものと思われる。それらの機体に可変機が多いのは、当時は可変機が非常に有望視されていたということだろう。

実際には、T3が試験を行ったMSがそのままの仕様で量産される、というケースはなかった。しかし、T3の存在、およびその試験結果は様々な形でティターンズのMS開発に影響を与えていたのだ。

ORX-005ギャプランはT3で熱心に研究された機体のひとつ。ギャプランの「T3仕様」ともいえるフライラーや、そこから弾道軌道による拠点強襲任務に特化したファイバーといった機体が開発されている。

### ORX-005 ギャプランTR-5 [アドバンスド・フライラー]



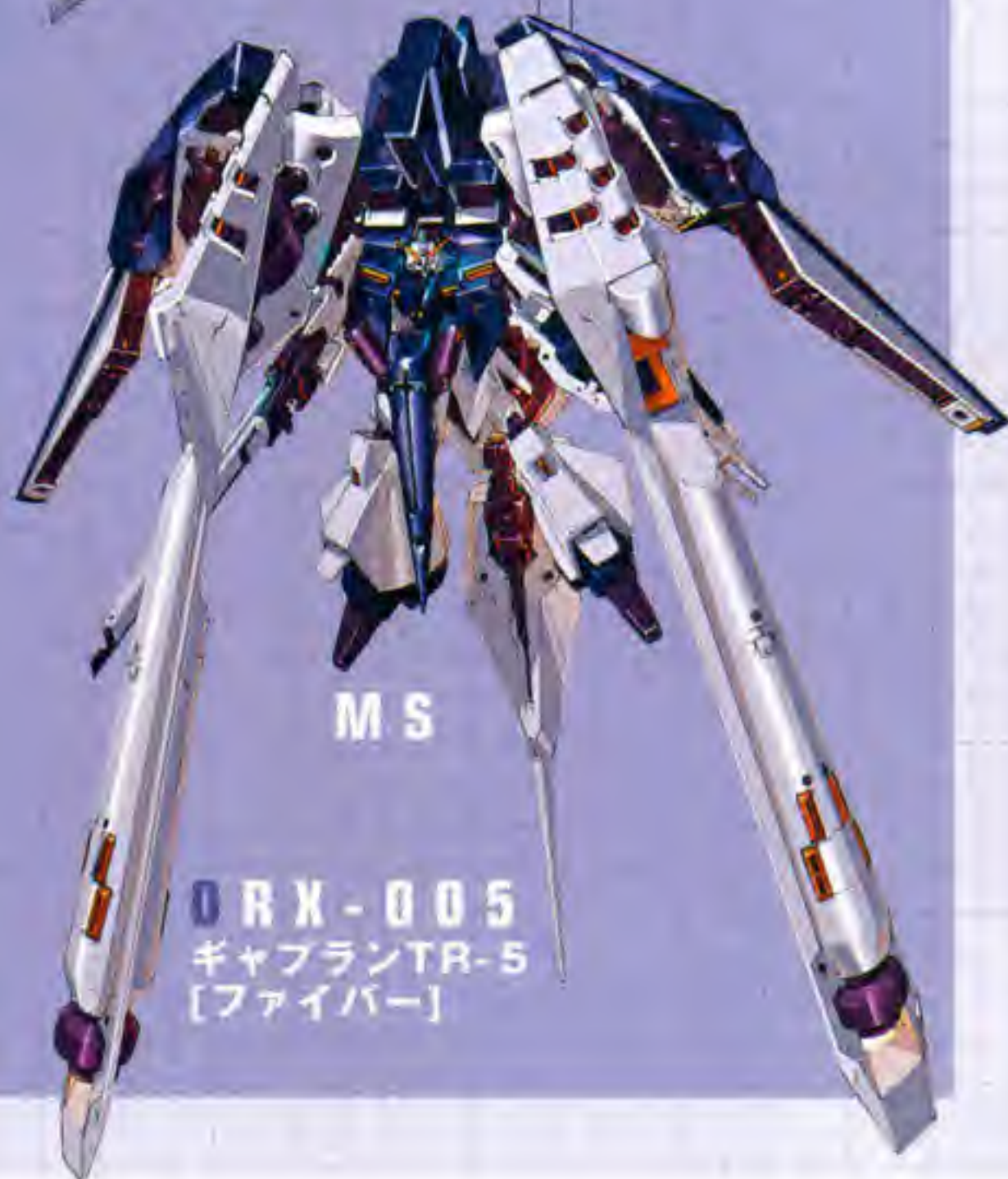
変形

### ORX-005 ギャプランTR-5 [フライラー]



MA

変形



MS

### ORX-005 ギャプランTR-5 [ファイバー]



# エウーゴ系 可変MSの根幹「Z計画」

エウーゴはアナハイム・エレクトロニクス社の協力を得て、「Z計画」をスタートさせる。その計画は宇宙世紀の歴史に名を残す、多様な可変MSを生み出していくことになる。

## ハイエンドMS開発計画と エウーゴの思惑の合致

エウーゴの可変機開発計画は、同組織とアナハイム・エレクトロニクス（AE）社が推進した「Z計画」を抜きには語れない。グリプス戦役を代表するMS、MSZ-006Zガンダムや、超火力のMSZ-010ZZガンダムなどを生み出し、いわゆるZ系は可変MSの代名詞的存在となった。

こうしたZ計画の詳細については諸説あり、エウーゴが次期主力MSの開発を模索したもの、最初から可変機の開発計画であったなど、様々である。だが開発された機体群を振り返ってみると、この計画は、少なくともAE社が持てる技術力をすべて投入する「ハイエンドMSⅡガンダム開発計画」であったということがわかってくる。

AE社の発展を振り返ってみると、一年戦争後、ジオン公国のMS開発の根幹を担っていたジオニックス社を吸収、さらに他のMS関連企業の買収を続けることで、MS製造分野においてはト

ップ企業となった。

だが、ティターンズが健在であったグリプス戦役期では、連邦系の工廠やニュータイプ研究所がティターンズの強い影響下にあったこともあり、新進の民間企業にとって、自らの技術力を示すようなMSを世に出す必要があったのは、想像に難くはない。実際、Z計画で生み出された機体は、どれも同時代のティターンズ系のMSを凌駕するような機体であった。またAE社がエウーゴと結託した背景にも、対峙するティターンズの影響が大きかったの

## 可変MSの代名詞となった 「Z計画」の機体群

Z計画とは、型式「MSZ」の範疇に限らず、AE社のMSから様々な影響力を受けて結実したものといえる。

たとえば、ガンダリウム（γ）合金を採用し、初期にはγガンダムと名づけられる可能性もあったRMS（MSA）-099リック・ディアス。ムーバブル・フレームを導入し、可変MSのガンダムとして開発がスタートしつつも、最終的に非変形型となったMSN-00100百式。変形機構のテストベッドとして様々なデータをフィードバックしたMSA-005メタス。こうした機体の開発経験を経て、Z計画を代表するMSであるZガンダムは誕生した。

エウーゴにとって当初の最大の目標は、ティターンズの本拠地であるジャブロー基地への攻撃であった。これは地球連邦軍内の内紛という、エウーゴとティターンズの対立構図があるために複雑な事情が絡み、エウーゴとしてはジャブローを撃破するのではなく、一時的にでも占拠し力を誇示することが最大の目標だったのだろう。

そのためには、他のMSよりも性能的にアドバンテージを持ち、オブション換装が不要で大気圏突入が可能な機体が必要であった。ウェイブ・ライダー形態こそないものの、大気圏突入可能機という意味ではRX-78ガンダムに非常に近いものであった。

結果的にエウーゴのジャブロー急襲作戦にZガンダムは間に合わなかったものの、副次的にZガンダムの持つ特



RMS-099  
リック・ディアス

新素材ガンダリウム（γ）合金を装甲材質に採用。連邦技術者のフランク・ピダンも注目するMSだった。ガンダリウム合金は、のちのZ系MS以外の機体にも採用されていくことになる。



## アナハイム・エレクトロニクス社 主要MSと「Z計画」の系譜



MSA-0011  
Sガンダム

自律制御を可能とした人工知能システムALICEを搭載した変形合体MS。その構造はZZガンダムとの関連性を感じさせる。



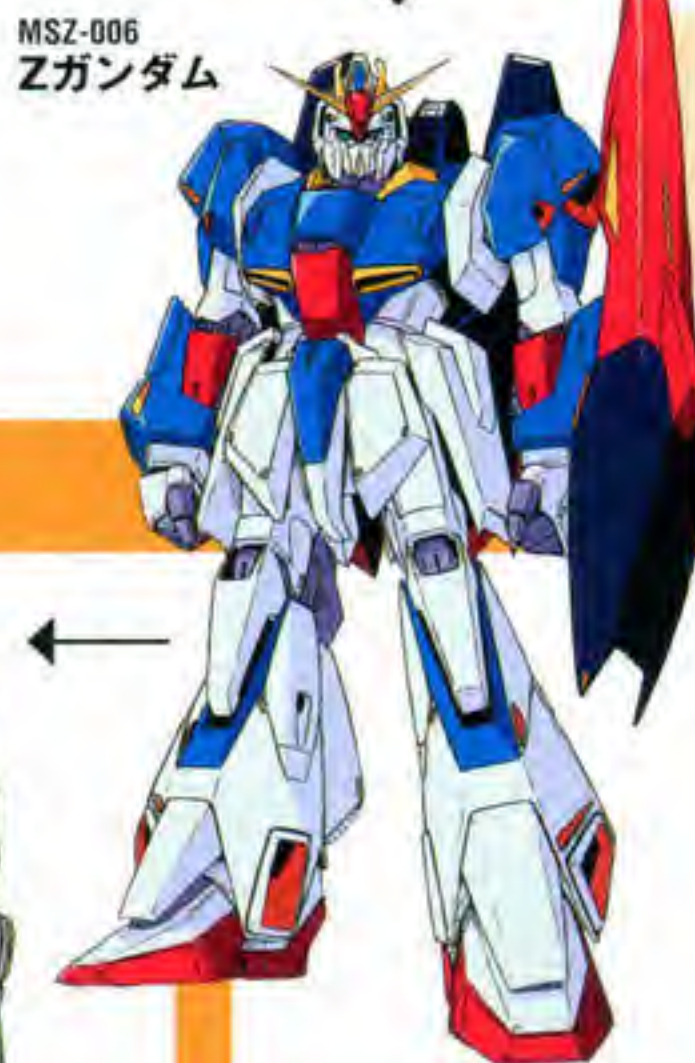
MSA-005  
メタス



MSN-001  
デルタガンダム



MSZ-010  
ZZガンダム



MSZ-006  
Zガンダム



MSN-00100  
百式



MSN-001A1  
デルタプラス

当初は可変MSとして開発されたデルタガンダムだが、諸問題によって実機の製造には至らなかった。その後、非変形の百式としてロールアウト。宇宙世紀0090年代には、可変機として再設計されたデルタプラスが登場。

RX-78ガンダム以来の合体構造（コア・ブロック・システム）を採用。大出力MSとなったが、あまりにも高コストで機能的にも限定される機体で、発展を遂げることはなかった。

MSZ-006A/C  
Zプラスシリーズ

Zガンダムの性能の注目したカラバは、大気圏内専用機としてZプラスA1型を開発。以後様々なバリエーションが登場していく。一方で宇宙世紀0090年代には、Zガンダムの再設計機として、型式「RGZ」の機体が開発される。

RGZ系へ



性がグリプス戦役で脚光を浴びることになる。Zガンダムが持つ優れた機動性や、あらゆる戦況にフレキシブルに対応する性能は、可変機のメリットを十分に活かすものだった。また、グリプス戦役が小規模紛争であり、カミーユ・ビダンの活躍が際立っていたことも、Zガンダムのイメージに少なからず影響を与えている。

Z計画が先に述べた「ハイエンドMS開発計画」だと推測される理由に、同計画の機体であるZガンダムが、Zガンダムとまったく共通性のない機体であることも理由のひとつだ。ZガンダムはRX-78ガンダムとGアーマーのコンセプトと継ぎ、ジェネレーター3基を搭載する高出力、高火力MSとして開発された。こと出力という点においては、宇宙世紀史上最強の機体といっても差し支えない。

こうして代表的な2機種を取り上げてみても、技術的な統一性はあったとしても、それぞれまったく異なる機体を生み出していった計画であることがわかる。Z系の機体は、それぞれ派生機種を多数生み出していったが、第二次ネオ・ジオン戦争後の軍縮の流れもあって、その系譜は衰退していった。結果的にZ系の機体は、どれも求められるものに特化した機体であったがゆえに、汎用性が求められる時代には合致しなかったのだろう。



## Pilot File

## 主なパイロット



## ファ・ユイリィ

ティターンズに追われ難民となった。後にアーガンに救助され幼なじみのカミーユと再会した。志願してエウーゴに参加し訓練を受けてパイロットになった。レコアの後を継いでメタスに搭乗した。



## レコア・ロンド

エウーゴの女性士官で階級は少尉。MSで出撃する一方で情報収集なども担当している。シロッコと邂逅したことで彼に心の拠り所を感じてエウーゴを離反する。

①頭部 / センサーはモノアイと頭頂部にはカメラアイも備える。リック・ディアスのようにコクピットが頭部にあるわけではないが、モノアイの色はグリーン系だ。

②スラスターユニット / 頭頂高は18.1mながら、スラスターを備えた背中のユニットにより、MS時の全高は26.0mと大柄。MSデッキ内ではユニットを前方に倒した姿勢で格納される。

③腹部 / 内部機構のアクチュエーターが剥き出しで装甲もない。本体重量が27.8tと時代的にも軽量級だが、防御面はいたって脆弱といえる。

④可変機構 / 「Z計画」における初期可変機実現のため、簡易的な構造であるが有用らしく、後に数多くの派生機や同様の変形機構を採用した機体が登場した。

## METHUSS

MSA-005

## メタス

## Spec

頭頂高:18.1m 本体重量:27.8t 全備重量:52.4t ジェネレーター出力:1,640kW

スラスター総推力:77,000kg センサー有効半径:11,300m 装甲材質:ガンダリウム合金

武装:ビーム・サーベル×6、アーム・ビーム・ガン×2



20m

15m

10m

5m



## 武器・装備



## アーム・ビーム・ガン

メタスのメイン武装で格納式のビーム兵器。前腕に基部が固定されているため、取り外して使用することはできない。MS、MAの両形態で使用することが可能である。



## ビーム・サーベル

脚部のラックにマウントされている白兵戦用の武器。通常1〜2本装備されるところだが、メタスの場合は6本マウントされている。



## エネルギー供給パイプ

ドゴス・ギアをメガ・バズーカ・ランチャーで狙う百式にエネルギー供給をするためのサブジェネレーターとしてメタスが帯同することもある。

## MA形態



3基のメインスラスタを装備する背部ユニットが機首となり、肩部と脚部のユニットが結合するメタスのMA形態。全体的なシルエットも宇宙戦闘機という趣である。メインスラスタと脚部スラスタを後方に向けて高機動力を発揮する。防御力はMS時と変わらないが、胴体部のアクチュエーターパイプや可動部も隠れるので、生存率も上昇すると思われる。この姿が真のメタスといえるかもしれない。

## PICK UP!



エウーゴのアーガマ隊に配備直後からレコアの機体として、MS隊の一翼を担っていた。当初はパイロット見習いのファも予備搭乗員として出撃することもあった。ヤザンのハンブラビとの戦闘でレコアの乗機が大破したため、2号機（おそらく予備機であろう）が配備され、ファの搭乗機としてグリプス戦役から第一次ネオ・ジオン戦争中盤までを戦い抜いている。

ちなみに当のレコアは、戦死者扱いだったが、一命を取り留めティターンズに離反したことが後に判明する。



ハマーン率いるアクシズ（ネオ・ジオン）勢力も加わり、混迷の度合いと激しさを増すグリプス戦役終盤、エウーゴはメール・シュトローム作戦を發動し、ティターンズの擁するコロニー・レーザー（グリプス2）を奪還しようとしていた。そんな中、ファのメタスは味方の機体を支援するため戦場を飛び回っていた。

そしてティターンズの艦隊がコロニー・レーザーで焼失し、停戦となり、カミーユのZガンダムがシロッコのジ・Oを倒した傍らには、メタスの姿があった。

変形機構のトライアルとして  
ムーバブル・フレームを採用

MSA・005メタスは、エウーゴとアナハイム・エレクトロニクス（AE）社が協同で進めていた次期主力機開発計画の「Z計画」におけるムーバブル・フレーム技術を応用した変形機構、並びに可変機を開発する研究の中で試作された機体に端を発する。

AE社としては初の可変機だが、装甲材などにガンダリウム合金を用いて変形に必要な剛性を確保するなど、可変機としてのまとまりは悪くなかった。しかし背面のスラスタユニットと胴体上部、胴体下部の下半身が3本のアクチュエーターパイプのみで繋がっ

ている構造は、MS形態における機体剛性や防御性能という面で問題が残されていた。

また機体の規模に比して搭載したジェネレーターの出力も低く、制式採用とはならなかったという。本機の位置付けとしては、AE社にとってまったく未知の存在であった可変機という機体を開発する上で「コンパクト化」という命題に対しての、実証試験機と考

を戦闘用に改修し、実戦配備されることとなった。こうして戦線に投入されたメタスは、相対的な火力では、当時のMS群に比して劣る傾向があったものの、その機動性の高さを活用して支援機として活躍。中にはメガ・バズーカ・ランチャーのジェネレーター役として使用されることもあった。

戦闘でもよく破壊、時には大破したこともある本機だが、搭乗員は無事生還するケースが多く、脆弱に見える防御面も、案外、サバイバビリティ自体は高かったと考えることもできる。

しかし、MS開発史の中でのメタスは、もう少し重要な位置にある。それは、その可変機構である。本機の比較

的単純ともいえる可変機構は、まったく用途の違う砲撃型可変MSであるMSA・005Kガンキャノン・ディテクターへの応用が簡単だっただけでなく、「Z計画」のある種本命である可変MSの実現にとっても有用に働いている。MSZ・008ZIIでは参考にされ、RGZ・95リゼルへと継承されるのである。つまり本機の可変機構のシステムは優秀ということであり、時代の流れに乗り主流化していったのである。

これは、当初は実戦使用を疑問視されたメタスが充分、実戦配備に耐えることを証明しただけでなく、その実戦経験が後の機体開発に、大いに役立ったということである。



# METHUSS CUSTOM

MSA-005S

## メタス改

### Spec

頭頂高:18.3m 本体重量:34.9t 全備重量:50.9t ジェネレーター出力:2,000kW  
スラスター総推力:83,000kg センサー有効半径:12,000m 装甲材質:ガンダリウム合金  
武装:ビーム・サーベル×2、ハイ・メガ・キャノン

カラバで開発されたメタスの火力強化バージョン。簡易な変形機構ながら可変機としての優秀性をみせたMAS・005メタスだったが、火力や対MS戦における防御力の脆弱性という問題を抱えていた。しかしながら支援機としては成功し、その機体性能（おそらく可変機構）に注目したカラバが、エウーゴから技術の供与を受け、独自開発をしたのが

MSA・005Sメタス改だ。基本構成はメタスに準じているものの、外装なども改修されており、機体として面影が残っているのは、全体的なシルエットぐらいだ。ジェネレーターも強化され、心許ない火力の増強を目論み、背中のスラスターユニットはハイ・メガ・キャノンが設置されている（搭載ジェネレーターで運用できるかは疑問だが）。反面、アーム・ビーム・ガンは廃されている。

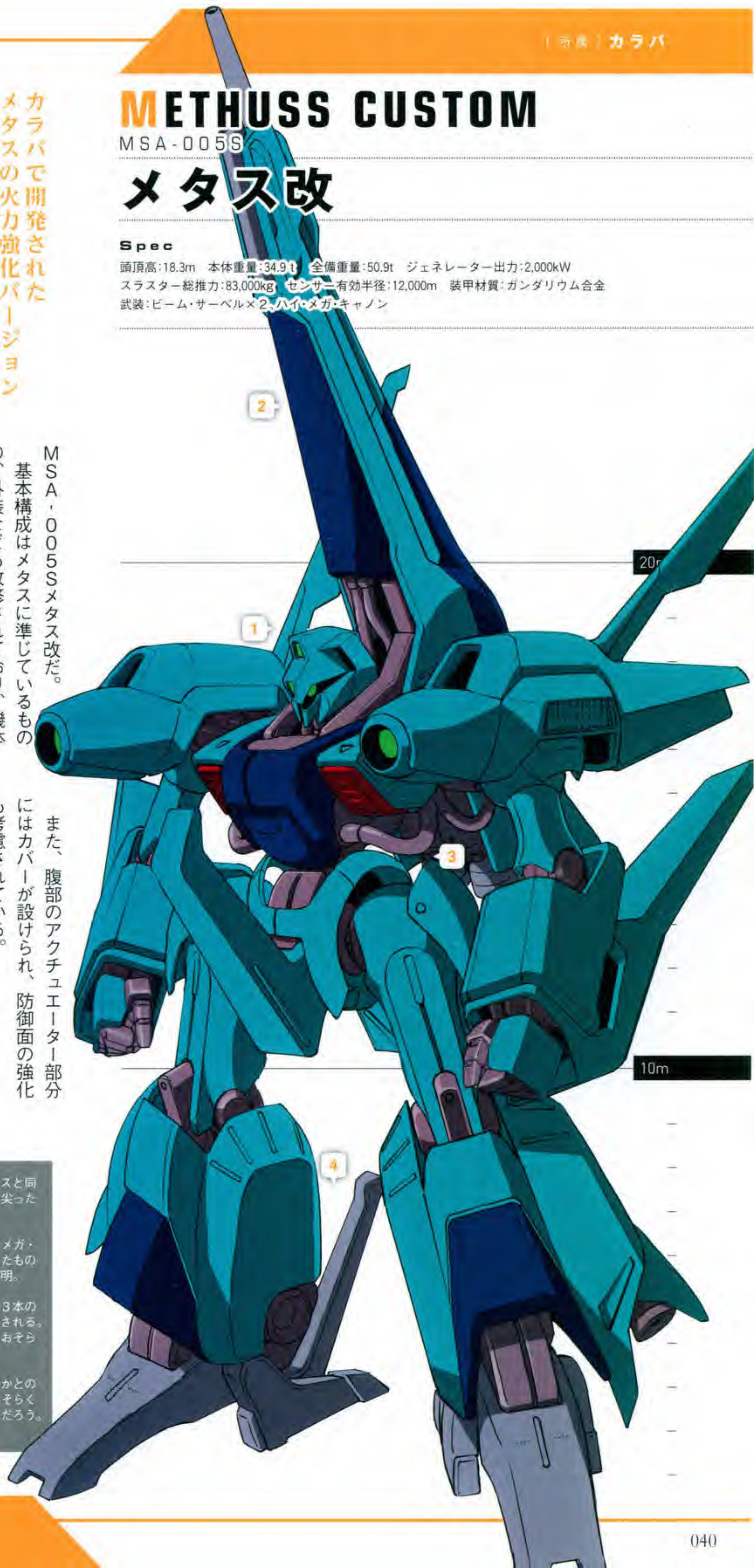
また、腹部のアクチュエーター部分にはカバーが設けられ、防御面の強化も考慮されている。ただ、機体のバランスとしては、ちぐはぐな印象も受け、RMS・099リック・ディアスを改修したとされるMSK・008ディジェの例に似て、あまりよくない方向でカラバの独自性が表れたようにも見える。そのせいかは定かでないが、本機の戦闘記録などの詳細は不明である。

①頭部：モノアイ式なのは原型機のメタスと同じだが、細かい部分で形状が異なり、鋭く尖った印象を受ける。

②スラスターユニット：先端部にはハイ・メガ・キャノンを搭載。ZZガンダムに搭載されたものと同規格と思われるが、スペックなどは不明。

③腹部：防御面の強化を狙って胴体部の3本のアクチュエーターパイプには装甲が追加される。MA形態への可変については未確認だが、おそらく変形機構には配慮されているだろう。

④脚部：通常MSのような構成の脚部。かかとの後部にはクローのような構造物があり、おそらく射撃時の姿勢を安定させるためのスパイクだろう。





# GUN-CANNON DICTECTOR

MSA-005K

## ガンキャノン・ディテクター

### Spec

頭頂高:18.5m 本体重量:34.5t 全備重量:54.5t ジェネレーター出力:1,780kW  
スラスター総推力:64,600kg センサー有効半径:9,200m 装甲材質:ガンダリウム合金  
武装:バルカン砲×2、ビーム・ガン、ビーム・ライフル、ビーム・キャノン×2

メタスのフレームを流用した  
もう一つのカラバ用支援機

地球圏で抵抗運動を続けるカラバにとって、擁するMS部隊を円滑に運用するための、支援機の配備が必須だった。そうした要望に応えるべく開発されたのがMSA・005Kガンキャノン・ディテクターである。

型式番号からもわかるように本機は、MAS・005メタス系列の派生機で、

1 頭部：メタスの系列機なれど、かつてのガンキャノンやジム・キャノンを彷彿とさせる砲撃支援タイプの顔だ。

20m

10m

可変機構を砲撃姿勢の安定のために用いるという変わり種の支援用MSだ。本来、可変機は変形により、高機動による高速性や、火力の集中などの実現

が機能的メリットだ。しかし、本機はそうしたアプローチはせず、支援機としての機能向上に可変機構を用いている。つまり変形機構をより機体の安定性を高める方向で使っているのだ。

もっとも、装備される火器類はビーム兵器主体で、実体弾による「曲射」

はできず、どこまで可変機構が有効かは定かではない。しかし精密射撃などには効果を発揮した可能性はある。

だが、機体の優秀性はそれなりに認められたようで、宇宙世紀0090年代には、地球連邦軍に配備された機体が確認できる。ちなみに機体名称の「ガンキャノン」は、かつてのホワイトベイスのクルーであり、カラバの構成員でもあった、ハヤト・コバヤシが命名したとされる。

### Ver.0090 バリエーション

## GUN-CANNON DICTECTOR

MSA-005K

ガンキャノン・ディテクター  
(連邦軍カラー)

### Spec

頭頂高:18.5m  
本体重量:34.5t  
全備重量:54.5t  
ジェネレーター出力:1,780kW  
スラスター総推力:64,600kg  
センサー有効半径:9,200m  
装甲材質:ガンダリウム合金  
武装:バルカン砲×2、  
ビーム・ガン、ビーム・ライフル、  
ビーム・キャノン×2

2 ビーム・キャノン×両肩に2門装備。こうした機体構成からなのか、ハヤトが命名してからかは不明だが、機体は赤系のカラーリングだ。

3 可変機構：砲撃時には体育座わりのような格好になるという。宇宙世紀0090年代にトリントン基地に配備されていた機体は様々な姿勢で射撃を行っていた。





## Pilot File

## 主なパイロット



## カミーユ・ビダン

エウーゴのMSパイロット。グリーン・ノアに住む学生だったが、ティターンズとの諍いをきっかけにエウーゴへ参加。ニュータイプとして優れた素質を持ち、ハマーンやシロッコと対等に渡り合う戦士として成長する。



## ルー・ルカ

エウーゴの正規MSパイロット。ZZガンダムをアーガマに届けるといった重要な任務を帯び、グリプス戦役で疲弊したアーガマに配属された。アーガマ配属後は主にZガンダムを駆り、ガンダム・チームの一翼を担った。

**1** 背面部 背面のパーツはフライングアーマーの役目を持ち、これにシールドを組み合わせて機体下面を形成し、大気圏再突入時に機体を防護する役目を担う。ランドセルはなく、MS形態では特徴的なシルエットになる。

**2** ボディ Zガンダムは構造的に、頭部と腕部を胴体に収めるため、従来のMSとは異なる複雑な構造になる。なおかつ強度も確保しなければならず、こうした難題をクリアできたのは、ムーバブル・フレームと超小型の核融合炉の開発が大きい。

**3** ロングテール・スタビライザー 背面にありウェイブ・ライダー時には後方に展開する。MS形態時にはスラスターやAMBACとして機能する。

**4** 脚部 スラスターが集中している脚部。これはバックパックを装備できないための措置で、一般的なMSとは異なる方法論。ウェイブ・ライダーへの変形時には、脚部を固定して推力を一定方向に集中する。

## Z GUNDAM

MSZ-006

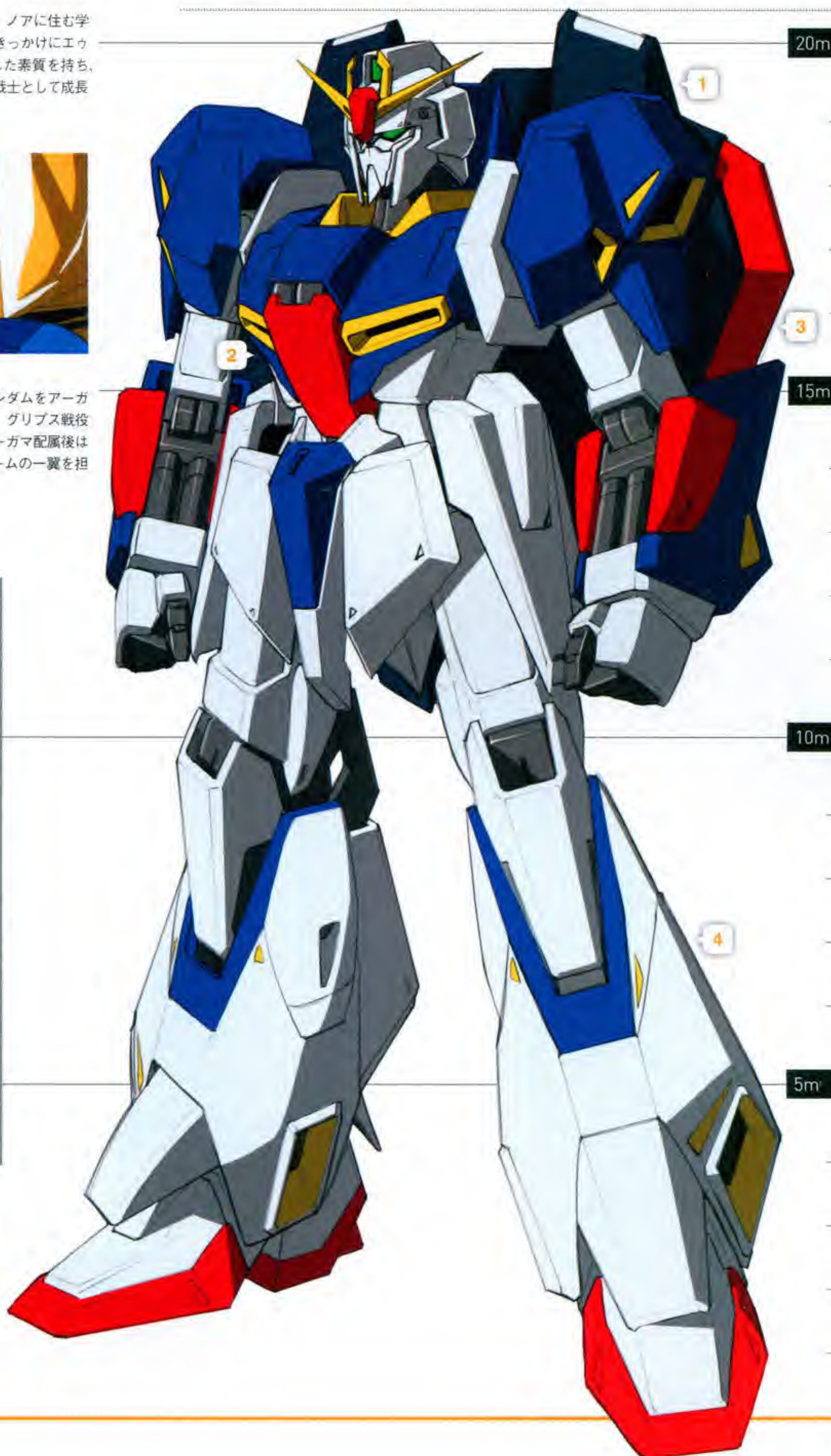
## Zガンダム

## Spec

頭頂高:19.8m 本体重量:28.7t 全備重量:62.3t ジェネレーター出力:2,020kW

スラスター総推力:112,600kg センサー有効半径:14,000m 装甲材質:ガンダリウム合金

武装:バルカン砲×2、ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、ハイパー・メガ・ランチャー、グレネード・ランチャー×2





## 武器・装備



## ビーム・サーベル

ガンダムタイプには珍しく、両サイドアーマー内に内蔵された近接武器。ウェーブ・ライダー時にはビーム・ガンとしても使用可能。



## ビーム・ライフル

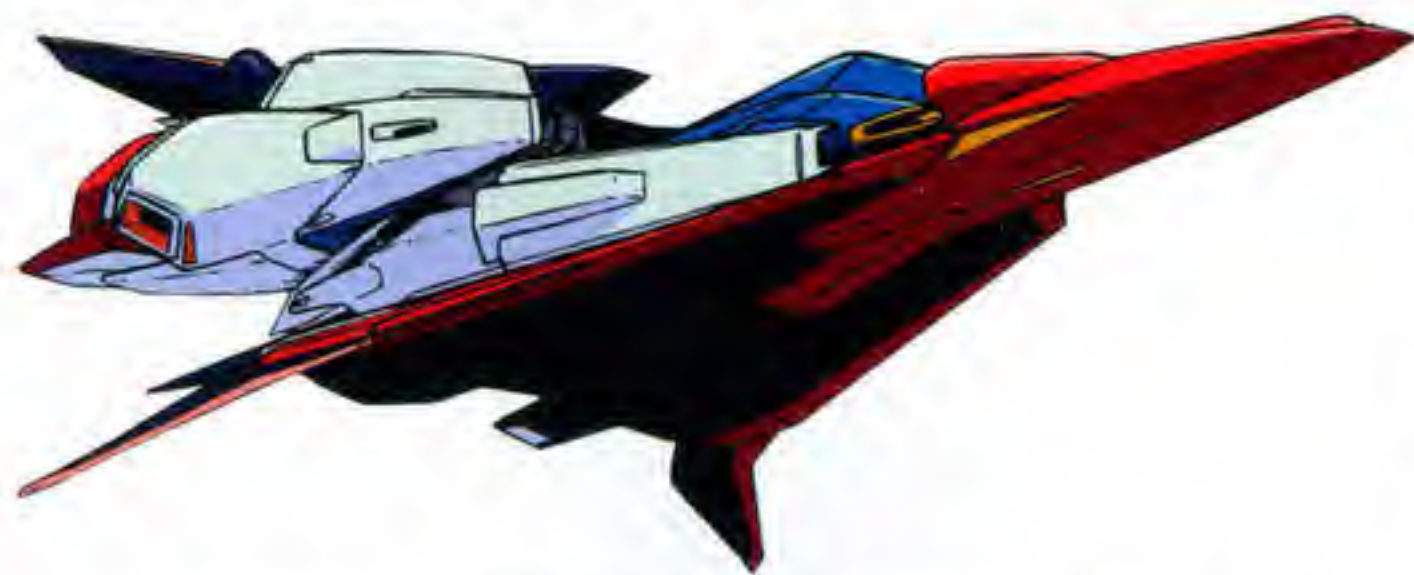
Zガンダムの専用ライフル。バレル長の伸縮が可能。近接戦闘時にはビーム刃を形成することで、ロング・ビーム・サーベルになる。



## ハイパー・メガ・ランチャー

大型ビーム兵器。百式のメガ・バズーカ・ランチャーをベースとして携行性が向上した。主に艦船への攻撃や狙撃など、基本は遠距離攻撃用。

## ウェーブ・ライダー形態



ZガンダムにおけるMA形態のウェーブ・ライダーとは、大気圏突入時に発生するショックウェーブを利用して揚力を得る機体のこと。機体下面に発生する圧縮波に乗ることから、「ウェーブ・ライダー」の名称になった。突入時の戦闘やMS搭載も可能など、これまでの常識を覆した機体だ。また、推力を後方に集中することで大気圏内における飛行能力を発揮し、サブ・フライト・システムとしての副次的効果をもたらした。

## PICK UP!



シロココが駆るジ・Oとの最終決戦において、カミーユはその力をZガンダムに託して発現させた。ビームすらはじくバリアや、ジ・Oを行動不能にするなど、MSのメカニズム的には説明がつかない奇跡ともいべき現象。これはZガンダムに搭載されているバイオ・センサーがもたらした現象と思われるが、ここまでの力を発揮できたのはカミーユの優れたニュータイプとしての素養が影響を及ぼしているのかもしれない。



地球へと落下していく百式を救ったのは、ウェーブ・ライダーへと変形したZガンダムだった。ジャブロー強襲作戦に機体の完成は間に合わなかったが、予期せぬシチュエーションでMSを搭載しながら大気圏再突入が可能という、Zガンダムが目指していたコンセプトが描かれた1シーン。その後、第一次ネオ・ジオン戦争においても、ジェドの駆るZガンダムに、ブルのキュベレイMk-IIを搭載するなど、有用性を発揮した。

コンセプト以上の活躍を  
見せたTMSの金字塔

MSZ-006Zガンダムは、グリプス戦役のエウーゴを象徴するMSであり、「大気圏突入型」という、当時としては珍しいそのコンセプトも組織の目的を象徴するものといえる。エウーゴは地球連邦軍内の反地球連邦組織であり、宇宙を根拠地とする。だからこそ、大気圏突入型がイメージリーダーとして必要だったともいえる。

グリプス戦役初期のエウーゴのジャブロー降下作戦は、MS総数90機という、大戦力をもって行われた。宇宙からの宙挺降下作戦は、一年戦争時代のジオン公国軍によってその効果が証明

され、グリプス戦役時代でも同様だった。迅速に地上目標を攻撃できる宙挺降下作戦は、宇宙側の永遠のアドバンテージともいえる。ゆえにエウーゴを象徴するMSは大気圏突入型である必要があったということなのだろう。

このようなエウーゴの思惑が、アナハイム・エレクトロニクス（A.E.）社による高性能MS開発プロジェクト、「Z計画」にどの程度影響を及ぼしていたかは不明だが、Zガンダムは大気圏突入型可変機として開発される。同時期にカミーユ・ビダンが考案したガンダムMk-IIとフライングアーマーを融合したコンセプトも影響を与えたといわれるが、それ以前から開発は始まっていたと思われる。

Zガンダムの変形形態はウェーブ・ライダーと呼ばれ、バリエート・システムやフライングアーマーなどのオプションを装備せず、宇宙空間から単機の大気圏突入を実現。一方、機体構造は複雑化し、量産化には暗い影を落としている。その後、同機の再設計機が様々に開発されているのは、同機の量産化・戦力化への努力の跡だろう。

一方、ウェーブ・ライダーは、地上では航空機的な運用が可能という副次的効果をもたらした。こうした要素に着目したカラバが、機能を特化させ構造上も最適化させたMSZ-006A 1ZプラスをA.E.社に発注し、その後様々な派生機が開発されたのは、本機の素性の良さの証明だろう。

Zガンダムは大気圏突入型可変MSという特殊機ながら、スペック面でも時代を代表する機体となった。ジェネレーター出力は平均より上程度だが、スラスター推力が高く、何より群を抜いて軽量だった。これは時代の要請にもマッチしていた。ゆえに台所事情の厳しいエウーゴでは、あらゆる作戦の主軸として投入された。グリプス戦役後期には、性能面で本機を凌駕する機体が数多く登場したが、軽量という点では抜きん出ている。この機体構造こそ本機のエポックメイキングだろう。さらにバイオ・センサーの採用とカミーユ・ビダンという、最強クラスのニュータイプとの搭乗により、同時代を象徴する機体となった。



# ZETA GUNDAM

MSZ-006-3

## Zガンダム3号機

【ホワイト・ゼータ】

### Spec

頭頂高:19.8m 本体重量:28.7t 全備重量:62.3t ジェネレーター出力:2,020kW スラスター総推力:112,600kg センサー有効半径:14,000m 装甲材質:ガンダリウム合金 武装:バルカン砲×2、ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、ハイパー・メガ・ランチャー、グレネード・ランチャー×2

謎のZガンダム  
3号機の正体とは!?

MSZ-006-3A Zガンダム3号機は、MSZ-006 Zガンダムの系列機で、基本構造などはほぼ同じ。白と紫のカラーリングが特徴で、3号機という名前も3番目に作られたというのではなく、機体仕様を表す番号で

ある。

機体の履歴としては、宇宙世紀0087年12月6日に発生した、豪華宇宙客船プロスペロー号落下事件で、生存者の救出を行っている。この時は、カラバ所属機として評価試験の最中、この事故に遭遇した。その際、高高度迎撃用ブースターを装備し出撃していた。同機には豊富なオプションが用意され

ているが、これはカラバの要望によるためだ。

その後、ホワイト・ゼータとして改修され、ティターンズのサイコシップ「ゲミヌス」迎撃任務のため、カラバのチャクラ研に赴く。パイロットである「ホワイト・ユニコーン」の要望に合わせ、より反応速度を高めるためのチューニングが施されているという。

### ウェイブ・ライダー形態



機体自体がスタンダードなZガンダムと基本的には変わらないため、ウェイブ・ライダー形態も同じである。白を基調したカラーリングが、より際立っている。機体後部にブースターを装着可能。



20m

15m

5m

1. オリジナルと比べて胸部や肩部、腰部スカートアーマーなどの機体各部には増加装甲が追加されている。

2. オリジナルのZガンダムがトリコロールを採用していたことに対し、シンプルな印象を受ける。ホワイト・ゼータ自体は様々なパターンが存在したという説も。



# MSZ-006 Zガンダムの バリエーション機の数々

## MSZ-006-3B

Zガンダム3号機 (グレイ・ゼータ)

火力を重視した  
パワーアップ型



ウェイブ・ライダー形態

MSZ-006-3B Zガンダム3号機 (グレイ・ゼータ) は、数ある3号機の中でも、特に火力の増強に重点を置いた派生機だ。サイコシッパ「ゲミヌス」の迎撃作戦に、他の3号機とともに参加した。

大型のビーム・ランチャーや、ビーム・マシンガン内蔵型のサブユニットを装備。また攻撃時の安定性を向上させるため、テール・スタビライザーは特殊な展開型へと換装され、原型機のZガンダムとはMS時のシルエットも異なっている。コクピットは同時代の一般的な全天周囲モニターを採用するも、パイロットの趣向に合わせてパネル式分割式表示に変更された。またオプションとして高高度迎撃用のブースターが用意されている。

機体名称のグレイ・ゼータは、パイロットのコードネーム「グレイ・ウルフ」にちなんだもので、当初はグレイ系のカラーリングが予定されていたという。だが、開発の過程で耐ビーム・コーティングの向上が行われたため、名称と異なる現在のカラーリングとなった。そのため本機は「イエロー・ゼータ」と呼称されることもあった。

## MSZ-006-P2/3C

Zガンダム3号機 (レッド・ゼータ)

サイコミュを搭載した  
ニュータイプ専用機



ウェイブ・ライダー形態

ZMS-006-P2/3C Zガンダム3号機 (レッド・ゼータ) は、Zガンダム3号機のC型をベースに、ニュータイプ専用機として開発された。チャクラ研が開発したサイコミュ・システム「サイコ・ニュートライザー」を搭載し、パイロットの思考が機体制御にダイレクトに反映される機体となった。こうした特殊なシステムの採用により、コクピット形状も他の3号機とは異なる。

機体各部に設置されたフィン、外部の情報収集用のセンサーの役割を果たすといわれ、全体のシルエットを変えている。可変機構そのものは、原型機であるMSZ-006 Zガンダムを踏襲するが、テール・スタビライザー、背面のフライング・アーマーや、各部ユニットの形状が異なるなど変更点も多い。

武装は連射性を重視するため、ビーム・ピストルを採用し、ウェイブ・ライダー時には下面に接続する方式となっている。

当初、「ジョニー」と呼ばれる人物の搭乗を予定していたが、最終的にニュータイプ能力を持つとされるユウリ・アジッサ (コードネーム「レッド・スネーク」) がパイロットとなった。



Pilot File

主なパイロット

アムロ・レイ

カラバのメンバーとして活動していた時期に、ZプラスA1の試作機（テストカラー）のテストパイロットを務めたとされる（実際に搭乗していたかについては諸説ある）。



# Z PLUS

MSZ-006A1

## Zプラス

Spec

頭頂高:19.86m 本体重量:36.2t 全備重量:— ジェネレーター出力:2,070kW  
スラスター総推力:24,200kg センサー有効半径:10,000m 装甲材質:ガンダリウム合金  
武装:バルカン砲×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・キャノン×2、ビーム・スマートガン

①頭部／使用されているセンサーやレーダー類は、他の量産機と同等品を使用し、部品共有やコスト削減を図った。

②背部、Zガンダムのようなフライングアーマーユニットではなく、ウイング・バイダーを装備。リック・ディアスや百式などの系譜にも通じる。

③腰部／Zガンダムに比べると、腰部装甲をオミットした部分が目立つ。防御力と引き換えに重量の低減や可動範囲の拡大を図った。

④シールド／センサーが内蔵され、腕に装着するがシールドとしての使用には不向き。ウェイブライダー時に機首となるのはZガンダムと共通。



20m

15m

10m

5m





## ウェーブライダー形態

A型系列、C型系列ともに基本的には巡航のための形態で、ウェーブ・ライダー形態のまま激しいドッグファイトをすることは想定していない。後に開発されたD型は空戦能力を追求した機体だ。

## バリエーション

MSZ-006A1  
A1型(テストカラー)

カラバが用いていたのがA型。その中でもZプラスとしてもっとも普及していたのがA1型となる。A2型は頭部にハイ・メガ粒子砲を備えていた。機体色はグレー単色が基本(試作機などはオレンジと明めのグレー)。

宇宙世紀0096年代には、地球連邦軍に配備される機体もあった。

MSZ-006C1  
C1型

**Spec**  
頭頂高:19.86m  
本体重量:36.18t  
全備重量:77.4t  
ジェネレーター出力:2,070kW  
スラスター総推力:124,200kg  
センサー有効半径:21,000m  
装甲材質:ガンダリウム合金  
武装:バルカン砲×2、  
ビーム・サーベル×2、  
ビーム・キャノン×2、  
ビーム・スマートガン

地球連邦軍が宇宙で運用していたのがC型系列。C1型がもっともスタンダードなモデルとなる他、頭部にメガ粒子砲を内蔵したC1/2なども存在する。宇宙空間での戦闘を得意とするが、大気圏内(1G下)でも運用は可能である。カラーリングはロービジを重視した暗めのグレー単色が基本だ。

Zガンダムの持っていた  
多機能を取捨選択する

Zプラスは、MSZ-006Zガンダムの実戦データを元にアナハイム・エレクトロニクス(AE)社によって開発されたMSである。細かく仕様の異なる派生機体が多数開発されているが、おおまかに分けるとA型系列とC型系列に分類ができる。可変機構を持つが、Zガンダムのものとは機構が若干異なるほか、多くのモデルでフライング・アーマー(Ⅱ大気圏突入用装備)の代わりにウイング・バインダーを装備している。これは両系列機に共通した特徴である。

A型系列は、地球圏の反地球連邦組

織であるカラバがAE社に開発を依頼したモデル。カラバの活動地域が地球であるため、大気圏内での運用に最適な設計となっている。ウイング・バインダーは飛行形態では中型の可変翼となる(これはC型も同様)が、基本的にA型系列の飛行形態は空中でドッグファイトを行うためのものではなく、長距離をより早く移動するためのものである。「サブ・フライト・システム+MS」を可変によってパッケージングした機体といえる(後にカラバは空戦能力を高めたD型を発注している)。このA型系列の有用性が着目されたのか、対する地球連邦軍でも本機を宇宙向けの機体としてAE社に再設計させたのがC型系列のZプラスだ。背部

にスラスターを4基増設し、推力を向上させているほか、プロペラントタンク増設も可能である。フライングアーマーは基本装備しないが、事前に調整を行えば大気圏への突入も可能である。なお、これは基本的な構成で、メガ粒子砲の増設、大気圏突入装備への換装など、MSZ-006の系列機では、もっとも多く派生機が生み出された機体でもある。

オリジナルのZガンダムはオプション装備なしに即時大気圏突入が可能で、1G下での高い機動性を誇り、そしてMS形態でも高性能を発揮できた可変機として、随一の完成度を誇る。その一方、コスト高という問題が付きまとい、本格的な量産化には至っていない。

そしてZプラスでは、Zガンダムが持つ能力に優先順位をつけ、必要性に応じて省力化を図り、生産性向上に努めることで、Zガンダム(的な機体)の量産、実戦配備を目論んでいた。本機のバリエーションが多いのも、設計に充分な余裕を持っていたということであり、Zガンダムという機体の設計の優秀さがうかがえる。

できるだけ高性能な可変機を可能な限り低コストで量産したい、というのは、後継発展的なRGZ-95リゼルに至るまで連邦軍のMS配備方針であったのだろう。

その後の発展があまり見られない可変機の中で、数少ない成功例がZプラスだったといえるだろう。



# Z II MSZ-008

## Z II (ゼツツー)

### Spec

頭頂高:18.3m 本体重量:不明 全備重量:69.7t ジェネレーター出力:2,130kW  
スラスター総推力:114,300kg センサー有効半径:14,000m 装甲材質:ガンダリウム合金  
武装:ビーム・サーベル、メガ・ビーム・ライフル

**Zガンダムの後継であり  
リゼルの祖となった**

MSZ-006 Zガンダムの発展型としてプランされた可変MS。Zガンダムの後継という位置づけではあるが、変形にはメタスの可変機構が取り入れられ、Zガンダムの変形機構の複雑さ、およびそこから派生する生産性の低さや、整備性の悪さという諸問題がある程度解消している。その一方、ウェイ

1 頭部。Zガンダムの後継というだけあって、フェイス部分の意匠はそれに通ずる趣。ただ、頭部バルカンを確認できない。

2 脚部。脚部にはカナード（整流板？）的なパーツが設置されている。オプション装備によって1G下での飛行を目指していた名残りが。

20m

10m

ブ・ライダーでの大気圏突入能力や大気内での飛行能力は持たない（便宜上ウェイブ・ライダーとは呼ばれる）。また、ウイング・バインダーやフライング・アーマーの類は持たず、その代わりに大型のスラスターユニットを備える。このように、ウェイブ・ライダー形態は大推力の航宙戦闘機としてデザインされている。これは一撃離脱戦法に特化したコンセプトであり、宇宙においてZガンダムが持っていた利点

をよく継承しているといえるだろう。企画時期がMSZ-010 Zガンダムや、他の多数のZガンダム後継機候補と重なり、本機の実機は作られなかったとされる（諸説あり）。しかしその後、宇宙世紀0095年には、可変機構を参考にしたMAS-005メタスの発展型ともいえる可変MS、RGZ-95リゼルが開発されており、本機で計画、研究されたデータも活かされている。

### ウェイブ・ライダー形態



基本的な構成や変形機構はそのままリゼルに通じる。リゼルの場合はオプションで様々な場所での運用が可能だが、本機は大気圏内（および1G下）での飛行は想定されていない。機体下部に懸架されるメガ・ビーム・ライフルは、本体ジェネレーターに直結され、高い威力を誇る。

3 スラスター・ユニット。非常に大型で本体の機動力を司るユニット。また武装としてクレイ・バズーカ2丁を装備することもできる。



# PROTOTYPE ZZ GUNDAM

MSZ-009(B)

## プロトタイプZZガンダム

### Spec

頭頂高:19.02m 本体重量:31.7t (A型29.5t) 全備重量:63.0t (A型60.3t)  
 ジェネレーター出力:7,200kW (A型3,140kW) スラスター総推力:100,300kg  
 センサー有効半径:15,480m 装甲材質:ガンダリウム合金 武装:ハイパー・ビーム・サーベル  
 ×2、ダブル・ビーム・ライフル、ハイ・メガ・キャノン、ダブル・キャノン

20m

15m

10m

5m

### 変形・合体機構と 兵装関連をテストした

アナハイム・エレクトロニクス社が「Z計画」に基づいて開発したMSZ-010ZZガンダムの試作機。後のZZガンダムと同様、このプロトタイプZZガンダムには変形合体機構が備わっている。ただしコア・ファイターを持たず、コア・トップにあたる上半身と、コア・ベースにあたる下半身の

2機が合体するという構成であった。

MS形態と2機の戦闘機を状況に応じて使い分けるというコンセプト、およびそれらに伴う様々な試験を実証するための実験機といえる。しかしZZガンダムでは、かつてのRX-78ガンダムを彷彿とさせるコア・ブロック・システムが採用されたことを鑑みるに、2機による変形合体の試験結果は、芳しくなかったようだ(どのタイミングで3基編成を主軸とするコア・ブロック

ク・システムが導入されたかは不明だ。

なお本機には、搭載ジェネレーターを新型に換装したB型も存在する。こちらのジェネレーター出力は7200キロワットと、よりZZガンダムに近い数値だ(ZZガンダムは7340キロワット)。さらに頭部のハイ・メガ・キャノンやハイパー・ビーム・サーベルといった武装も装備された。変形、合体の検証に加えて武装面の実験も行われたのだろう。

1 頭部 / フェイスや全体的なシルエットはまさしくZZガンダムを彷彿とさせるが、機体各部のスラスター配置などは大きく異なっている。

2 ジェネレーター / その出力は3140kwとZZガンダムを名乗るには低めの数値だ。B型は新型ジェネレーターで7200kwまでパワーアップし、ハイ・メガ・キャノンも実装された。

3 ビーム砲 / 背部にビーム砲は装備されていたが、ハイパー・ビーム・サーベルとしての機能はB型で実現。

4 可変機構 / B型でもコア・ファイターは、まだシステムに組み込まれていないが、上半身と下半身に分離することが可能だ。



Pilot File

主なパイロット



ジュード・アースタ

サイド1シャングリラに住む少年。もともとジャンク屋だったが、寄港したアーガマからZガンダムを盗みだそうとしたことをきっかけに、パイロットに。カミーユに匹敵するニュータイプ能力の持ち主といわれる。



# ZZ GUNDAM

MSZ-010

## ZZガンダム

Spec

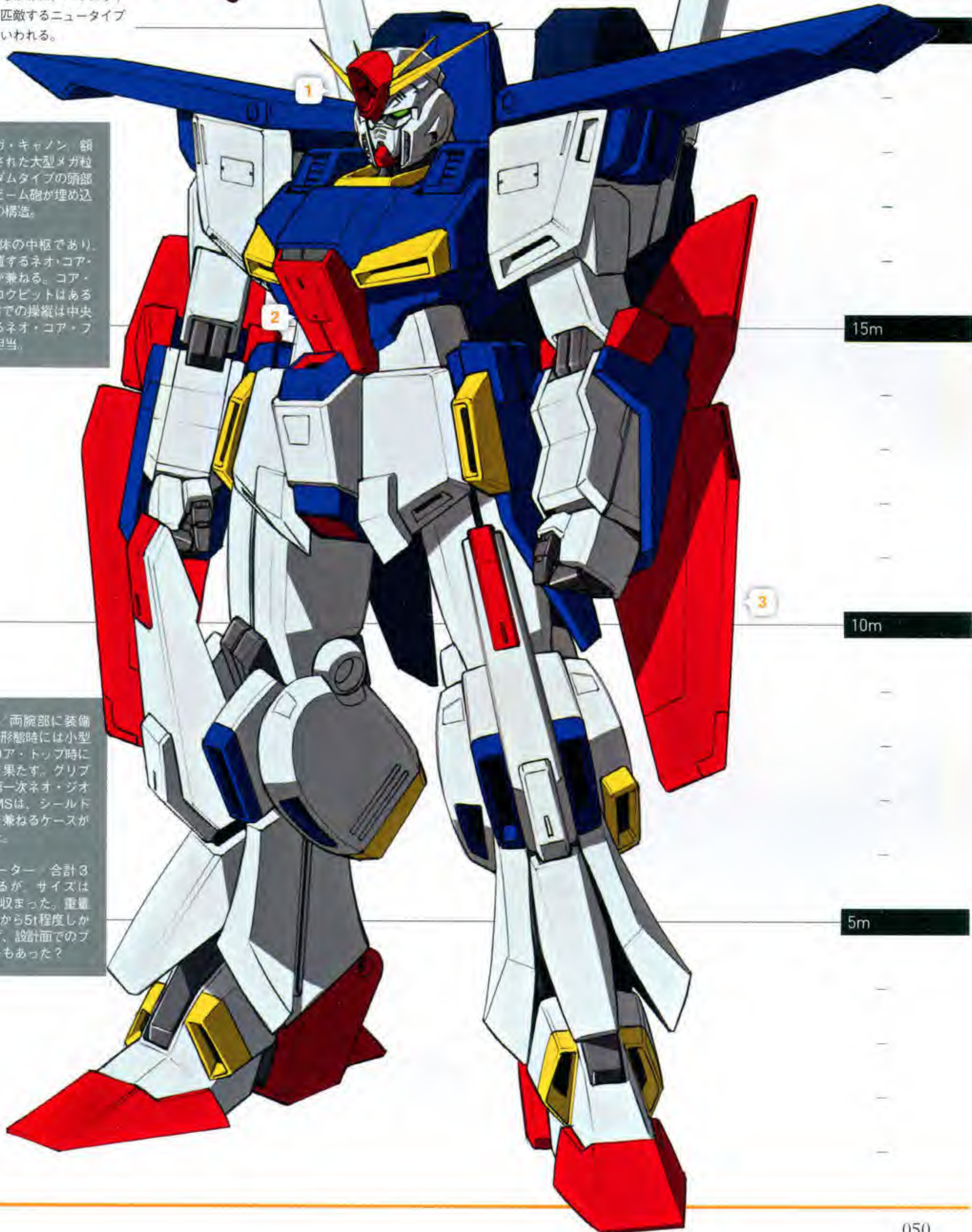
頭頂高:19.86m 本体重量:32.7t 全備重量:68.4t ジェネレーター出力 7,340kW  
スラスター総推力:101,000kg センサー有効半径:16,200m 装甲材:ガンダリウム合金  
武装:ダブルバルカン、ハイパー・ビーム・サーベル、ダブル・ビーム・ライフル、  
ハイ・メガ・キャノン、ダブル・キャノン、21連装ミサイル・ランチャー×2

①ハイ・メガ・キャノン 額部分に装備された大型メガ粒子砲。ガンダムタイプの頭部に、大出力ビーム砲が埋め込まれる異色の構造。

②胴体 胴体の中枢であり、中心部に位置するネオ・コア・ファイターが兼ねる。コア・トップにもコクピットはあるが、MS形態での操縦は中央部に合体するネオ・コア・ファイターが担当。

③シールド 両腕部に装備される。MS形態時には小型シールド、コア・トップ時には翼の役割を果たす。グリブス戦役から第一次ネオ・ジオン戦争期のMSは、シールドが他の役割を兼ねるケースがよく見られた。

④ジェネレーター 合計3基を搭載するが、サイズはMSクラスに収まった。重量もZガンダムから5t程度しか増えておらず、設計面でのブレイクスルーもあった？



15m

10m

5m



## ZZガンダムのコア・ブロック・システム



### Gフォートレス

3機が合体したZZガンダムの巡航形態であり、重爆撃機として戦闘を行うことができる。そのまま分離せずにZZガンダムへの変形が可能。



### コア・トップ

ZZガンダムの上半身を形成する機体。シールドが翼を形成し、ダブル・ビーム・ライフルが機首とコクピットを構成するという大胆な構造となっている。



### コア・ベース

ZZガンダムの下半身とバックパックを構成する機体。コア・トップと違い、ネオ・コア・ファイターがドッキングした状態で機体を形成している。



### ネオ・コア・ファイター

ZZガンダムの中枢部といえる機体。コア・トップ、コア・ベースと異なり、複数の機体がバックアップ用として用意されている。

## COLUMN TMSへと進化

### FA-010S フルアーマー ZZガンダム

ZZガンダムの強化プラン。各部に増加装甲、スラスター等の追加が行われたほか、装甲内部には無数のマイクロ・ミサイル・ランチャーを搭載。さらに腹部にはハイ・メガ・キャノンが追加されている。ドーベン・ウルフやグウィン・マンサと互角以上の戦闘を展開するなど、大幅に重量は増加したが、それによってある性能を獲得した。

#### Spec

全高 15.85m  
本体重量 32.7t  
全機重量 47.2t  
ニュー・エネルギー出力 1,340kW  
スラスター総推力 124,800kg  
センサー有効半径 15,200m  
装甲材質 ガンダリウム合金  
武装 ハイ・メガ・キャノン  
スプレッドミサイルランチャー  
×2、16連装ミサイルポッド  
×2、5連装ミサイルポッド  
×2、6連



## 高出力化を実現する 合体変形という選択

MSZ-010 ZZガンダムは、宇宙世紀0080年代に推進された「Z計画」で開発されたMS。同プロジェクトで開発された機体には、同時期の可変MSの代名詞ともいえるMSZ-006 Zガンダムが存在するが、変形構造から見ると、まったくの別プロジェクトだと思われる。

Zガンダムが大気圏外からの強襲を目的とした可変システムを搭載しているのに対し、ZZガンダムはまったく異なる目的を変形に見出していた。その変形システムは、上半身を形成するコア・トップ、下半身を形成するコア・ベース、さらに中核を成すコア・フ

イターという3機の航空機に分離することが可能というもの。これは一年戦争におけるRX-78ガンダムとGアーマーを融合させたようなスタイルだ。こうした変形・合体システムを採用した背景には、「ジェネレーターを3

基搭載する超高出力型MS」というコンセプトが大きな影響を与えていたと考えられる。ZZガンダムの特徴を紐解くなら、高火力、高出力、高性能に尽きる。MSサイズでは類を見ない高出力型兵器を使用可能にするというこ

コア・ファイター、コア・ベースにそれぞれ搭載しているため、ジェネレーターの合計出力は7340キロワットと通常の3〜4倍の値となった。これは後の時代のMSすらも上回る数値である。

その余力は、主に武装へ配分され、ダブル・ビーム・ライフル、ハイパー・ビーム・サーベルなどは通常の機体の携行武装よりも、はるかに高出力であった。さらに頭部には、本体のジェネレーターを直結し、出力の大部分をメガ粒子砲として放つハイ・メガ・キャノンという恐るべき機構を採用し、同機の高火力性能を印象付けている（初陣では調整不足から、射撃後に機体は行動不能になった）。

ZZガンダムは高出力型MSではあ

るものの、通常のMSと比較して運動性などにそんな色はなく、第一次ネオ・ジオン戦争では名だたるMS群を凌駕する戦闘力を見せている。その一方で、運用の柔軟性や防御面においては、Zガンダムに一步譲る点もあり、メインパイロットのジュード・アシータは大気圏突入時や地上での戦闘時にはZガンダムを選択している。

しかしながら、ニュータイプ専用機という観点から見れば、バイオ・センサーを搭載していることで、度々想定以上の能力を発揮している。ジュード・アシータの優れたニュータイプ能力に呼応し、想定した出力を上回るパワーを発揮させたほか、無人状態の各形態を合体させるなど、通常MSでは考えられない現象を引き起こした。



Pilot File

主なパイロット

リョウ・ルーツ

破天荒で周囲とのトラブルが耐えない問題児だったが、Sガンダムに搭載されたALICEシステムの教育係として専任パイロットに抜擢され、α任務部隊に配属された。ベズンの反乱鎮圧で活躍した。

シン・クリプト

リョウとは実験MS部隊からの知り合いで悪友。FAZZ隊の隊長としてα任務部隊に加わった。反乱勢力ニューディサイズの追撃の際に、Gアタッカー（Sガンダムの上半身が変形）のパイロットを務めている。

デックス・ウェスト

α任務部隊所属のパイロットでZプラスに搭乗する。カラバ出身のため正規兵から馬鹿にされることもあった。ニューディサイズ追撃では、Gボマー（SガンダムのBパーツが変形）のパイロットを務めた。

COLUMN

人工知能  
ALICEとは？

Sガンダムに搭載された人工知能で、Advanced Logistic&In-consequence Cognizing Equipmentの頭文字から名付けられ、連邦軍が極秘に開発していたパイロットの感情も認識し、既存の人工知能にはできない高度な機体制御の実現を目的にしていたという。単なるガンダムのような教育型コンピューターではなく、成長の先には、パイロットを介さず無人機による機体制御で戦闘を行うといわれる。

①頭部 頭頂部のアンテナ近くにはインコムを搭載。準サイコミュ・システムによりニュータイプ能力を持たないパイロットでも扱える。有線式でオールレンジ攻撃が可能である。EX-Sガンダムでは腕にも装備される。

②胴体 機体が損傷時、コアビットブロックのみを機体の外へ射出する（この形態をGコアという）。それぞれ上半身、下半身。コア・ファイターへ分離可能だが、離脱用といえる。

③腰部 腰アーチャーはビーム・キャノンとしても機能するが、ビーム・スマートガンを使用時にはサブアームユニットへと換装する。

# "S"-GUNDAM

MSA-0011

## Sガンダム

Spec

頭頂高:21.3m 本体重量:38.4t 全備重量:73.0t ジェネレーター出力:7,180kW  
スラスター総推力:143,600kg センサー有効半径:18,800m  
装甲材質:ガンダリウム・コンポジット 武装:バルカン砲×4、ビーム・サーベル×2、  
ビーム・キャノン×2、ビーム・スマートガン、背部ビーム・キャノン×2、インコム





**Gアタッカー**

Sガンダムの上半身パーツと背部スラスターユニットが変形した形態。運動性と攻撃性に優れた戦闘攻撃機。Gアタッカーのパイロットは、Sガンダム合体時には射撃手を務める。

**Gボマー**

Sガンダムの下半身パーツが変形した形態。ビーム・スマートガンやビーム・キャノンなど高い火力を持つ。Gボマーのパイロットは、Sガンダム合体時には索敵手を務める。

Variation  
バリエーション**MSA-0011 (Bst)**  
Sガンダムブースターユニット装備型

**Spec** 頭頂高:15.7m 本体重量:82.2t  
全備重量:220.1t  
ジェネレーター出力:12,250kW  
スラスター総推力:2,140,000kg  
センサー有効半径:18,800m  
装甲材質:ガンダリウム・コンボジット  
武装:バルカン砲×8、  
ビーム・スマートガン、  
背部ビーム・キャノン×4、インコム

**MSA-0011 (Ext)**  
Ex-Sガンダム

**Spec** 頭頂高:21.3m 本体重量:69.4t  
全備重量:162.5t  
ジェネレーター出力:7,180kW  
スラスター総推力:1,182,000kg  
センサー有効半径:18,800m  
装甲材質:ガンダリウム・コンボジット  
武装:バルカン砲×4、ビーム・サーベル、ビーム・キャノン×2、ビーム・スマートガン、背部ビーム・キャノン×4、インコム、リフレクターインコム

究極の性能を持ちながら  
歴史の闇に消えたガンダム

スペリオル・ガンダムことMSA-0011 Sガンダムは、第一次ネオ・ジオン戦争期の「Z計画」で開発された合体可変機だ。高火力でニュータイプや強化人間に対応した、いわゆる第4世代MSが席巻する時代に生まれた。MS開発の歴史において、こうした高火力機やニュータイプ専用機などの特殊機の台頭を指し、「恐竜的進化」とも言われる。

この時代を代表するのはMSZ-010 ZZガンダムだが、本機はそれに続く7番目の機体、「イオタ」ガンダムとして開発がスタートした。

ZZガンダムと開発時期はほぼ同時期といわれ、機体の構成など似ている部分も多い。しかし、ZZガンダムが高火力、高出力機として単機での汎用性を求めていたのに対し、本機の場合、出撃する作戦や戦況に応じて、それを様々な追加装備やオプションによってさらなる拡張性を得るという方向性が模索されていた。そのため複雑化する機体制御や火器管制をサポートするため、複数の搭乗員（3人）であったり、バイオ・センサーではなく人工知能「A-LEECE」を制御デバイスとして搭載していた。

メインの武装であるビーム・スマートガンは、砲身（バレル）部分が長く、取り回しの難さもあるが、高威力のビ

ーム兵器である。サブウェポンとして装備されるインコムは、ネオ・ジオンのAMX-014ドーベン・ウルフ同様、準サイコミュ兵器だが、基本的にはニュータイプ能力を持たない、一般兵の搭乗を前提にしている。

また、本機は兄弟機的存在のZZガンダムと同じく、3機の航空航空機が変形合体するコア・ブロック・システムを採用するが、それぞれを単体の戦力として運用するという側面もなくはないが、主に機体の戦闘データや、人工知能の保護が目的で、RX-78ガンダムに近い考え方といえる。

そのため合体機能により集合したコクピットブロックを、そのまま機外へ脱出させる形態、Gコアという独自の

機能も有している。こうした点からも本機は、後の機体開発に利用できるであろう、データ採取を主眼にした実証実験機とも考えられる。

追加装備による機能の拡張というコンセプトから、脚部をブースターユニットへ換装できたり（ブースターユニット装備型）、1フィールドジェネレーターや高出力スラスターユニットへの換装で高機動化を図るなど（EX・Sガンダム）、オプション類が豊富に用意されている。

将来的には無人機構想もあったといわれる本機だが、反乱を起こしたニュー・ディサイズとの戦闘に投入され、反乱首謀者らを倒すものの、大気圏突入により焼失してしまった。



# ネオ・ジオン系 可変MSの発展と衰退

アクシズ、ネオ・ジオンの創世期を支えたのは、作業用から発展したガザシリーズであった。その一方で同勢力が送り出した可変MSの種類はあまり多くはない。その背景を探ってみよう。

## 地球圏帰還の原動力 作業用ベースのMSたち

母国を失ったジオン公国の残党は、方々へ散り散りとなっていたが、その中でも地球圏から離れた小惑星アクシズを本拠地とした勢力は、もともと大きな勢力であった。だが、一方で静かに時を待っていた。そのため、残党勢力の中で、ある程度の戦力と影響力を持っていたデラーズ・フリートが一年戦争からわずか3年で蜂起したことに対し、アクシズが地球圏へ帰還するまでに7年の歳月を要した。

アクシズは他のジオン公国軍残党と比較しても技術的なアドバンテージとある程度の生産力も有する組織であったと考えられる。のちにガンダリウム(V)合金や小型化したサイコミュ・システム、時代はズれるがサイコ・フレームといったMSの技術開発にブレイクスルーをもたらす革新的な技術が、同組織を発端として生まれていったという事実は驚愕に値する。ただ、資源(資金、人材)という意味では不足しがちであり、無尽蔵というわけではなかった。

アクシズに限られた資産の中で、戦力を整えるうえで考え出したのは、作業用機械を戦闘用MSにガザシリーズへ転用するという試みであった。これは以前からアクシズに備わっていた作

業機械(おそらくMSも含む)の生産ラインの転用が可能であり、短期間に戦力化が図れることが大きかったとされる。これは「もたざる国」が戦力の生産から戦術までを含めた総合的な戦略を企図する上で合理的であったという点でもあるのだろう。

用途に応じた多数の機体を揃えることができないアクシズにとって、1つの機体に複数の役割(マルチロール)を担わせることは、MSの生産性の向上だけでなく、人材育成の面でもメリットは大きかったことだろう。

実際、ガザシリーズはA、Bタイプを経て、Cタイプで量産化が進み、D、G・ゾウムへと発展していく。Cタイプは作業用機械の設計をベースに、強化されたジェネレーターを搭載し、胸部に固定式のナックル・バスターを装備するという、エースパイロットの乗る高性能機が戦場を支配するという時代のトレンドと逆行するように、かつての一年戦争のボール的な移動砲台というコンセプトに、モビルアーマー的な要素を足したような、一見、急場しのぎ的な機体であった(実際の性能はかなり高い)。

そのような機体である一方で、モビルスーツ形態では機体強度や剛性も不足しており、対MS戦用には脆弱性が指摘されていたという。これは、MS形態はあくまで「使用できる状況は限

定的」と割り切り、その戦法はあくまで遠距離砲撃か一撃離脱攻撃に徹し、不測の事態(MS同士による白兵戦)には、作業用マニピュレーターを格闘用装備としたMA形態で補い、素早く戦域から離脱する、といったものだったのだろう。そして、シリーズを重ねていったのは、それらの確立した戦法と、パイロットの練度を活かすためのものでもあるのだろう。

## 恐竜的進化の幕開けと 変形からの脱却

ガザシリーズが実戦投入されたグリプス戦役機は、前述のようにエースパイロットと高性能試作機の時代であった。そして、ハマーン・カインの立ち回りのうまさもあり、疲弊したエウーゴと崩壊したティターンズの隙を突いて地球へ侵攻。なし崩し的に地球連邦政府に国家として認めさせ、名をアクシズからネオ・ジオンへと改めるなど、強大な勢力へと発展していった。

こうした状況に歩を合わせるように、ネオ・ジオンのMSは、新たな機体が矢継ぎ早に投入されていく。ここに至り作業用機械を改造するという時代は終わりを告げ、かつての公国の栄華を極めるかのような、往年の一年戦争時代の名機を模したMSが開発されていくことになる。

第一次ネオ・ジオン戦争期のMSが



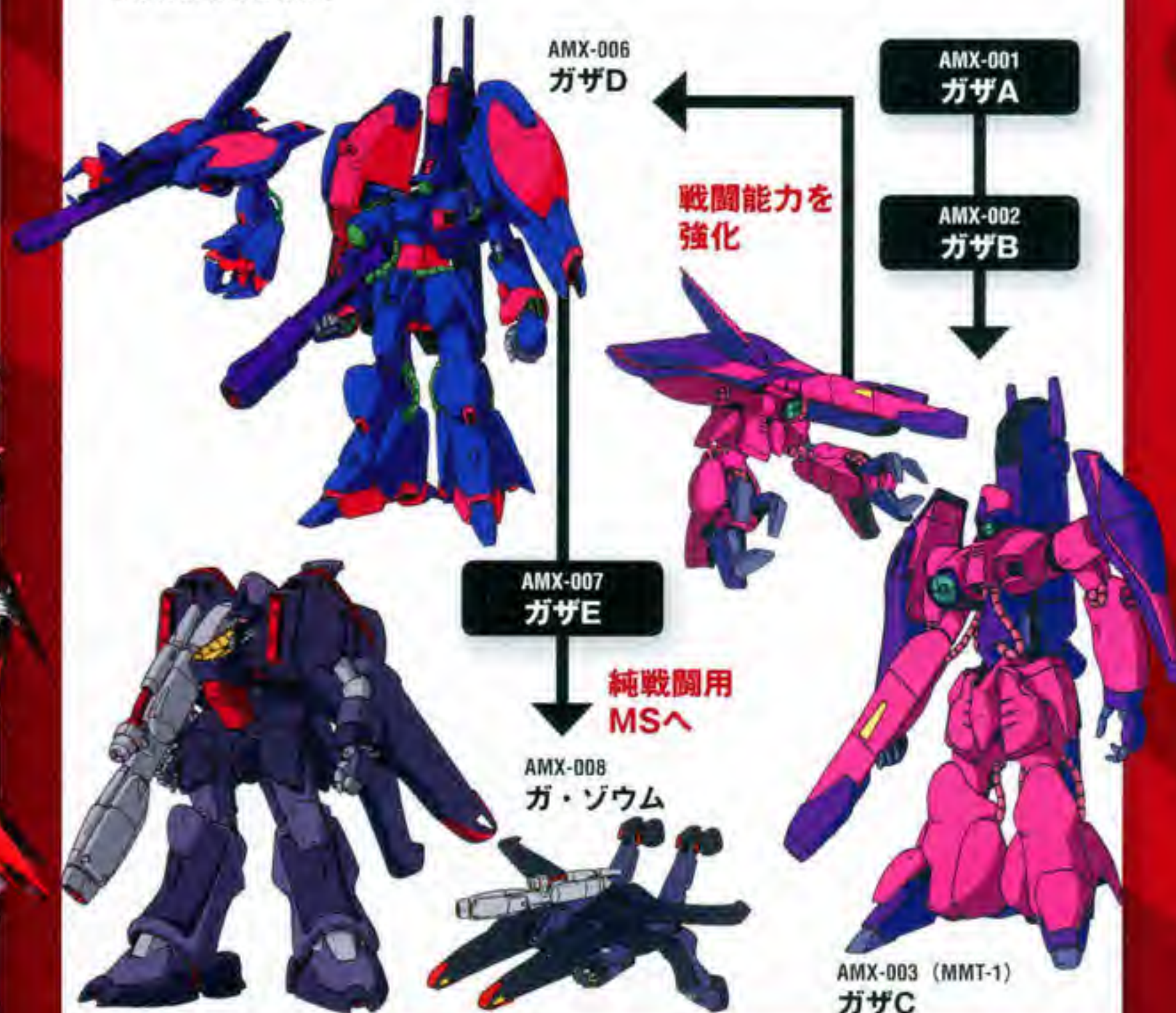
## 純可変戦闘MSとしての流れ

ネオ・ジオンでは珍しい合体・可変MSであるパウ。その変形構造を見ると、胸部を展開する構造や上半身と下半身の合体など、ZガンダムやZZガンダムの影響を強く感じさせる。のちにサイコ・フレーム搭載のリパウが開発されることになるが、技術的な側面を継承したMSは存在せず、パウ系のMSは一代のみで終わりを告げることになる。



## 作業用MSとしての流れ

アウシズの地球圏帰還への原動力となったガザシリーズ。シリーズが継続する中で、ガ・ゾウムではついにフレーム構造から見直しが図られた純戦闘用MSとなる。多数の機体が開発されている中で、ガザ系が最後まで生き残った背景には、単に設計思想の表情のよさがあったのかもしれない。



## 大型MAとしての流れ

ジオンの技術的な系譜として、大型MAの存在は重要な位置づけを担っていた。こうした流れはどの時代においても必ず受け継がれており、ビグザムやノイエ・ジール、α・アジールなどのMAの流れを生み出していく。シャムブロ（第一次ネオ・ジオン戦争当時はブランまで）、ジャムル・フィンも、そうした大型MAの流れにある機体といえる。ただ、前者はブランにとどまり、後者は本来の大型機として開発を断念している。この時代における大型MAは微妙な立場にあったようだ。



グリプス戦役期と異なるのは、可変MSの衰退だろう。可変という構造の中に、様々なアイデアを盛り込んでいたグリプス戦役時代のMSに対し、第一次ネオ・ジオン戦争期では、モビルスーツに過剰なスペックを盛り込むことで、あらゆる用途へ対応しようとする意図が見て取れる。のちに恐竜的進化といわれる時代の幕開けだが、MS自体の性能を極限まで高めて、あらゆる局面に対処する」という考え方自体は、きわめてオーソドックスといえるもので、宇宙世紀0090年代以降の主流となる考え方でもある。

このような時代背景もあり、ネオ・ジオンでは可変MS自体の数は少ない。第一次ネオ・ジオン戦争初期には、ガザCの発展型のガザDが投入されたが、これは作業機械ベースという点から脱却できておらず、その後、純粋な戦闘

用MSとして開発されたガ・ゾウムへと受け継がれていく。また特異な機体にパウが挙げられる。これはジオン系としては珍しい変形合体機であり、ジオン系よりはZ計画などの影響を強く感じさせる。つまり、相手が持っているならこちらも持つておかねばという考え方だ。

このようにネオ・ジオンの可変MSは、設計思想としての革新さを以って、可変MSを開発していたケースはあまり多くはない。

前述のように、ガザシリーズの変形も「やむを得ず」取り入れたにすぎないだろう。つまり、実はネオ・ジオンは時代のトレンドとしての可変機にはほとんど興味がなかったという見方もできるのだ。それは、サイコミュの小型化のメドが立っていた背景を考えると、納得なものではある。





Pilot File

主なパイロット



ハマーン・カーン

父であるマハラジャ・カーンに代わり宰相としてアクシズ (ネオ・ジオン) を取り仕切った女傑であると同時に、優れたニュータイプ能力を持つパイロット。白く塗装されたガザCを一時乗機とした。



# GAZA C

AMX-003 (MMT-1)

## ガザC

Spec

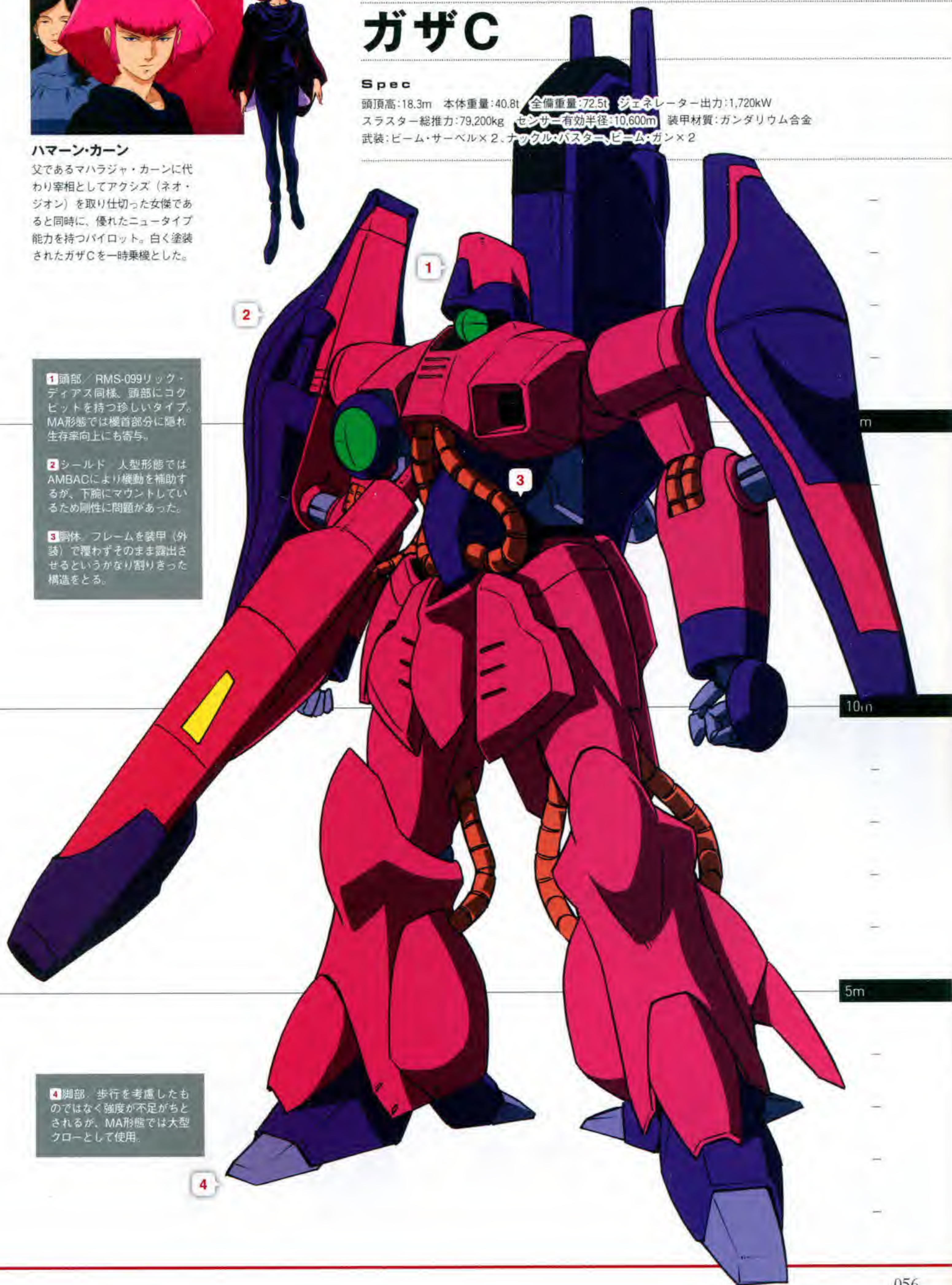
頭頂高: 18.3m 本体重量: 40.8t 全備重量: 72.5t ジェネレーター出力: 1,720kW  
スラスター総推力: 79,200kg センサー有効半径: 10,600m 装甲材質: ガンダリウム合金  
武装: ビーム・サーベル×2、ナックル・バスター、ビーム・ガン×2

**1** 頭部 / RMS-099リック・ディアス同様、頭部にコクピットを持つ珍しいタイプ。MA形態では機首部分に隠れ生存率向上にも寄与。

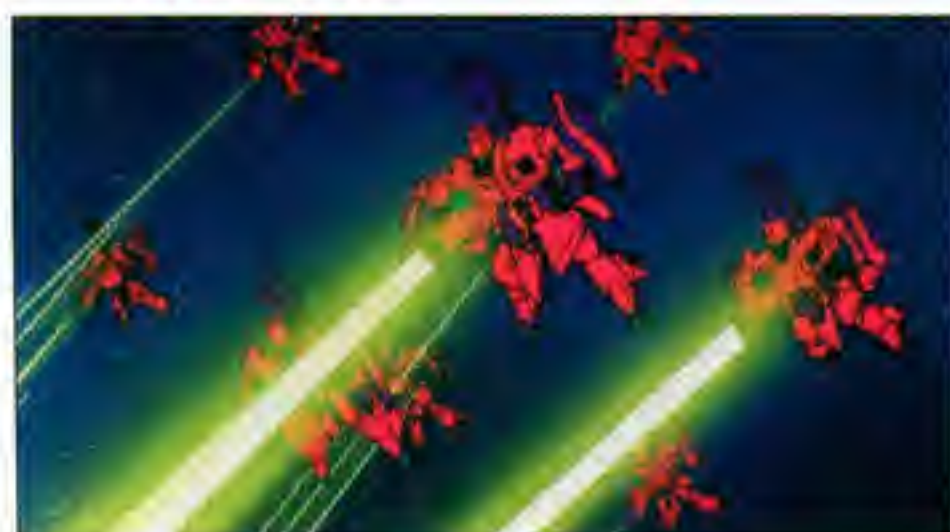
**2** シールド 人型形態ではAMBACにより機動を補助するが、下腕にマウントしているため剛性に問題があった。

**3** 胴体 フレームを装甲 (外装) で覆わずそのまま露出させるというかなり割りきった構造をとる。

**4** 脚部 歩行を考慮したものではなく強度が不足がちとされるが、MA形態では大型クローとして使用。







**ナックル・バスター**  
ジェネレーターと直結されており取り回しはあまりよくないものの、出力はZガンダムのビーム・ライフル以上。密集隊形での一斉砲撃は非常に強力。



**ビーム・サーベル**  
近接格闘用の武装でシールド部分のラックにマウントされる。ガザCの機体コンセプト的に用いられる機会は多くはなかった。



MA形態

ベースになった作業機器の構造を活かしたもので、変形機構としてはかなりシンプル。脚部はクローとしても使用される。背部のビーム・ガンはMA形態時の前方への火力を向上させる（ナックル・バスターと合わせると非常に強力）。また、MA形態では下半身はつま先以外ほぼMS形態のままなので、そのまま地面に立つことも可能。こちらは砲撃形態と呼ばれた。

## PICK UP!



現在、ガザCの評価はというと、あまり性能の不高くないアクシズ（ネオ・ジオン）の量産機というイメージである。

しかし、ハマーン・カーンがキュベレイ搭乗以前にパーソナルカラーに塗られたガザCに乗っていた時期がある（劇場版）。

ガザCを選んだということは、優れたパイロットであるハマーンからみても本機には見るべきところがあったということの証明だろう。



ガザCが最初に戦場に姿を現したのはグリプス戦役終盤。エウゴ、ティターンズの戦いに第三勢力として突如割って入ったアクシズは、見事なガザCの編隊飛行を披露した。そのままティターンズのモビルスーツ隊に一斉射撃を行い（結果的にZガンダムを手助けすることとなった）、鮮烈なイメージを植え付けている。この初陣はまさにガザCのコンセプト通りの戦い方ができた場面であった。

## MA形態の速度と強力な砲撃が持ち味の量産機

アクシズ（ネオ・ジオン）が開発した可変MSで、その起源は小惑星アクシズで用いられていた作業用機器をベースに設計されたという。そうした出自のせいか、本機にはMMT-1という型式番号も持っている。

すでに機械として存在する生産ラインの有効活用や、開発期間の短縮など、資金面でもあまり裕福とはいえないであろうアクシズが、手取り早く低コストでMSの数（兵力）を揃えるために、このような方法を選ぶのは、ある意味当然といえる。

作業用機器から転じた本機だが、ラスター推力やジェネレーター出力といったスペックは、同時代の機体に比べて劣っているわけではない。主兵装であるナックル・バスターによる砲撃能力は、当時の量産MSの中でも、かなり強力な部類だ。搭載するジェネレーターの出力は、この砲撃力を視野に入れているのだろう。

そして砲撃能力を最大限に活かすのが可変機構だ。MA形態を取ることで機体の機動性（三次元的な空戦機動力というよりは、速力・加速力を重視）を高め、なおかつ前面投影面積を小さくできれば、強力な武装と相まって一撃離脱戦法がより効果的になる。例え

ば敵艦船に肉薄し、これを撃沈すれば残った敵MS部隊は無力化される。また、数を活かし集団で長距離から一斉砲撃を行えば、得意ではない対MS戦にしても近接戦になるまでもなく勝利を収められるというわけだ。

これらの点を考えると、ガザCにとってはMA形態が本来の主たる姿であり、機体の性質としては集団運用を主眼にした「高性能なボール」といったところである。ガザCの変形機構は第3世代MSほど高度ではない。それはグリプス戦役中盤の可変機のように、単機でMS形態とMA形態を巧みに切り替え、常に相手に対し最適な位置取りで対MS戦を行うようなコンセプト

ではないから当然である。

MS形態は空間機動への対応、すなわち最低限の近接戦への対応と、コロニー制圧などのMS形態の方が適しているミッシェンをこなすために付加されたといっていいたいだろう。もちろん、AMBACなどは推進剤の節約にも効果があっただろう。そういった意味では、一年戦争時のジオン公国軍のモビルポッド、MP-02Aオッゴよりも進んだ設計思想といえる。

低コストで必要な能力を無駄なく付与された本機は、実は見た目の印象よりもはるかに優秀な機体といえる。だからこそ、様々な後継機の開発が進められたというわけである。





## GAZA D

AMX-006

## ガザD

## Spec

頭頂高:17.0m 本体重量:28.7t 全備重量:68.4t ジェネレーター出力:2,140kW  
 スラスター総推力:98,200kg センサー有効半径:10,800m 装甲材質:ガンダリウム合金  
 武装:ビーム・サーベル×2、ハイパー・ナックル・バスター、ミサイル・ランチャー×4、ビーム砲×2

1 頭部 後継機というだけあって、そのデザインはガザCを踏襲する。モノアイ部分も通常MSとは異なる。

あらゆる部分が強化された  
 ガザCの正統進化モデル

ガザCを改修したアクシズのMS。ジェネレーター出力やスラスター推力、主兵装であるナックル・バスター（ハイパー・ナックル・バスターとも）の出力など、スペック的には全面的にガザCを上回る。また、本体重量もガザCと比べ約25%軽くなっている。装甲材質やフレーム構造の改良がもたらした

た恩恵だが、スラスター推力の向上と合わせて運動性は大きく向上した。また構造上、剛性に難のあったシールドはマウント位置が肩へと改められ、より信頼性の高いものとなった。このようにガザCと比べ、細かい改良点や進歩した点が多いが、機体の構成・コンセプト自体は踏襲している。武装に実体弾兵器のミサイルや、メガ粒子砲などが追加されているため、ガザC同様、集団による砲撃や一撃離脱

戦法による対艦攻撃に加えて、汎用性や対MS戦能力が向上している。しかし、優れた点を多く持つもの、量産MSとしてガザCほどの地位を確立するには至らなかった。第一次ネオ・ジオン戦争では大規模な艦隊戦があまり起きておらず、より対MS戦闘に特化した機体の配備が優先されたためだろう。機体自体は宇宙世紀0090年代でも使用が確認されている。



2 ナックル・バスター 出力は8.5MWとガブスレイなどが携行するフェダーイン・ライフル(6.6MW)以上の威力を誇る。

3 シールド 機体両サイドに備えた、スラスターやミサイルを内蔵するなど、幅に強化された。スペック的にはZガンダム(2020kW)をも上回る。

## MA形態

基本的にはガザCと同様に変形する。しかしシールドの接続位置の変更により、肩部の変形機構が若干複雑化している。







# GA-ZOWMN

AMX-008

## ガ・ゾウム

### Spec

頭頂高:18.0m 本体重量:31.6t 全備重量:58.2t ジェネレーター出力:1,840kW  
スラスター総推力:92,280kg センサー有効半径:11,200m 装甲材質:ガンダリウム合金  
武装:ビーム・ガン兼用ビーム・サーベル×2、ハイパー・ナックル・バスター、  
9連装ミサイル・ランチャー×2

### 一般的なMSとして ガザシリーズを改修

ガザシリーズを発展させたアクシス（ネオ・ジオン）の可変MS。開発時期はAMX-006ガザDと非常に近く、本機を含め複数機種が平行して、開発が進められていた。だが戦線への投入時期的には後発の機体となる。それまでのガザ系列とは異なる可変機構を持ち、MSのフォームは

1 頭部 意匠面はガザシリーズの系列機といえる面影を残しているものの、どちらかというと旧ジオン公国系列に近づいたようだ。

2 肩部 両肩は大型のミサイルベイで肩を軸に回転が可能。すれ違いざまに発射するなどの芸もできる。

AMX-003ガザCなどと比べれば、より人型に近い。一方、ジェネレーター出力やスラスター推力、さらに機体重量などのスペックはガザDの方が優勢だ。また、ガザシリーズの特徴であるビーム兵器、ナックル・バスター（およびハイパー・ナックル・バスター）は、本体直結の半固定式から一般的なビーム・ライフルのような携行式に改められたが、その出力は、ガザDはおろかガザCと比べても低下した。

こうした特徴を踏まえると、本機は従来機をベースに、グリップス戦役期の可変機に近いより対MS戦向けの機体として開発されたと位置づけられるだろう。それは戦場で求められてものに対応した結果かもしれない。しかし、後発の新規開発機が優秀だったためか、対MS戦用のガザシリーズとしてのガ・ゾウムは目立った活躍を見せなかった。ただし、一部の機体は『袖付き』などで運用されている。

### MA形態



同系列のガザCやガザDと比べ、特に脚部の変形機構が異なり、クローとしての使用はオミットされた。より純粋な航空機としての機能を求めた形態だ。

3 コクピット ガザCなどに比べればMS形態は、より人型へと近づいたシルエットである。コクピットも胸部へと移された。

4 武装 名称はハイパー・ナックル・バスターだが、出力はガザDのものより低い。エネルギーバック式になり、普通のビーム・ライフルとあまり変わらない。

20m

5m





## Pilot File

## 主なパイロット



## グレミー・トト

オレンジにペイントされた試作機のパウに搭乗し、ZZガンダムなどと戦っている。後にハマーンに対し反乱をおこした際、自軍の部隊にもパウを配備していた。



## アリアス・モマ

アクシズの補給部隊のパイロット。グリーンのカラリングが施された量産タイプのパウに搭乗。ガンダム・チームを相手に見事な空中戦を披露している。

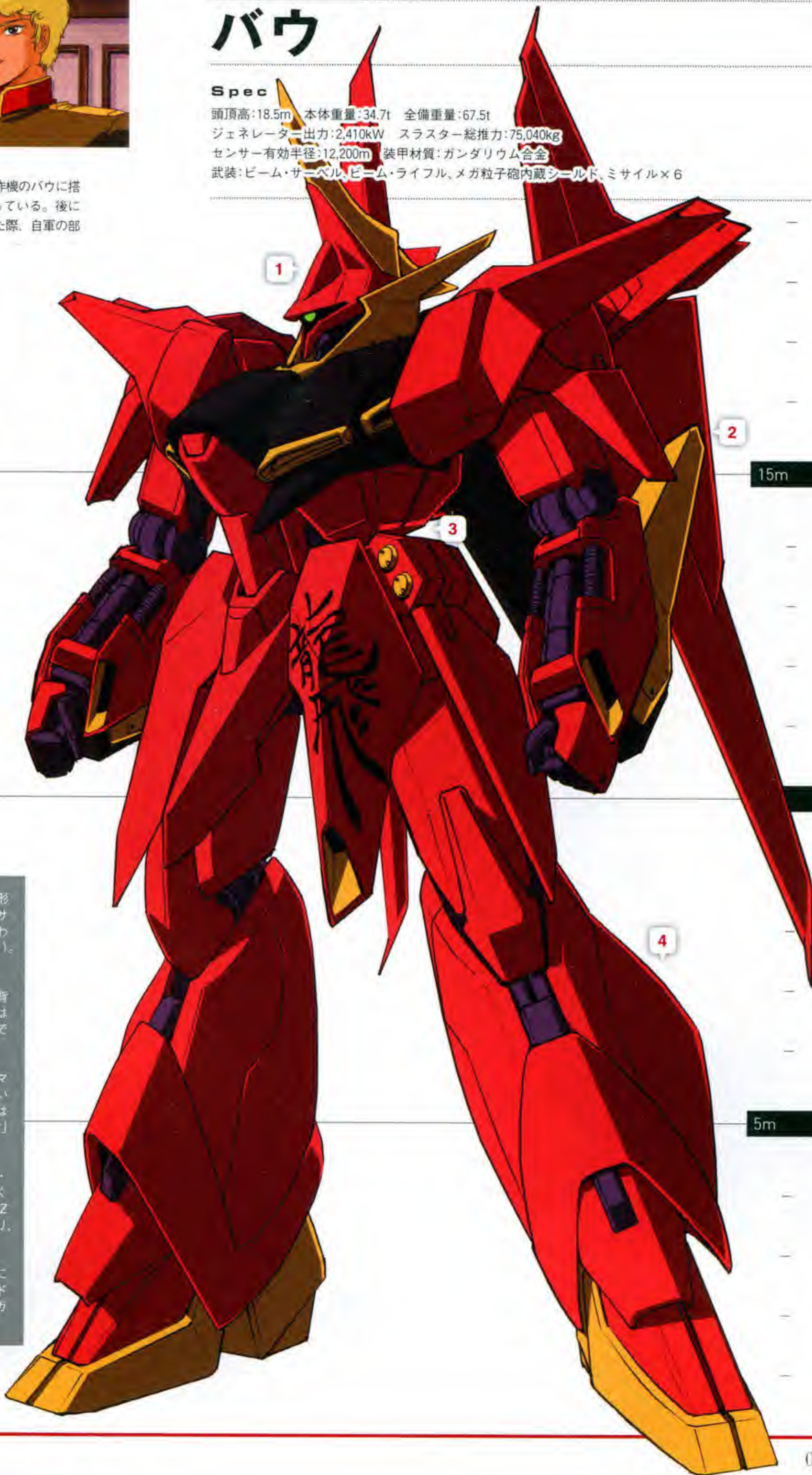
## BAWOO

AMX-107

## パウ

## Spec

頭頂高:18.5m 本体重量:34.7t 全備重量:67.5t  
 ジェネレーター出力:2,410kW スラスター総推力:75,040kg  
 センサー有効半径:12,200m 装甲材質:ガンダリウム合金  
 武装:ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、メガ粒子砲内蔵シールド、ミサイル×6



**1** 頭部 非常に特徴的な形状だが、それによってセンサー能力が左右されるというわけではない(性能はそれなり)。装飾的要素が強い。

**2** プロペラントタンク 背中に備えている。主翼下にはミサイルを懸架することができる。

**3** 腰部分 試験機の腰アーマーには「龍飛」と記されているように見えるが、実際には二文字で一つの文字で「パウ」と読む。

**4** 脚部 シルエットはネオ・ジオン勢の可変機には珍しく細身。脚部のラインなどはZガンダムに通じるものがあり、参照したのかもしれない。

**5** 武装 ビーム・ライフルにビーム・サーベル、シールドと標準的。シールドにはメガ粒子砲が内蔵。



## 武器・装備



## バウ・アタッカー

上半身にあたるパーツ。主翼があり、大気内での飛行を意識した形状となっている。『袖付き』が運用していた機体など例外はあるが、基本的にコクピットが設けられているのはバウ・アタッカー側のみ。



## バウ・ナッター

下半身にあたるパーツ。無人機であり、遠隔操作が可能とされるがどの程度の制御レベルかは不明。誘導方式も赤外線など諸説ある。そもそもミノフスキー粒子散布下において、遠隔操作はサイコミュ使用以外厳しい？

## Variation

## バリエーション



## バウ量産機カラー

アクシズ（ネオ・ジオン）のグレミー・トトが搭乗していた先行試作機の量産タイプ。外観、性能、合体可変機能などは基本的に同じで、カラーリングのみが異なっている。地球進攻やグレミーの反乱の際、戦線へ投入されている。しかし、分離状態で運用される例はほとんどみられなかった。

## PICK UP!



バウ・アタッカー、バウ・ナッター両者を有人化された『袖付き』のバウ。『ラプラスの箱』を巡る争いのメガロニカ宙域の戦いでロンド・ベル隊と交戦したが、その際は分離によって攪乱しつつ対象に急接近したり、ネル・アーガマに特攻する際にも分離することで対空砲火を散らしたりといった戦い方を見せた。

有人化は貴重なパイロットの損失に結びつきやすいが、ミノフスキー粒子散布下における戦術の多様化には一定の効果があった！

バウの実証試験機は、グレミー・トトによって運用され、アーガマのガンダム・チームと交戦した。新鋭機らしい高性能で奮戦したが、分離合体機構はあまり有意義に使われなかったようだ。

ネオ・ジオンの地球進攻に際し量産タイプも投入されたが、これもMSとしての単独飛行の例はあるが、バウ・ナッターとバウ・アタッカーが編隊を組んで飛ぶようなシーンはほぼ見られない。実際には一般機同様の扱いをされる例が多かったようだ。

分離合体機能を  
持たせた理由とは？

アクシズ（ネオ・ジオン）が開発したMSで可変機構をさらに発展させた、分離合体機能を持つ。機体は上半身に当たるバウ・アタッカーと、下半身に当たるバウ・ナッターから構成される。この分離合体機能が、どのような経緯で開発され、実現したかについては不明な部分も多い。当初の開発プランからして、バウ・アタッカーとバウ・ナッター両機を有人で操縦（つまりコクピットが2つ）する案や、バウ・ナッターは無人数機として無線誘導する案など複数が存在していた（その誘導方式についても諸説あり判然としない）。中にはアナハイム・エレクトロニクス

社が開発した可変合体機、MSZ-010ZZガンダムを参照、対抗したという説もあるが、本機と開発時期が近いことやZZガンダムのような特殊なコンセプトを真似ていないことなどから、単なる偶然とみられる。

陣営としても長く可変MSとしてAMX-003ガザCに代表される、ガザシリーズを運用していたが、非常に特殊な機体だった。また、変形のコンセプトも第3世代MSにみられるような、対MS戦を有利に進めるためのものではない。おそらくアクシズの開発陣は、本機の開発によって、第3世代機相当の技術の確立、もしくは開発技術全体の底上げを図る、という思惑があったのかもしれない。

だが、実際の戦場において、バウは一般的な非可変MSとして運用されるケースがほとんどであった。分離合体機構が持つメリットとしては、上半身・下半身をモジュール構造とすることで損傷時の修理や交換がしやすくなることや、戦況に応じて柔軟な運用がしやすい（ただし、これには各モジュールが有人で操作される必要があるだろう）ことなどが挙げられる。

富める国とは言い難いアクシズ（ネオ・ジオン）としては、主力兵器たるMSに対して、そういったマルチロール性を求めているとしても不思議ではない。

そうした流れの中にありながら、本機の合体可変という新機軸の機構そのものは、あまり有効に機能していなか

ったようではあるものの、高性能MSの量産化という目論見自体は、一定の成功を収めたといえるのだろう。

なお、宇宙世紀0150年代になると、分離合体というシステムを高度なレベルで採用したMSが再び登場する。それがLM312V04ヴィクトリーガンダム、ZG-S08Gゾロだ。それぞれ運用する陣営は異なっているものの、ことヴィクトリーガンダムにおいては、高性能機でありながら、生産性や整備性もよく考慮され、小規模なレジスタンス組織でも製造・運用ができた。

バウの開発陣が目指した分離合体MSの理想の姿とは、まさにヴィクトリーガンダムのそれだったのではないだろうか。





# CAPULE

AMX-109

## カプール

### Spec

頭頂高:16.5m 本体重量:38.7t 全備重量:57.5t ジェネレーター出力:3,680kW  
ロケット総推力:6,800kg センサー有効半径:12,300m（大気中）/7,600m（水中）  
装甲材質:ガンダリウム合金（二重装甲） 武装:アイアン・ネイル×2、  
レーザー・ビーム、ソニックブラスト、ミサイル×8

### 宇宙で開発された 水陸両用の可変MS

AMX-109カプールは、第一次ネオ・ジオン戦争においてアクシズ（ネオ・ジオン）が開発した水陸両用機だ。一年戦争末期に旧ジオン公国軍で開発されたMSM-03ゴッグやMSM-03Cハイゴッグなどの技術やデータを活用しているという。

搭載されるジェネレーターは登場時

1 頭頂部 独立した頭部はなく、天面部分にはビーム・アイなどを備えている。上半身が球状になるのも限りなく水の抵抗を軽減するためだろう。

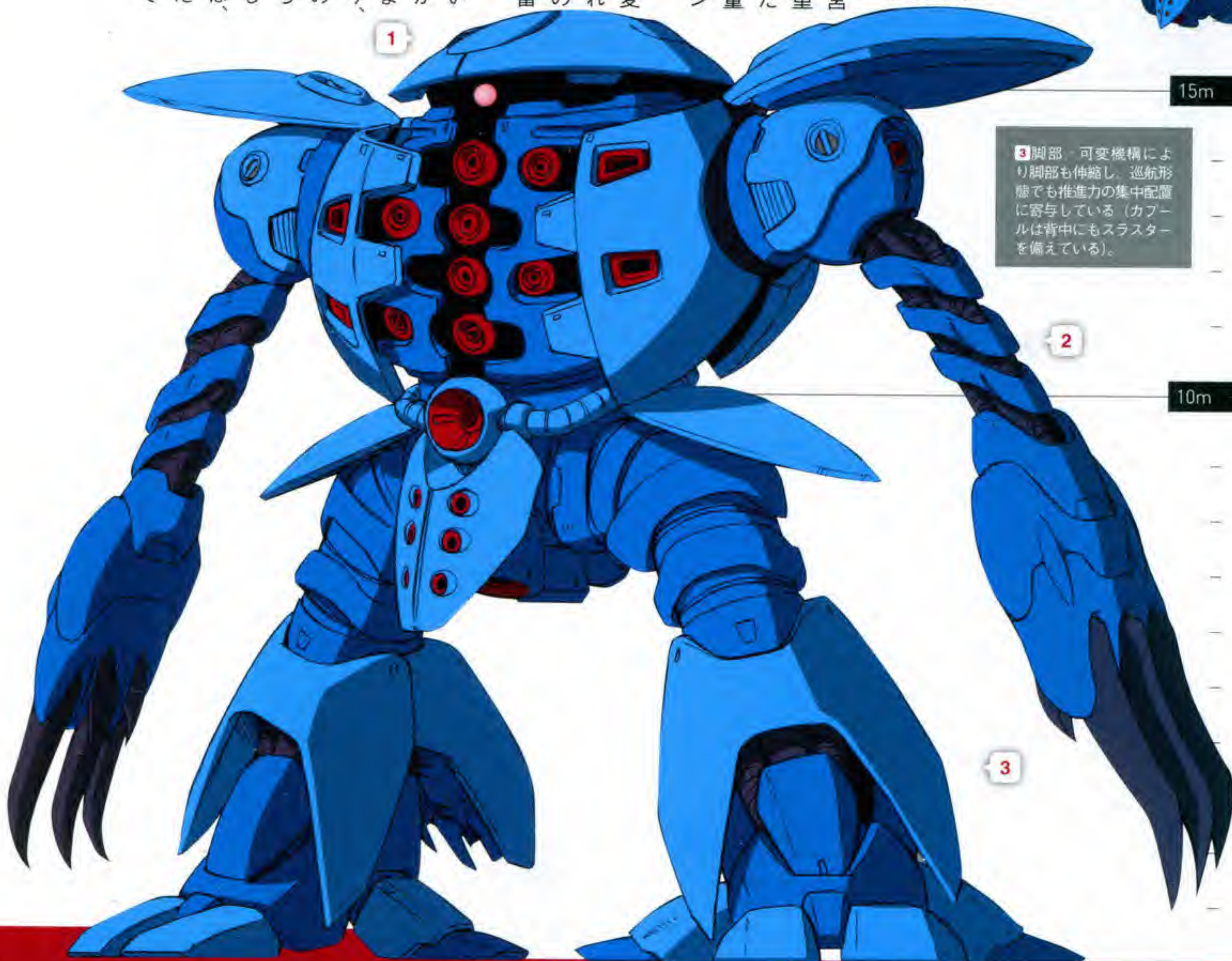
2 腕部 ある意味、ジオン系水陸両用MSの伝統装備といえるアイアン・ネイル。蛇腹式の関節機構は伸縮もする。形状はハイゴッグに似ている。

### MA形態（水中潜航形態）

頭部や肩部の装甲は外蓋の役目を果たすので、密閉されると機体は球に近い形状となる。関節などの駆動部も外からは見えなくなり、耐圧深度も高そうである。



代に相応しい出力に強化され、同陣営の機体群の中でも高い数値だ。本体重量は一年戦争最優秀機と謳われたMSM-07ズゴックと比べ40%の軽量化を果たしたが、これは装甲材のガンダリウム合金の恩恵と考えられる。もともと巡航形態としてMAに可変する機能は、一年戦争時から採用されている機構で、本機の場合、球状のMA形態だが、これも長年の技術の蓄積の結果、もしくは伝説といえる。あらゆる面で高性能化を実現していた本機だが、地球侵攻時の現場の兵からの評判は芳しくなかった。当時はまだ、新規技術で構築された新型機より、一年戦争を戦い抜いたザク系の機体の方が、機械的信頼性が高かったのだろう（一種のザク神話だろう）。しかし時は流れ、宇宙世紀0090年代では、そうした機械への不信任も払拭されたよう、旧ジオン軍残党の戦力として活用される機体があった。



15m

10m

3 脚部 可変機構により脚部も伸縮し、巡航形態でも推進力の集中配置に寄与している（カプールは背中にもスラスターを備えている）。





# JAMRU-FIN

AMA-01X

## ジャムル・フィン

### Spec

頭頂高:15.0m 本体重量:24.7t 全備重量:58.5t  
 ジェネレーター出力:4,750kW スラスタ総推力:82,600kg  
 センサー有効半径:13,400m 装甲材質:ガンダリウム合金  
 武装:ハイ・メガ・キャノン、2連装小型ミサイル・ランチャー×2、ビーム砲×2

計画変更で急遽完成された  
謎多き可変MA

AMA-01Xジャムル・フィンは、ハマーン・カーン率いるネオ・ジオンが開発した可変MAで、第一次ネオ・ジオン戦争末期に戦線へ投入された。本機は、いわばMA(戦闘形態)からMA(巡航形態)に変形する特異な機体だが、これは本来のジャムル・フィンの姿ではない。

そもそも本機はMSとして開発が進められ、旧ジオン公国軍のMA-08ビッグ・ザムのような巨大な機体として完成を目指していたといわれる(諸説あり)。しかし、開発の遅延で上半身の完成時に計画は中断され、その後、未完成の上半身に仮設の頭部、簡易マニピュレーター、脚部を取り付けて完成した。

どこことなくアンバランスな機体形状も、こうした出自に起因するのだろう。機体サイズも15メートルとかなり小型だが搭載ジェネレーター出力や、スラスタ推力などは、どれも高い数値である。MSZ-010ZZガンダムと同等の威力かは定かではないが、ハイ・メガ・キャノンを装備するなど火力も高い。ブースターユニットを装着したメガ・ファイター形態の機動力も侮れない。

しかし、本機は戦闘の記録があまりに少なく(エウーゴのネエル・アーガマ隊との戦闘記録以外は皆無)、未完成機という出自も手伝ってか資料に乏しく、謎の多い機体だ。

前述の目標とされていたビッグ・ザム以上の機体というのも、おそらくNZ-000クイン・マンサの開発計画へと吸収されたと思われるが、いずれにしても真相は藪の中である。

15m

10m

5m

1 頭部 巡航形態時、頭部はカバーで覆われる。センサーはモノアイ式。従来搭載されるはずだった頭部の形状は定かではない。

2 ハイ・メガ・キャノン 機体の胸部中央に位置する高出力のビーム兵器。ZZガンダムとは違って、連射が可能である。

3 マニピュレーター 特異な位置の腕部。簡易装備といわれるが、掌部分にはメガ・ビーム砲(ビーム・サーベル兼用)を備える。

4 脚部 つま先が長く、ランディングギアのような形状の足首。構成される脚部は極端に短く設定されているようだ。

### MA形態

頭部カバーが下り、腕部装甲が展開してクチバシのような機首部を形成し、両脚部を180度展開して完成する巡航用のMA形態。変形所要時間は短い。

### メガ・ファイター

ビーム砲やミサイル・ランチャーなど多くの火器類を装備するメガ・ブースターユニットを装着した状態。本体がユニットを跨ぐような格好となっている。航続距離も延伸される。







GAZA E

AMX-007

## ガザE

## Spec

頭頂高:16.29m 本体重量:34.8t 全備重量:68.2t

ジェネレーター出力:2,280kW スラスター総推力:59,300kg

センサー有効半径:11,690m 装甲材質

武装:ビーム・サーベル×2、バインダー武装ポッド×2、ビーム・カノン×2

ガザCの高機動発展型  
SFSの能力を付加

一年戦争以降もMSの開発は盛んに行われていた。それでも単機における展開能力には限界があり、ド・ダイ改やベース・ジャバーといったサブ・フライングシステム(SFS)などの「脚」となるサポート兵器は必要だった。

こうしたMSの「脚」を稼ごうとしたのが可変機であり、各陣営とも実現

1 頭部・背部のユニットと一体化しているような頭部。モノアイがかるうじてガザの系列機ということ想起させる。

2 手首・MSの形状や手首をみても、自ら対MS戦や格闘戦などを進んで行う性格の機体とは言い難い。それでもビーム・サーベルは装備。

3 バインダー武装ポッド/両肩に装備される武装ユニット。ガザCのようなシールドではなく、ウェポンキャリアといえる。先端にビーム・カノン1門を備えている。

に向け躍起になっていた。そうした潮流に則ってかアクシズ(ネオ・ジオン)で開発されたのがAMX-007ガザEである。型式番号と名前からもわかるようにAMX-006ガザDに連なるガザ系列の機体だ。

しかし、本機は可変MSの機能向上というより、SFSとしての機能を追及している点特徴だ。そのためガザシリーズの代名詞、「ナックル・バス

ター」は装備せず、2門のビーム・カノンがメイン武装となっている。性能としては、MS1機の搭載、運搬が可能で、それなりの機動力は確保されていたようだ。しかし、独自色が強いいためか、ガザCやガザDといった系列機とは共用部品が少なく、生産性も低かったという。本機はおそらく、あまりに性急に開発されたため、結局、実験機の範疇を越えられなかった、というのが真相ではないだろうか。

## COLUMN ガザEのスクリーンデビュー



模型の連載企画が初出のガザEだが、実はフィルムに登場したことがある。それは06年に公開された『機動戦士ZガンダムⅢ A New Translation-星の鼓動は愛-』のグワダンの格納庫シーンで、シャアが通り過ぎる後ろに一瞬だけ映るのだ!

4 脚部/非常に短く、自立歩行などには向かないと思われる(ほとんど飾りか?)。





# REBAWOO

AMX-107R

## リバウ

### Spec

頭頂高:19.6m 本体重量:40.4t 全備重量:71.2t ジェネレーター出力:3,020kW  
スラスター総推力:112,240kg センサー有効半径:20,300m 装甲材質:ガンダリウム合金  
武装:ビーム・サーベル、ビーム・アックス、ビーム・ライフル、マシン・キャノン、  
フレキシブル・ビーム・ガン、他

1 頭部 形状はベースのバウからかなり手を加えられているようだ。トサカ部分などの構成要素は同じといえる。

### サイコ・フレームを搭載した ニュータイプ専用バウ

AMX-107Rリバウは、ネオ・ジオン残党である『袖付き』が徹底改修を行ったニュータイプ専用機である。そのベースは、第一次ネオ・ジオン戦争時、ハマーン・カーン率いるネオ・ジオンで運用された合体可変MSのAMX-107バウである。機体のコクピット周辺と下半身のフレームには、

サイコ・フレームが採用され、バウ・アタッカー、バウ・ナッターの完全なる分離運用を可能にしていたという。バウのバウ・ナッターの遠隔操作方法については諸説あり、判然としない部分も多い。本機にはそうした部分を解消する目的が課せられていたのかもしれない。外見的には機体各部の装甲、腕部の袖口に装飾が施され、『袖付き』由来の機体であることがわかる。機体色も赤系となり、同組織の首魁、フル・

フロントル専用機としてあつらえられたという。

確かに拠点となるパラオには、ハマーンのネオ・ジオンが擁していた旧来のMSが秘匿されていた。これらを『袖付き』は戦力化していった。そんな中には、バウ・ナッターを当初の構想に近づけて有人仕様にした機体も確認されているので、機体の調達に問題はなかっただろう。では、なぜバウが選ばれたのだろうか？ 当時から9年も経

過していた機体をわざわざ組織のトップの専用機とするだろうか。

おそらく、バウという機体は、そのスペック以上に優秀な機体だったのだろう。分離合体機ゆえ、案外、サイコ・フレームの搭載が容易な構造だった可能性も考えられる。

結局、フロントルが本機に搭乗する機会はいまなかったようで、その後、別の搭乗員を得て複数の戦場に投入されたとされる。

2 ボディ 上半身、下半身、それぞれにサイコ・フレームが用いられている。これによる感応波で分離後の機体をコントロールする。

3 武装 基本となる火器類(ビーム・ライフルやビーム・アックスなど)は、シナンジュと同規格のものを装備している。





## Pilot File

## 主なパイロット



## ロニ・ガーベイ

ジオン残党軍のパイロット。父親は元ジオン公国軍人で資産家だったマハディ・ガーベイ。その父を連邦軍によるジオン残党狩りで殺害され激しく憎んでいた。シャンプロのパイロットとしてダカール市、そしてトリントン基地などを襲撃した。



## 水中巡航形態

両肩部装甲を閉じ前肢を収納する形で巡航形態へ変形し水中を潜航する。両肩部には電磁流体誘導推進器を内蔵している。水中内でもクローの展開が可能である。洋上を航行する艦艇にとって脅威以外のなにものでもない。

## SHAMBLO

AMA-X7

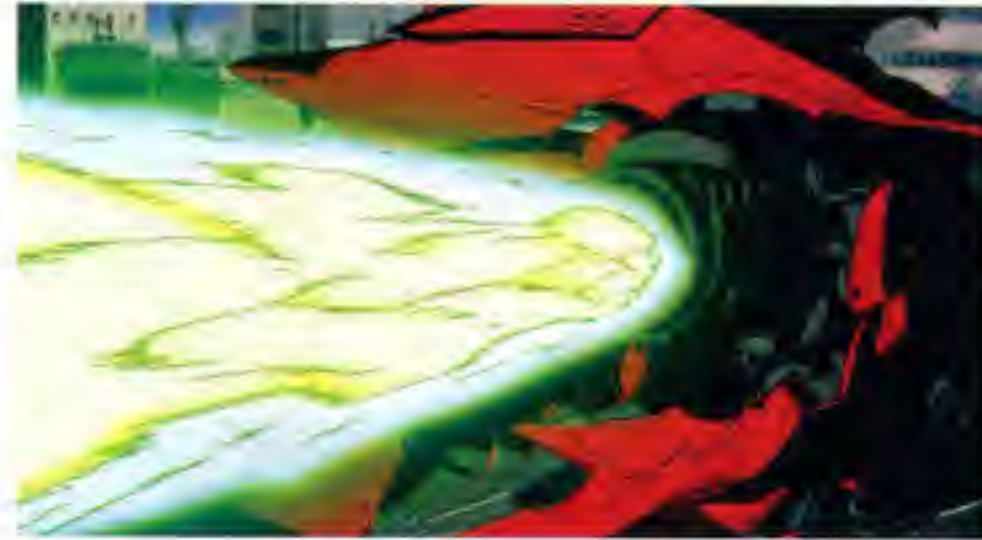
## シャンプロ

## Spec

全高:31.8m (陸上戦闘形態時) / 全長 77.8m (水中巡航時) 本体重量:196.8t  
全備重量:283.9t ジェネレーター出力:21,460kW スラスター総推力:226,480kg  
センサー有効半径:12,800m (陸上)、240,000m (ソナー/水中) 装甲材質:ガンダリウム合金  
武装:大型アイアン・ネイル×2、拡散メガ粒子砲、大口徑メガ粒子砲、リフレクター・ビット×10

## Arms and equipment

## 武器・装備



## 大型メガ粒子砲

シャンプロの主武装。非常に高出力の大口徑ビーム兵器で、一撃で広範囲に被害を及ぼす高火力だ。直撃を受ければMSは、跡形もなく消え去りたちまち蒸発してしまう。連射は不可能ではないが一発の威力が大きい分、チャージにはそれなりの時間が必要である。



## リフレクター・ビット

本体から発射されたビームを、電磁フィールドを発生させたリフレクター板で反射(偏光)するサイコミュ兵装。敵から放たれたビームを利用し撃ち返すこともできる。本体そのものにはビーム砲などは搭載されておらず、二重反転ローターを装備し、本体の周囲に滞空する。

3

30m

## MSとのサイズ対比

全高31.8mと上下方向でもMSと比べてかなり大きい。この小山のようなサイズと動物的な外観も相手は心理的プレッシャーを感じるだろう。

20m

10m

4



## ジオン残党軍の執念が 形となった超大型可変M A

宇宙世紀0096年、「ラプラスの箱」をめぐる戦いで、旧ジオン残党軍の戦力として、ダカール市とトリントン基地を襲撃し、驚異的な破壊力をみせたのが水陸両用の可変M A、A M A・X7シャンプロだ。なお本体コクピットには、サイコ・フレームが採用されているので、ニュータイプ専用機にも該当する。M Sの機体サイズが大型傾向となる同時代の機体群と比べても、圧倒的な巨体だが、ミノフスキー・クラフトとホバー推進を併用した航行システムは驚くほど静粛で、巨大機にありがちな「鈍重さ」はない。非常に堅牢な装甲に、3脚と独特な形状の陸上戦闘形態も特徴の一つだ。

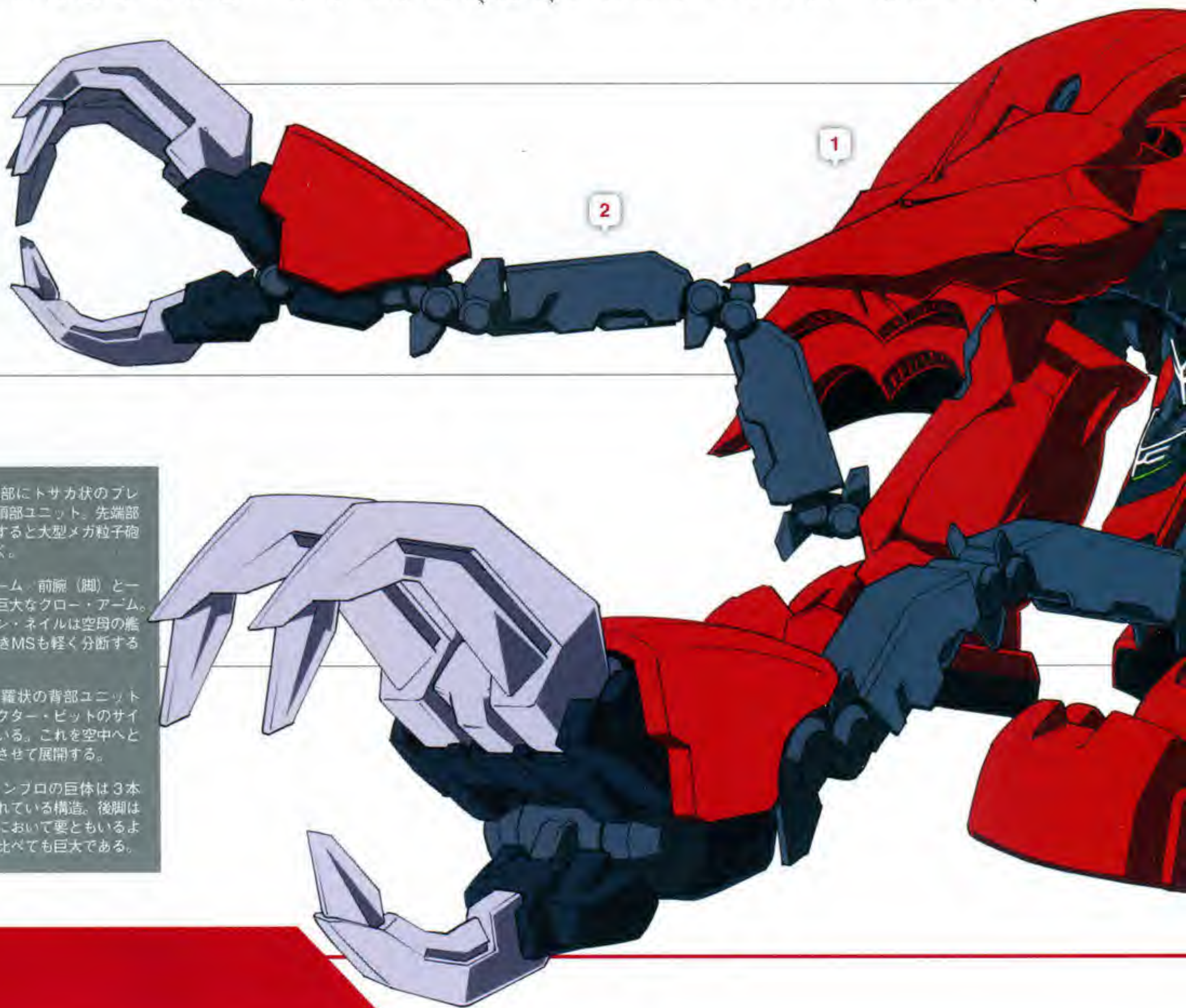
また、本体に搭載した「フィールドジェネレーター」(当然、これは防御にも利用される)の作用と、可変機構による巡航形態への変形で、水中移動時の巡航速度と機動性も高いものになっている。武装面では、大型メガ粒子砲拡散メガ粒子砲といったビーム兵器が主だが、機体左右の前腕(脚)部には、近接戦闘用クロー・アームが、本体には攻防一体の運用が可能なサイコミュ兵装のリフレクター・ビットが搭載されるなど実に多彩だ。

これだけの装備類に、火器管制や機

体制御を、実質的に一人で行うのには、サイコ・フレームの採用は必須といえる(複数人での操作も可能)。反面、サイコミュを制御デバイスとする機体の宿命だが、場合により暴走する危険性も孕んでいる。

本機の開発を主導したのは、地球圏で活動を続けている旧ジオン軍残党といわれ、完成までに6年の歳月を要した。元は第一次ネオ・ジオン戦争期、ハマーン・カーン率いるネオ・ジオンの時代に設計され「ハマーンの遺産」と称されるが、『袖付き』からの援助を受け、完成へとこぎ着けたという。機体の建造や入手経路については、直接ハマーンから譲渡されたのか、地球に残されていたものを発見したのか、はたまた設計データのみで一から建造されたのかは不明だ。しかし、両肩から張り出したバインダーなどは、A M X・003キュベレイやN Z・00クイン・マンサといった旧来のネオ・ジオンの系譜を感じさせる。

これほどの規模の兵器が連邦軍の目に触れることなく完成に至ったことは驚愕だが、実際、地球圏で活動が続ける旧ジオン軍残党への現地協力者は少なく、監視の目がどこまで行き届いていたかは怪しい限りだ。また『袖付き』の前身である、ネオ・ジオンの時代から協力関係は続いていたのだらうと思われる。



1 頭部・後頭部にトサカ状のブレードを備える頭部ユニット。先端部が上下に展開すると大型メガ粒子砲の砲口がのぞく。

2 クロー・アーム・前腕(脚)と一体化している巨大なクロー・アーム。先端のアイアン・ネイルは空母の艦底を易々と貫きM Sも軽く分断する破壊力。

3 サイロ「甲羅状の背部ユニット」には、リフレクター・ビットのサイロが備わっている。これを空中へと射出して滞空させて展開する。

4 後脚。シャンプロの巨体は3本の脚で支えられている構造。後脚は航行システムにおいて要ともいうよう。前脚に比べても巨大である。



# 地球連邦軍系 可変MSが摸索した新たな道

第二次ネオ・ジオン戦争が終結した後、地球連邦軍はアナハイム・エレクトロニクス社にMS開発を一任した。時代は軍縮の流れもあって、可変機は生き延びる道を模索しなければならなかった。

## 白熱したMS開発から 現実的な軍縮の時代へ

グリプス戦役と第一次ネオ・ジオン戦争という2つの紛争を経て、地球連邦軍の軍縮傾向はさらに促進する。これは当面の脅威が去ったこと、そして過熱化した兵器開発を抑制する意図があったことが推測される。

特に宇宙世紀0080年代後半は単一機能に特化し、複雑なシステムや構造をもった機体が数多く生まれ、小規模紛争を繰り返していた。それらが地球連邦政府の財政を圧迫していたのはいうまでもない。こうした時代背景も手伝って機種の統廃合と、単一機種の性能向上という方向性が摸索され、結果、RGM-89ジェガンが地球連邦軍の主力機へとなっていく。

このような軍縮の影響をダイレクトに受けたのが、可変機であることは間違いない。複雑な構造や様々な専用部品、また一般的な機体よりもメンテナンスに要する時間は多く、パイロットの機種転換や習熟するための時間もかかるなど、軍縮を目指す地球連邦軍の方向性とは相反する存在であった。代表的な可変機の機能特性である「活動範囲の向上、長い稼働時間、航続距離」にしても、サブ・フライト・システム(SFS)の代用で事足りると判断された部分は多かったようだ。

ただ、だからといって可変機の灯が消えてしまったというわけではない。これには様々な要因がある。たとえばMSスペックの平準化は一部のエースや特殊部隊からは不評もあり、これにはジェガンの仕様変更などで対応していた。

だが、それでも第二次ネオ・ジオン戦争など、いまだ一部のエースパイロットが戦場を支配する状況は発生しており、ロンド・ベル隊のMS隊隊長アムロ・レイ大尉が、当初、MSZ-006Zガンダムを欲していた、という事例のように、十分といえる状況にはなかった。また、これまで培った技術を放棄することをせず、最後までこだわりを捨てなかった技術者も多かったことだろう。一度開発がペンディングとなったMSN-001デルタガンダムのデータを基に系列機体が誕生したことも、開発が細々とながらも継続していたことの証左であろう。

特に地球連邦軍の一部では、同時代を代表する可変機、Zガンダム系MSへの信奉ともいうべきものが強かったようで、軍縮の波に逆らうかのように再設計機が生まれていった。それは一種の「Zの呪い」といえるものだったのかもしれない。

## 生き残りをかけたZ系は 様々な手段を模索する

Zガンダムのメリットは、ウェイブ・ライダーの変形によってオプシオンを必要とせず大気圏を突破できること、重力下でもSFSを必要としないフレキシブルな運用性と機動性、MS形態での汎用性の高さなどが挙げられる。

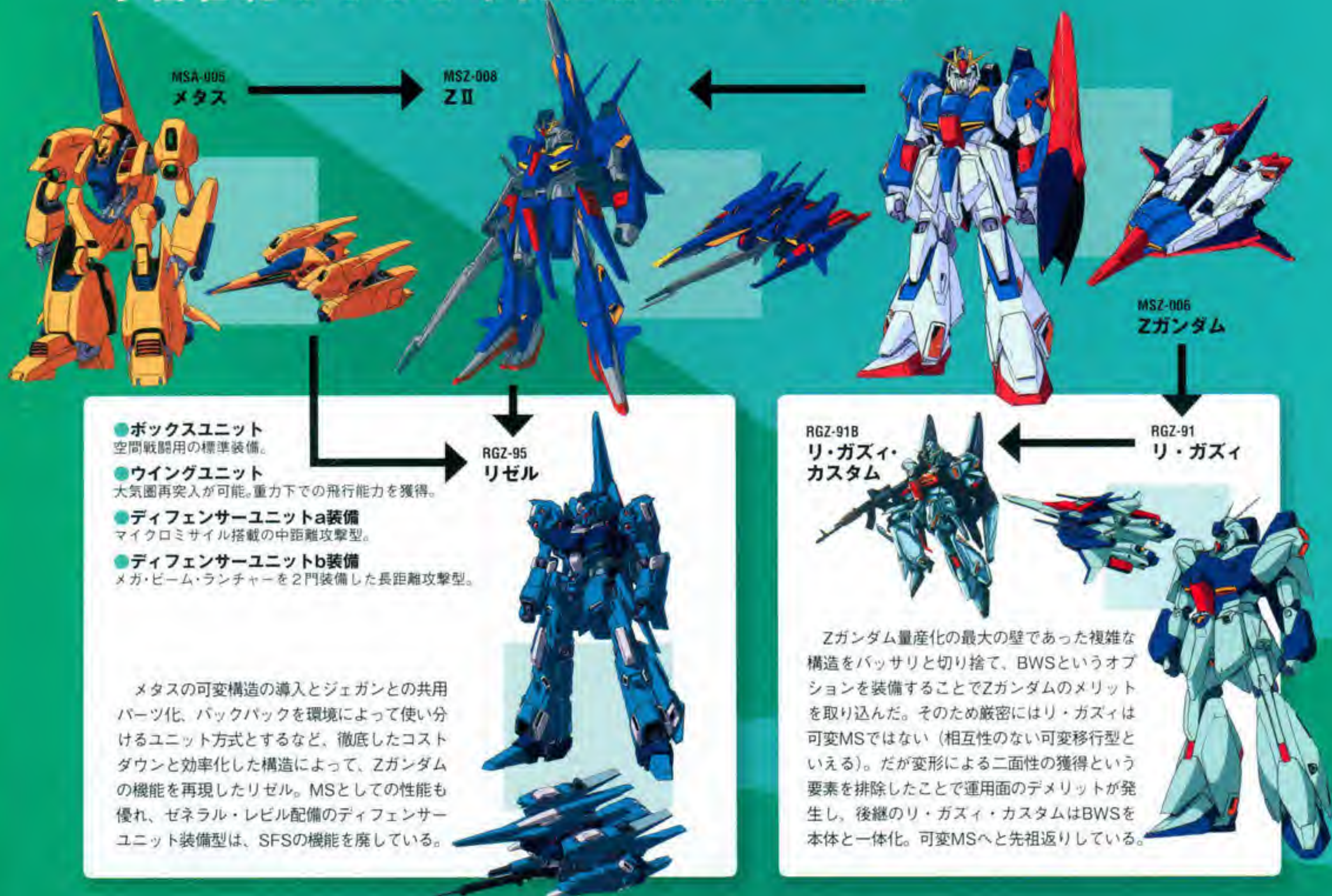
特に宇宙世紀0080年代後半は、MSの先鋭的な技術力こそ企業の力であると考えられていた時代であることは明確で、コストを度外視したMS開発が行われる傾向にあった。Zガンダムもいわば「その時代だからこそできた」機体であって、Zガンダムと同一機能の機体を、軍縮時代に同コストで再現することは不可能となっていたことだろう。

それは後のZガンダムの再設計機が多く、ある程度の妥協を受け入れて開発されていることから明確である。たとえばRGZ-91リ・ガシィは、可変機構を最小限にとどめ、機能の一部を外部ユニットであるBWS(バック・ウェポン・システム)に分割。Zガンダムの「変形(BWS)形態での突貫能力」に特化させた。だが一度BWSを分離すると、変形形態には戻れないというデメリットがあり、柔軟な運用性は欠落してしまった。

一方、RGZ-95リゼルはMSZ-008ZⅡや、MSA-005メタスの可変方式を参考に、ジェガンとのパイプ共有化を図るなどコストダウンを



## 宇宙世紀0090年代におけるZの系譜



宇宙世紀0080年代に設計されながらも、当時は開発が断念されたデルタガンダム。その設計データをもとに、宇宙世紀0090年に開発されたのがデルタプラスである。機体自体は一世代前のものだが、素性の良さから最新鋭機とも互角以上の戦いを展開した。

目指した。またバックパックユニットを換装式とすることで、重力下での運用も可能となっている。これはBWSシステムの考え方もいえ、リゼルの全体的なパッケージングは、ZⅡ、メタスと、リ・ガズィのハイブリッド（良いところ取り）な機体という印象を受ける。

リゼルはジェガンと部品の共通化を推進することで「Zガンダムの機能を現実的なラインで実現する」ことに成功したといえる。小規模ながら量産化が進められ、ロンド・ベル隊やゼネラ

ル・レビルなどに配備されていた。リゼルが生き残った背景には、コストダウンで軍縮の波を切り抜けた、可変MSが不要となりつつある時代の中において、「MS戦に対応可能なSFS」というポジションを見出したことが大きい。それが結果的に可変機が生き残る道につながったのだ。

ただ、こうした状況もいわば一時しのぎに過ぎず、宇宙世紀0100年代になるとMSの高性能化が進み可変機への需要はさらに薄くなり、主流から外れていくのである。





## Pilot File

## 主なパイロット



## アムロ・レイ

一年戦争の伝説的英雄であり、ロンド・ベル隊のMSパイロットとして復帰した。時代遅れとなったリ・ガズィを駆りつつも、最新スペックのギュネイのヤクト・ドーガと対等に渡り合うなど、実力を示した。



## ケーラ・スウ

ロンド・ベル隊の女性パイロットで、アムロに次ぐエース的存在。以前からジェガンをしのご機体を欲し、リ・ガズィを手に入れる。アクシズへの先鋒として出撃するも、ギュネイの人質となり命を落とす。

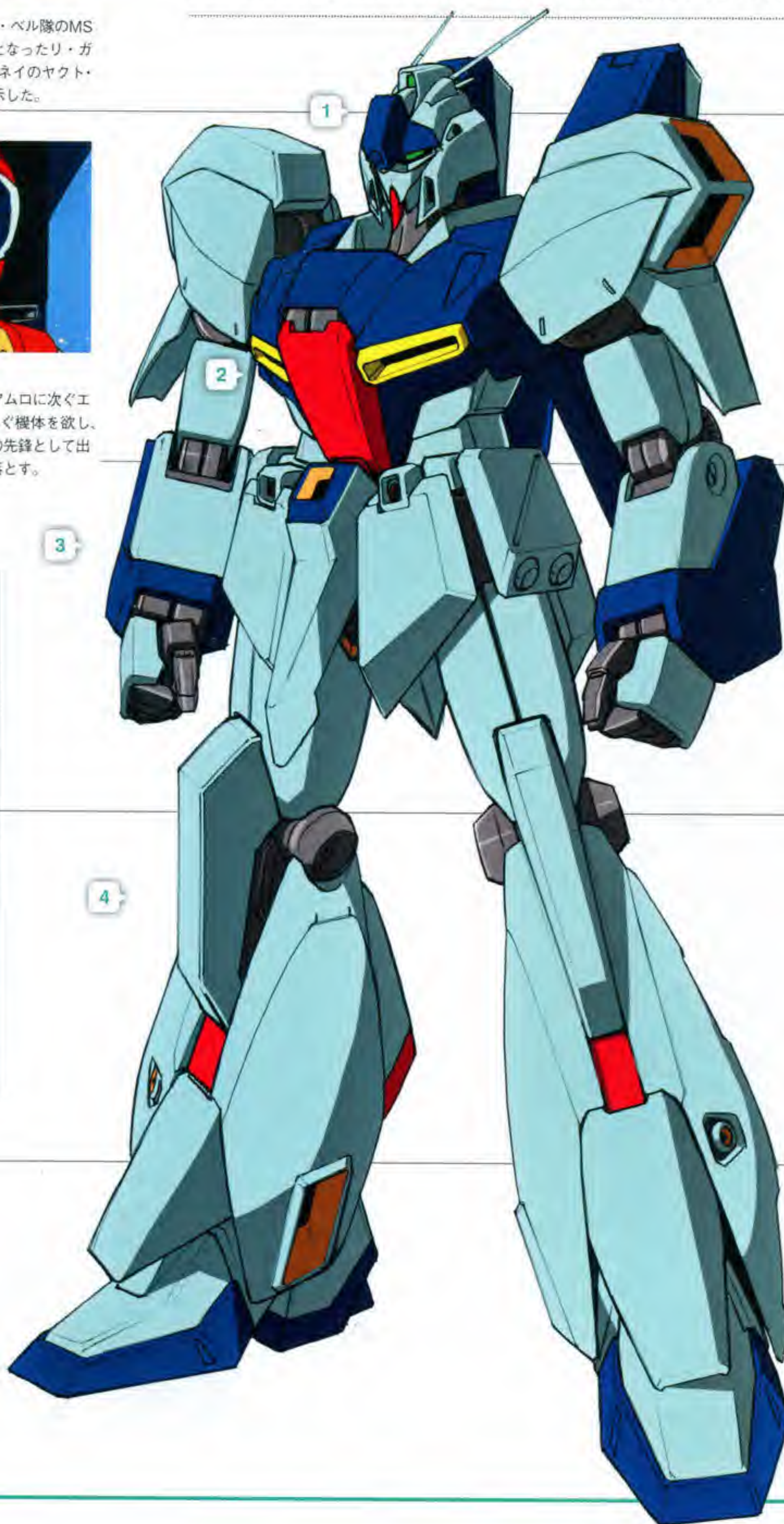
## Re-GZ

RGZ-91

## リ・ガズィ

## Spec

頭頂高:20.5m 本体重量:24.7t 全備重量:55.2t ジェネレーター出力:2,550kW スラスター総推力:67,600kg  
センサー有効半径:18,900m 装甲材質:ガンダリウム合金 武装:バルカン砲×2、ビーム・サーベル×2、  
ビーム・ライフル、2連装グレネード・ランチャー×2、ハンドグレネード×3、バック・ウェポン・システム、他



①頭部 / ガンダムのようなツインアイタイプ。シルエットもZガンダムに近い。だがV字アンテナは装備されておらず、印象が大きく異なる。

②胸部 外観シルエットは、ベースとなったZガンダムのイメージを強く感じさせるもの。だがリ・ガズィは非変形MSであるため、ボディ内部に変形機構は取り入れられておらず、大きく展開するような構造ではない。

③腕部ユニット / Zガンダム同様、グレネード・ランチャーを内蔵する。これはリゼルも同様の構造となっており、Z系MSの特徴的な装備といえるかもしれない。

④脚部 / Zガンダムのシルエットを色濃く残す脚部のライン。バック・ウェポン・システムとの合体時には、Zガンダムに近い機構で脚部・つま先が折りたたまれる。





### ビーム・ライフル

リ・ガズィの専用ライフル。ジェガンなどが使う地球連邦軍MSの標準型ビーム・ライフルとは異なり、Zガンダムのビーム・ライフルの発展型。



### ビーム・サーベル

背中中のバック・ウェポン・システムに収納された格闘戦用武器。斬撃直前にビーム刃を形成するリミッターを採用し、ビーム形成を扁平に行うパイアス発生器を備えている。

## BWS (バック・ウェポン・システム)



バック・ウェポン・システムは、リ・ガズィ本体に装備することで、Zガンダムのウェイブ・ライダーに酷似した形態になる（装着時の名称はスペースファイター）。可変MSの基本概念と同様、機体のスラスターを一定方向に固定し、推力を集中させて、宇宙戦闘機的な運用が可能となっている。だが大気圏突入能力はなく、あくまでZガンダムの強襲能力に特化した装備といえる。ユニット自体はMSの背面から上半身を覆い、下部はシールドでカバーする。

### PICK UP!



スペックでは圧倒的に勝るサザビーに対しても、アムロはリ・ガズィで奮戦する。懐に飛び込んで、サザビーのビーム・ショット・ライフルをビーム・サーベルで両断するなど、できる限りの手段で対抗。だがシャアは意図的にファンネルを使わないなど、本気を出していたわけではなかった。のちに「情けないモビルスーツに勝ってなんになる」と吐き捨て、アムロと互角のMSで戦うことを欲していたことが後に判明する。この戦闘でシャアはリ・ガズィを撃墜する意思はなかったのだ。



ネオ・ジオンによるフィフス・ルナ落とし作戦を止めるべく、出撃したロンド・ベル。だが奮闘もなしく作戦の阻止に失敗。アムロはリ・ガズィでギュネイの駆るヤクト・ドーガに対して性能の劣る機体で互角以上の戦いを展開。BWSや地形を生かして、ファンネルを巧みに撃ち落とし、機体自体も撃墜寸前に追い込んでいる。さらにシャアのサザビーが登場してからは、乱戦を利用して確実にヤクト・ドーガを追いつめていくなど、歴戦のパイロットのテクニックを見せつけている。

## 変形を排除することで Zの系譜を活かす

MSZ・006 Zガンダムは、グリプス戦役、第一次ネオ・ジオン戦争において多大な戦果を残した機体だった。それゆえ後世においても、その系譜を受け継ぐMSの開発は継続され、いくつかの可能性を示した。とはいえ、その複雑な可変構造とそれに伴う生産コストや整備性などの諸問題があり、その後継機も「性能は同等にしてZ的な構造問題からいかに脱却するか」という点に主眼が置かれたと思われる。RGZ・91リ・ガズィも、Zガンダムのコンセプトを元に、量産化を視野に入れて開発されたMSである。だが

本機は大胆にも変形構造の核となるユニットを別体化。いわば変形を最低限に抑えて、バック・ウェポン・システム（BWS）を採用したのである。Zガンダムの大きなメリットのひとつである、強襲用MSとしてウェイブ・ライダー形態で発揮される機動性と、MSとしてのポテンシャルの両立を再検討した機体といえる。

BWSの構成をみると、推進力の集中強化というよりもウェポンキャリアとしての側面が強い。メインスラスターもリ・ガズィ本体のものを利用してため、BWSはあくまで機体の直線方向の推進力の増強を主眼にした外装フレームと考えられる。さらに2門のビーム・キャノンに加え、機首部分の大口徑ビーム・キャノンは、Zガンダムのハイパー・メガ・ランチャーに該当する武装である。そのほか行動時間の拡大を狙い、プロペラントタンクが装備されている点もポイントだろう。

こうした着脱式のBWSは、Zガンダムのように、状況に応じてMSとウェイブ・ライダーの使い分けはできず、フレキシブルな運用というZガンダムのメリットが失われていることは否めない。BWS排除後は、性能は高いとはいえない一般的なMSと何ら変わらない機体となってしまう。

型式が同じで、やはりZガンダムを再設計した後継機、RGZ・95リゼルが構造面の簡略化や、通常機とのパーツ共用による低コスト化で、可変機のメリットを得ていたのに対し、リ・ガズィは、こうした2つのメリットをあえて切り離して考えることで成立した機体といえるだろう。

こうして着脱式のBWSは、Zガンダムのように、状況に応じてMSとウェイブ・ライダーの使い分けはできず、

基地強襲や対艦戦、基本的な作戦ならBWSは問題なかっただろうが、リ・ガズィが投入されたのは、シャア・アズナブルやギュネイ・ガスといったエース級パイロットと相まみえる戦場である。可変機が時代遅れになりつつあったとはいえ、変形は戦闘における戦法やオプシオンを増やすことを意味するはずだ。アムロ・レイが当初、本機ではなくZガンダムを要求していたといわれるのも、そうした理由があるのかもしれない。





## Pilot File

## 主なパイロット



## ノーム・バジリコック

ロンド・ベルMS隊隊長で階級は少佐。リゼル指揮官機（C型）を駆る。フル・フロントルの操るシナンジュとの戦いにおいて、自らを囷にして近接戦闘を仕掛け、リディに後を託して戦場に散った。



## リディ・マーセナス

ロンド・ベル所属のパイロット。連邦政府初代首相ローナン・マーセナスの家系、マーセナス家の嫡子。家に対する反発から軍人となったが、のちにバナージとの因縁を経て戦争に身を投じていく。

**1 頭部** 形状の基本フォルムはZガンダムを思わせるが、センサーユニットやメインカメラなどはジェガンと共通化することでコストダウンを実現。C型は出力的影響だろうか。各部センサー色が一般機と異なる。

**2 胴部** 機体構造はメタスの可変機構を踏襲するが、アクチュエーターパイプ3本で接続されるといふ脆弱な構造は変更。Zガンダム+メタスのメリットを併せ持つ構造へと進化。

**3 腕部** 上腕部には実体弾のグレネード・ランチャーを装備する。Zガンダムと同様の構造であり、Zの系譜を感じさせる。

**4 脚部** 変形時には、膝を前方向に折りたたむ。これはメタスからの流れであり、Zガンダムとは異なる構造。脚部には、メインジェネレーターが搭載される。



## ウェイブ・ライダー形態

メタスの系譜を受け継ぐ変形でサブ・フライト・システムとしての運用も可能。また、バックパックの換装により様々な戦況に対応する。便宜上ウェイブ・ライダー形態と呼ばれるが、機能面としてはZガンダムのそれとは異なる。

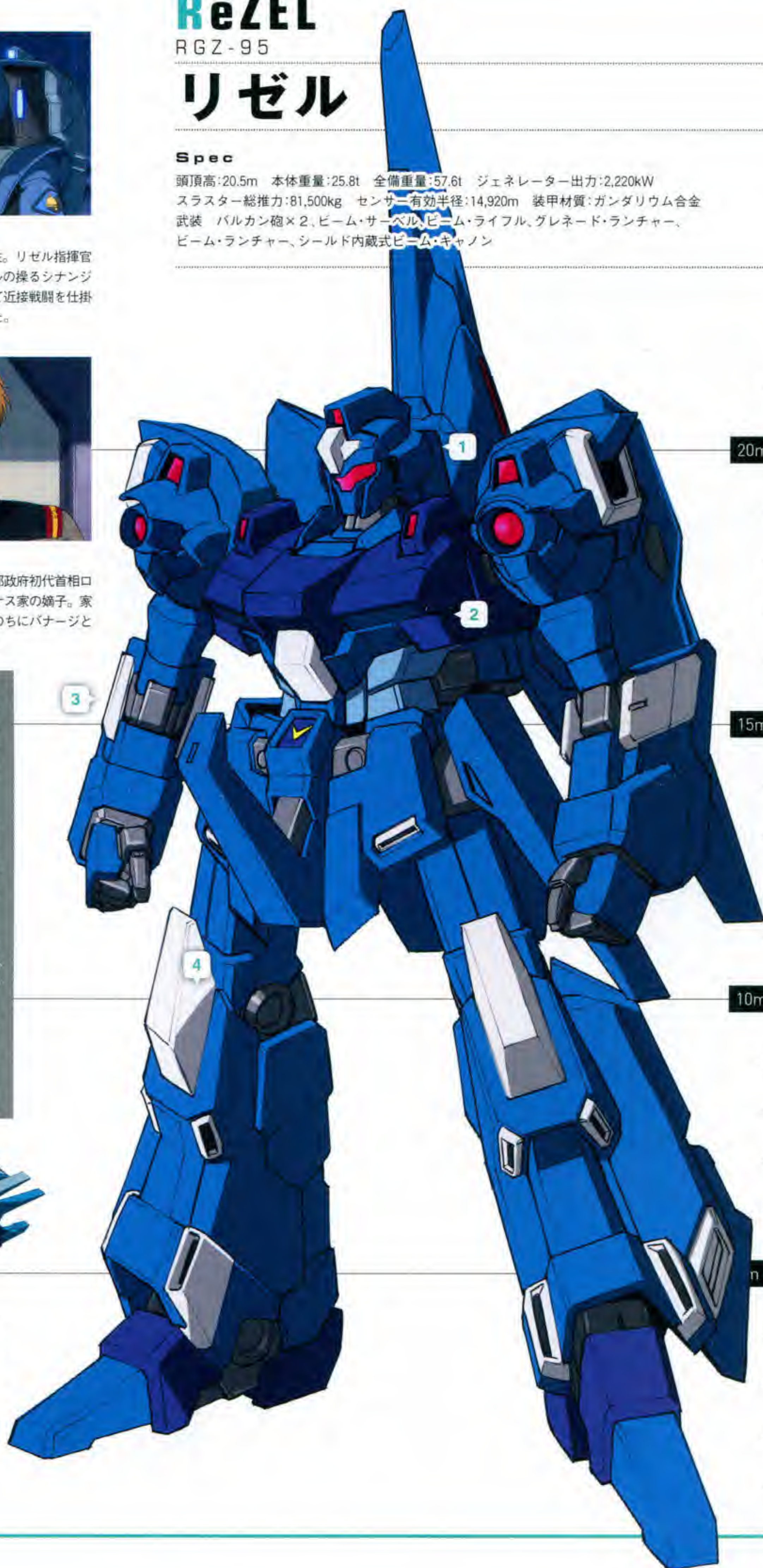
## ReZEL

RGZ-95

## リゼル

## Spec

頭頂高:20.5m 本体重量:25.8t 全備重量:57.6t ジェネレーター出力:2,220kW  
スラスター総推力:81,500kg センサー有効半径:14,920m 装甲材質:ガンダリウム合金  
武装 バルカン砲×2、ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、グレネード・ランチャー、  
ビーム・ランチャー、シールド内蔵式ビーム・キャノン





## Zガンダムの量産化を目指し 可変を見直した再設計機

グリプス戦役期に活躍したMSZ-006 Zガンダムは、大気圏突入型可変MSというコンセプトながら、ウェイブ・ライダー形態を活用した地上(航空)での運用性、優れた対MS戦能力を持つ優秀機だった。だが、複雑な可変機構に伴う製造工程のコスト高、整備性や運用面などの問題から、時代を代表する主力機にはならなかった。

また第二次ネオ・ジオン戦争後の軍縮の流れから、MS開発の流れは極端な専門性を持たせるより、基礎性能を高め、あらゆる任務に対応する方向、つまり高レベルの汎用性の保持へと舵

が切られていった。たとえば可変型の高機動(MA)形態への変形機能も、ベース・ジャバーなどのサブ・フライト・システム(SFS)を活用する案で代替が可能であったのだ。

RGZ-95リゼルIIリファイン・ゼータ・ガンダム・エスコート・リーダー(Refine Zeta Gundam Escort Leader)は、こうした軍縮の波に逆らうように登場した可変MSである。名称どおり、リゼルは、Zガンダムのある意味、再設計機である。開発コンセプトのベースは、Zガンダムの発展機であるMSZ-008ZII。可変機構にMSA-005メタスと同系統の方式を採用することで機構を簡略化した機体である。これに数種類の換

装式バックパックを用意し、Zガンダムのような活躍の場を選ばないフレキシブルな運用にも対応可能とした。結局、2つの異なる能力を同時に使う局面などは、ほとんどないであろうから、合理的な設計方針といえる。

さらに主要パーツの多くを同時期の主力機、RGM-89ジェガンと共通化することで、生産、運用面での効率化を図っている。こうした取り組みが功を奏し、脱可変機IIリゼルの量産化は実現。宇宙世紀0096年には、ロンド・ベルなど一部の部隊に配備された。本機が宇宙世紀0090年代に生き残れた背景は、「特定の目的に特化した機体は、ある程度あったほうが効率的」ということだろう。この時代、ほ

とんどの場面で可変機は必要ないだろうが、軍縮の時代は、戦力が少ないゆえに即応性が必要な部隊にはある程度必須であった。スピードがあり、強力で、かつ時としてはSFSとして活用できる機体は、結果的に部隊の効率的運用に貢献するのだ。

リゼルの配備により、迅速な作戦行動が可能となり、さらにSFSの所有数を減らすことで母艦内の余裕が増し、より戦力を収納できる。これにより効率的かつ柔軟な運用が可能となったといえるだろう。そうした意味では、相応部隊であるロンド・ベル隊や、エリート部隊である「ゼネラル・レビル」の搭載機に本機が選定されたのは、当然のことだろう。

### Variation バリエーション

#### RGZ-95C リゼル隊長機

##### Spec

リゼル(指揮官機/C型)  
頭頂高:20.5m  
本体重量:28.1t  
全備重量:62.8t  
ジェネレーター出力:  
2,220kW  
スラスター推力:85,400kg  
センサー有効半径:14,920m  
装甲材質:ガンダリウム合金  
武装:バルカン砲×2、  
ビーム・サーベル、  
グレネード・ランチャー、  
ビーム・ランチャー、他

一般兵でも扱えるようにリミッターを設けた一般機とは異なり、RGZ-95Cではスラスターの出力を再調整、機体への負荷を考慮してフレーム補強などが行われ、本来の機動性を発揮。背面ユニットは大気圏内にも対応するウイングユニットに換装。メガ・ビーム・ランチャーを装備する。

#### RGZ-95C

##### リゼルC型 ディフェンサーαユニット

ディフェンサーユニットは、他機体との連携を考慮したリゼルを、単体での機能向上に主眼を置いた装備である。αユニットは主に近接・中距離での戦闘をメインとした広域拡散型に特化したユニットで、マイクロ・ミサイルを格納したコンテナと、ハイパー・ビーム・サーベルを装備している。なおハイパー・ビーム・サーベルからはビーム砲としての機能は省略された。

#### RGZ-95C

##### リゼルC型 ディフェンサーβユニット

ディフェンサーユニットの中でも中・長距離用の一点集中型として開発されたユニット。ジェネレーターが増設されたことで、ビーム兵器の効率化がなされ、バインダー内部にビーム・キャノンを搭載するほか、メガ・ビーム・ランチャーを2門装備できるなど、火力に特化した仕様となっている。なおサブ・フライト・システム用のMSグリップは、a/bとも省略された。





## Pilot File

## 主なパイロット



## リディ・マーセナス

ロンド・ベル隊のMSパイロット。当初はリゼルに搭乗していたが、パラオ攻略戦以降はガルダ機上で本機を失うまで搭乗していた。



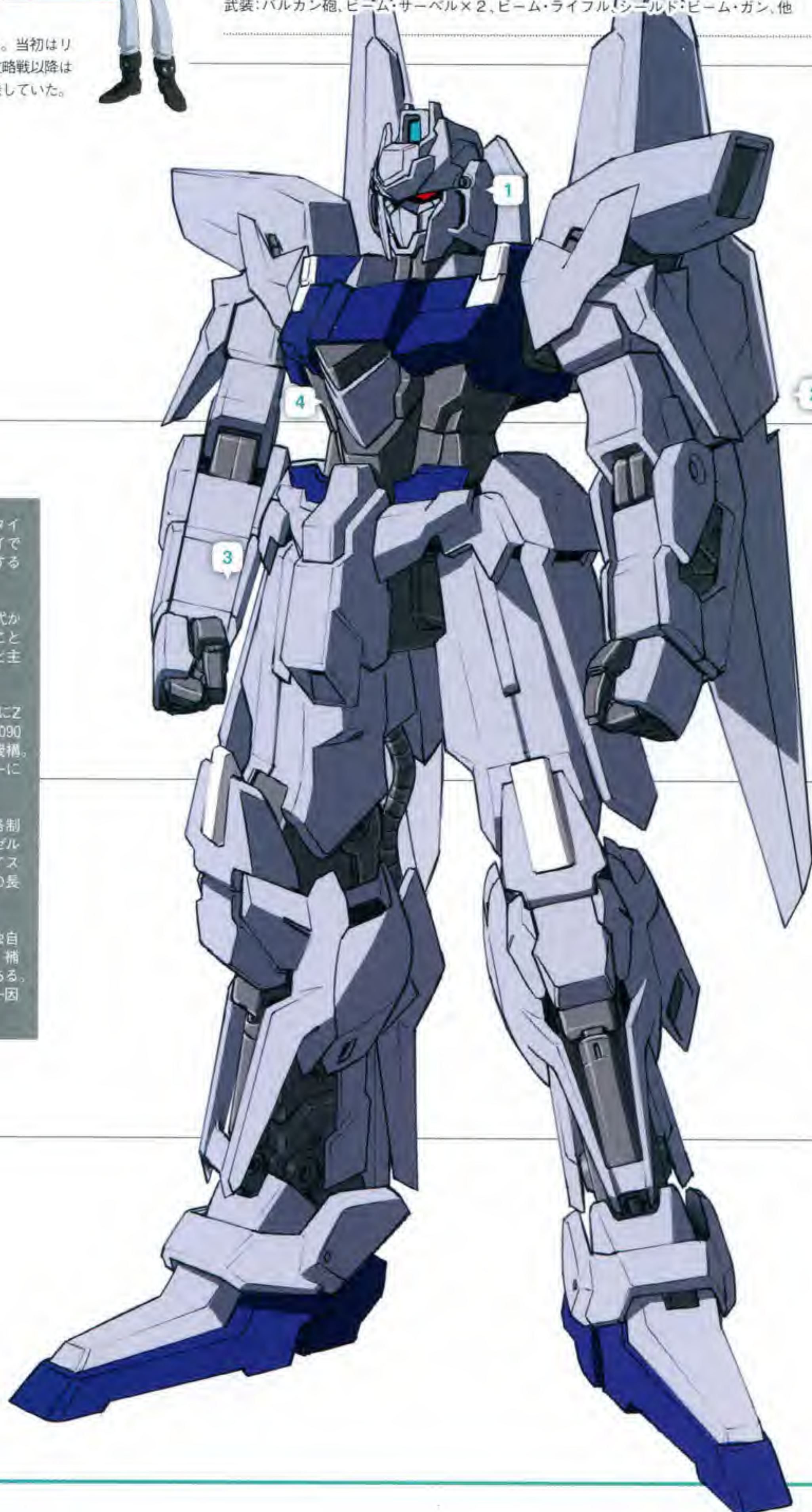
## DELTA PLUS

MSN-001A1

## デルタプラス

## Spec

頭頂高:19.6m 本体重量:27.2t 全備重量60.8t ジェネレーター出力:2,360kW  
スラスター推力:92,400kg センサー有効半径:16,200m 装甲材質:ガンダリウム合金  
武装:バルカン砲、ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、シールド・ビーム・ガン、他



20m

15m

10m

5m

1 頭部 表面上はゴーグルタイプだが、実際にはデュアルアイである。デルタガンダムを基とするガンダムタイプらしい部分。

2 ウイング・バインダー 百式から連なる「δ」の系譜であることを示す。AMBAC用デバイスと主翼を兼ね、1G下の飛行も可能。

3 可変機構 その構造は実際にZガンダムと近い。宇宙世紀0090年代としても、やや複雑な機構。それだけにウェーブ・ライダーにおける性能や完成度は高い。

4 コックピット 搭載OSや各制御システムは、最新鋭機のリゼルと比べて古い（インターフェイスにも表れている）。開発期間の長さが陳腐化を呼んだといえる。

5 機体構成 試作機ゆえに独自規格のパーツも使われており、補修パーツの調達などには難がある。ロンド・ベル隊所属となった一因はこの特殊性にある。





### ビーム・ライフル

リゼルの使用しているビーム・ライフルをそのまま装備。ウェイブ・ライダー形態でもきちんと機体にマウントできる設計となっている。



### シールド

ビーム・ガンとグレネード・ランチャーを内蔵したシールド。実質的にはウェイブ・ライダー時の機首兼武装キャリアとして機能した。

### ウェイブ・ライダー形態



リゼルなどに比べ前面投影面積の小さい、「薄い」形状から、空力特性も良好で大気圏内の運動性は高いと思われる。機体上面に他のMSを乗せて飛行できる。ウィング・バイダーのサイズや機首も大きく、Zガンダムのウェイブ・ライダーに比べて大柄。ビーム・ライフルはウィング・バイダーのハードポイントにマウントする。

### PICK UP!



宇宙世紀0090年頃に完成したデルタプラスは、その後にロンド・ベル隊のネェル・アーガマへ配属となった。『袖付き』との戦闘で状況が動いたことや、ロンド・ベルにはリゼルという新鋭可変MSがあり、可変機の扱いに習熟したパイロットや整備員がいたことなどがその理由とみられる。

また、同隊は一種の独立部隊で、単独で様々なケースに対応しなければならない点も、汎用性の高い本機が役に立つ、と判断されたのだろう。



量産を前提としてはいたが、デルタプラスに使用されているパーツ規格は他の機体と共通性がないものが多かったとされる。最初からジェガンと共用すべく設計されていたリゼルと比べると、こういった部分でも選定理由上は不利であった。これは機体の問題というよりは配備プラン全体の問題であり、デルタプラスに非はないのだが……。

また、このパーツの問題はネェル・アーガマに配備された理由の一つでもあろう。

## デルタガンダムの系譜を新たに再現する意味は？

アナハイム・エレクトロニクス(AE)社とエウーゴによるMS開発計画「Z計画」は、ムーバブル・フレーム関連技術の未成熟により当初難航した部分があった。グリプス戦役で活躍したMSN・00100百式も本来は「Z計画」の一環である可変機(デルタガンダム)として開発される予定だったが、この技術的難点によって非可変機として設計変更された経緯を持つ。

デルタプラスは、百式を計画本来の可変MSに近い機体として再設計したMSである。開発開始の時期は定かではないが完成したのは宇宙世紀0090年であり、エンジンアライングの水準は第二次ネオ・ジオン戦争時のMSと同等以上と思われる。開発時期的にMSZ・006Zガンダムの成功を経ているものの、背中にウィング・バイダーを採用しているのは、この時代でもウィング・バイナー方式に優れた部分を見出していたため、もしくは何らかのメリットがあったのだろう。

機体の特質としては、ジェネレーター出力やスラスター推力、武装といったスペック面で突出したものはない。しかしウェイブ・ライダーでは、オプションなしの単独による大気圏突入能力を持ち、1G下での通常飛行が可能など、Zガンダムに匹敵する能力が付与されている(いわばウィング・バイナー仕様のZガンダムである)。

こうした機能は元の「Z計画」における原型機、MSN・001デルタプラスの仕様を忠実に再現したとみられるが、Zガンダム以後に企画された可変機は、MSZ・006・A1/C1ZプラスやMSZ・008ZIIなど、Zガンダムの持つ能力(飛行能力、大気圏再突入など)を分解、取捨選択し、なるべく低いコストで必要とされる能力だけを選択した機体が多く、本機のようなフル装備仕様は珍しい。

このようにデルタプラスは、Zガンダムと同等の能力を持つ可変機として、アップデイトした技術を盛り込みながらも、低コストで製造するためのテストベッドとして開発されたといえる。

そこには当然、連邦軍の悲願であった可変機の量産および実戦配備が視野に含まれていたはずだ。

しかし、結局のところ本機が量産化されることはなく、より柔軟性とコスト面を意識したRGZ・95リゼルが量産可変機として選定された。本機のような高性能なマルチロール可変機というコンセプトは、宇宙世紀0090年代においては、すでに主流とは成り得なかったということである。

本機のデータを元に開発された系列機のMSN・001Xガンダムデルタカイ(別項77ページにて解説)が第一次ネオ・ジオン戦争期の機体のような「恐竜的」筋道を辿ることになったのは、ある意味必然だったのかもしれない。





# Re-GZ CUSTOM

RGZ-91B

## リ・ガズィ・カスタム

### Spec

頭頂高:20.9m 本体重量:29.8t

装甲材質:ガンダリウム合金

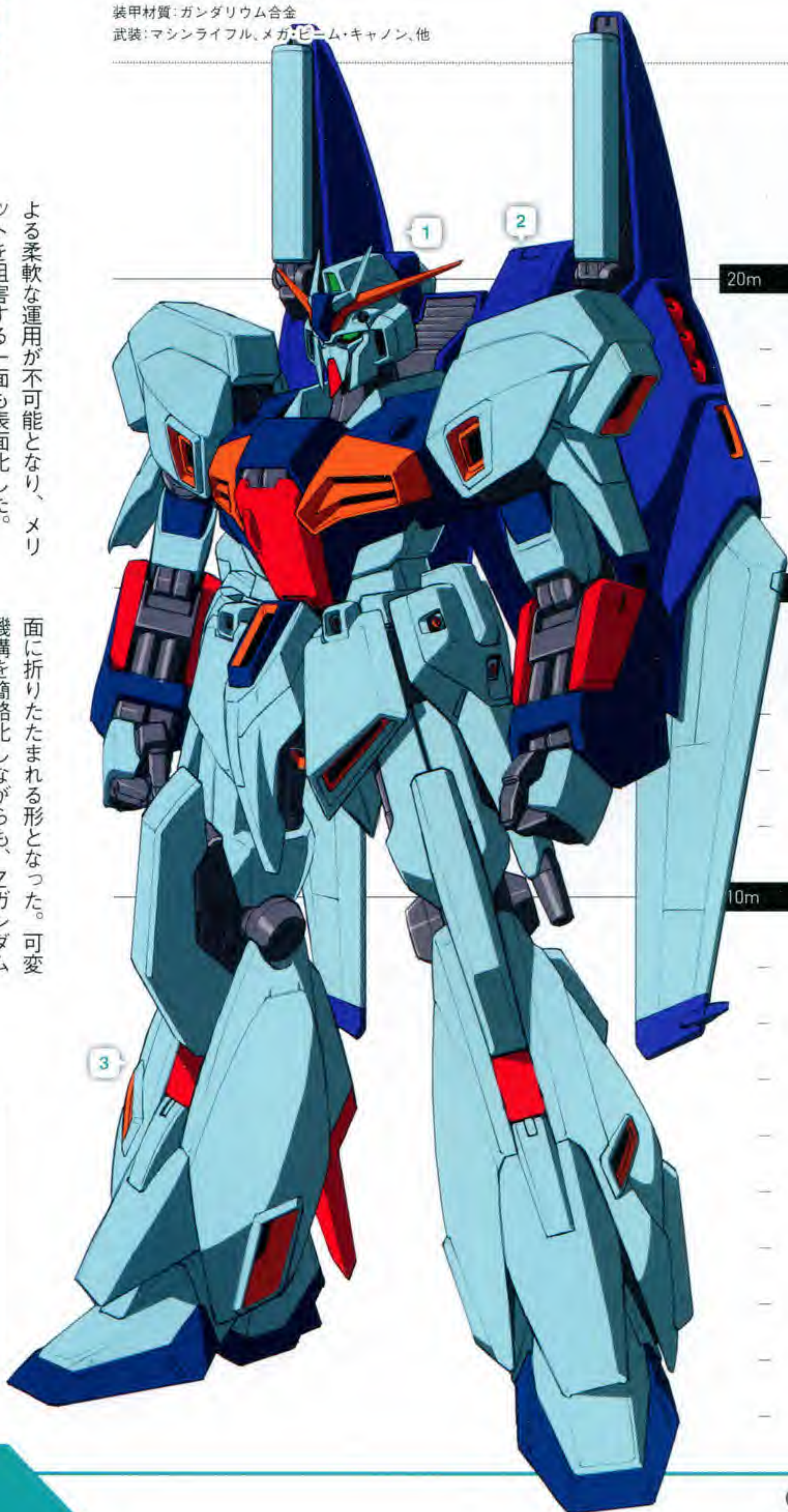
武装:マシンライフル、メガ・ビーム・キャノン、他

### 簡易可変機から 完全可変MSへ先祖帰り

可変構造自体を切り離し、MSZ-006 Zガンダムの再設計を行ったRGZ-91リ・ガズィ。外部ユニットBWS（バック・ウエポン・システム）に機能の多くを集約し、複雑な可変機構を最低限にとどめ、Z系のメリットを活かす準可変機といえた。だが、結果として他の可変機のように、変形に

よる柔軟な運用が不可能となり、メリットを阻害する一面も表面化した。これは、こと臨機応変な対応が求められる戦況では制約も多かった。第二次ネオ・ジオン戦争において、アムロがZガンダムを欲した点も機体のフレキシビリティを重要視したからだろう。こうした状況を受け、リ・ガズィを可変機として再設計したのがRGZ-91Sリ・ガズィカスタムである。特徴であるBWSは小型化され、背

面に折りたたまれる形となった。可変機構を簡略化しながらも、Zガンダムのコンセプトに回帰しようとしたわけである。武装の大口徑ビーム・キャノンなどの大出力火器は維持、BWSの回収も不要となり、リ・ガズィのデメリットを排除することに成功した。当初はアムロ専用機として開発が進められていたが、RX-93 νガンダムが優先され、計画は凍結されたという。



①頭部 Vアンテナを採用。頭頂部に2本のアンテナを持つリ・ガズィとは異なり、よりガンダムタイプに近いフェイスとなった。

②BWS 機首部分は背中に折りたたまれる形で収納されている。先端部には、リ・ガズィと同様、大口徑ビーム・キャノンが装備されている。

③脚部 リ・ガズィの面影を色濃く残す。可変MSとはいえ、システムは簡略化されており、本体の基本構造には大きな影響を及ぼしていない。





# GUNDAM DELTA KAI

MSN-001X

## ガンダムデルタカイ

### Spec

頭頂高:19.6m 本体重量:28.0t 全備重量:68.6t ジェネレーター出力:3,520kW  
スラスター総推力:101,500kg センサー有効半径:16,200m 装甲材質:ガンダリウム合金  
武装:ビーム・サーベル×2、ロング・メガ・バスター、プロト・フィン・ファンネル×2、他

### 尖ったコンセプトの 新鋭可変モビルスーツ

MSN-001A1デルタプラスの運用データを用いて開発された可変MS。ロールアウトは宇宙世紀0094年でニュータイプ用兵装などを備え、それら特殊機能の実証を目的とした試作実験機といえる。

装備類の多くは、火力面の増強に注力され、RX-93νガンダムのフィ

ン・ファンネルの試作型の、プロト・フィン・ファンネルに、ウェポン・ラック兼用シールドにマウントされたハイ・メガ・キャノン。大口径のロング・メガ・バスターなどを備える(ロング・メガ・バスターは本来、原型機のデルタプラスに採用されるはずだった)。さらに特殊デバイスの「ナイトロ・r・o(ナイトロ)」という新型のサイコミュ装置を搭載する。これは一般的なパイロットにもニュータイプ同様の能

力を付与し、本機の機動性や大火力を有効運用するためのもの。だが実質的には搭乗者を強制的に強化人間化する装置という恐ろしい側面も持っている。このように本機は非常に攻撃的な機体であり、装備類も宇宙世紀0080年代末に逆戻りしたかのようだ。なぜそんな本機が企画されたのか詳細は不明だが、シャアの反乱(第二次ネオ・ジオン戦争)の混乱が、その一因としてあるのかもしれない。

### ウェイブ・ライダー形態



基本的な可変構造はデルタプラスと変わらないが、機体の主翼を兼ねるウイング・バインダーにはプロト・フィン・ファンネルがマウントされている。形状面で見ると、空中での機動性はデルタプラスの方が高そうだ。

1 プロト・フィン・ファンネル/試作型(ジェネレーター内蔵式)サイコミュ兵器。ナイトロシステムと合わせ、一般兵でも扱える。

2 頭部。形状はこれまでのデルタ系と異なり、明確にガンダムタイプを意識した造形だ。

3 ハイ・メガ・キャノン本体ではなくシールドにマウント。ZZガンダムに比べ出力は約45%に抑えられているが、連射が可能。





# DELTA GUNDAM

MSN-001

## デルタガンダム

### Spec

武装:60mmバルカン砲×2、ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、他

ペーパープランで終わった  
幻の可変型ガンダム

グリプス戦役期「Z計画」のもと、ムーバブル・フレームを利用した可変MSの開発に注力していたアナハイム・エレクトロニクス（A.E.社）が企画したガンダムタイプ。

エウーゴが鹵獲したRX-178ガンダム Mk-II のムーバブル・フレームの技術解析からA.E.社の可変機開発



技術は進歩したが、それで可変機をただちに製造できるわけではなかった。MSN-00100百式はそうした背景から、可変機構をオミットして生み出された性能検証用のMSだ。そんな百式の開発コード名が「デルタガンダム」であり、本機は本来の百式の姿（すなわち可変MS）である。ただし実機はなく、データのみの存在だ。

当時のシミュレーションで、変形時の機体フレームの剛性不足が発覚、こ

れが克服できずに本機の計画は頓挫した。しかし開発に携わったエンジニアによると、スペック面ではMSZ-006Zガンダムと遜色ない機体だったという。

実際、このデータから百式をはじめ、コードネームを受け継ぐMSN-001A1デルタプラスやMSN-001Xガンダムデルタカイといった機体が生み出されたことから、その素性は優れていたのだろう。

4 可変機構 詳細は明らかではないが、シミュレーション上のデータではフレーム剛性が足りず、冶金技術や構造解析技術・最適化が不十分だった。

### ウェイブ・ライダー形態



シールドを機首として使う変形機構や「ウェイブ・ライダー」という呼び名など、その後Zガンダムにコンセプトが引き継がれたと思われる点が多い。単体での大気圏突入能力を持つかは疑問もある。

1 頭部 「ガンダム」という名称だが、V字アンテナは小さく目立たない。本体にまつわる諸元については謎も多い。

2 背部 リック・ディアスや百式と同じく、MS形態時の姿勢制御にバインダーを用いている。ウェイブ・ライダーでは主翼として機能する。

3 ボディ 機体色は金色とされ、百式同様の耐ビーム・コーティング用のエマルジョン塗装が施されている。





# DELTA GUNDAM II

MSN-001-2

## デルタガンダム弐号機

### Spec

武装:60mmバールカン砲×2、ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、他

### 整備性も考慮した 実戦的デルタガンダム!?

データ先行で開発が進められていたものの、その過程におけるシミュレーションにより、フレーム剛性不足が判明。設計変更をされたのがMSN・001デルタガンダムの2号機だ。デルタガンダムと同じくシミュレーション上の機体で、実際に製造された可能性は低いとみられる。

機体の詳細は不明だが、本機は「Z計画」にて開発された機体（RMS・009リック・ディアスやMSZ・006Zガンダムなど）と、パーツの互換性を持たせているのが特徴だ。とりわけ計画時は可変MSのコスト高や整備性の悪さが取り沙汰されており、そうした部分の解消も目指していたと思われる。計画的には後発であるZガンダムとの部品共有が意識されていることから、ムーバブル・フレーム関連の

技術情報入手後、これまでの問題点や、様々な部分のアップデートがなされたのかもしれない。

兄弟機のデルタガンダムとの明確な相違は、全身、赤のカラーリングで、かの「赤い彗星」を彷彿とさせる。もし本機が実際に製造され、クワトロ・バジーナ（シャア・アズナブル）が百式から乗り換えていたら、後の歴史は変わっていたかもしれない。そう思わせてしまう機体である。

①頭部 マスクなどは基本的にデルタガンダムと同じ。メインのセンサーはデュアルセンサーのツインアイ。

②可変機構 一部軽量化が図られているというが、データが主体といえる本機の場合、デルタガンダム同様にその全貌は不明である。

③ボディ 塗装は赤系のカラーリングが施される。効果としては、百式やデルタガンダムと同じくビーム・コーティングとしての役割を持つ。







## U.C.0150年代の

# 可変MS事情

グリプス戦役から世に出てきたTMSやTMAなどとも呼ばれる可変機の数々は、わずか十数年で姿を消してしまった。しかし、それから半世紀以上が経過した宇宙世紀0150年代になると再び姿を表した。これは一体どういう動きであったのだろうか？当時の状況などから検証してみよう。

## モビルスーツの技術革命・小型化

宇宙世紀のモビルスーツの開発史において、もっとも革命的な出来事、それはモビルスーツの小型化だろう。18メートル級からはじまったモビルスーツは、周辺技術の成長、発展を背景に、著しい性能向上を果たし、機能の増加により20年程度で22〜3メートルと、機体サイズ拡大の一途を辿った。ジェネレーター出力、スラスター推力は4倍前後にも達し、一方で重量は2倍以下程度の増加で済んでいた。すなわち、出力・推力が4倍だが、実質的にはそれ以上の性能を獲得するに至っ

たということだ。

宇宙世紀0090年代当時より、D・50Cロトシリーズなど、主にコロニー内部での対人運用を主軸に想定した、15メートル級の特殊任務用モビルスーツの開発は行われていたが、絶対的な性能は、フル規格の機体には劣るものであった。

つまり、小型モビルスーツの主力化というのは、前者のスタンダードなモビルスーツの基礎性能の向上と、後者の小型特殊機たる各モビルスーツの統合ということだ。これは、言葉を変えれば、主力モビルスーツのジェネレーターやスラスターの大きさが、補機類を含めて小型機に収まるほどダウンサ

## ベスパの主な可変MS

### ZM-S09G トムリアット



**Spec** 頭頂高:15.0m  
本体重量:8.6t  
全備重量:20.7t  
ジェネレーター出力:5,440kW  
スラスター総推力:36,940kg  
装甲材質:チタン合金  
ネオセラミック複合材  
アポジモーター数:29  
武装:ビーム・トマホーク×2、  
ビーム・ライフル、ガトリング・ガン、  
4連装マルチミサイル・ポッド×2、他  
備考:ビーム・ローター装備機

### さらなる改良、発展を進める

#### 派生機

#### ZM-S08GS ゾロ改



#### ZM-S08G ゾロ クロノクル専用機



地球圏におけるザンスカール帝国（ベスパ）の主力機といえるゾロには派生機も多い。クロノクル専用機は各部に改修を施したパーソナルカスタム機だ。ゾロ改は頭部センサー類などが換装されている。

### ZM-S08G ゾロ



**Spec** 頭頂高:14.8m  
本体重量:8.9t  
全備重量:21.2t  
ジェネレーター出力:5,120kW  
スラスター総推力:39,040kg  
装甲材質:チタン合金  
ネオセラミック複合材  
アポジモーター数:30  
武装:ビーム・ガン兼用ビーム・  
サーベル×2、ビーム・ライフル、  
ビーム・バズーカ、  
対地爆雷コンテナ、他  
備考:ビーム・ローター装備機



イジングを果たしたということだ。これは主力モビルスーツに搭載する機器が、パフォーマンスの向上と効率化、それに加えて軽量化を追求した結果、小型モビルスーツに収まる大きさになったということだろう。

そして、この小型モビルスーツに通常機と同等のジェネレーターを搭載することの副産物として、機体の大幅な軽量化が可能となった。それは頭頂高にして、わずか3〜6メートルの差にもかかわらず、全備重量となると20トン程度か、それ以下の差になった。

それは宇宙世紀0090年代〜0100年代初頭の地球連邦軍の主力機であり、登場時は革新的軽量機であったRGM-86ジェガンの半分程度の重量であり、出力は同等という凄まじいものだった。

こうした状況も手伝って、宇宙空間における可変機の需要はほぼなくなったといっていだらう。何しろ、究極的な空間機動力を獲得したモビルスーツにとって、可変構造の導入による機動性向上など、その手間に比して、あまり意味をなさなくなったのだらう。

一方、地上ではこうした小型化の機動力向上策が、宇宙より効果を挙げ難かったが、こちらは宇宙世紀0100年代前半の、「平和な時代」には、それほど需要自体がなかったと考えられる。つまり、モビルスーツの性能向上

に、従来システムのコンセプトを継続するので事足りていたということだ。

しかし、それが動き出すのは、宇宙世紀0150年代、地球に対しその野望をみせたコロニー国家、ザンスカール帝国とそれに対抗する組織、リガ・ミリティアの戦いである「ザンスカル戦争」に於いてであった。

## 飛行モビルスーツ時代の可変モビルスーツ・ゾロ

この時代では、大型艦艇などにしか搭載できなかった飛翔装置、ミノフスキー・クラフトが簡易ながら、モビルスーツに搭載できるほどに小型化されていた。そうした装置は「ミノフスキー・フライト」と呼ばれ、実用化が進み、単機で飛行可能なモビルスーツが



**ZMT-D15M**  
ガルグイユ



**Spec** 頭頂高:14.2m  
本体重量:9.8t  
全備重量:26.2t  
ジェネレータ出力:5,420kW  
スラスター総推力:60,260kg  
装甲材質:チタン合金ネオセラミック複合材  
アポジモーター数:6  
武装:ショット・クロー、ビーム・サーベル×2、腕部内蔵式ビーム・ガン×2、背部大型ミサイル、背部3連魚雷ポッド×2、ビーム・ライフル

**ZM-D11S**  
アビゴル



**Spec** 頭頂高:22.6m  
本体重量:18.4t  
全備重量:45.3t  
ジェネレータ出力:7,340kW  
スラスター総推力:185,740kg  
装甲材質:ハイチタン合金  
ネオセラミック複合材  
アポジモーター数:16  
武装:頭部ビーム・キャノン、ビーム・カッター×3、ビーム・カタール×2、ビーム・サイズ×2、ビーム・ネット発生器×60

局地戦用機に改修

**ZM-S27G**  
ドムットリア



**Spec** 頭頂高:14.8m  
本体重量:8.2t  
全備重量:19.9t  
ジェネレータ出力:5,960kW  
スラスター総推力:75,820kg  
装甲材質:ハイチタン合金ネオセラミック複合材  
アポジモーター数:31  
武装:ショックバイト、ビーム・トマホーク×2、ビーム・ライフル、ビーム・バズーカ、4連マルチ・ポッド×2、他  
備考:ビーム・ローター装備機

後継機開発





一般化しつつあった。とはいえ完全にその時代が到来したわけではなく、サブ・フライト・システムであるセッターやアインライッドも使用されていた。

そして、コロニー国家であるザンスカール帝国は、地球侵攻を企図するに對して、従来とはまったく別の考えによるモビルスーツの飛行システムを考え出した。それは、当時一般的となっていたビームによる防衛装置、ビーム・シールドのビームを、棒状に伸ばして展開する「ビーム・ローター」の採用である。この棒状のビームを羽根（厳密な原理は異なるが）、すなわちローターとし、ヘリコプターのように使用するアイデアであった。

これは、モビルスーツによる新たな空戦の時代の到来であった。これは低速域において従来にない高機動戦が可能という代物で、ある意味、サブ・フライト・システムで代替するのが難しい優れたシステムだった。

その第1号がZM・S08Gゾロであった。この機体は可変モビルスーツであつただけでなく、合体式であり、上半身はヘリコプター型のトップ・ターミナルに、下半身は、いわば随伴武器キャリアのボトム・ターミナルとなつ

た。機体構成的には、第一次ネオ・ジオン戦争時にネオ・ジオンで運用されていたAMX・107バウにも通じるコンセプトといえる。

ゾロは、トップ・ターミナルだけでも戦闘が可能であり、効果的であつたものの、運用効率という面では難もあつた。そこで発展型の後継機ZM・S09Gトリムアットでは、分離合体機能をオミットしたものとなり、結果的に戦闘能力が大幅に向上している。そしてトリムアットはゾロベースであり、構造もそれに準じていた。そして、さらなる発展型のZM・S27Gドムットリアにおいて、可変機構は専用設計となり、完成の域に達した。

しかし、時代的に振り返ると革新的にみえたビーム・ローターも、他の優れた技術の登場に追いやられ主流から外れ、ドムットリア以降、ビーム・ローター搭載機は開発されていない。

### 事情が違つたりガ・ミリティアの可変モビルスーツ

一方で、ザンスカール帝国に抵抗する、リガ・ミリティアでも、ミノフスキーの開発は行われていた。LM312V04ヴィクトリーガンダムは、トップ・ターミナル、コア・ファイター、ボトム・ターミナルという3機構成であり、ZM・S08Gゾロよりも構成機数が1機増え

## リガ・ミリティアの主な可変MS

### LM314V21 V2ガンダム

V2コア・ファイター



V2トップ・ファイター



V2ボトム・ファイター



**Spec** 頭頂高:15.5m  
本体重量:11.5t  
全備重量:15.9t  
ジェネレータ出力:7,510kW  
スラスター総推力:66,790kg+  
ミノフスキー・ドライブ(計測不能)  
装甲材質:ガンダリウム合金  
スーパーセラミック複合材  
アポジモーター数:42  
武装:頭部バルカン砲×2、  
ビーム・サーベル×4、  
マルチプルランチャー付  
ビーム・ライフル、投擲型機雷、他  
備考:ビーム・シールド装備機

#### ●装備換装による派生機

LM314V23 V2バスターガンダム  
LM314V24 V2アサルトガンダム  
LM314V23/24 V2アサルトバスターガンダム

### LM312V04 ヴィクトリーガンダム

コア・ファイター



トップ・ファイター



ボトム・ファイター



**Spec** 頭頂高:15.2m  
本体重量:7.6t  
全備重量:17.7t  
ジェネレータ出力:4,780kW  
スラスター総推力:79,700kg  
装甲材質:ガンダリウム合金  
スーパーセラミック複合材  
アポジモーター数:34  
武装:頭部バルカン砲×2、  
ビーム・サーベル×4、  
ビーム・ライフル、  
メガ・ビーム・ライフル、他  
備考:ビーム・シールド装備機

#### ●装備換装による派生機

LM312V06 ヴィクトリーガンダムヘキサ  
LM312V04+SD-VB03A Vダッシュガンダム  
LM312V06+SD-VB03A Vダッシュガンダムヘキサ



こちらはゾロよりも高機動で高速寄りの航空機形態であるが、これは、擁する戦力が乏しいリガ・ミリティアの兵器稼働率を維持する、という側面もあり、上下どちらか、またはいずれかが損傷した後も、残ったパーツが戦力を維持できるという利点があった。

このように地上における宇宙世紀0150年代の可変モビルスーツは、宇宙世紀0080年代末〜宇宙世紀0090年代のように、変形における能力の付加というより、変形によって能力の拡大、もしくは維持を目論んだものといえる。それは、モビルスーツの 대기圏内の単体飛行が一般的になりつつある時代らしいといえるだろう。

一方で、宇宙に目を向けると、ザンスカール帝国のZM・D11Sアビゴルのように、グリプス戦役や第一次ネオ・ジオン戦争当時の可変モビルスーツ／モビルアーマーの要素を拡大したような機体も一部製造された。これは大きな22メートル級と、「小型化」ではない方向を模索した、モビルスーツの進化の一つの可能性であっただろう。モビルアーマー時は大火力、モビルス



ーツ時は格闘戦重視という、かつてのコンセプトを現代風に仕上げた機体といえる。

そして同機をベースにしながら宇宙と同じような性能が求められ、さらに特殊な状況下である水中用のZMT、D15Mガルグイユは、より状況に適した機体を目指していたといえる。

いずれにせよこのような旧時代式機は、ミノフスキー・ドライブを搭載しあらゆる領域で驚異的なパフォーマンスを見せたLM314V21 V2ガム・システムの登場で一気に陳腐化した。

その性能は、もはや変形という状況への最適化を必要としないほどであったのだから。

## 実は主力MSの多くが非可変機だった!

特にザンスカール帝国では、ゾロをはじめとした可変機より、タイヤ型サポートマシンのアインラッドや、ツインラッドの開発が盛んで、最終的にはMS本体に可変式アインラッドを装備する勢の入れようだ。戦艦にまでタイヤを備える陣営ゆえ、開発主軸ベクションがそもそも違うのだろう。

—連邦系主力MS—



ゾロアット

## Spec

頭頂高:14.5m 本体重量:8.2t 全備重量:19.8t  
ジェネレーター出力:5,280kW スラスター総推力:  
179,200kg 装甲材質:チタン合金ネオセラミ  
ック複合材 バッテリータンク数:39 武装:頭部  
バルカン砲×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・  
ライフル、5連装ビーム・ストリングス、他 備  
考:ビーム・シールド装備機



## ゲドラフ

## Spec

頭頂高:13.8m 本体重量:6.9t 全備重量:17.4t  
ジェネレーター出力:5,440kW スラスター総推  
力:60,910kg 装甲材質:チタン合金ネオセラミ  
ック複合材 アポジモーター数:31 武装:ビー  
ム・サーベル×2、ビーム・ライフル、アインラッ  
ド 備考:ビーム・シールド装備機



ブルツケング

## Spec

頭頂高:14.1m 本体重量:13.9t 全備重量:25.1t  
ジェネレーター出力:5,570kW スラスタ総推力:  
54,080kg アポジモーター数:15 装甲材質:  
ハイチランタン合金オセラムミック複合材 武装:  
ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、9連装ミ  
サイル・ランチャー、可変式アインラッド、他 備  
考:ビーム・シールド装備機



## ガンイージ

## Spec

頭頂高:14.9m 本体重量:  
7.6t 全備重量:18.6t ジ  
ェネレータ出力:4,820kW  
スラスタ総推力:  
81,840kg 装甲材質:ガン  
ダリウム合金スーパーセラ  
ミック複合材 アポジモ  
ーナ数:29 武装:頭部バル  
カン砲×2、2連マルチラ  
ンチャー×2、ビーム・サー  
ベル、ビーム・ライフル、ビ  
ーム・バズーカ、他 備考:  
ビーム・シールド装備機



ガンブラスター

## Spec

頭頂高:14.9m 本体重量:  
7.6t 全備重量:21.3t ジ  
ェネレーター出力:4,820kW  
スラスタ総推力:  
91,590kg 装甲材質:ガン  
ダリウム合金スーパーセラ  
ミック複合材 アポジマー  
タンク数:47 武装:頭部バル  
カン砲×2、2連マルチラ  
ンチャー×2、ビーム・サー  
ベル、ビーム・ライフル、ビ  
ーム・バズーカ、他 備考:  
ビーム・シールド装備機



## ジェムズガン

## Spec

頭頂高:14.7m 本体重量:  
7.1t 全備重量:16.3t ジェ  
ネレータ出力:3,860kW ス  
ラスタ総推力:66,810kg  
装甲材質:ガンダリウム合金  
スーパーセラミック複合材  
アポジモーター数:16 武  
装:頭部バルカン砲×2、ビ  
ーム・サーベル×2、ビ  
ーム・ライフル 備考:ビーム  
・シールド装備機



## ジャベリン

## Spec

頭頂高:14.5m 本体重量:  
8.1t 全備重量:16.5t ジェ  
ネレータ出力:3,980kW ス  
ラスタ一総推力:69,260kg  
装甲材質:ガンダリウム合金  
スーパーセラミック複合材  
アボジモーター数:18 武  
装:頭部バルカン砲×2、ビ  
ーム・サーベル×2、ビー  
ム・ライフル、ショット・ラ  
ンサー×2 備考:ビーム・シ  
ールド装備機



MSZ-006  
Zガンダム

VS

ORX-005  
ギャプラン

大気圏突入能力を駆使し降下してくるZガンダムを迎撃すべく、地上からスクランブルをかけるギャプラン。両者の設計コンセプトに沿ったこの戦いが起きたらどうなるか？



↑実際には降下するZガンダムを迎え撃つギャプランという戦いは見られず、大気圏内での空中戦が主であった。その場合は三次元的な運動性、速度ともに優れるZガンダムに分があった。



↑ギャプランはロケットのような性質のモビルスーツゆえか、ヤザンには「動きの硬いモビルスーツ」といわれた。戦闘機の行うドッグファイト的な戦闘はあまり得意ではない。

Zガンダム	スペック比較	ギャプラン
19.85m	頭頂高	25.2m
28.7t	本体重量	50.7t
62.3t	全備重量	94.2t
2,020kW	ジェネレーター出力	3,040kW
112,600kg	推力	183,000kg
14,000m	センサー有効半径	13,000m
頭部バルカン砲・ビーム・サーベル・ビーム・ライフル・ハイパー・メガ・ランチャー・グレネード・ランチャー	武装	ビーム・サーベル・ムーバブル・シールド・バインダー内蔵ビーム・ライフル

# THE 対決 MATCH UP

可変機と一括りにしても、そのコンセプトや能力は様々。もしそれら可変機が戦うことがあればどうなっていたのか!? 構成・文 星★馨介

## 一瞬にかける勝負 スペックは影響しない？

機体のスペックとしては、ジェネレーター出力はZガンダムの2020キロワットに対しギャプラン3040キロワットで、ギャプランが大勝している。推力もZガンダムが総推力11万2600キロ、ブースターを装着すれば24万3600キロでZガンダムの倍以上だ。反面、本体重量はギャプラン50・7トンと倍近い重さとなるため、重量比はZガンダムが有利だ。

両機の戦いは大気圏を突破してくるZガンダムに対し、ギャプランが超高速による高高度で迎撃に向かうという、かなり特殊な交戦形態が想定される。一般的なモビルスーツ同士の戦いほどスペック差が作用しない。

このような両機の特殊な戦いの場合、もっとも重要となるのがポジションだろう。有利なのはやはり下から迎撃する側のギャプランだろう。大気圏を降下してくるZガンダムのウェイブ・ライダーは、武装のマウント形状的に下方から向かってくるギャプランを迎撃することは難しいし、大気圏突入中に戦闘機動を行うにはかなりの困難を伴うはずである。

一方のギャプランとしては、Zガンダムがまったく対処できない体勢のう

ちに攻撃をしかることができれば、ワンサイドゲームが展開できるだろう。ギャプランのムーバブル・シールド・バインダーに内蔵されるビーム・ライフルの出力は3・0MWと充分な値だが、バランスを崩されたり耐熱コートの一部を損傷させるだけでZガンダム側には致命傷となる。

ただ、大気圏を突破されてしまうと今度はギャプランが不利となる。大気内でも熱核ジェット・エンジンで高い運動性を誇るZガンダムに対し、ギャプランはロケット推進が主体で速度はともかく複雑な機動は難しい。また、降下し続けるZガンダムを反転して追いかけるにしても、180度向きを変えて自身も下降する間にZガンダムはどんどん目標地点へ接近していく。そもそも、防衛網を突破されてしまった時点でギャプラン側としては「勝負に負けた」状態だ（これを補うために、中低高度も対応できる迎撃機としてアッシマーが存在している）。

降下してくるZガンダムと、大推力で上昇し迎撃するギャプランの勝負はその相対速度の高さゆえに一瞬で決まる。ギャプラン側はZガンダムのスキを逃さず一撃で仕留め、Zガンダムはなんとしても攻撃を回避しながら目標に向かって降下していかなければならない。非常に緊張感あふれるバトルが展開されることになるのだ。



## リゼルが採用されるのはある種の必然だった？

グリプス戦役におけるZガンダム  
成功以後、地球連邦軍では常に低コストで可変モビルスーツを導入したいという思惑が働いており、量産を前提とした可変モビルスーツ（の試作機）を多く開発してきた。しかし、そのどれもが決定打となることはなかった。

そんな状況において、宇宙世紀0090年代に入り2つの可変機が登場する。デルタプラスとリゼルだ。そのどちらも宇宙世紀0080年台末期のアナハイム・エレクトロニクス社製モビルスーツのような極端な性能ではなく、それなりの生産性を持ちながら必要十分な性能を備えた可変機として開発されたという特徴がある。

スペックを比較すると、ジェネレーター出力と推力は若干デルタプラスが優れる。重量は本体重量がデルタプラスのほうが少し重く、総重量もその差分程度の違いであり絶対的な差はない。また、武装や装備に関しては、リゼルのほうがオプションも豊富に用意されている。一方のデルタプラスはあくまで試験機であるため標準的なものしか持たないが、ある意味仕方がない面はある。

その他、世代的にはリゼルに近い（スターク）ジェガンが、ニュータイプ専

### MATCH no.2

MSN-001A1

#### ◁ デルタプラス

VS

RGZ-95

#### リゼル ▷

0090年代に登場した連邦軍の新鋭可変機であるデルタプラスとリゼル。果たして両者はどちらの方が「優れている」可変モビルスーツなのか。

デルタプラス	スペック比較	リゼル
19.6m	頭頂高	20.5m
27.2t	本体重量	25.8t
60.8t	全備重量	57.6t
2,360kW	ジェネレーター出力	2,220kW
92,400kg	推力	81,500kg
16,200m	センサー有効半径	14,920m
頭部バルカン砲／ ビーム・サーベル ／ビーム・ライフル ／シールドビーム ／ガン／グレネード	武装	頭部バルカン砲／ ビーム・ライフル ／ビーム・サーベル ／グレネード・ ランチャー／メガ ・ビーム・ラン チャー



↑本来ならハイエンド量産機となりうる可能性もあったデルタプラスではあるが、そうはならなかった。ジェスタ+サブ・フライト・システムがその役割を継いでいる。



↑人型ではジェガン、変形すればメタスと揶揄されたリゼルではあるが、それはある意味コンセプト通りである。絶対的な性能も決して低いわけではない。

用機であるクシャトリヤのファンネルに対処可能な能力を持つなど、アビオニクスや機体制御のソフトウェア的にはリゼルが最新鋭機としてデルタプラスより優れている可能性もある。デルタプラスはベースプランが「Z計画」ゆえにこれまたある種の古さがあっても仕方ない面はある。

以上を踏まえると、標準的な技量のパイロット同士が戦った場合、より最適化が進んだリゼルのほうが有利である。デルタプラスの能力を使い切れるエース同士ならハード的にやや優れるデルタプラスが有利かもしれないが、その差は大きくはなく、アビオニクスの世代差を超えるほどとは限らない。しかも、戦う状況（宇宙／重力下など）に応じて装備を適化させたリゼルなら、ハード的アドバンテージもなくなってしまう。デルタプラスが明らかに有利になるのはリゼルが想定していないような状況下で戦うケースだろうか。Zガンダムのな万能さを持つデルタプラスの特質が光るだろう。

しかし連邦軍が量産機として採用したのは、結局リゼルであった。当時の情勢的にそれほど高機能な可変機は必要ないし、搭乗するのは一般的なパイロットだ。扱いやすいベースを用意し、そこに必要なオプションを足していく、というリゼルのコンセプトの方が有意義と見られたのだろう。



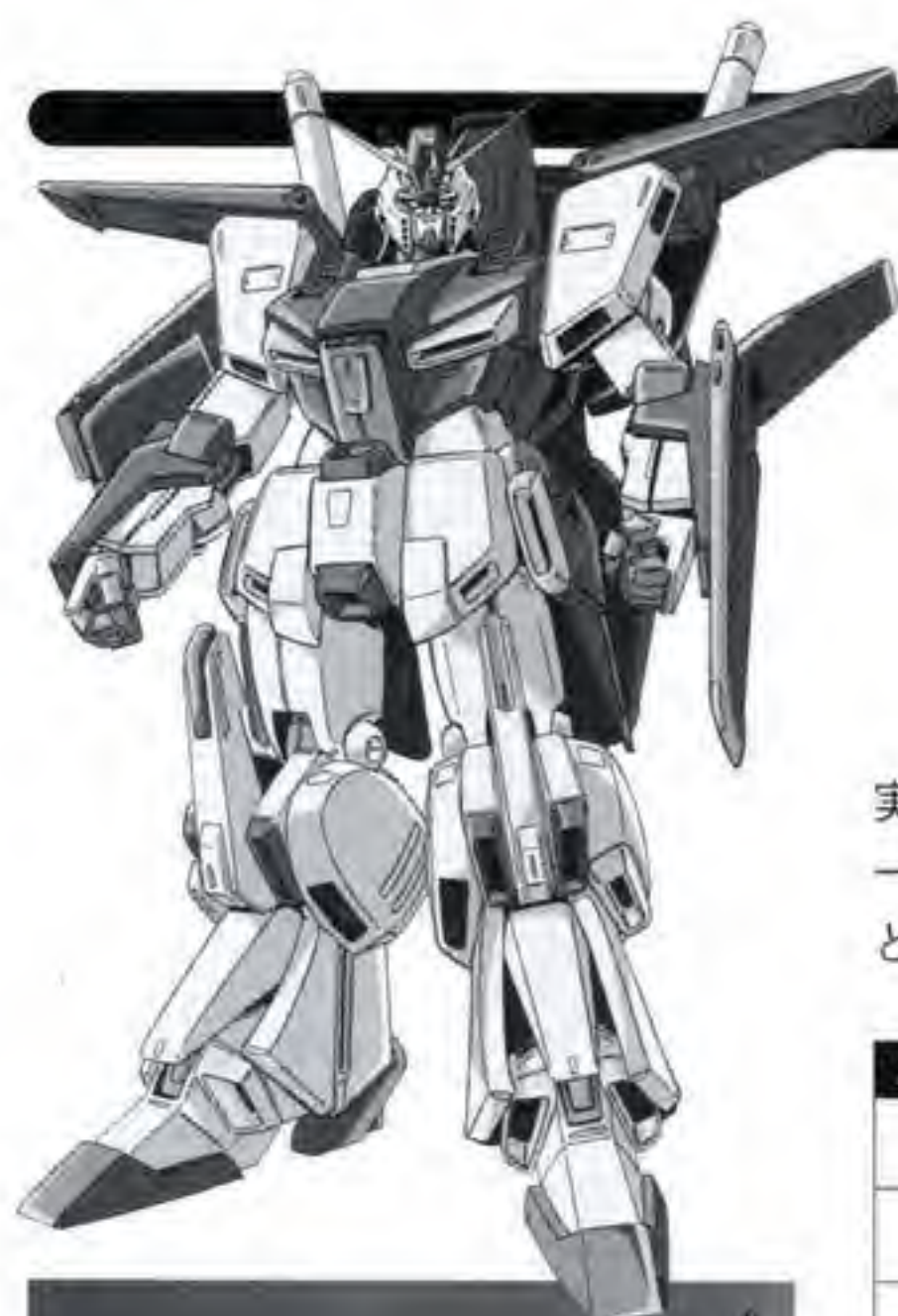
## 分離合体を活かすには バウは未熟だった

「Z計画」に基づき、当時の技術を注ぎ込み複雑な変形合体機構と強力な武装を両立させたZZガンダムと、一定の性能を保ちながらも量産を視野に置いて開発がなされたバウ。スペック面では、やはりZZガンダムがかなり優位にある。ジェネレーター出力は3倍の差があり、スラスタ推力もZZガンダムが優れる。武装に関しても火力という点でZZガンダムが圧倒的だ。生まれが違ふのだからある意味では当然だが……。

変形合体という点でも、ZZガンダムはコア・トップ、コア・ベース両機ともに有人機であり、分離状態でもとれる戦術は多い。コア・トップ、コア・ベースとともに搭載している武装も強力だ。

バウの変形合体機構がどのようなものであるかは明確ではないが、少なくとも試験機のパウ・ナッター（下半身パーツ）は無人機である。そう高度な戦術はとれず、通信方式次第では、ミノフスキー粒子を高濃度に散布されてしまうと無線操縦自体が、おぼつかない可能性もある。

カタログデータだけでみると、このようにバウが有利な点はほとんどない。しかし、実戦においてバウに勝ち目が



MATCH no.3

### Z-010 ZZガンダム

VS

AMX-107  
バウ▷

実は希少な存在である変形合体モビルスーツ。第一次ネオ・ジオン戦争期の希少な2機が戦ったらどうなる？

ZZガンダム	スペック比較	バウ
19.86m	頭頂高	22.05m
32.7t	本体重量	34.7t
68.4t	全備重量	67.5t
7,340kW	ジェネレーター出力	2,410kW
101,000kg	推力	75,040kg
16,200m	センサー有効半径	12,200m
ダブル・バルカン／ハイパー・ビーム・サーベル／ダブル・ビーム・ライフル／ハイ・メガ・キャノン／21連装ミサイル・ランチャー	武装	ビーム・ライフル／ビーム・サーベル／グレネード・ランチャー／ミサイル／メガ粒子砲内蔵シールド



↑第一次ネオ・ジオン戦争でアーガンによって用いられたZZガンダムは、比較的分離状態で運用されることも多かった。MSの頭数が足りないアーガンでは、それなりに有用だったようだ。



↑ZZガンダムとは対比的に、分離合体機構がほとんど使われなかったバウ。その後ネオ・ジオンでは分離合体MSは開発されておらず、概念的には失敗ととられた様子。

ないとは限らない。まず第一に、ZZガンダムはスペックを優先して開発されたフシがあり（後にフルアーマー、強化型へと改修されている）、そのため設計に無理をしている可能性が高い点だ。実戦においても何らかの不調からスペックを発揮しきれないシーンもあるはず。また、そもそもバウは量産機であるため、ZZガンダム1機に対し複数である、という戦法をとることができる。

さらに、ZZガンダムは変形合体機構が複雑で、その分合体プロセスも長い。戦闘中に合体することは非常に危険であり、バウにとっては付け入るスキとなる。反対にバウは合体が一瞬で完了するため、戦闘中でも（推奨はできないが）分離合体のチャンスはある。特に『袖付き』が改造していたバウのようにバウ・ナッターも有人化すれば、合体・分離を繰り返し変幻自在に戦うこともできるだろう。実際、『袖付き』仕様のバウは、この戦法をうまく用い、ネル・アーガンとそのモビルスーツ隊相手に善戦していた。

とはいえ、「複数であたる」「変形合体中をねらう」といったことは、まさに戦いのセオリー通りで、当たり前の戦法である。逆にいえば、そうでもしなければ戦いようのないZZガンダムは、それだけイレギュラーな存在、ともいえる。



## スベックは優れるが 対MS戦闘は不得手？

アクシズ（ネオ・ジオン）の可変量産機であるガザC。作業用機械を源流としながらも、グリップス戦役ではアクシズを支えた。

このガザCと世代の近い量産モビルスーツとなると、グリップス戦役初期にティターンズ、および連邦軍双方で用いられたハイザックや、アナハイム・エレクトロニクス社が開発してエウーゴが運用したネモといったところだろう（ネモと中身はほぼ変わらないと思われるティターンズのマラサイも間接的比較対象だ）。

カタログデータ上、意外にも一番優れているのはガザCである。スラスト・推力、ジェネレーター出力、センサー有効半径といった数値はどれもトップだ。もっとも、ネモとはそれほどの差はない。

装甲材もガンダリウム合金製と、当時冶金技術の進んでいたアクシズらしい豪華さだ。もっとも劣るのはやはりハイザックなのだが、そこまで後れをとっているわけではない。装甲材だけはこの3機の中で唯一のチタン合金系複合材となっている。

武装に関しては、主兵装の火力からナックル・バスターを装備するガザCが圧倒的となる。ネモはジムIIと同じ

### MATCH no.4

AMX-003

ガザC

VS

RMS-106

ハイザック

VS

MSA-003

ネモ



グリップス戦役で活躍した様々な量産モビルスーツ。それらの中での可変MS、ガザCの立ち位置を探る。汎用機の三つ巴戦の勝敗やいかに!?



◀エウーゴ（地球連邦）の当時の量産機には珍しくガンダリウム合金製の装甲をもつネモ。標準装備では若干火力が心もとないが、他の機体の火器類を用いれば解消も可能か？



◀ベースが一年戦争の名機ザクIIという出自を持つハイザック。グリップス戦役ではさすがに力不足だが、ランドセルや脚部のスラストによる運動性はなかなか侮れない。



◀グリップス戦役においてのガザCは、当時アクシズが保有する唯一の量産機。得意不得意がはっきりしているゆえに、自分の有利な立場・戦法がとれないと厳しい面も。

スペック比較	ガザC	ハイザック	ネモ
頭頂高	18.3m	18.0m	18.5m
本体重量	40.8t	38.7t	36.2t
全備重量	72.5t	59.6t	55.6t
ジェネレーター出力	1,720kW	1,428kW	1,620kW
推力	79,200kg	64,800kg	62,000kg
センサー有効半径	10,600m	8,900m	10,020m
武装	ビーム・サーベル／ナックル・バスター／ビーム・ガン	ビーム・サーベル／ザク・マシンガン改／ヒート・ホーク／三連装ミサイルポッド／ビーム・ライフル	頭部バルカン砲／ビーム・サーベル／ビーム・ライフル

ビーム・ライフルを装備するがこれは出力が低く、マラサイのビーム・ライフルでやっと標準的。ハイザックも基本的には同様だ（後期型になるとマラサイのビーム・ライフルを装備して戦ったこともある）。

ただ、これをもってガザCが3機の中でもっとも優れたモビルスーツである、とは断言できない。ガザCの能力はあくまでも集団による対艦戦闘が主眼で、対モビルスーツ戦闘が得意というわけではないからだ。

特に1対1での白兵戦による格闘戦となれば、元は作業用ゆえ、実力にも限界があり、ネモはおろかハイザックに対して遅れをとることも充分に考えられる。

機体重量の重さや、本体ジェネレーターと直結されるナックル・バスターの取り回しといった問題点が表面化してくるガザCは、推力の高さを活かして一撃離脱戦法をとるのが無難だが、重量の重さゆえに一度速度を落とすと再加速には時間がかかる。足を止めず、ネモの戦い方に付き合わないほうが無難だ。一番の良策は集団で密度を高めた強力な砲撃を会敵前に浴びせかけて一掃することだが、それを行うにはセンサー能力が足りない。

もしガザCのセンサー能力がさらに優れていたら、戦闘力はより高いものになっていただろう。



## 数値に現れない強さが 際立つハンブラビ

まずは両機のスペックだが、数値的にはメタスが若干有利だ。ジェネレーター出力、スラスタ推力、さらにはセンサー有効半径と様々な部分においてハンブラビを上回る。ジェネレーター出力の差はわずか100キロワットだが、推力はメタスが20%強高い。加えて全備重量、本体重量ともにメタスが軽く、機動性には差がある。

といっても、両機の性能ともグリップス戦役時のモビルスーツとしては、標準的な値（ハンブラビはむしろ低めの値だ）であるため、いわゆる「可変モビルスーツ」という言葉から連想されるような高スペック機であるわけではない。

ただ、ハンブラビの場合、機体サイズが特殊である。頭頂高は約19メートルだが、頭が尖った非常に長い形状のため、全体的なシルエットは普通のモビルスーツに比べ小型だ。これは慣性の影響の低減、被弾率の減少といったプラスの効果をもつ。その一方で小型になれば軽くなるはずの重量は標準的なため、装甲も見た目に反し厚い可能性も考えられる。対するメタスは、あくまで試験機を実戦投入したというレベルのものであり、機体には脆弱性も残る。

次いで武装面だが、ハンブラビは「海

### MATCH no.5

RX-139

◀ ハンブラビ

VS

MSA-005

メタス ▶

高スペック可変機が隆盛する中、コンパクトにまとめられたグリップス戦役時の二つの可変機。性能面では近似値といえる2機だが、戦場で対峙したら勝つのはどちらか？



↑歴戦のヤザンをして「得体のしれない力を感じる」と言わしめたハンブラビ。潜在的な戦闘力をカンで見分けたか。実際、ヤザンのハンブラビ隊は幾度もアーガン隊を追い詰めた。

ハンブラビ	スペック比較	メタス
19.9m	頭頂高	18.1m
34.6t	本体重量	27.8t
56.9t	全備重量	52.4t
1,540kW	ジェネレーター出力	1,640kW
59,800kg	推力	77,000kg
10,020m	センサー有効半径	11,300m
ビーム・サーベル 背部ビーム・ライフル テール・ランス フェーダー イン・ライフル 海ヘビ・クモの巢	武装	ビーム・サーベル アーム・ビーム・ガン



↑検証機ながらアーガン隊で運用され続けたメタス。しかし最前線で切り込み隊長を務める、といった使い方はあまりなされない。実戦ではヤザンのハンブラビに撃破されたことも。

ヘビ」や「クモの巢」という特殊な武装を持つ。これらは対モビルスーツ戦に特化した兵器で、海ヘビはワイヤーを相手に直接巻き付け、クモの巣では小隊編成で視認性の低いワイヤーをネット状にして張り、トラップとして用いる。いずれも、その効果は敵に電撃を与えて行動不能にするというものだ。Zガンダムや百式といったエース機や新鋭機も、ハンブラビのチームプレイによる海ヘビやクモの巣を用いた攻撃に対し、初見で対処するのは非常に困難であった。それに比べてメタスの武装の威力は平均的で、攻撃のバラエティには欠ける。

もし両機が戦った場合、スペック上には表れない数々の優位性からハンブラビが有利だろう。特に複数の連携プレーを挑んでくるハンブラビは非常に厄介な相手だ。メタスとしてはインファイトでハンブラビの戦法に付き合うことは絶対してはならない。

自身の優位性である機動性の高さを保ちつつ、ヒット&アウェイ戦法に徹するしかない。幸い、メタスのMA形態はスラスタび集中配置による推力重視の形状で、この戦法には適している。もっとも、ハンブラビはZガンダムに迫っていくくらいの加速力を見せたこともあり、侮れない。戦闘は「純戦闘型メタス」といえるリゼルに任せた方が無難だろう。



## 設計の無茶をかばいつつ 戦うことになる!?

サイコ・ガンダム Mk・II は、多数のビーム兵器による強大な火力と、サイコミュ兵装のレフレクター・ビットを駆使する、強化人間とサイコミュを用いてコントロールする移動要塞といったコンセプトだ。対して S ガンダムは、やはり強大な火力を備え、変形合体機構と豊富なオプション装備を駆使し、単体であらゆる戦局に対応するというコンセプトを持つ。ブースターユニットやインコムなど各種装備を追加した強化形態 Ex・S ガンダムは、ある種モビルスーツの常識を超えたスペックを誇る。

まさに最強の「盾対矛」といった趣のこの勝負。戦いは基本的には全身のメガ拡散ビーム砲とレフレクター・ビットで暇を与えぬように攻め続けるサイコ・ガンダム Mk・II と、その攻撃をかわしつつ様々な兵装で手傷を追わせ、隙あらばビーム・スマートガンの一撃を叩き込む S ガンダム、という構図になるだろう。

そこではビーム兵装をドライブするジェネレーターのスペックが重要になるが、これはやはり大きなゆえ設計に余裕のあるサイコ・ガンダム Mk・II が有利だ。さらにフィールド発生装置があり、ビーム兵器主体の S ガン

### MATCH no.6

MRX-010

## サイコ・ガンダム Mk-II

VS

MSA-0011

## Sガンダム

「恐竜的進化を遂げた」と表現される宇宙世紀 0080 年代末のモビルスーツ。その頂点ともいえるだろう両機が戦場で戦ったら、その結果はどうなるのか?

サイコ・ガンダム Mk-II	スペック比較	Sガンダム
39.98m	頭頂高	21.73m
187.8t	本体重量	69.24t
283.9t	全備重量	162.5t
19,760kW	ジェネレーター出力	7,180kW
244,420kg	推力	1,182,000kg
16,230m	センサー有効半径	18,800m
メガ拡散ビーム砲 メガ・ビーム砲 サイコミュ式ビーム・ソード レフレクター・ビット	武装	頭部バルカン砲 ビーム・サーベル インコム・ビーム・カノン ビーム・スマートガン



↑元の機体の頑強さとサイコミュの発揮が合わさればその防御力はかなりのもの。Sガンダムの猛攻でもそう安々と倒されはしないはずだ。しかしその能力はそのままパイロットへの負担になる。



↑当時の技術レベルを考えれば、全てにおいて無理をした設計バランスとなっている S ガンダム。スペック的には確かに圧倒的だが、実戦では御しがたい部分もあったことだろう。

ムは少々不利だ。もしこれが Ex・S ガンダムならば、双方フィールドバリアが形成できるため、状況が異なる。サイコ・ガンダム Mk・II にはバルカンなどの実体弾兵装がなく、ビーム・スマートガンのような決め手になる高威力兵器もないので、かなり手を焼くはずだ。しかし、Ex・S ガンダムも、どの程度のフィールドを維持、形成できるかは不明だ。

さらにビーム兵器との併用は機体のジェネレーターへの負担も高く、同時使用には疑問も残る。また、一発でも被弾すれば致命傷になりかねない Ex・S ガンダムに対し、サイズからくる耐久力の高さを有したサイコ・ガンダム Mk・II は、攻撃を凌ぎさえすれば勝機はある。

このように、速攻なら (Ex・) S ガンダム、持久戦はサイコ・ガンダム Mk・II に軍配が上がりそうだが、持久戦の場合、サイコ・ガンダム Mk・II のパイロットへの負担は問題がある。対する S ガンダムは 3 人で操縦する上、複雑な機体制御や火器管制などは人工知能の ALC E システムが補佐するので軽減される。

S ガンダムはダメージやジェネレーターといったハード面、サイコ・ガンダム Mk・II はパイロットというソフト面で、双方「爆弾」を抱えながらギリギリの戦いとなるだろう。



# 可変機の 武装 Armament

## ▽ビーム兵器

大型で高出力・高収束率の  
ビーム・ライフル

大型ビーム・ライフル、ハイパー・メガ・ランチャー、フェダーイン・ライフル、ダブル・ビーム・ライフル等

代表機  
NRX-044アッシマー、MSZ-006  
Zガンダム、RX-110ガブスレイ、MS  
Z-010ZZガンダム等

実は可変モビルスーツの武装は、通常モビルスーツの武装とほとんど変わらない。主武装は携行式のビーム兵器、ビーム・ライフルなどである。その一方で、一年戦争時のモビルアーマーの要素も併せ持っている。

一般的な可変モビルスーツの場合、高速で一撃離脱することから、威力が高く、かつ命中精度のいい兵器を必要とした。その点、ビーム・ライフルなどのビーム兵器は実体弾兵器よりも、はるかに威力があり、時として一撃で



↑MSの基本装備といえる格闘戦用の武器。中にはアッシマーのようにビーム・サーベルを装備しない（できない？）珍しい例もある。

艦艇を破壊できた。そしてビームの軌跡は一般的な実体弾兵器よりも速い。つまりビーム・ライフルで必要十分であったということだ。

そんな可変機の携行するビーム・ライフルは銃身が長く、大型のものが多い傾向がみられる。これらは強力で収束率が高いという特徴があった。



可変モビルスーツ、可変モビルアーマーの武装は、特殊用途に用いられる機体に比べれば、通常のモビルスーツと大差がないことが多い。しかし、よく見てみると可変機ならではの特徴が付加されていることも多く、武装が機体の特性を読み解くカギになることも多い。ここでは、そんな可変機に装備された武装の数々について考察してみよう。

RX-110ガブスレイなどのフェダーイン・ライフルは、最大出力6・6MWと通常のビーム・ライフルの倍以上の威力があったとされ、Zガンダムのビーム・ライフルでも5・9MWと、それに劣らない数字だ（どちらも銃身の長い携行式ビーム兵器だ）。ハイパー・メガ・ランチャーに至っては8・3MWと破格だ。さらにMSZ-010ZZガンダムのダブル・ビーム・ライフルとなると、10・6MWが2門という凄まじさである。

通常モビルスーツのビーム・ライフルの出力は3MW程度なので、性能的にはそれで充分といえる。むしろ、いたずらに高出力のビーム兵器を持つことは、本体のジェネレーターにそれだけ負担をかけ、機体の性能自体を阻害しかねないだろう。機体性能と運用目的にあった兵器の装備こそがベストの



### ハイパー・メガ・ランチャー

本体には小型ジェネレーターを内蔵し、全長はMSの身の丈ほどある。百式が使用したメガ・バズーカ・ランチャーに比べれば威力は低い、MS単体で携行できるビーム兵器では最大級の破壊力を有する。

### (Zガンダムの) ビーム・ライフル

エネルギーバック方式でロング・ビーム・サーベルとしても使用できるZガンダムのビーム・ライフル。ウェイブ・ライダー時には機体上面にマウントする。





選択といえるのである。

だが可変機に高出力のビーム兵器を搭載する傾向は、その性能が飛躍的に上がったグリプス戦役時代以降も続き、宇宙世紀0096年に登場したRGZ-95リゼルにおいても、高出力のビーム兵器を装備するなど継承されている。これはなぜか。

おそらく、これはひとえに可変機の運用形態を考えてのことだろう。可変機は、いち早く目的地に到着できる巡航性能と、攻撃面でもモビルアーマーと同じような高速での一撃離脱を考えられていた機体が多い。また、現場到着時に、戦場に入る前の長距離からの射撃（艦砲射撃的な使い方）でも効果が期待される。つまり、可変機の攻撃パターンは、非常にマルチロール性が高いので、様々なミッションへの対応が求められていたということだ。

遠距離から、および高速での攻撃に

は、ビームの収束率の高さと、光跡の

長さが必要とされる。ビーム（メガ粒子砲）は、射程距離が長くなればなるほど威力が減衰し、高速域の攻撃では、機体速度があまりに高すぎると命中精度が低くなるからだ。この2点を満たすには、高出力で長時間照射が可能で、大型のビーム兵器が必須だったといえる。また、通常戦闘時には出力を調整して、通常のビーム・ライフルと同じように扱えなければならない。

こうした調整機能の副産物としてMSZ-006Zガンダムや、RGZ-095リゼルが携行するビーム・ライフルでは、通称「ギロチン・バースト」と呼ばれる長時間のビーム照射が可能であった。これは光跡の長いビームを射出し、射撃中に銃身の向きを素早く動かし、結果的に広範囲にビームの光跡を「蒔き」、複数対象を同時に攻撃する方法だ。もちろん、これは敵が密集隊形で接近するなど限られた状況でしか効果がないと考えられるが、独自戦法といえる。

結果的に可変機の大型ビーム兵器は、機体特性に合わせた武装を選択した結果ともいえるが、その反面、重量増を招きやすく、携行式のものは銃身も長く取り回し難くなる短所もある。しかし、こと可変機の場合、そうした欠点を補って余りあるほど、高い効果が得られたということだろう。

## 2 特殊兵器

可変機に似つかわしくない特殊投擲兵器!?

海ヘビ、クモの巣

代表機  
搭載機  
RX-139 ハンブラビ

海ヘビもクモの巣主にRX-139ハンブラビが使用した武装で、双方ともその形状からの通称である可能性が高い。

海ヘビはいわば「投げるヒート・ロッド」ともいえる投擲兵器で、先端部分を敵に射出して巻きつけ、電気ショックを与えるというもの。敵パイロットの殺傷や、機体の電子機器などにダメージを与える効果があった。

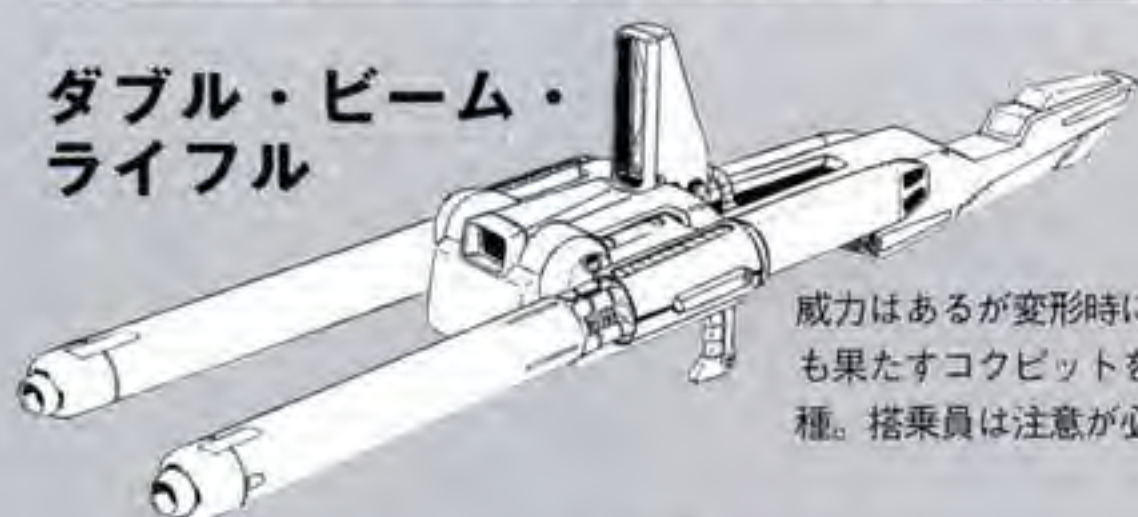
クモの巣は、モビルスーツ3機小隊で展開する一種のトラップ兵器で、クモの巣状の網によって敵を包み、海ヘビ同様に電気ショックを与える（一説には海ヘビのワイヤーを展開した状態がクモの巣ともいわれている）。

ワイヤー類は視認し難く、高速で接近する敵機に対するトラップとしてはある程度効果があったようだ。しかし、不意打ち用兵器であるからして使いどころが難しく、可変機での使用という点も用兵面では若干の疑問も残り、その後の発展がなかったのも頷ける（通常機では同様の効果を狙った兵器が一部導入されている）。

しかし、これが極めて特殊な変形形

## 可変機が携行したビーム・ライフルの数々

### ダブル・ビーム・ライフル



威力はあるが変形時には機種の役目も果たすコクピットを備えた変り種。搭乗員は注意が必要だ。

### ビーム・スマートガン

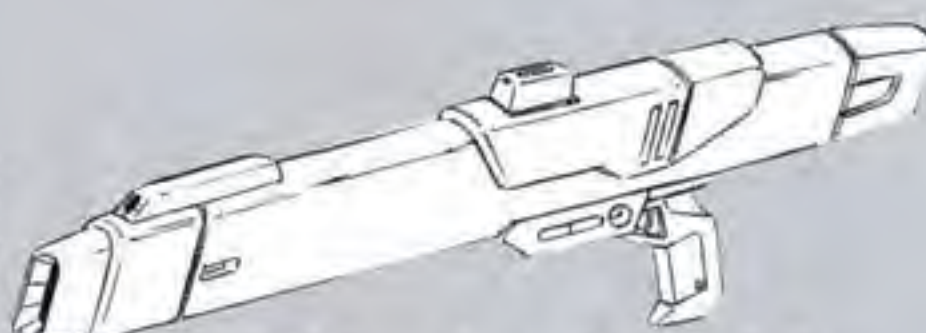
Sガンダムが携行するビーム兵器。ハイパー・メガ・ランチャーに負けず劣らずの長さ。射撃時にはアームで把持する。



### フェダーイン・ライフル



ガブスレイやハンブラビの携行するビーム兵器。並のビーム・ライフルよりも高威力な設定がされている。



### 大型ビーム・ライフル

アッシマー専用のビーム兵器で、機体にはこれ以外の武器は装備されていない（ビーム・サーベルも持たない）。





海へビ  
↑ワイヤーで相手を絡め取って電気ショックにより敵にダメージを与える投擲兵器。コンセプト自体はグフのヒート・ロッドに近い。

態を持つハンブラビが装備していたことは注目すべきことだろう。ハンブラビの可変機構とは、高加減速に特化した機能であり、瞬時に接敵し、急減速、急速離脱が可能ゆえ、そこで海へビなリクモの巣を撒くのが、本来想定されていた使用法なのかもしれない。

### 3 複合兵装

大型機ならではの装備と使用法

リフレクター・ビット+拡散メガ粒子砲

代表機  
搭載機  
MRX-010サイコ・ガンダム Mk-II、  
AMAX-7シャンプロ

MRX-010サイコ・ガンダム Mk-II、AMAX-7シャンプロといった大型モビルアーマーは、その運用を円滑に行うため、移動時と戦闘時で形態を使い分ける可変機であることが多かった。機体サイズが40メートル前後（もしくはそれ以上）になるのも、

機体制御にサイコミュを用いているため（どちらが先かはまた別の話）、それらに付随して、当然、搭載ジェネレーターも大型化する。これにより主武装のメガ粒子砲も大出力となり、要害の攻撃などに大きな威力を発揮した。また、近接戦闘も考慮した拡散メガ粒子砲も備えていた。

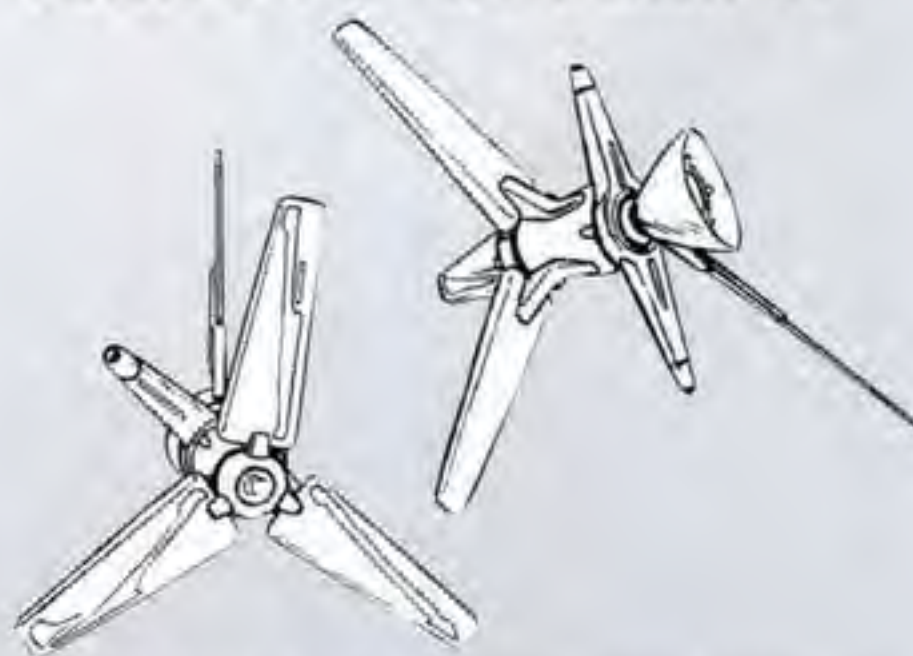
リフレクター・ビットは、こうした大型機の持つ大出力ビーム兵器を有効に使うという発想で、ある種のニュータイプ用兵装である。反射板を搭載した子機（ビット）を複数滞空させ、これに本体からのビームを当て、リレー式に偏光することにより方向を変え、オールレンジ攻撃のような全方位攻撃が可能となる装置である。

簡単にいえば、ビーム砲を搭載していないファンネル、といったところだ。ビット本体にビーム兵器を搭載していないため、通常のファンネルに比べて滞空時間（稼働時間）は長いと思われるが、あくまで非武装の反射板でしかないため、どこまで効果があつたか疑問も残る。ビームを反射する際に拡散や減衰もするはずで、本体からリレーされたビームが目標に届くまで、どれほどの威力を維持できるのか、がカギになるだろう。

システム制御に関しても、ミノフスキー粒子下では、ビットと本機の通信にサイコミュを使用した方が合理的だ

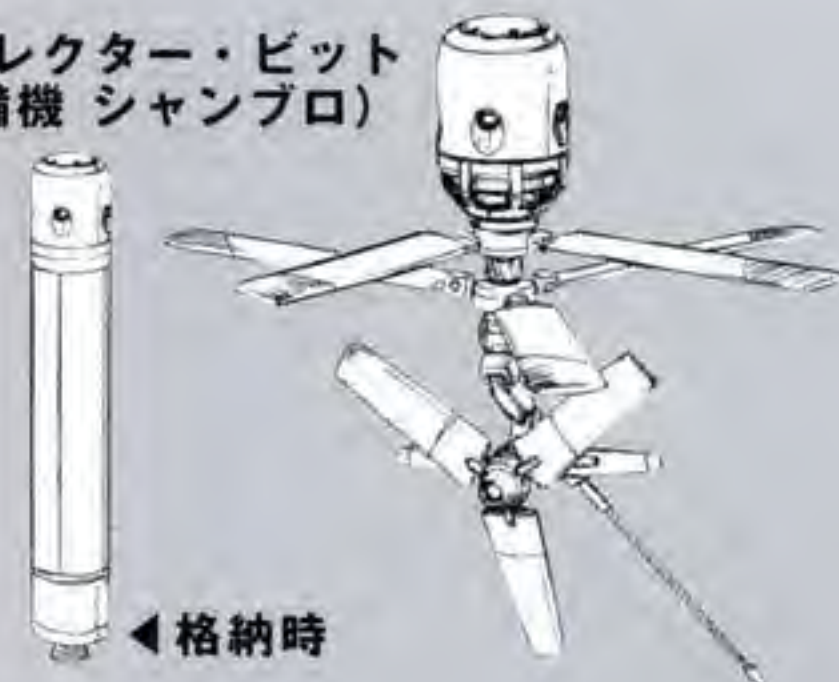
### リフレクター・ビット

リフレクター・ビット  
(装備機 サイコ・ガンダム Mk-II)



原理としてはどちらも同じで、本体に備えた反射板（磁気フィールドを発生させる）により、照射されたビームを屈曲させることが可能だ。これにより「あらゆる角度」からの射撃ができ、面制圧にも効果を発揮する。おそらくビットという名称なので、ジェネレーターなり燃料電池といった動力源（&推進剤）を搭載していると思われる。

リフレクター・ビット  
(装備機 シャンプロ)



格納時

ったと考えるのが妥当である。

シャンプロに搭載されていたもののように、面制圧などには高い威力を発揮するが、制御はかなり複雑であることが想像され、気温や風向き、風速などにも大きく左右されるはずで、精密射撃など、細かい作戦にはやや不向きな武装でもあつただろう。

### 4 近接戦闘兵器①

ビーム・サーベル

一般的兵装でも、  
可変機ではひと工夫！

可変モビルスーツといえど、空間戦闘において、近接戦闘用のビーム・サーベルは必須装備であった。しかし、ビーム・サーベルは可変機の任務に関しては使用しない例も多く、デッドウェイトになりかねない可能性もあつた。一方でMSZ-006 Zガンダムのようにビーム・サーベルラックを腰

部に装備し、ウェイブ・ライダー時、ビーム・サーベルを低出力のビーム砲として使用できる例もあつた。特にMSZ-006 Zガンダムは高出力のビーム・ライフルを装備しており、これをフル出力で打ち続けるのは難しい場面も想定され、また近接兵器であるバルカンやグレネード・ランチャーは、変形機構上、ウェイブ・ライダーでの使用は難しかったため、有効に機能したところだろう。

また、MRX-010サイコ・ガンダム Mk-IIにおいては、腕部自体をビーム・サーベル化し、有線ユニットとして打ち出すという、すさまじい兵装を備えていた。これは、RX-78 GP-03ガンダム試作3号機（デンドロビウム）に装備された大型ビーム・サーベルの考え方をさらに一歩進めたものといえ、もはや対艦兵器といった趣であつた。



## 5 近接戦闘兵器②

グレネード・ランチャー

武装の隙間を埋める近接兵器

代表機 PMX・000メッサーラ  
搭載機 MSZ・006Zガンダム等

後にモビルスーツの標準的なオプション装備の一つとなるグレネード・ランチャー。登場初期にはPMX・000メッサーラやMSZ・006Zガンダムなど、可変機に取り入れられるケースが多かった。グレネードという言葉通り、榴弾の一種と考えられ、ミサイル（ミノススキー粒子下では限りなくロケット弾に近い）が、高速度で弾体移動を行うのに対して、グレネードは面の破壊力を重視しており、速度も速くないために、白兵戦よりも範囲の広い近接戦用の武器であると思われる。

## 時代を経て進化する ディフェンサーユニット

U.C.0087

RX-178+FXA-05D  
スーパーガンダム

Gディフェンサーとガンダム Mk-II が合体した姿。ディフェンサーユニットはMS自体の総合的な能力拡張を狙って考案された装備といえる。ただ、有人ユニット=コア・ファイターによる運搬を必要とし、コア・ファイターそのものの武装が脆弱など、システム自体が未熟な部分もあった。



▼ グリプス戦役から第一次、第二次ネオ・ジオン戦争を経過。

U.C.0096

RGZ-95C  
リゼルC型  
ディフェンサー  
aユニット  
ウェイブ・ライダー



主にミサイルとハイパー・ビーム・サーベルを装備した、近～中距離で威力を発揮するタイプ。近接防御力を活かしてディフェンサー bユニットの防御や対MS戦向けの機体といえる。

RGZ-95C  
リゼルC型  
ディフェンサー  
bユニット  
ウェイブ・ライダー



大型のメガ・ビーム・ランチャーを2門備えた火力増強タイプで中～長距離でのレンジで威力を発揮する。対艦戦闘や敵MSの牽制が主な任務だろう。各ユニットとも混成ではなく統一した部隊での運用が望ましい。

## 6 機能拡張装備

通常モビルスーツの強化ユニットが可変機用に進化！

代表機 RGZ・95Cリゼル  
搭載機 ディフェンサーユニット

モビルスーツの追加兵装としてRGZ・95Cリゼル用に作られたオプション装備。元のアイデアは、グリプス戦役時RX・178ガンダム Mk-IIに最新型の可変モビルスーツ並の性能を付与しようとした、FXA・05D

Gディフェンサーの発展系といえる。Gディフェンサーを装着したRX・178ガンダム Mk-II（スーパーガンダム）は、大幅な重量増を招いたものの、火力と直線方向の機動力（つまりスピード）は、想定通り可変機に劣らぬものになり、そのアイデアはそれなりに成功を収めた。

宇宙世紀0090年代には、このディフェンサーユニットは、可変機であるRGZ・95Cリゼル用の追加装備として採用される。これは、ただでさえ機動力と火力のある可変機に、さらなるスピードと火力の増強を促すものといえる。しかし、この時代、即応体制と火力を重視する可変機にとって、必要時に自身の能力をさらに向上させるのはむしろ戦術オプションの追加を意味しているといえ、効果的に使用された。

そうしたRGZ・95Cリゼルのディフェンサー装備はaユニットとbユニットが用意され、aユニットはミサイルと大出力ビーム・サーベルを装備し、bユニットはビーム・キャノンとハイパー・メガ・ランチャーを備えていた。どちらのユニットも目的は異なるが、基本的に火力増強を主眼に置いている。当然、ディフェンサーユニット装備機は、ボックス、ウイング両ユニット搭載のリゼル（つまり通常型とC型）と性能特性も違うはずで、本来は一般機などとの混成運用ではなく、ディフェンサー装備機のみで編成され、移動砲台として艦艇防衛にも使用される火力担当のbユニットに対し、近接戦とその防御を担当するaユニットという、役割分担を踏まえたフォーメーションで運用されたと思われる。



# 短すぎた時代にあだ花

宇宙世紀の歴史の中では、可変モビルスーツ&モビルアーマーは第三世代に属する機体である。しかし、それらが活躍した時代は最盛期で1〜2年程度、それなりに活躍した時代を含めても10年程度でしかない。これらの機体はどのような時代の要請で登場し、どのように消え去っていったのだろうか。

## モビルスーツが戦略体系の中心となった「戦後の時代」

一年戦争において短期間で既存の戦略体系を塗り替えてしまったモビルスーツ。しかし、登場当初はまだモビルスーツの戦略的な黎明期ともいえるものであり、戦略体系が確立していたとは言いがたかった。

一年戦争を勝利した地球連邦軍が当時執った手法は、既存の戦略体系の中にモビルスーツを取り込むことであった。数の上では圧倒的に優勢な戦力を背景に、適時に応じてモビルスーツを投入することで勝利したという点であり、モビルスーツを必要としない状況では、従来兵器を運用することで戦力を効率的に使用していた。

一方で、国力が地球連邦よりも遥かに低く、若い宇宙国家であるジオン公国においては、戦略体系の多くの部分

を、モビルスーツの機能を特化することによって解決しようとしていた。つまり、主力である空間戦闘だけでなく、本来向かない要素もある陸戦や、偵察に至るまで、ありとあらゆる用途にモビルスーツを適応させて投入したのだ。

この結果、モビルスーツという新兵器の限界を示すことになった反面、矛盾するようではあるものの、モビルスーツの可能性を見せる結果となった。地球連邦軍が既存の兵器体系を活かしたことは、効率において当然のことであると同時に、総兵力に劣るジオン公国軍が、その兵器開発や生産といったリソースを自国の数少ないアドバンテージであるモビルスーツに集中させたこともまた、当然のことだろう。つまり、各々の執った方策は、それぞれ自国の持つ駒を活かすために採らざるをえなかった方策ともいえる。

そして、一年戦争が終結した後の地

球連邦軍に求められていたものは、軍隊のスリム化であった。それは、総人口が半分になった当時の状況から、何事もそのサイズに合わせた行政が敷かれるのは当然の流れだ。そして、地球連邦軍という軍隊においても、戦前の軍の規模を単純に縮小再編する、というのと違った状況だったことだろう。

この時代、驚異となるのはジオン残党程度でしかない。地球連邦軍の国家予算は軍拡よりも地球圏の再建に向けられたはずだ。人口が半分になった時代ということは、税収も半分ということであり、軍事予算は極めて限られたものだっただろう。また、モビルスーツの登場で、時代遅れになった兵器はそれなりに多かつたはずだ。

## モビルスーツ開発が積極的に進められていった事情とは!?

このような時代背景もあり、新しい兵器であるモビルスーツの開発は、軍縮の時代でありながら、積極的に進められていた。これは、モビルスーツという生まれたばかりのテクノロジを育成するのはもちろん、「10年進んで

いる」といわれたジオン公国（IIアクシズ）の技術力に追いつこう、という意図もあったのだろう。

そして、宇宙世紀0080年以降になると、面白い特徴が表れる。それは、地球連邦軍のモビルスーツ開発思想がある意味ジオン的なになっていった、ということである。つまり、「そこそこの性能のものを大量に生産し、戦略体系に組み込む」ことから「一機あたりの性能を上げたものを少数配備する」という考え方への転換だ。




しかし、これは時代の要請としては当然のものだろう。何しろ先に述べた軍縮の時代、敵組織も小規模なら戦時中のような大規模な軍隊は必要ない。仮想敵よりも明らかに多いくらいの戦力で、兵器の威力と質が上回っていれば事足りる、すなわち質が重視されるというわけだ。そういった意味ではモビルスーツ開発への投資は当然といえる。このようなことから、まさに戦前から戦中のジオン公国軍と同様、地球連邦軍ではモビルスーツを中心にした、それまでに比べ少数精鋭で軍を維持する戦略体系を構築する必要に迫られたのだ。





## スペックに見る機体性能の違い

宇宙世紀0080年代中ごろには多くの可変機が登場している。  
それぞれ代表的なモビルスーツのスペックを比べてみよう。

カテゴリー	量産モビルスーツ	可変モビルスーツ	可変モビルアーマー
			
型式番号	RGM-86R	MSZ-006	ORX-005
名称	ジムⅢ	Zガンダム	ギャプラン
全備重量	56.2t	62.3t	94.2t
ジェネレーター出力	1560kW	2020kW	3040kW
スラスター推力	81200kg	112600kg	183000kg

これらは、旧ジオン公国の技術を吸収しながら、コンパクトに軍備を再建したい財政上、新技術を積極的に開発したい用兵側、戦後の兵器開発を技術的にリードしたい兵器産業側の理由などがなく、結果的にティターンズというきわめて政治性の高い特殊部隊を生む土壌になった。

### 戦中の技術、考えを引きずっていたGP計画

戦後の混乱が一段落した後に、まず地球連邦軍が手がけたモビルスーツ開発は、いわゆる「GP計画」だ。これは、RX・78ガンダムをベースにしつつ、その発展型の開発以外に新技術や

新コンセプト、はたまた一年戦争中効果のあった兵器をリファインし、モビルスーツのフォーマットに織り込むなど、様々なトライアルがなされた。

すなわちRXシリーズを開発したV作戦と同様、異なる目的の機体がある程度同じフォーマットで、開発するという方針の発展型で、ベースをガンダムタイプ（RX・78）に特化し、より効率的な開発・運用を目指したものと思われる。

そうして開発されたガンダムタイプは「デラース紛争」で、一機が敵に奪われ、開発を請け負うアナハイム・エレクトロニクス社の一部が敵勢力に通じ、別の一機が秘密裏に敵に供与されるなど、様々なスキャンダルが重なり、開発自体がキャンセルされただけでなく、その記録自体も抹消された。

それは技術的秘蔵が敵であるジオン残党側に流出したという重大な不祥事もさることながら、後にティターンズとエウーゴの内紛に繋がる地球連邦軍内の派閥争いもあったと思われる。また、この時点でGP計画における開発自体が陳腐化していたということでもあるのだろう。

### エポックメイキングは第2世代機の登場！

その背景には、後に第2世代といわれるモビルスーツの技術が登場したこ

とによる。構成要件はガンダリウム合金、ムーバブル・フレーム、そして全天周モニターを持つコクピット、の3つである。これらの登場でモビルスーツは、もう一段上の能力を獲得する。これら次世代型の技術はGP計画ではまだ採用されておらず、全天周モニターのみRX・78 GP03ガンダム試作3号機に搭載されていた程度だ。一年戦争時からプロトタイプが存在した全天周モニターはともかく、第2世代機が登場する宇宙世紀0087年との間のわずか3年に新しい技術が導入、実用化されていったということである。それは、一年戦争時からの技術の蓄積が、ある程度の期間を経てようやく花開いたということなのだろう。

一方で、第2世代機の登場の背景には、モビルスーツの基礎性能、すなわちジェネレーター出力とスラスター推力が大幅に向上したことも忘れてはならない。特にジェネレーター出力の向上は、ビーム兵器の装備を一般化した。これは、RX・78ガンダムの高性能の理由のひとつであった、通常の実体弾に耐えうる堅牢な装甲がほぼ無力化してしまうことを意味していた。

この状況下でガンダムの装甲材であるルナ・チタニウム合金よりもさらに軽量で扱いやすく、安価なガンダリウム合金と、俊敏な動きが可能なムーバブル・フレームは、モビルスーツのハ





イスビード化を促し、MSA・009  
リック・ディアス、MSN・0010  
0百式など、シールドを装備せずに、  
空間戦闘を効率化するバインダー装備  
の、機体機動に特化した機体も生み出  
されることになる。

## 第2世代機の 亜種としての第3世代機

そして第2世代機に続いて、ほぼ同  
時期に第3世代モビルスーツと称され  
るモビルスーツ群が登場する。これが  
いわゆる可変モビルスーツだ。その亜  
種としての可変合体モビルスーツもこ  
の範疇に入るだろう。これらの機体は、  
第2世代機の技術要目であるガンダリ  
ウム合金やムーバブル・フレームなど  
の新技术の産物といえた。

可変モビルスーツは、一般的にはム  
ーバブル・フレームという、それまで

のモノコック構造から、人間のような  
骨格と動力、それと外皮を分ける考え  
方を採用する。これはある意味モビル  
スーツの設計のエポックメイキングと  
いうべきものである。一見すると、外  
皮とフレームを兼ねるモノコック構造  
のほうが軽量な印象を与えるが、強固  
なガンダリウム合金により、従来より  
も軽くて丈夫な構造を実現した。この  
背景にはビーム兵器時代の装甲の厚さ  
とフレーム強度の問題もあるかもしれ  
ない。つまり、対実体弾への装甲の防  
御力を最低限に抑え（「薄くした」機  
動性重視）、結果、モビルスーツに必  
要な剛性をモノコックフレームでは維  
持できなくなった、という可能性だ。

さらに可変モビルスーツは、このム  
ーバブル・フレームの可動域の大きき  
に着目し、それを拡大し、さらに複雑  
に組み合わせることで、能力拡張や、  
違う能力の獲得を、デッドウェイトを  
極限まで少なくすることで実現したも  
のということができるだろう。つまり、  
技術レベル的には第2世代機と第3世  
代機は同等で、その用兵コンセプトが  
違う、もしくは便宜的に分けるために  
名付けられた、あるいはカテゴライズ  
されたものといえるだろう。

## モビルスーツの可能性の追求 それが可変モビルスーツ

では、可変モビルスーツはどのよう

な時代の要請のもと、産み出されたの  
だろうか？

おおよそすべての兵器の歴史を辿つ  
ても、まったく新たなコンセプトと使  
用法が一度に生み出されることはほと  
んどない。戦車などに代表される「あ  
る状況下により適応する兵器として開  
発される」か、飛行機などに代表され  
るように「新たなテクノロジーが戦争  
に転用される」かのどちらかである。

モビルスーツはどちらかといえば後  
者だが、両方の要素を兼ね備えている。  
そして、新たな兵器の実戦経験は、そ  
の問題点を明らかにし、さらに状況に  
フィットすべく改良が加えられていく  
ことで洗練されていくものなのだ。

戦車は当初、塹壕を越えていくため、  
歩兵に随伴する、いわば動く小要塞だ  
った。次第に機動力が重視され、最終  
的には戦車単独で、集団使用する機動  
兵器になった。一方、軍用機は、最初  
は偵察が主な任務だが、やがて戦闘機  
や爆撃機に用途が分かれ、高性能化に  
よってそれらの垣根が小さくなってい  
った。状況によって最適化されつつ発  
展していく面もある。

おそらく可変モビルスーツの変形に  
関する部分は、ムーバブル・フレーム  
の実用化時に、その特性をより活かす  
ために発想されたものだろう。つまり、  
「ここまでできるから、ついでにこの  
機能を付加しよう」というものだ。「関

節の可動域を組み合わせると、スラス  
ターの多くを一方に向けられるから、  
これにより高機動を低燃費で実現しよ  
う」といった「ついでの機能」を付加  
することで、より運用の幅を膨らませ  
る試みだったのだろう。

この発想の源になったのは、初期の  
可変モビルアーマーであるNRX・0  
44アッシーマーとORX・005ギャ  
バブルだろう。特にアッシーマーはム  
ーバブル・フレームが使われておらず、  
従来型の機体構造にマグネット・コー  
ティングを施し可変機としていた。こ  
れらの機体はジオン公国軍が一年戦争  
時多用していたHLEVによる地球降下  
作戦的な戦闘への対応のため開発され  
たとはいえるもの。つまり、高高度と  
中から低空での迎撃任務と、それに付  
随するであろう対モビルスーツ戦闘に  
対応するため「開発される必要」があ  
り、後の可変モビルスーツの登場は、  
これらの機体の運用記録の影響も当然  
あるだろう。宇宙世紀0087年から  
のグリップス戦役時代は、新しいテクノ  
ロジーを様々に実験していった時代と  
いえる。モビルスーツ開発への投資が  
盛んだった結果、様々な機体が主に試  
作機という形で登場する。一方で用兵  
側も、新たな戦術体系の開発に「使え  
そうならどんどん試していく」という  
方針であり、さらに戦闘が半ば非公式  
の内戦（内紛）規模であったことも、



実験的兵器を投入するのにつけてついていた。それが結果的にこの時代の百花繚乱な可変モビルスーツの登場につながっているのだろう。

つまりは、可変モビルスーツというのは「ムーバブル・フレーム」の導入により、ついでにモビルスーツに載せられる機能を一通り載せよう」という大きな実験だったのである。それゆえに、様々なアイデアを持った機体が開発され、そしてそのコンセプトごと時代の波の中に消えていったのだ。

MRX-009サイコ・ガンダムはサイコミュをモビルスーツに導入し、単体で長距離移動できるというコンセプトから大型化し、RX-110ガブスレイはフレームと装甲を、それぞれ別の構成物としてシステムを考える、というコンセプトであり、変形時に脚部がフレームと装甲に分かれ、脚部フレーム部に別の機能が付与された。RX-139ハンブラビに至っては、空間機動時に必要ない脚部を折りたたむ簡単な変形により、小型化、つまり被弾面積を減少させる「コロンプスの卵」的な発想の機体だったといえる。

なぜ可変機は消えていかねばならなかったのか

その中で、唯一生き残ったといえるのが、MSZ-006Zガンダムに代表される可変機で、比較的主流であった「変

形時に空間機動用のスラスタ類をなるべく後方に集中させ、航空機(航宙機)のごとく直線方向での機動性を向上と燃料消費量も抑制する」機体であった。

これは、宇宙では高いスピードで戦闘での戦法の選択肢を増やすだけでなく、少ない兵力でより幅広い戦域を担当できるという、小兵力化へのメリットもあった。対するデメリットとして、コスト増大、整備性の拡大などが囁かれるが、これは本当だろうか。

というのも、ムーバブル・フレーム型の可変モビルスーツは、その機構自体を利用しデッドウェイトを極力減らす方向で開発されたわけで、通常モビルスーツの特殊機程度の負担増で賄えた可能性もある。グリップス戦役のように、一機一機違う機体が運用されるような状況では、煩雑になりがちだが、むしろ運用機種をある程度絞ると、それなりの効果があったに違いない。

おそらく問題となったのは、可変モビルスーツよりも、ベース・ジャバーなどのサブ・フライト・システムを使用したほうが、より効率的で安価だったということだろう。つまり、予算増のため採用されなかったのではなく、より予算が少なく済む方策があったから、という見方が正しいのかもしれない。実際、後世にも、RGZ-95リゼルのように、必要とする部所に可変機は開発・投入されている。

## 宇宙世紀0150年代に可変機再び

ZM-S08G  
ゾロ



LM312V04  
ヴィクトリーガンダム



宇宙世紀0150年代になると、再び可変モビルスーツが出現する。それは地球圏を席巻したザンスカル帝国とそれに対抗するリガ・ミリティアのそれぞれの陣営でだ。ザンスカル帝国のゾロをはじめとした可変機一群は宇宙用に運用していたゾロアットの改修型(陸戦用機)といえる。グリップス戦役期の実験的可変機に性格は近いだろう。一方、リガ・ミリティアのヴィクトリータイプは、小規模な集団でも運用できるように機体を分割する(主に運搬を考慮)ための変形といえた。

その一方でRGM-79ジムが2度に渡る改修で2世代15年以上使い続けられている。可変モビルスーツの時代は、そういった全体的には軍縮傾向だが、新規の機体開発にはそれなりの投資が行われていた時代の産物であることも忘れるべきではないだろう。

そして可変機の終わりは、実にあつけないものだった。これらの実験の結果、モビルスーツの性能は大幅に底上げされ、軽量、高出力の従来型のモビルスーツが開発されるに至り、それら

に機能を付加することで、ほとんど問題は解決してしまったのだ。

それは、あたかも第二次世界大戦以後の1950年から60年代の飛行機開発のようなものであった。様々なコンセプトの実験的機体が登場したものの、結果的には正常進化へと落ち着く。これはよくある話で、一見あだ花に見える可変モビルスーツという実験も、モビルスーツ開発史においては重要で、様々な試みの結果「正しい道」が証明される、ということなのだろう。





可変モビルスーツ／モビルアーマー

## その戦略的・戦術的意義とは!?



ほんの十数年のうちに瞬く間に消えてしまった可変モビルスーツ (TMS) / 可変モビルアーマー (TMA)。これらの機体は、実験的要素が強かったとはいえ、確かに時代の要求によって登場した機体であった。ではその要求とは何だったのか、そしてどのように役目を終えたのだろうか。

### TMSとTMA その違いは何なのか

ひとくちに可変機といっても、その最盛期、グリプス戦役時の可変機はTMS (可変モビルスーツ) とTMA (可変モビルアーマー) に大別できる。こういった区別とは別に、可変機は実に様々なコンセプトの機体が登場したが、ここではMSZ-006Zガンダムなどに代表される、もっとも主流である「変形機構によってスラスターの指向性を一方に集中させ、直線方向で高い機動性を発揮する機体」につ

いて取り上げていこう。

TMSとTMAは、一見同じように見えるが、わざわざ名前が分けられていることから明確な区別があったと考えるべきだ。おそらくはモビルアーマー (MA) 的な性格の機体をモビルスーツ (MS) に変形させるか、MS的な性格のものをMAに変形させるかということである。

一年戦争におけるMAとは、基本的にはMA-05ビグロやMA-04Xザクレロ、MA-06ヴァル・ヴァロのような高機動、高火力を主眼とした「高速移動砲台」という性格が基本にあった

とっていいだろう。そういった意味でMAN-08エルメスやMAN-03ブラウ・ブロなどのニュータイプ専用機も、機動性はビットに担保させていたものの、その範疇にある。

これに対しMSは活動場所をあまり選ばない汎用性と、マニピュレーターによる武装の換装が容易で柔軟な運用が特徴となっている。つまり、MAは大きな破壊力を利用した一撃離脱戦術、MSはそれより短いレンジでの空間戦という具合に、用途、コンセプトが明確に分けられていた。

このような区分けを踏襲して考えると、TMAは直線的移動力に特化し、変形することで攻撃点の空間戦闘能力を強化した機体であり (火力も重要な要素だったはず)、TMSはMSの空間戦闘能力を活かしつつ、移動 (展開) 速度を早める狙いがあったと思われる。つまり、その開発コンセプトや実際の性能上、どちらの用途に重きを置いているのかということと区別されると考えればよい。

MSに関しては、一年戦争時よりジオン公国軍のMS-09ドム/MS-09リック・ドムのように直線方向の機動性を重視した機体は開発されていたが、TMSはドムのような高機動性を維持しながら、サブ・フライト・システム (SFS) に頼らない速い作戦展開能力を目指して開発されたとも考えられ

るだろう。

### 地上におけるMSの弱点 移動力の低さをカバー

なお、ここまでの話は宇宙空間においての話だが、地上においてはMSの最大の弱点である「脚の遅さ」をカバーするための抜本的解決法であった。しかし、真空中である宇宙空間よりも、大気のある地上のほうが、空力設計など、TMSに求められる技術的要素は高いものであった。

地上でのTMSの存在価値、まず一つ目は一年戦争におけるジオン公国軍が実施した地球降下作戦に端を発しているといえるだろう。地球圏軌道上から一気に大量の戦力を降下させるという電撃戦は、一年戦争において絶大な効果を発揮した。これは大戦後半になると、地球連邦軍の高高度戦闘機、セイバー・フィッシュなどによる降下カプセル (HLV) 迎撃ミッションにより、その効果は大幅に減じられたといわれる。

しかし、軌道上からの急襲という作戦は極めて有効であったらしく、HLVよりも瞬時に戦闘へ移行可能な、MSによる直接降下の道が模索される。このMS単機で大気圏を突破する、という能力を備えていた第1号はRX-78ガンダムだが、戦後はもっと安価に行う方法が検討された。それがバリュート・



## 戦訓から生まれた 可変機の機能



U.C.0079



U.C.0087



一年戦争時、ジオン公国軍による地球圏軌道上からの降下作戦は、戦後の連邦軍に少なからず影響を及ぼしている。バリュート・システムの不自由さを解消するためにウェイブ・ライダーは開発されたといつて過言ではあるまい。MS単機を多機能化し、それによる大気圏突破能力の獲得は、軍縮という宇宙世紀0080年代の政治背景にもマッチしていたのだろう。

これらの機体があれば、衛星軌道上や遠隔地からの奇襲攻撃が可能であるばかりでなく、敵からの同様の攻撃の防衛兵器にもなる。Zガンダムが大気圏突入というウェイブ・ライダー機能

システムによる降下である。しかし、これ自体も個としての機動性は上がったが、バリュートとパラシュートを併用で降下する方法は弱点も多く、完全な方法ではなかった。

そこで生まれたのが機動力を維持したまま降下作戦を行える機体の開発だ。これには地上から超高度までブースター付きのTMS (TMA) を打ち上げる手法と、宇宙からフライング・アーマー (II後のウェイブ・ライダー) という形で降下させるというコンセプトが産み出された。前者はTMAであるORX・005ギャプランであり、後者はTMSであるMSZ・006Zガンダムだろう。

充分であり、TMSは専ら長距離移動や高速移動を含んだ作戦に使用できれば充分なため、必要とされる数はSFSよりも、かなり少なかったであろう。直線と面の移動力の増大はMS

があり、ギャプランにないのは単純に開発陣営の地勢の差であり、どこで主に使用するかという考え方の違いでしかなく、Zガンダムの方が一歩踏み込んだ設計思想を持っているにすぎない。

また、MSの弱点である展開能力の遅さを減じる効果もあった。一年戦争時にはジオン公国軍がド・ダイスを使い、MSを陸送させるという手法を取った。ド・ダイスなどのSFSは効果的な兵器で、戦後もベース・ジャバーやド・ダイ改という形で採用されている。これをさらに高速化するのがTMSというわけだ。

といつても低速域での移動 (つまり作戦行動的な行動) は従来のSFSで

が、ギャプランにないのは単純に開発陣営の地勢の差であり、どこで主に使用するかという考え方の違いでしかなく、Zガンダムの方が一歩踏み込んだ設計思想を持っているにすぎない。

また、MSの弱点である展開能力の遅さを減じる効果もあった。一年戦争時にはジオン公国軍がド・ダイスを使い、MSを陸送させるという手法を取った。ド・ダイスなどのSFSは効果的な兵器で、戦後もベース・ジャバーやド・ダイ改という形で採用されている。これをさらに高速化するのがTMSというわけだ。

の可能性を大幅に上げる。それが地上におけるTMSの出現理由だといえるだろう。

可変機の戦術思想は  
単に一年戦争の焼き直し?

おそらく、理想的な戦術としては、目的地に対して衛星軌道上からのTMSの降下による奇襲と、地上 (空) よりのTMSの攻撃を同時に行い、敵の迎撃体制を混乱させたところで、ガルダ級などの母艦より出撃したSFS & MS本隊による制圧戦を行う、という段取りだろう。しかしこれは、実際一年戦争時のジオン公国軍の戦術を展せたものでしかない。

一方、宇宙空間におけるTMS、TMAは、先に挙げた高速と稼動時間向上というメリットが遺憾なく発揮されたことだろう。戦場到達時間を大幅に短縮する。これは少ない戦力で広範囲の戦場や空域をカバーできるということ、軍縮の時代にもマッチしている。そして戦場では、高機動能力によるMA的な高性能を活かした一撃離脱による対艦戦闘と、空間機動力が要求される対MS戦の双方に対応できるので重宝されただろう。しかし、これもまた基本的に一年戦争の戦術概念から大きく変わるものではなかった。

つまり、TMSとはある意味、従来の戦場の構図をそのままに、より便利

### ムーバブル・フレーム



機体の基礎部分のフレームに柔軟性を持たせることで装甲とフレームを分け、人体に限りなく近い動作が可能になる機構。このフレーム特性を活かすことで可変機の開発は一気に現実味を帯びた。技術面では当時の連邦軍の工廠が抜きんでいたといわれる。

### 全天周囲モニター



コクピット内部のモニタースクリーンを360度張り巡らした機構。外部カメラの映像をコンピューター処理で投影する。技術的には宇宙世紀0080年代には一部で試みられていたようだが、また、これに付随するリア・シートも条件の一つとして数える場合がある。

### ガンダリウム (γ) 合金



MSの装甲材の一種。その製造方法はアクシズ (ネオ・ジオン) からエウゴ (ひいては地球連邦軍) へもたらされた。RX-78ガンダムに使用されていたルナ・チタニウム合金をより効率的に生産できるという。以後、MSの装甲材として多用される。

## 第2世代MSの 必要条件

左に挙げた3つの要件を2ないし3個満たしていることが第2世代MSの条件といわれ。これに可変機構を備えたのが第3世代MSと呼ばれるが、こうした機体の種別や区分については諸説あり、その境界もあいまいだ。ただし可変機の場合、変形により機能的な面が変化するという点は、区分されて然るべきだろう。



## 可変MSと可変MAの違いとは？



本文でも触れられているが、運用目的においてMSとMA、どちらに重きを置いている機体なのか？という点は重要だろう。また運用時の巡航形態でもある程度の区別はできるだろう。NRX-044アッシマーやMRX-009サイコ・ガンダムなどは、通常運用時はMA形態で移動する。ただ中には、RX-110ガブスレイのようにMA的な戦闘機能を付与されている機体もある。

に（多目的に）したものだといえる。確かにTMSは戦場で多大な効果を発揮したが、未来型の戦術を切り開くほどではなかった、という見方もできる。また、時代的にもTMSが本来活躍すべき、想定されていた戦場が、グリップス戦役以降、実際にはあまり起きなかったという世界の情勢も、意外なほど一般的にならなかった要因のひとつとして挙げられるかもしれない。

それをいち早く看破した人間がいた。その名はパプテマス・シロッコ。ニュータイプと噂された彼は、戦術家としてだけでなく、政治家、そしてMSの開発者としても極めて有能だった。木星船団にいた彼は、現地においていち早くTMAであるPMX-000メッサラを開発している。これは木星の強い重力圏に対応するために開発した機体と考えていいだろう。しかし、せっかく完成させた変形というコ

## ロンド・ベル隊により再評価されたTMS

一方でグリップス戦役から第一次ネオ・ジオン戦争を経て、第二次ネオ・ジオン戦争後にTMSを積極的に使用した例も存在した。宇宙世紀009

0年代後半のロンド・ベル隊である。特に最前線で活動していたネエル・アーガン隊は、主力機であるRGM-89ジェガンと、可変機であるRGZ-95リゼルの2機種を多く運用していた。この部隊の運用例を見ると、可変機の最終的な存在価値が見えてくる。

ロンド・ベル隊は新興外郭部隊という位置づけであり、その担当エリアはいわば地球圏全体であった。さらに有事にいち早く対応する部隊であるからして即応性が重視された。つまり、いざ事が起これば、早急に現場へ到着することが求められていたのだ。そして、その装備品にもスピードが求められたのは当然といえる。

輸送の要である艦艇も高速艦（最新艦）で、装備するMSもSFSで機動力を補う以外に、すでにこの当時、重要性の薄れつつあった可変機も、積極的に投入・配備している。可変機は即応性が重視される任務以外には、それほど使い道がないため、ロンド・ベルという即応部隊に合わせてジェガンと部品の共通性が高い新鋭機リゼルの開発が行われたほどである。

一方、ロンド・ベル隊は、あくまでMSを中心とした戦力編成だったのに対して、対人、コロニー制圧に主眼をおいたのが特殊部隊エコーズだ。同部隊は、コロニー侵入に特化した可変小型MS、D・50Cロトを配備するなど、



↑自ら可変機を開発していたにも関わらず、木星帰りの男こと、パプテマス・シロッコは其の先を見据えていた。時代の要請の先を行くとは、恐るべし先見の明だ。ニュータイプの能力が、木星という環境のなせる業か……？

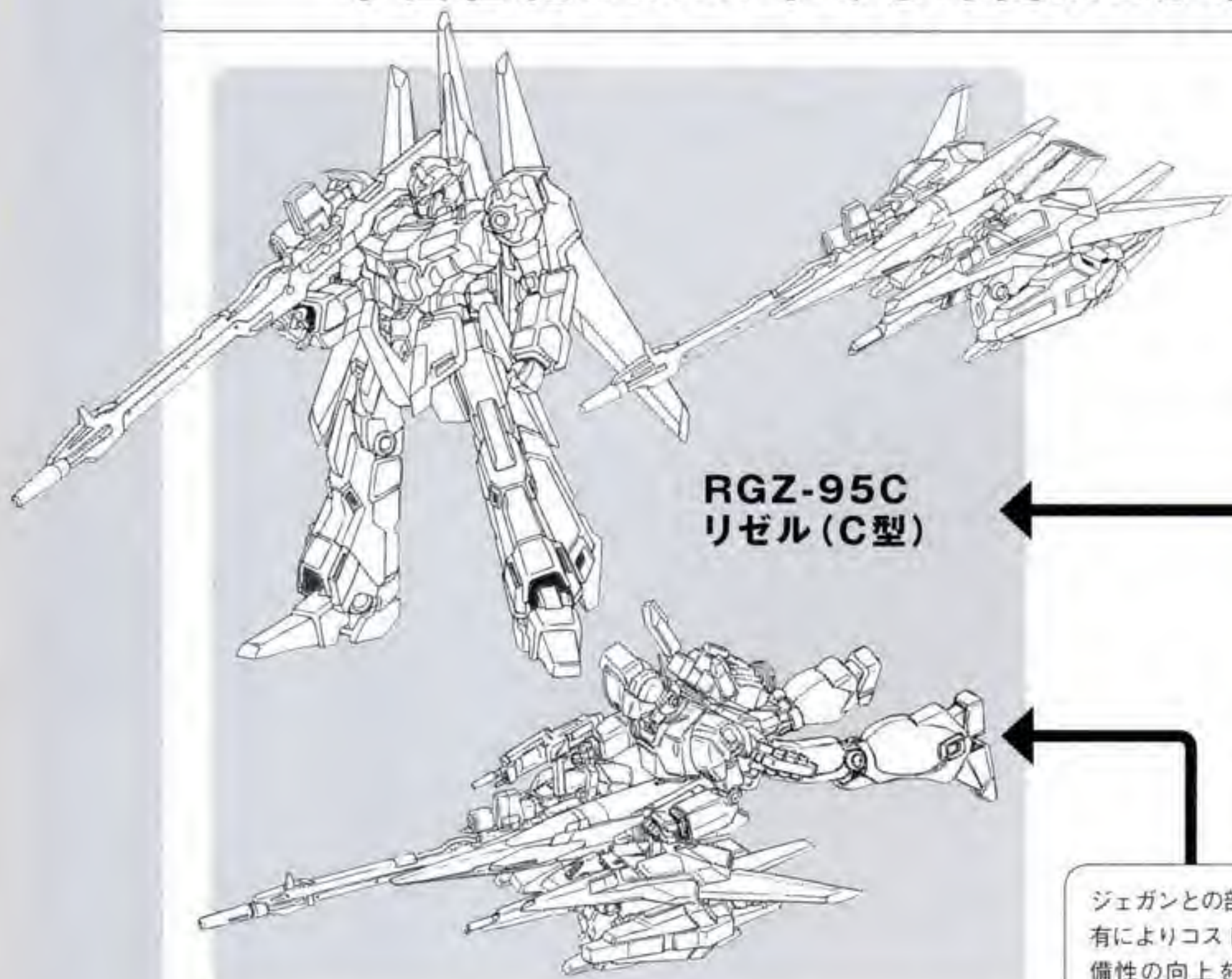
ロンド・ベルのMS隊が対応できない地域や場所へ対応するため、装備も歩兵中心で構成されていた。熾り続ける軍事テロに対応するこの2つの即応部隊が可変機を装備していたのは、偶然ではないだろう。

有事が起きた際には、速度と対応力を併せ持つリゼルの部隊が現場へと急行し、ある程度の制圧を行いながら後続の到着を待つ。もう少し余裕がある場合、リゼルをSFSとして、ジェガンを運ぶというフォーメーションもあっただろう。

これから考えられるのは、おそらくリゼル単体の方が、ジェガンとSFSの組み合わせより優速であったということだろう。逆にいえばリゼルの性能要求として、まずあったのは、それだったとも考えることができる。そしてMSや艦船を使用した軍事テロ鎮圧が目的である以上、Zガンダムのような単機での活動ではなく、一定数を揃え



# 宇宙世紀0096年でも可変MSが求められていた!?



RGZ-95C  
リゼル(C型)

全地球圏をカバーしなければならないロンド・ベルだからこそ、リゼルは必要な機体だったのかもしれない。しかし、その後はMS自体の性能が高くなり、次第に可変機の魅力は薄れていくことになる。

## リゼルに要求 されていたこと

### MSとしての戦闘力



型式番号から、リゼルはリ・ガズィの発展系といえる。性能面でも、もちろんリ・ガズィ以上のパフォーマンスが求められたはずだ。

### SFS的な機動力



MA時のスピードもさることながら、ベース・ジャバーやド・ダイ改のようにMSを牽引、もしくは搭載し展開できる能力も大事である。

ジェガンとの部品共有によりコストや整備性の向上を図る。これにより運用面でのストレス軽減効果が期待された。

た部隊での集団運用は必須であり、まとまった数の需要があればこそ、主力機のジェガンと共通性を持つ新規機体の開発が促されたのだろう。

しかし、地球圏はその後、ネオ・ジオンの消滅、宇宙世紀0100年ジオン共和国の自治権放棄により、反地球連邦のテロ事件や紛争などはあったものの、しばらくの間、表向きは平穏な時代を迎える。

**TMSが一般化しなかった  
本当の理由とは!?**

総合的な戦略面でTMSは、後のスタンダードな存在になり得なかった。それはどうしてだろうか。

その第一の可能性として語られることが多いのは、総合的なコスト面だ。これはただ単に一機あたりの製造コストが高いという単純な図式だけではない。そもそもTMSはムーバブル・フレームの可動域の増大を利用した副産物的なものであり、単純なユニットコストとしては通常機に比してそこまで高いものではない可能性はある。

担当するタスクが多い以上、開発費などは割高だったはずであり、整備、維持の面では、より多くの労力が必要とされただろう。何せ可変機一つの機体でマルチロール性を飛躍的に増やすということである。これは例えば開発におけるテスト項目が倍以上になるの

と同義であり、問題点の修正や熟成にも時間がかかるということだ。

パイロットの養成も2つの能力に習熟するため余計に時間がかかる。部品点数も機体フレームの機能を変形にうまく利用しているとはいえ、ある程度は増えているはずで、パーツストックの増加による兵站への障害や、整備兵の習熟に要する時間など、様々な負担を強いる可能性がある。

もちろん、これらのネガティブファクターをおしても余りある必要性があるなら、TMSは存続したことだろう。実際にリゼルは、そのような用途から登場している。しかし、結果的にそのコンセプトが消滅したことは、戦略面においての必要性がそれほど高くなかったということだろう。つまり、真の性能を発揮できる局面は少なく、他の機体で代用できる場面が多かったということだ。

実際、TMSの代表的存在であるZガンダムは、その性能を見ると可変機であるだけでなく、驚くほど軽量の機体という特長がある。さらに大出力、大推力を併せ持っており、絶対的な性能の高さに注目すべき存在といえた。

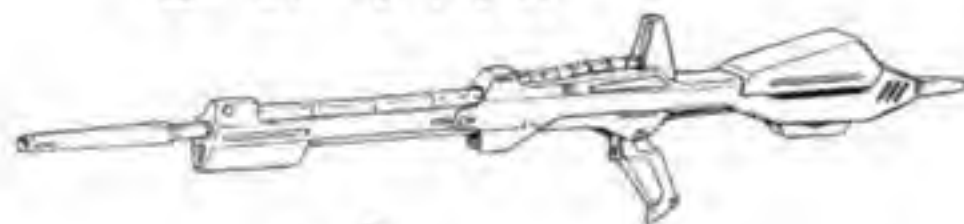
そして、次代のイノベーションである「MSの小型化」の時代以降になると、MS単体が飛行機能を獲得することによって、TMSは、ほぼその使命を終えることになるのだ。



## MSZ-006 Zガンダム

アナハイム・エレクトロニクス (AE) 社が「Z計画」で開発した可変MS。大気圏突入能力を備えたウェイブ・ライダーになる。『Z』劇中における2代目主役メカで、カミーユ・ビダンの機体となる。ただし、登場するのは3クール目に突入した第21話「ゼータの鼓動」から。次回作である『ZZ』にも引き続き登場し、物語終盤まで活躍している。デザインは藤田一己。

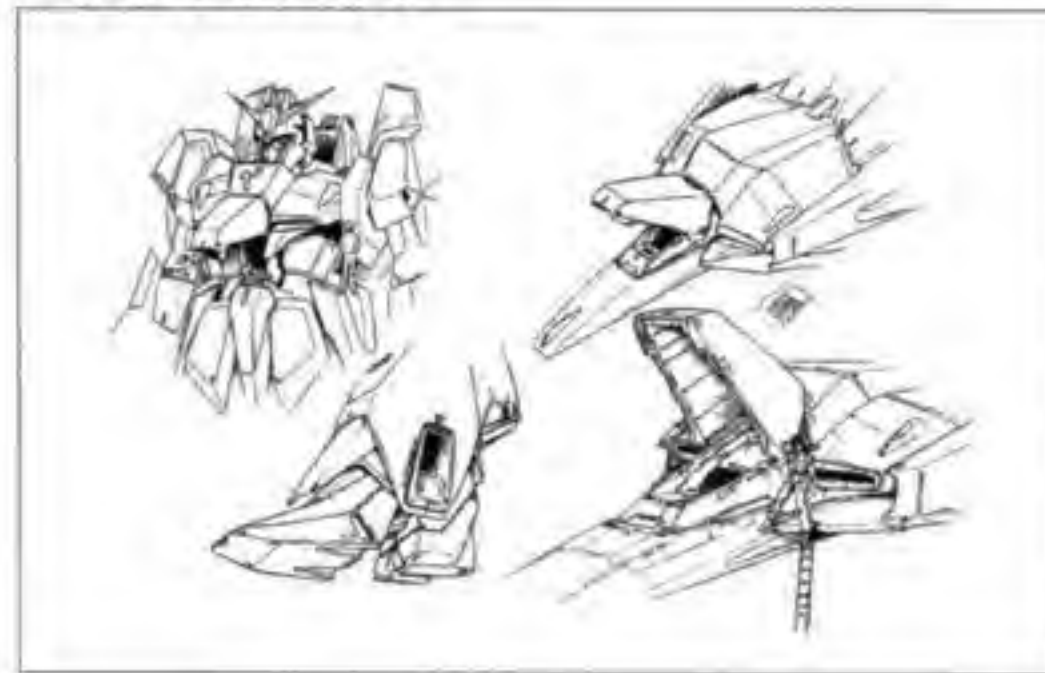
ビーム・ライフル



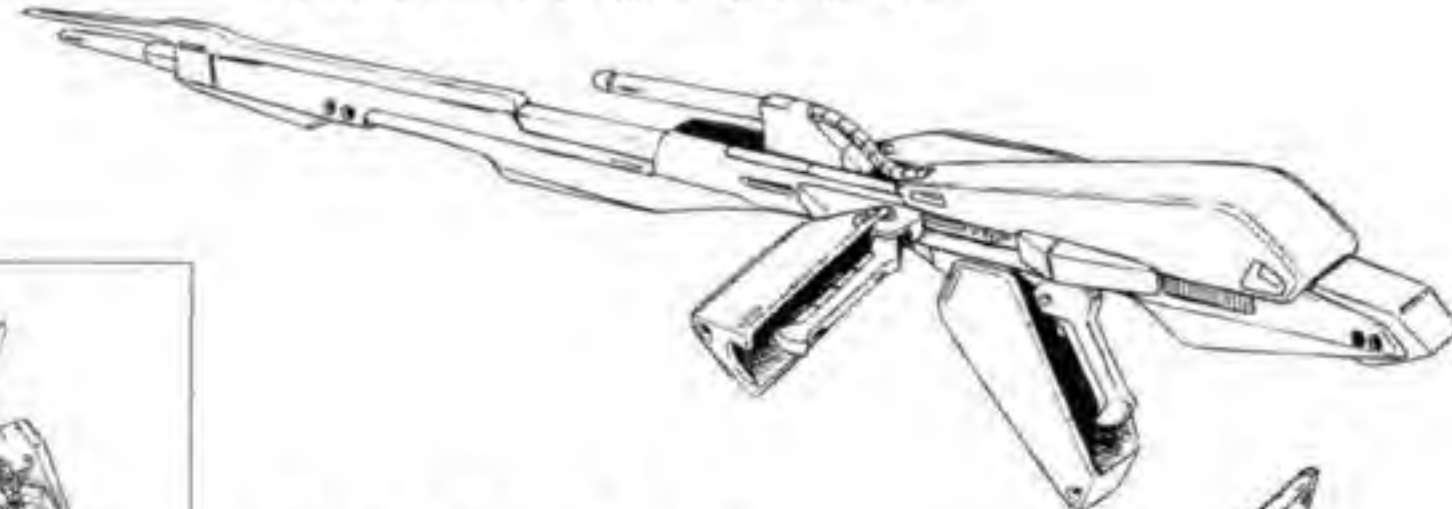
シールド



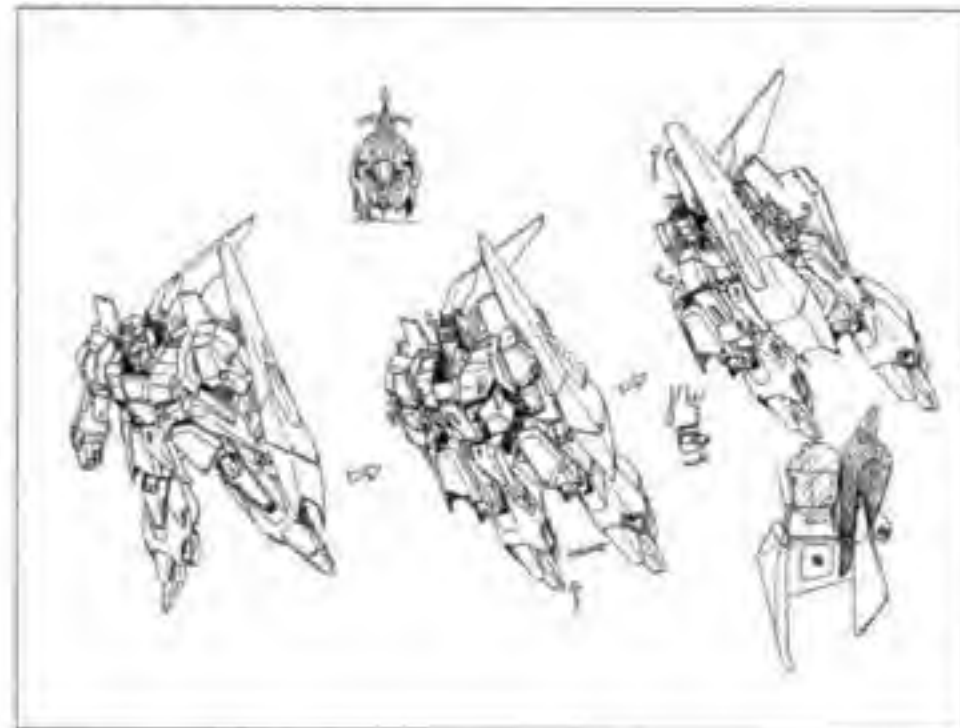
コクピットハッチ



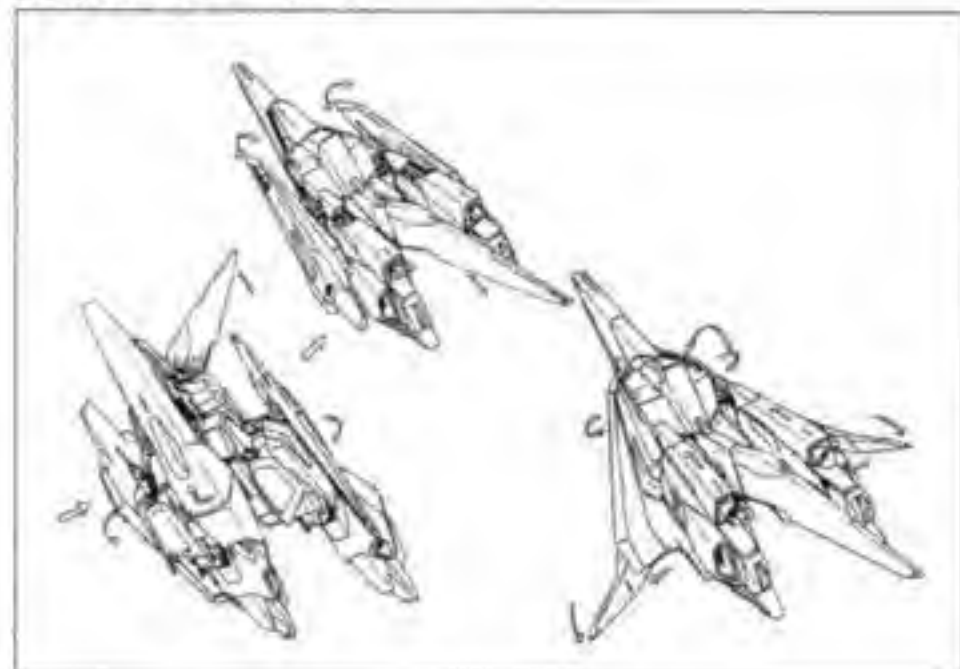
ハイパー・メガ・ランチャー



変形パターン1



変形パターン2



ウェイブ・ライダー



↑ZガンダムのMA形態をこう呼ぶ。系列機や派生機にもこの点は継承されている。この形態で大気圏突入が可能となる。

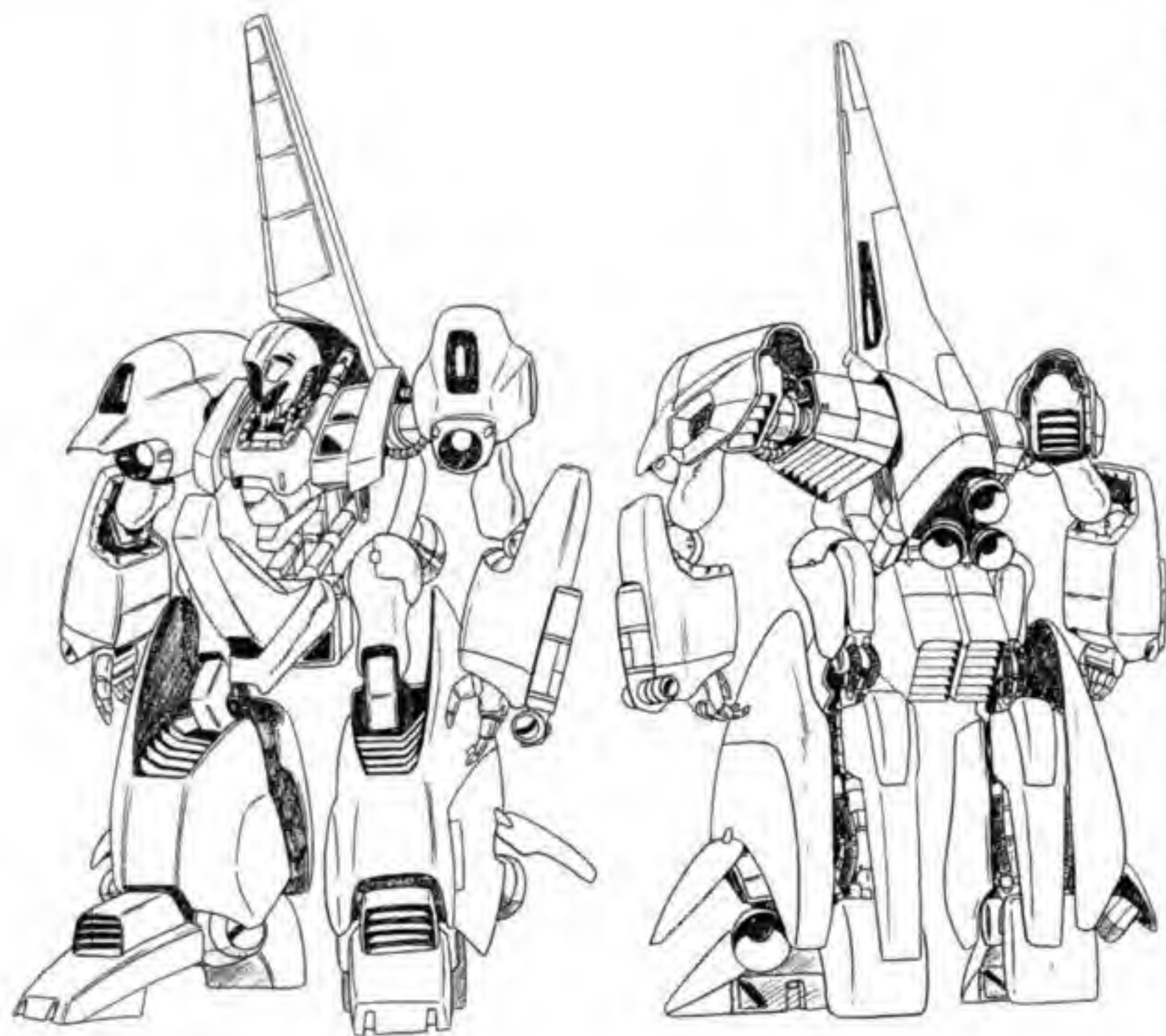


このページでは、各ガンダムシリーズの映像作品やMSV (モビルスーツバリエーション) といった関連企画、漫画などのメディアに登場した可変MSと可変MAなどを紹介する。なお、収録の順番は映像作品を先に関連企画の順に並べ、登場作品タイトルの後には製作年代を付記している。

# 可変MS設定資料集

モビルスーツ





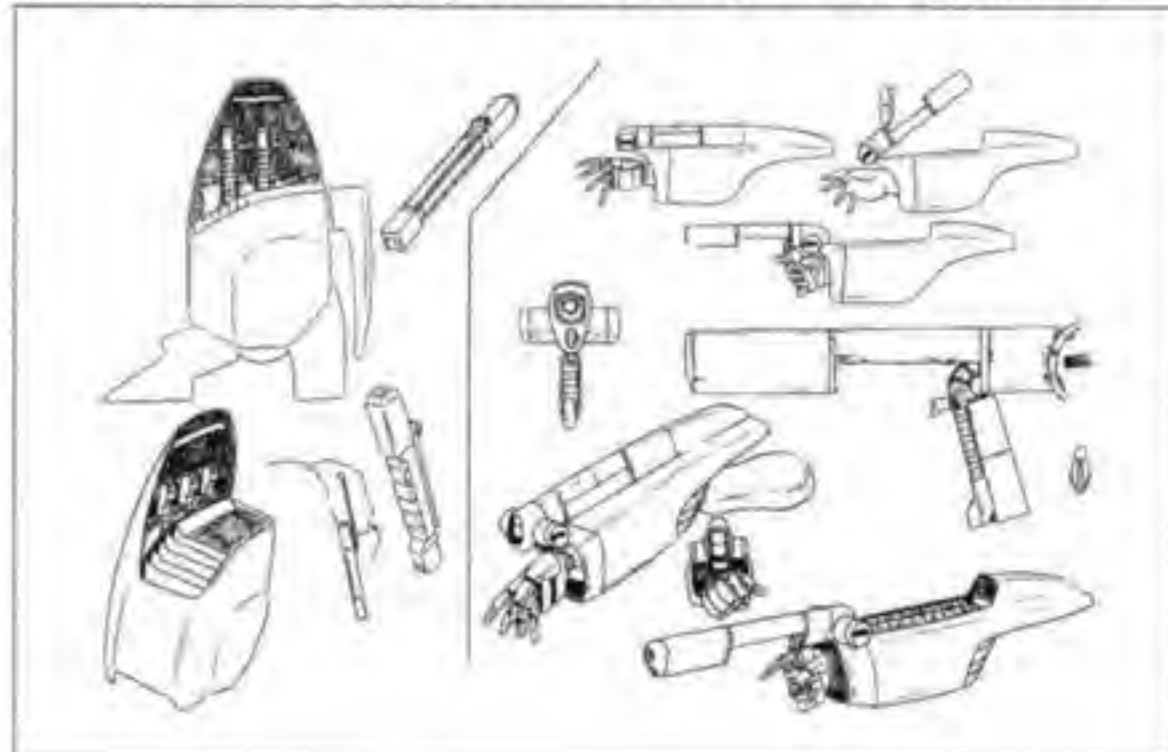
MA形態

## MSA-005

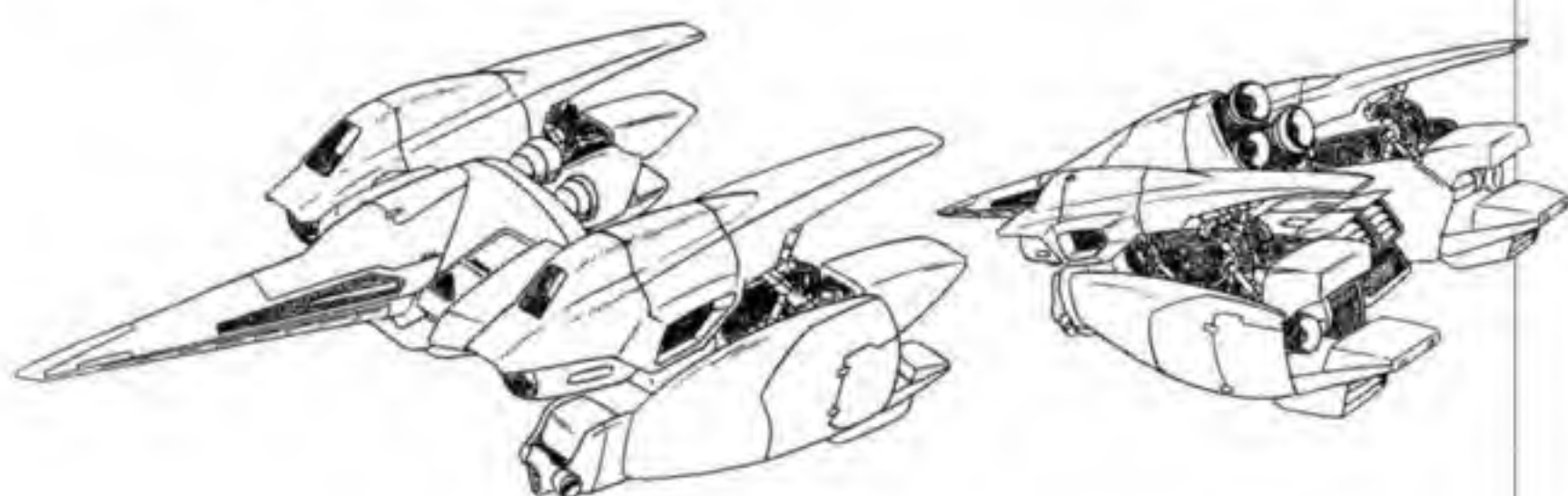
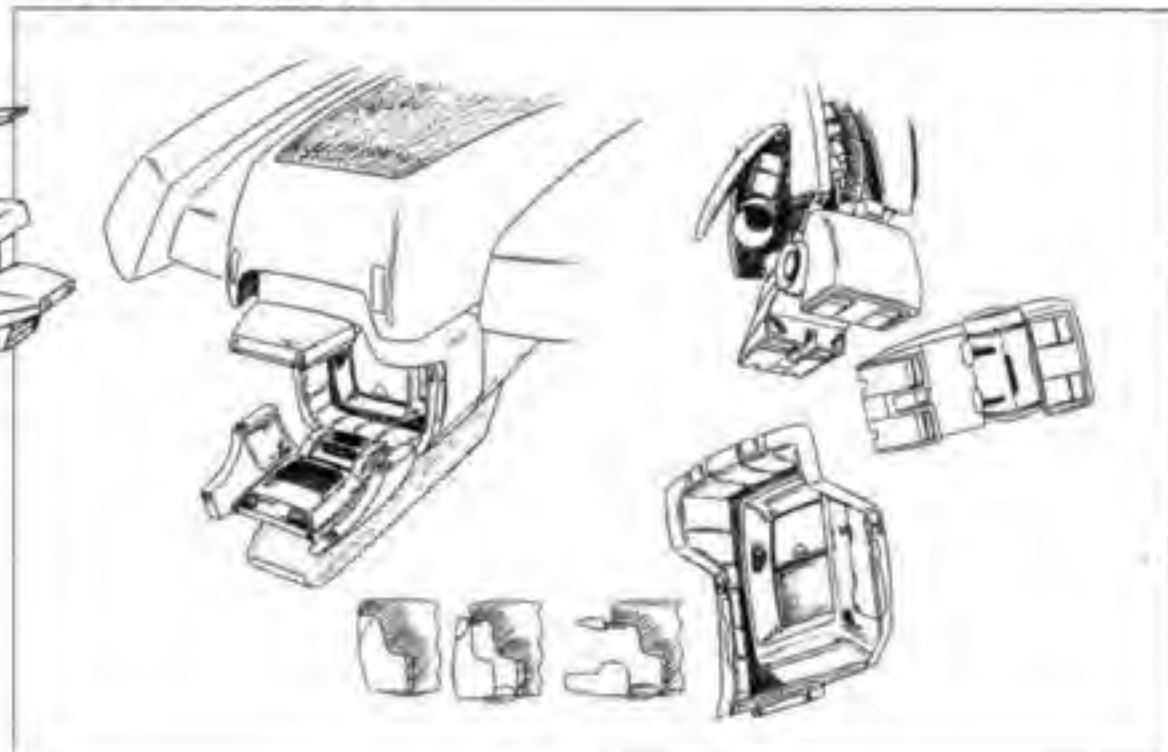
### メタス

エウーゴの可変MS。主なパイロットはレコア・ロンドや、ファ・ユイリィ。レコアが寝返ってから（当初は戦死扱い）はファがパイロットを務めた。レコア搭乗時にヤザンのハンブラビとの戦闘で大破したが、レコアは無事など、意外とタフで搭乗者生還率は高い機体だ。次回作の『ZZ』でもファの乗機として活躍したが、ZZガンダム登場前の第10話「さよならファ」で戦列を離れる。

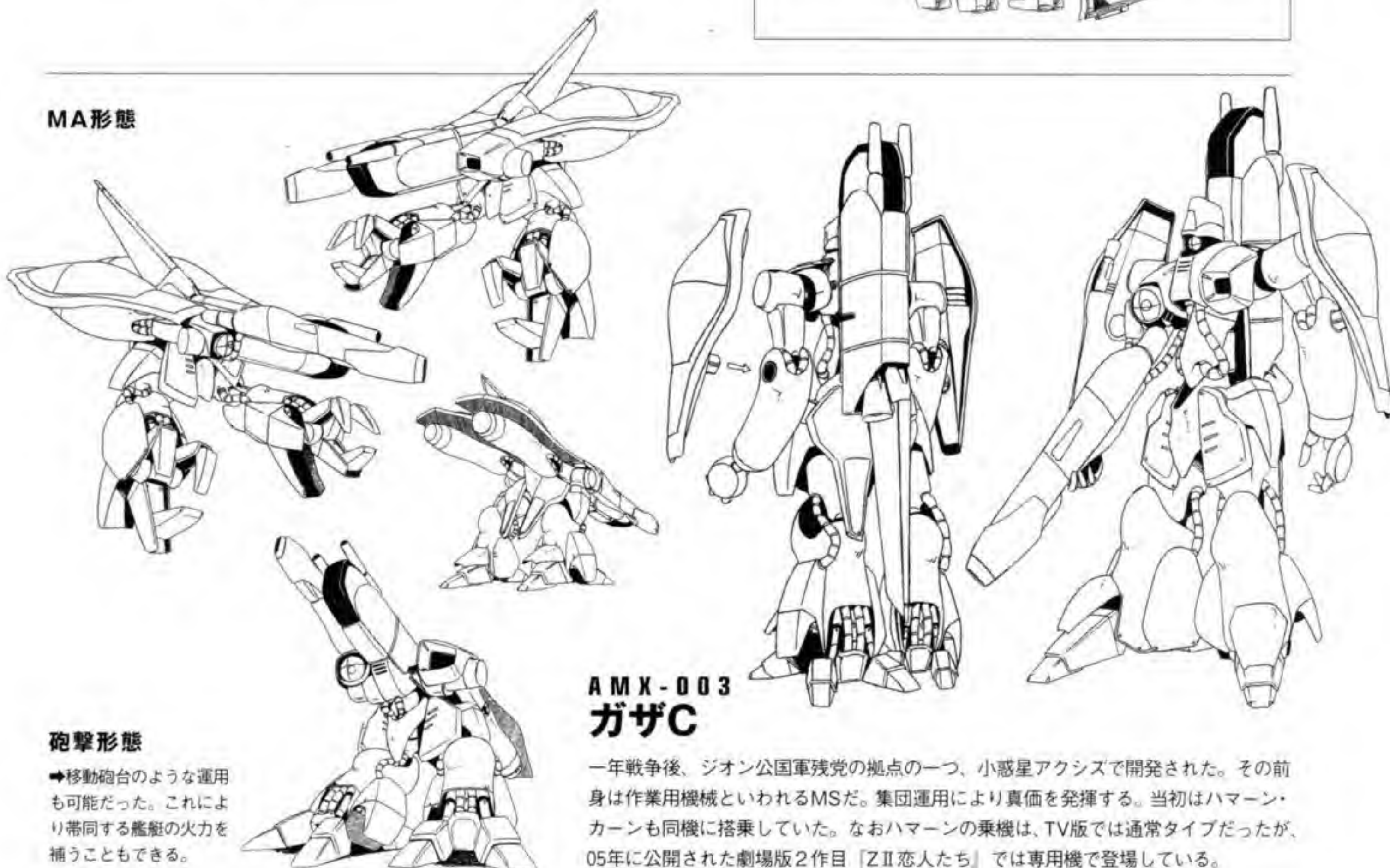
#### アーム・ビーム・ガン／ビーム・サーベル&ラック



#### コクピットハッチ



MA形態



砲撃形態

→移動砲台のような運用も可能だった。これにより帯同する艦艇の火力を補うこともできる。

## AMX-003

### ガザC

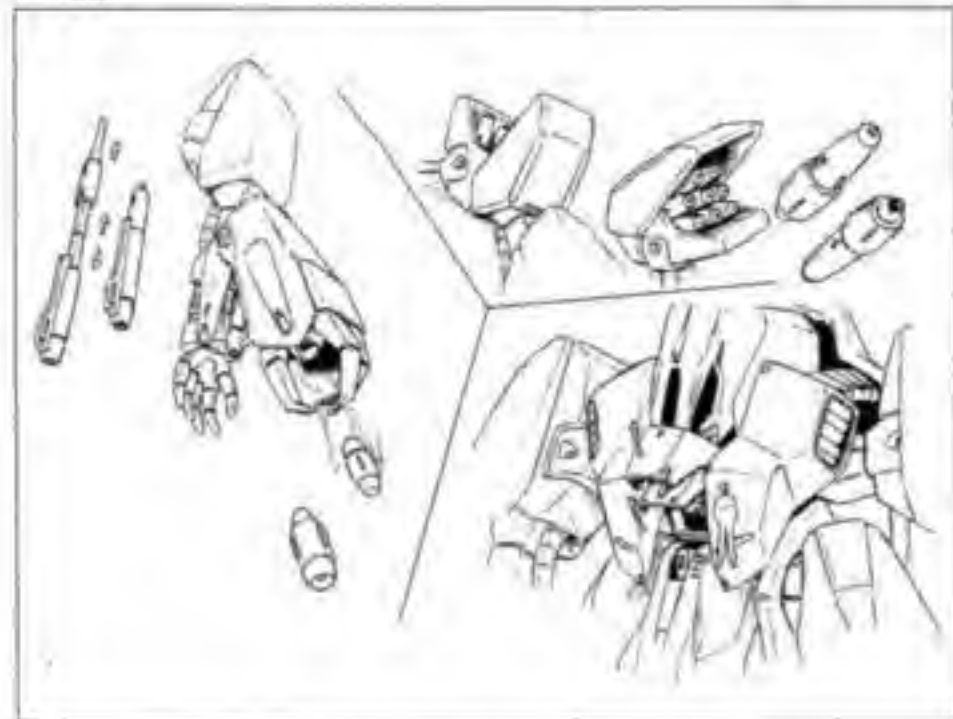
一年戦争後、ジオン公国軍残党の拠点の一つ、小惑星アクシズで開発された。その前身は作業用機械といわれるMSだ。集団運用により真価を発揮する。当初はハマーン・カーンも同機に搭乗していた。なおハマーンの乗機は、TV版では通常タイプだったが、05年に公開された劇場版2作目『ZⅡ恋人たち』では専用機で登場している。



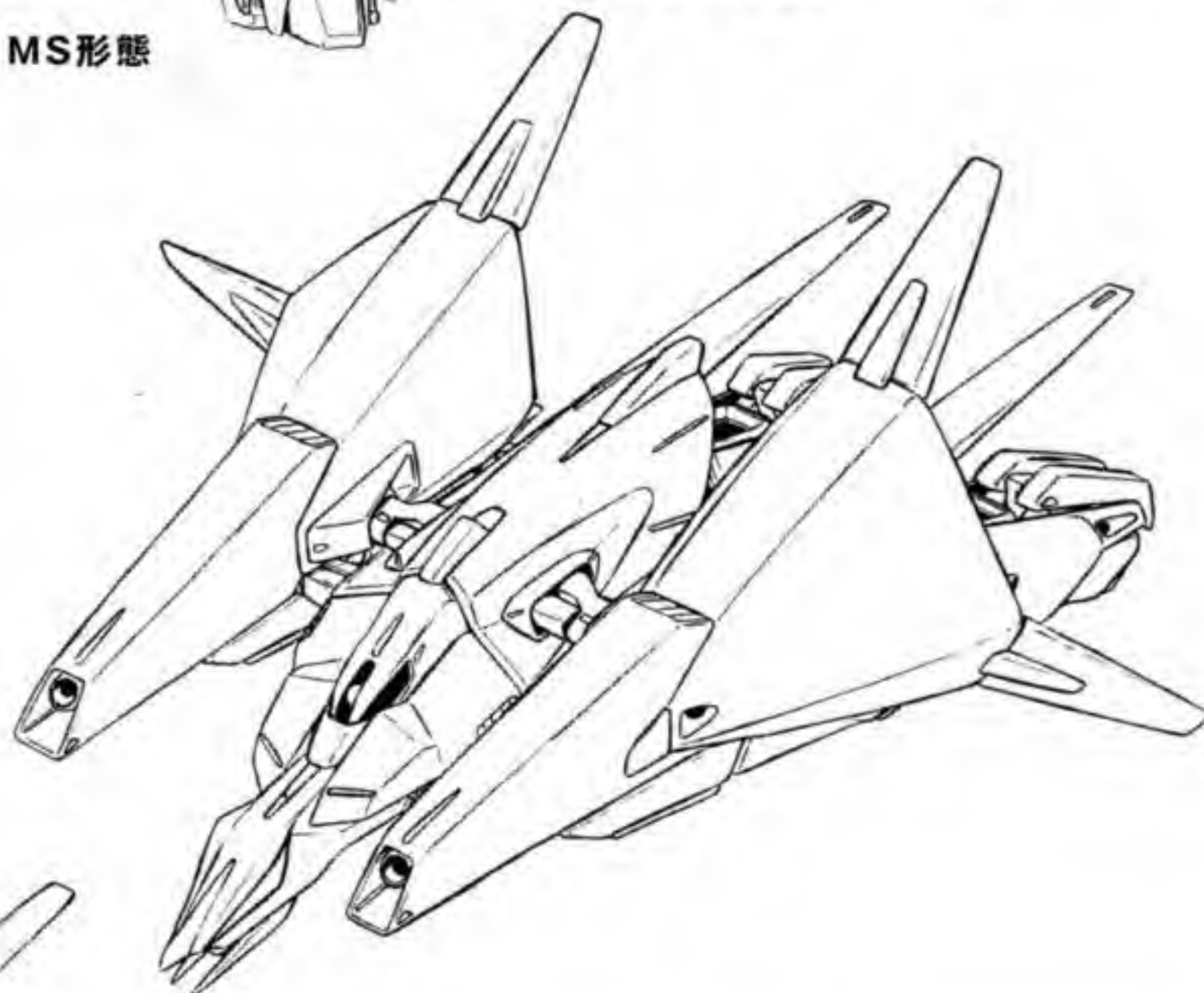
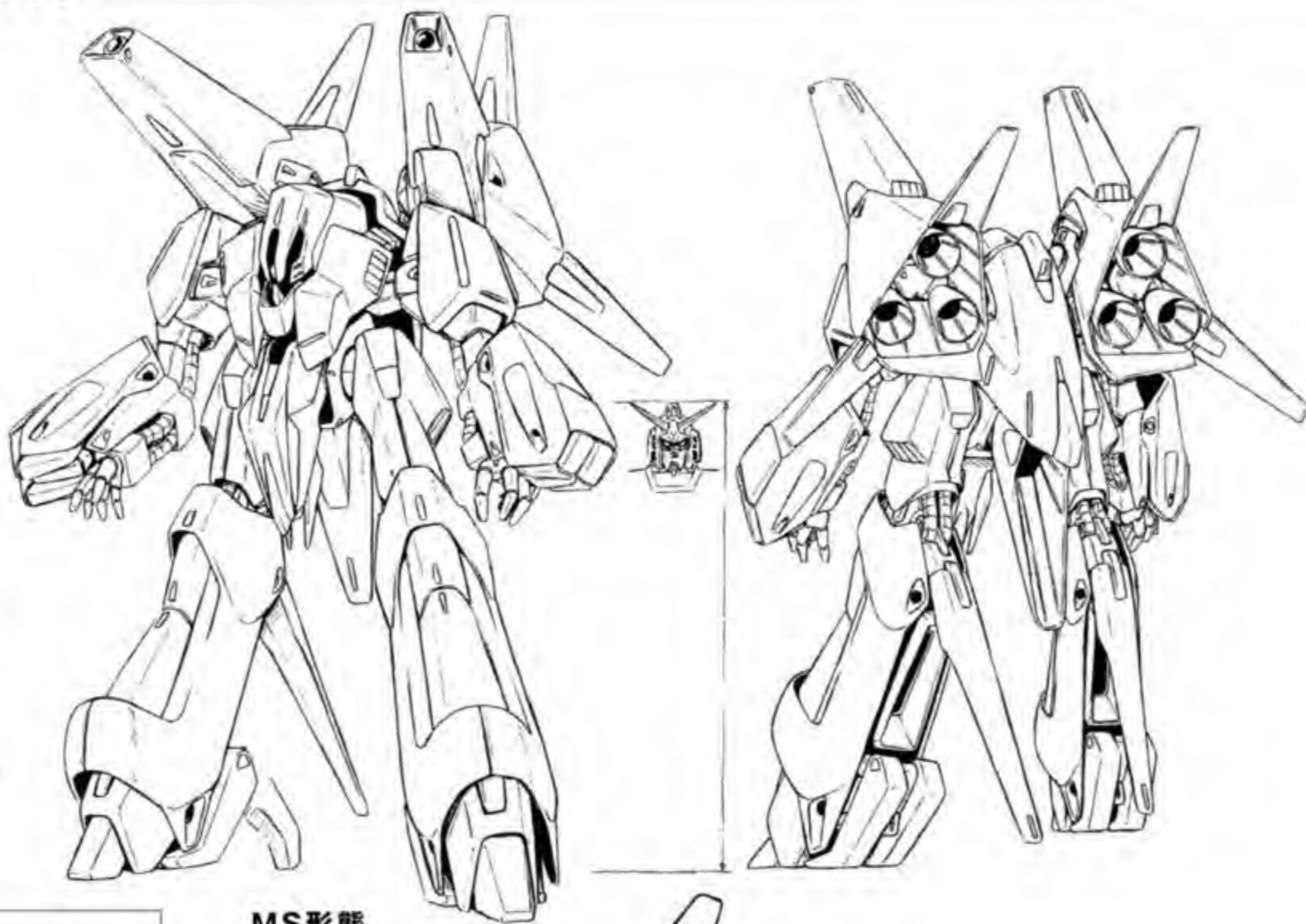
## PMX-000 メッサーラ

木星往還船ジュピトリスのキャプテン、バブテマス・シロッコが開発した可変MA。木星圏の高い重力に対応すべく、巨大なスラスターを備えている。高速度による一撃離脱戦法だけでなく、MSとの格闘戦までこなせる。機体のポテンシャルは高いかもしれないが、彼以外が搭乗した時には、あまり戦果を挙げられず、被弾することもしばしば。

### 武器



### MS形態

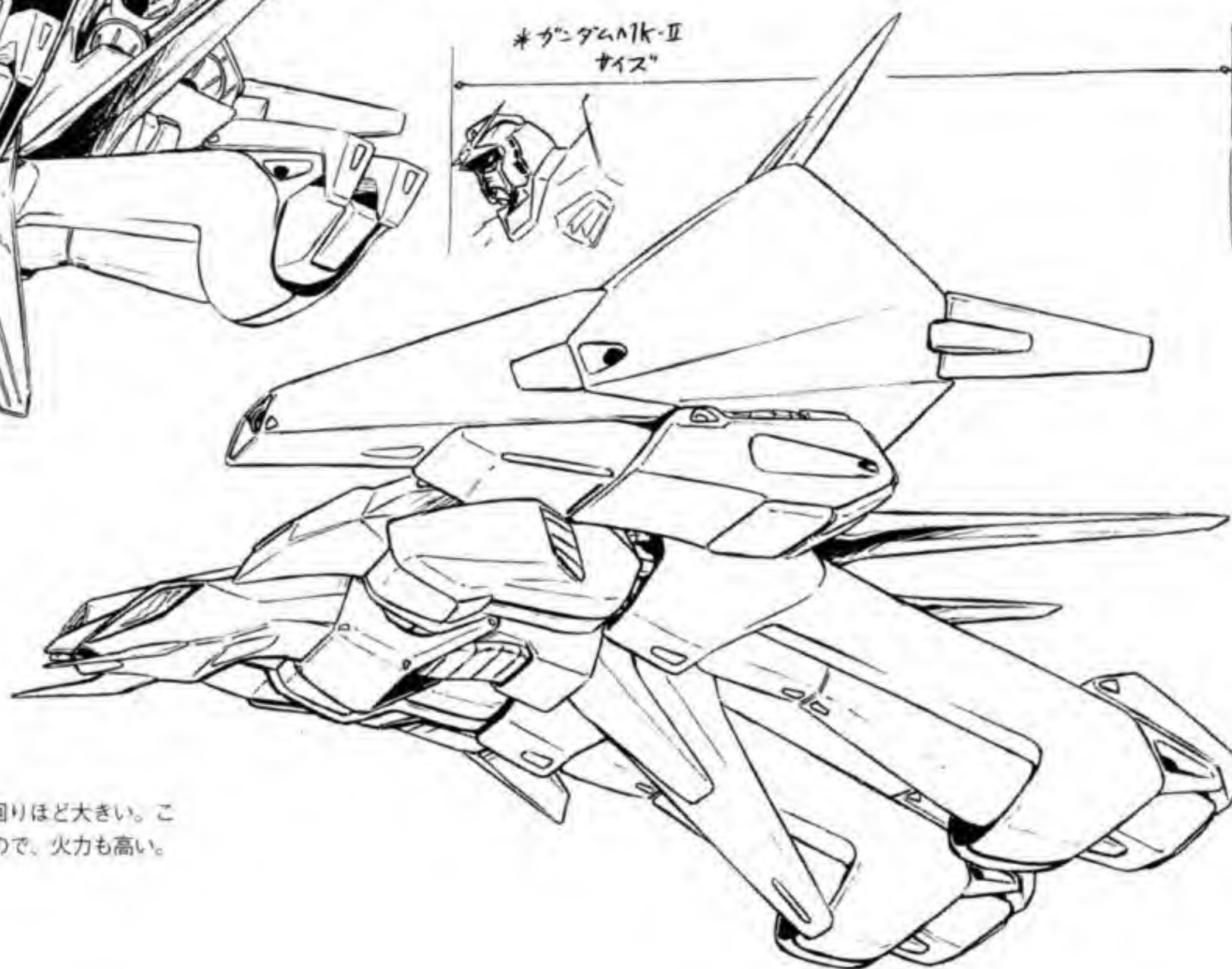


\*ガンダムMk-II  
サイズ

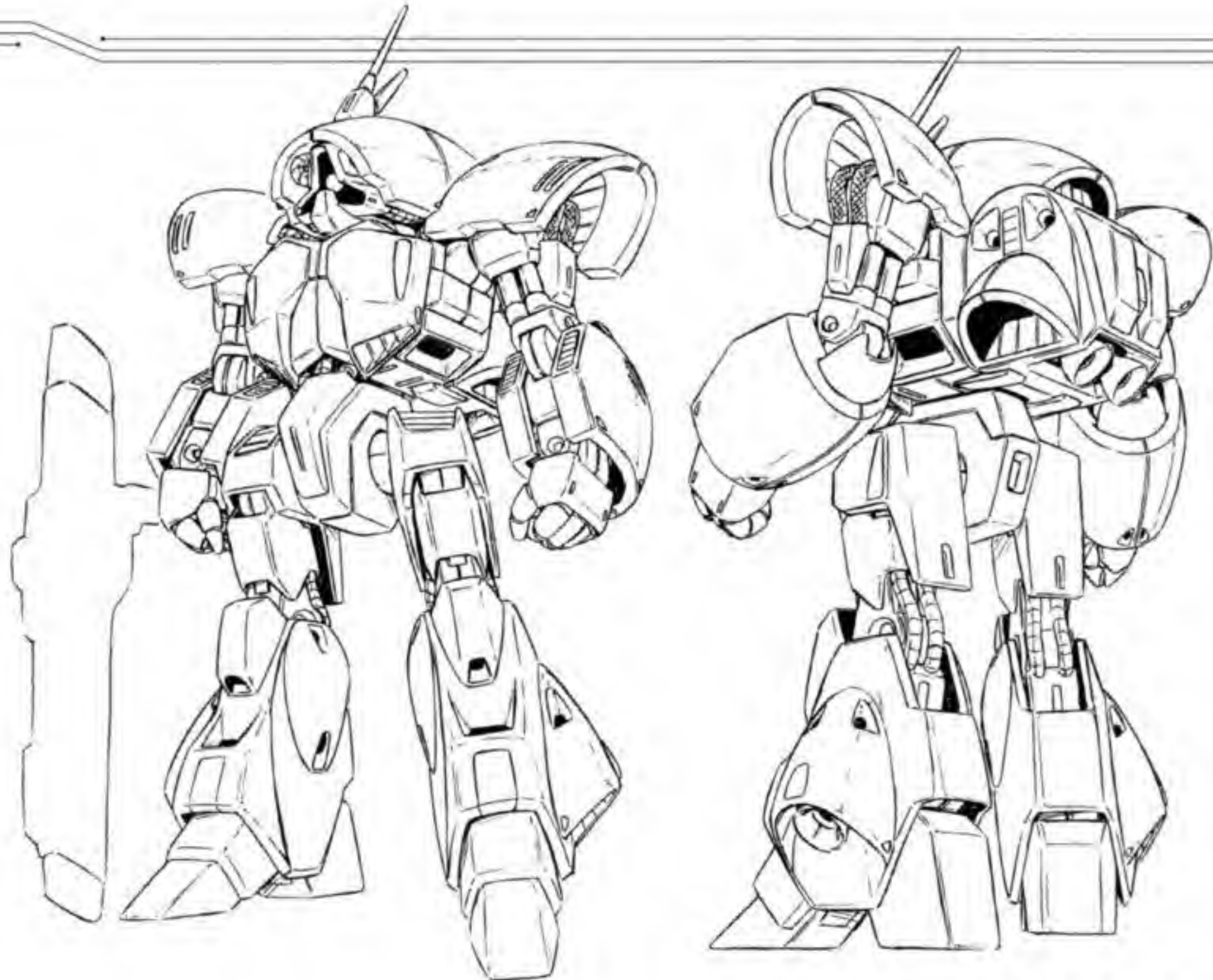


### MA形態

➡全長はガンダムMk-IIよりも一回りほど大きい。この状態でもミサイルなどは使えるので、火力も高い。



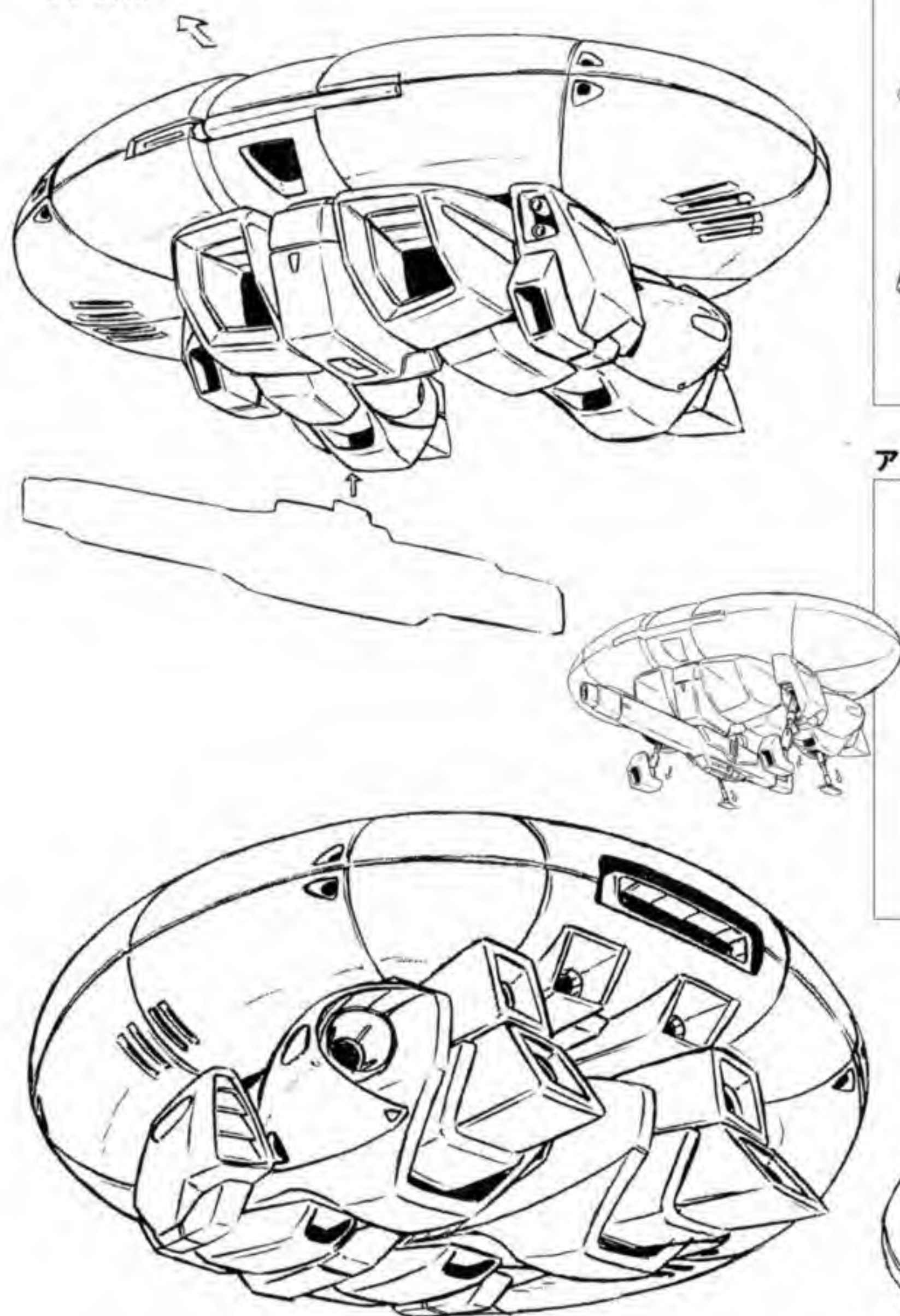




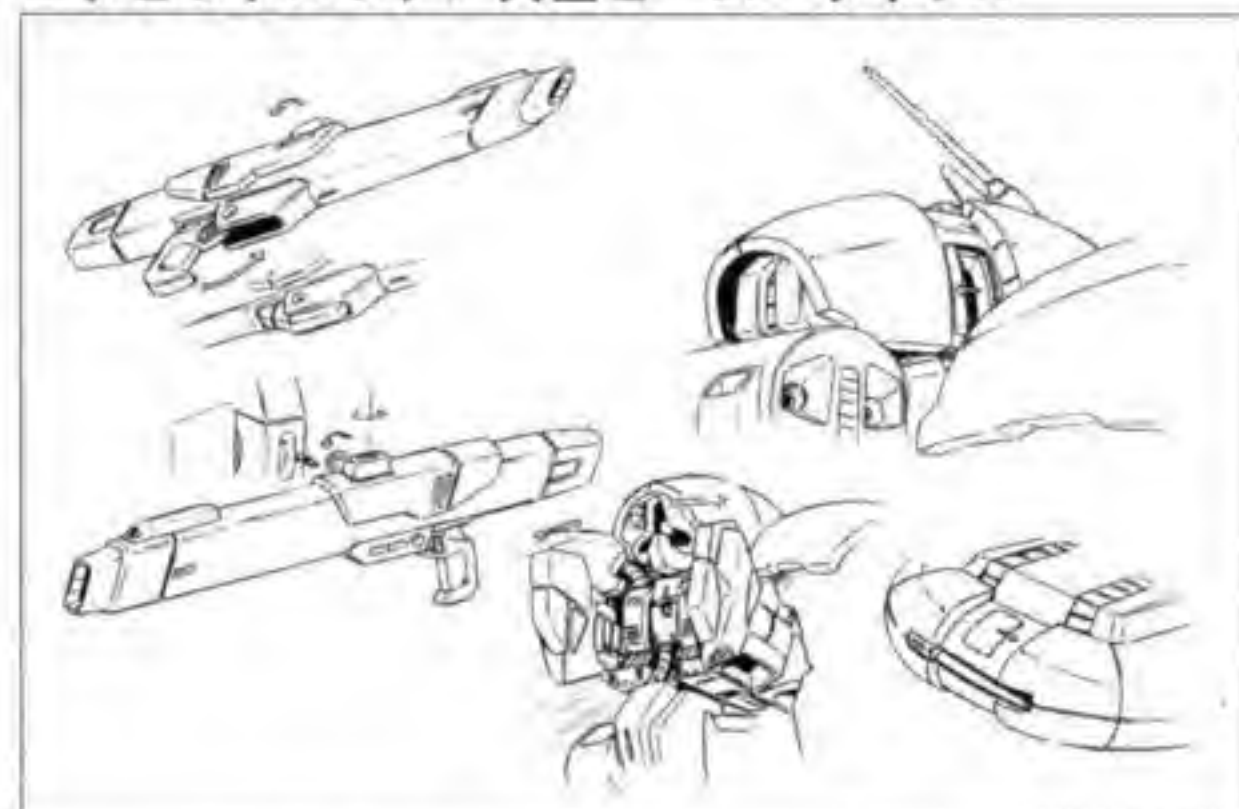
## NRX-044 アッシマー

地球連邦軍の可変MA。開発を主導したのはオークランドなどのニュータイプ研究所で、可変機構にはマグネット・コーティングを用いている。変形時間はたった0.5秒だが、展開中の胸部の装甲を狙われると機能不全に陥るという弱点がある。ただし、そうした弱点を突くといった芸当ができるのは、ニュータイプでもなければ不可能に近い。

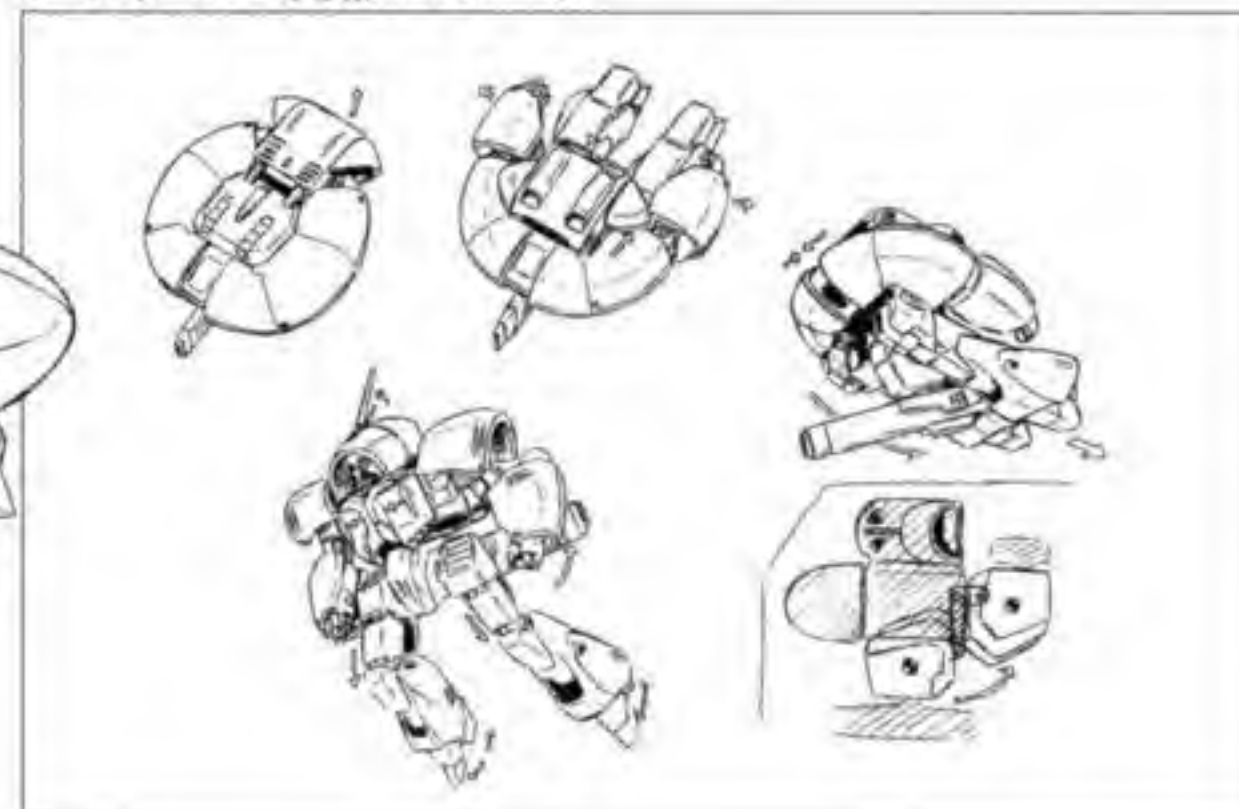
MA形態



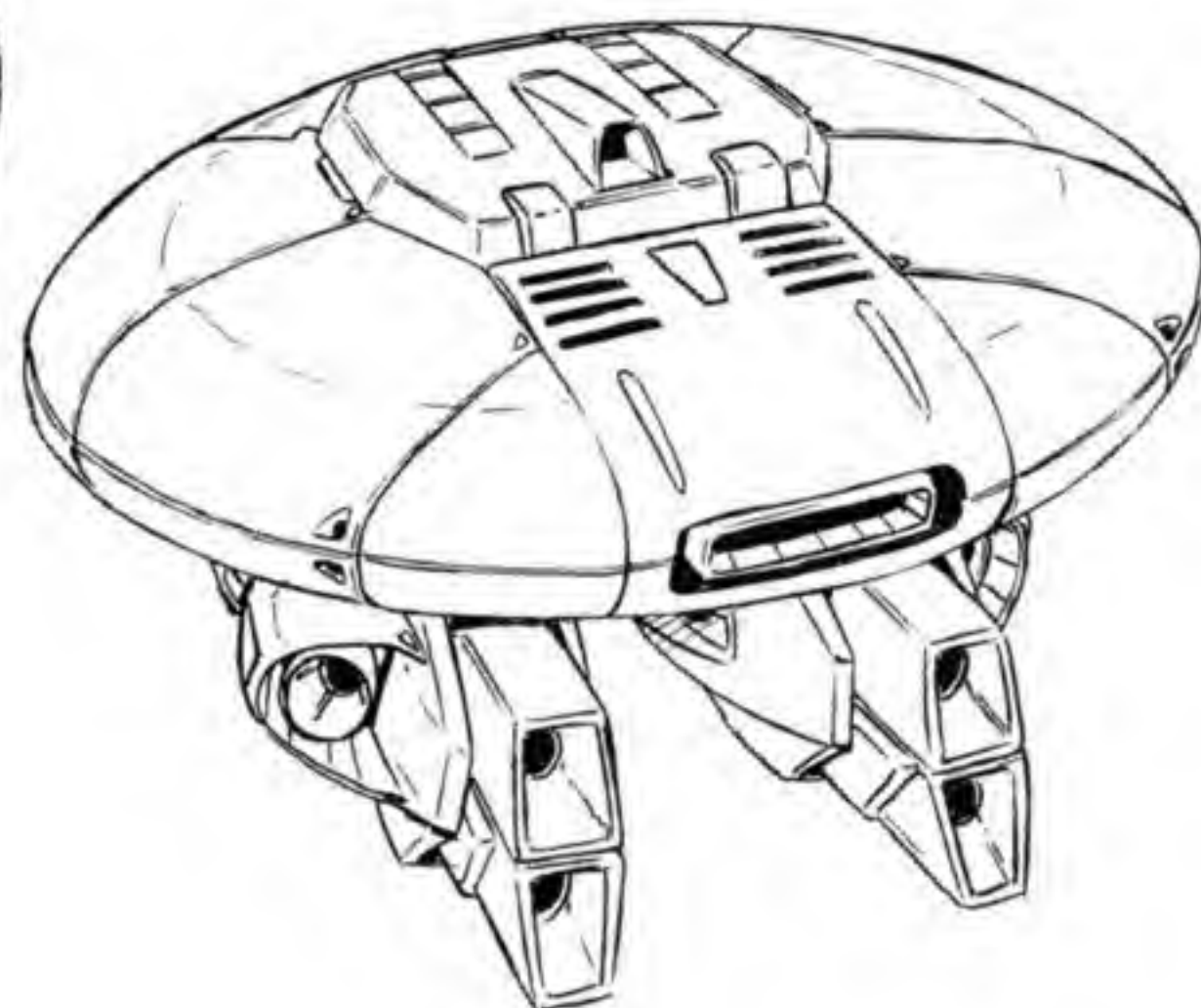
コクピットハッチ / 大型ビーム・ライフル



アッシマー変形パターン

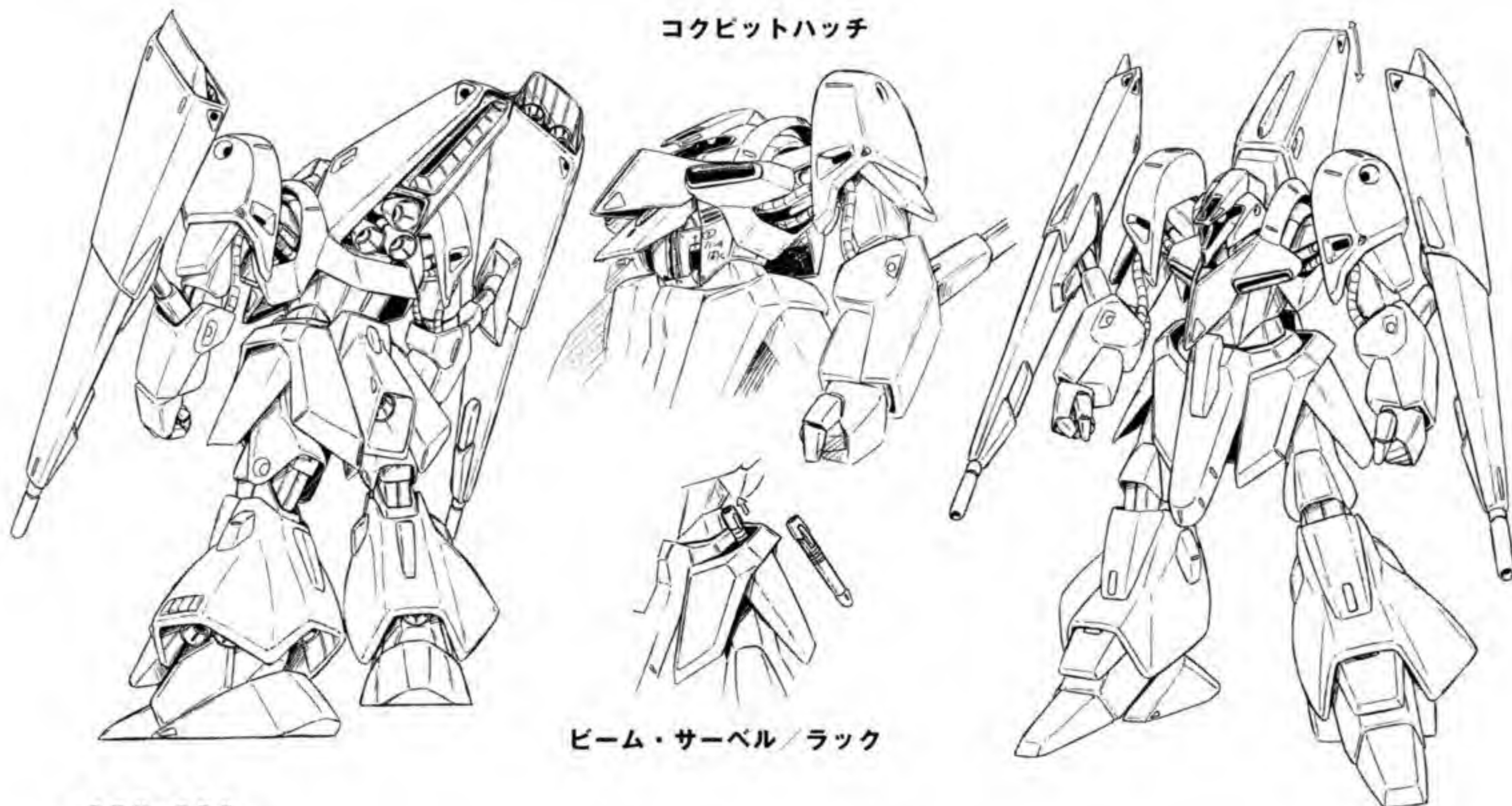


↑円盤型のシルエットが特徴といえるアッシマーのMA形態。円盤部分は主に上半身とバックパックが主体の構成だ。





コクピットハッチ



ビーム・サーベル / ラック

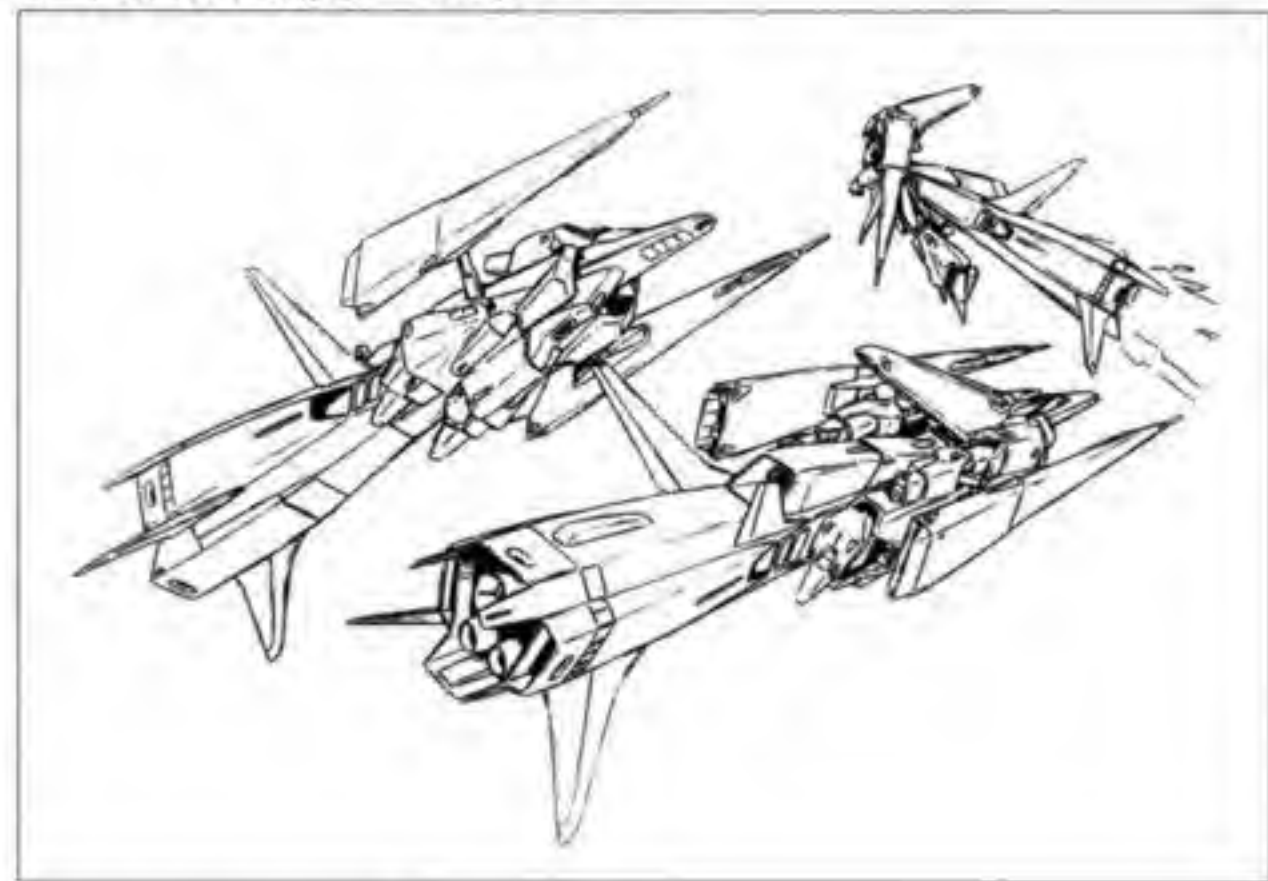
## ORX-005 ギャプラン

この機体も地球連邦軍に与するニュータイプ研究所が開発を手掛けた可変MA。大気圏内外を問わずに戦える高機動タイプだが、並の人間では扱うのが難しい機体である。宇宙での戦闘では、ヤザン・ゲートルが搭乗し、アーガマ以下、エゥーゴのメンバーを苦しめた。しかし、モニターの一部に死角があるという弱点があり、そこを突かれた際には敗走するしかなかった。

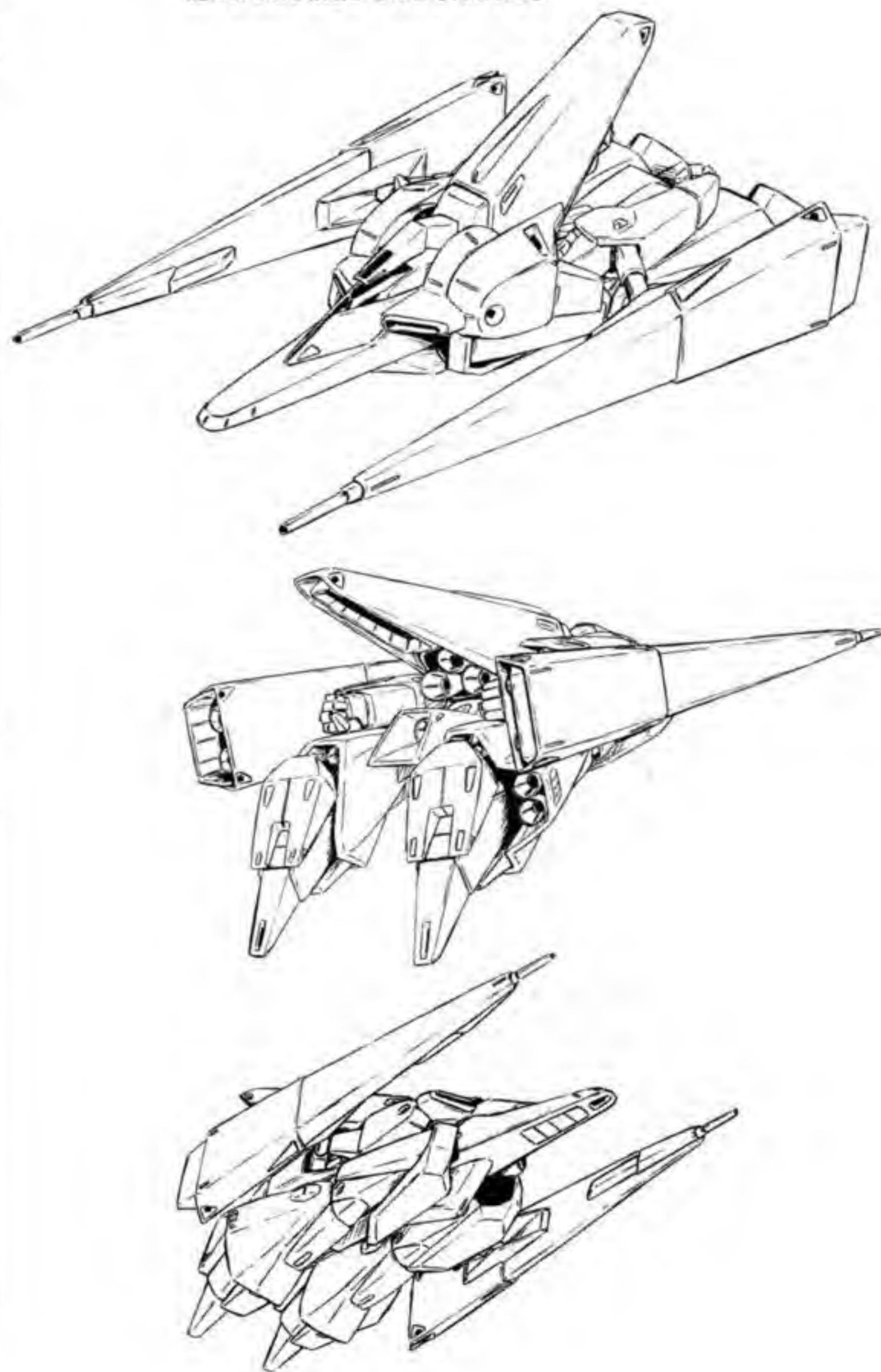
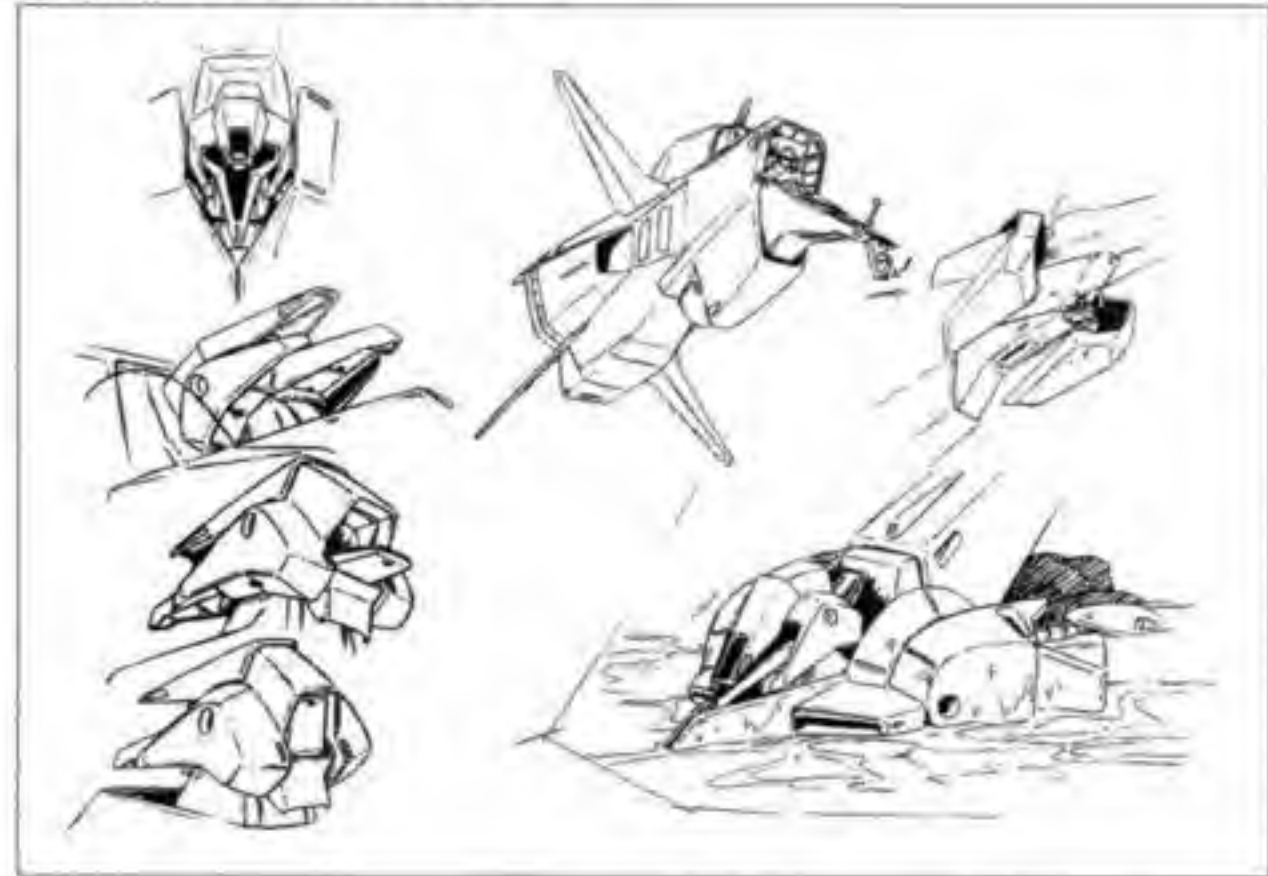
### MA形態

✚航空機のように空力特性で飛ぶというより、スラスターの推進力で飛んでいる印象だ。加速によるGも相当なものと考えられる。

### ギャプラン用ブースター

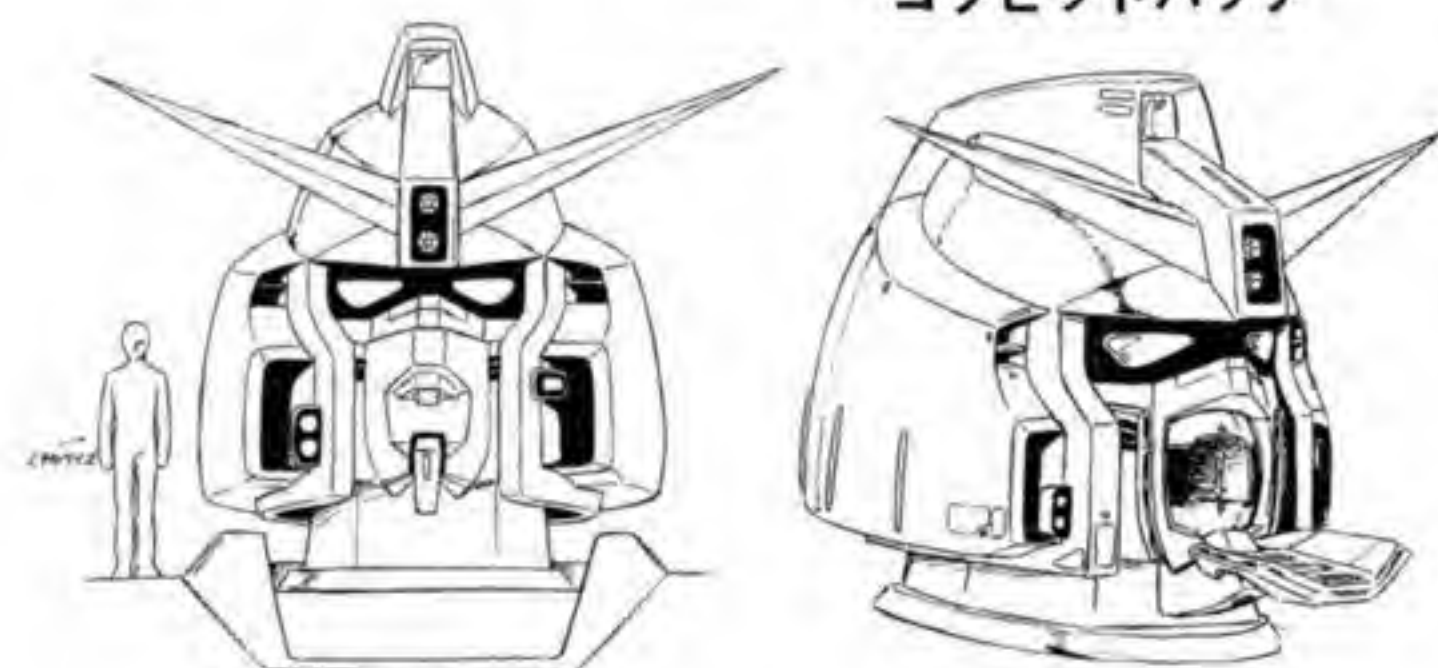


### MA時コクピットなど





コクビットハッチ

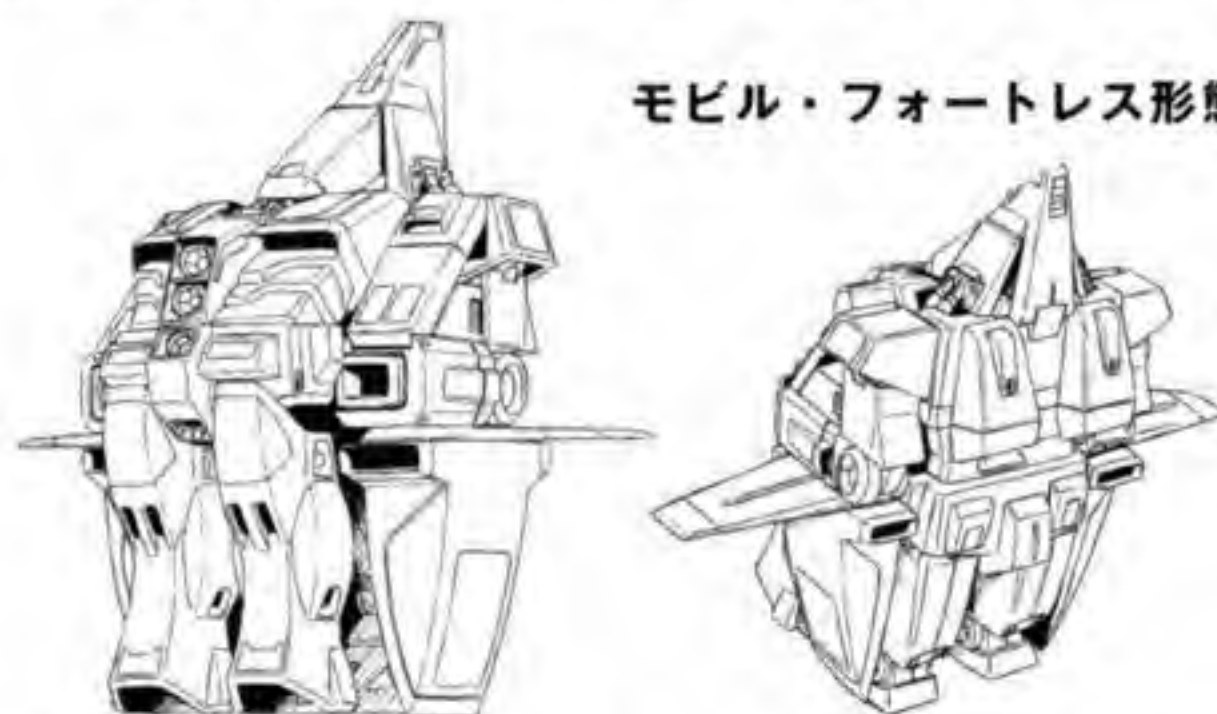


MRX-009

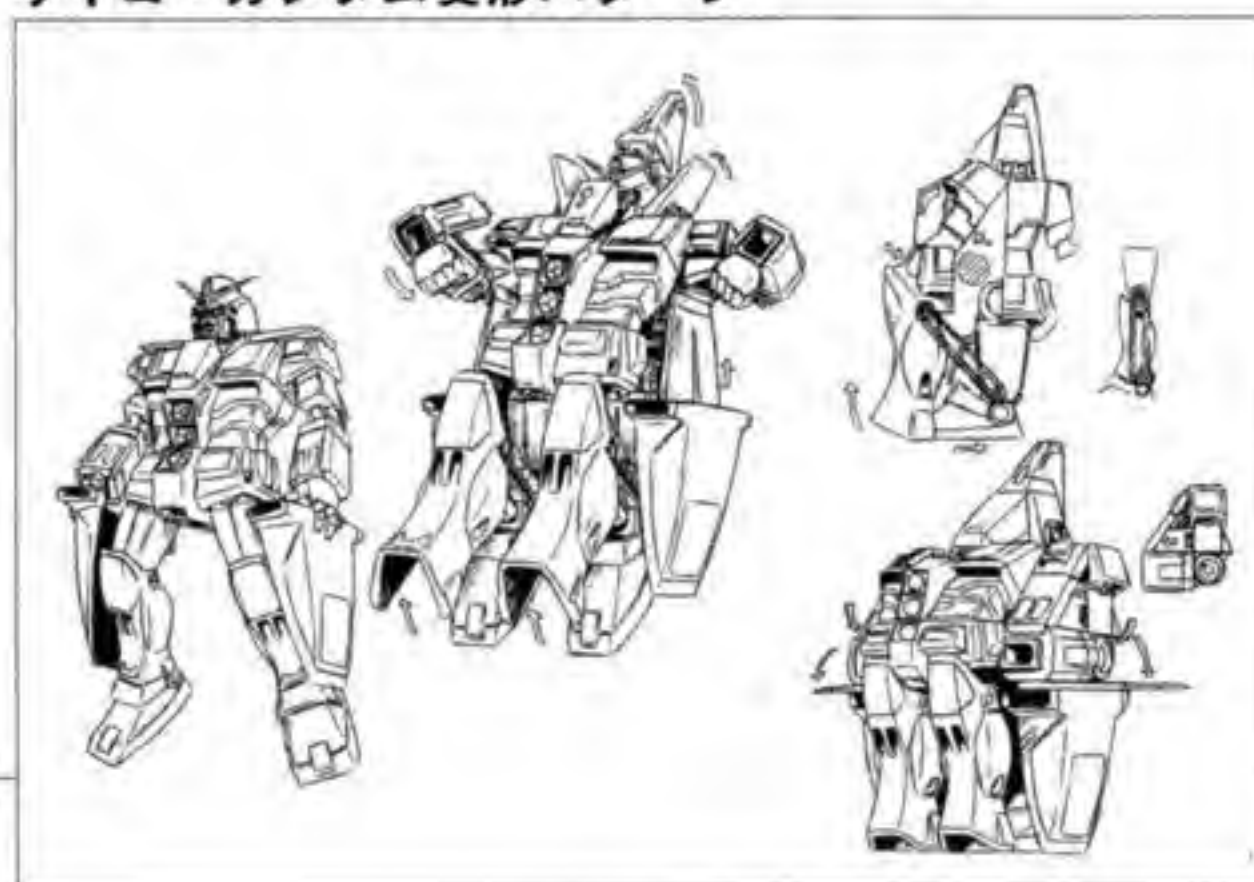
## サイコ・ガンダム

ニュータイプ研究所のひとつ、ムラサメ研究所で開発された可変MA。機体制御にサイコミュを用いる。そのため、操縦者には相応のニュータイプ能力が必要とされる。作中でも、不在のフォウ・ムラサメに代わって出撃したベン・ウッダーではまともに操作できなかった。また非人型（MA）時の形態はモビル・フォートレスと呼ぶ。

モビル・フォートレス形態



サイコ・ガンダム変形パターン

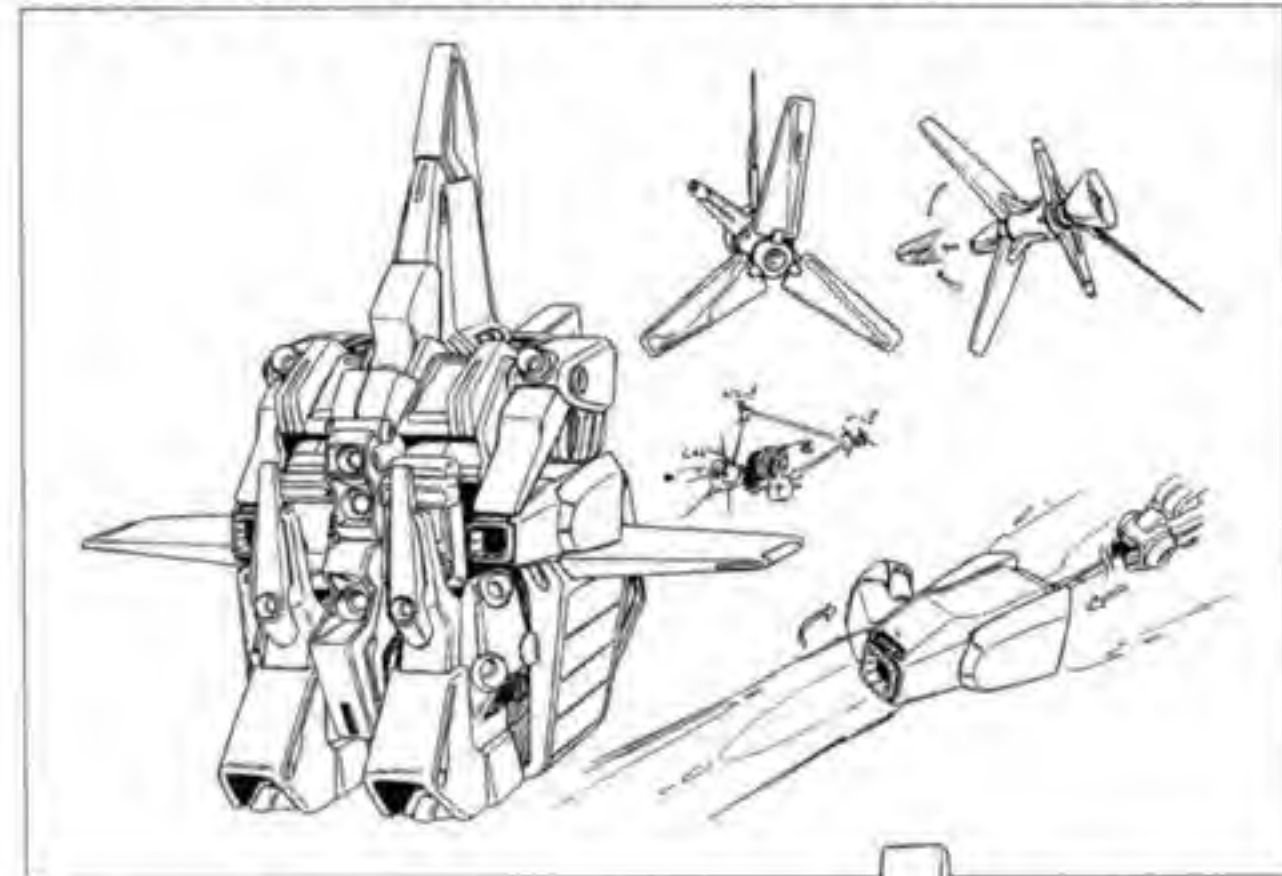


MRX-010

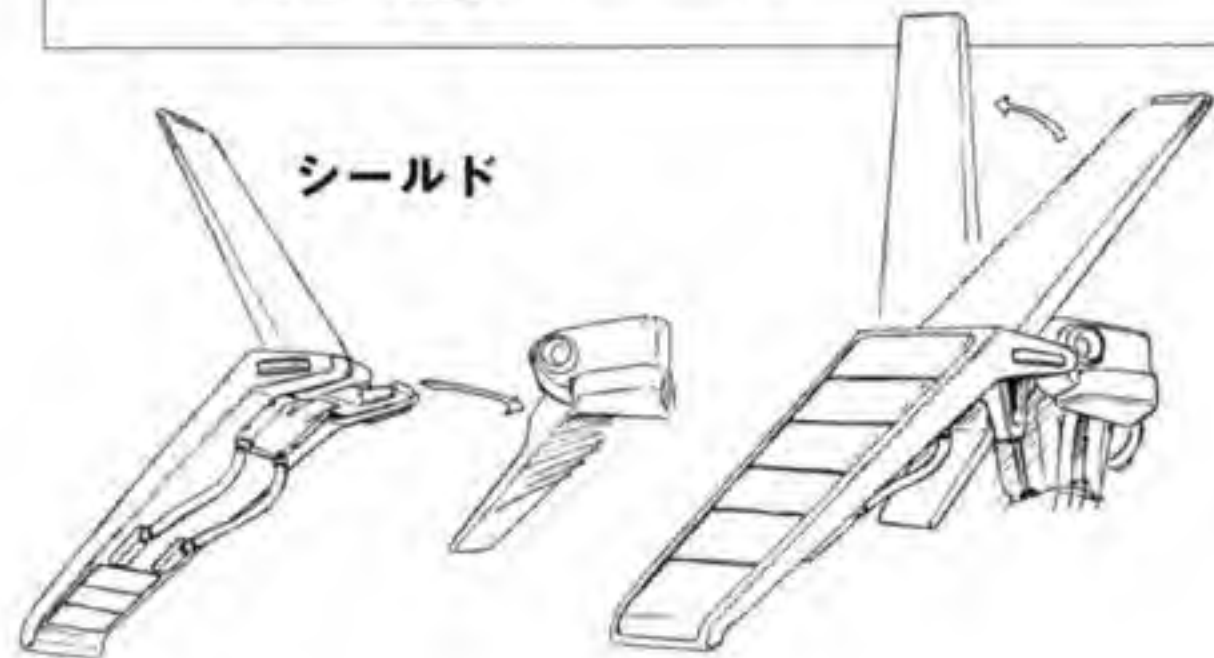
## サイコ・ガンダムMk-II

サイコ・ガンダムの発展型。基本的な制御システムはサイコ・ガンダム同様、サイコミュを導入しており、操縦には高いニュータイプ能力が必要となる。武装面もリフレクター・ビットやサイコミュ式ビーム・ソードなどを装備し強化されている。『Z』ではティターンズのロザミア・バダムの、次回作の『ZZ』ではネオ・ジオンのブルソーの搭乗機体となった。

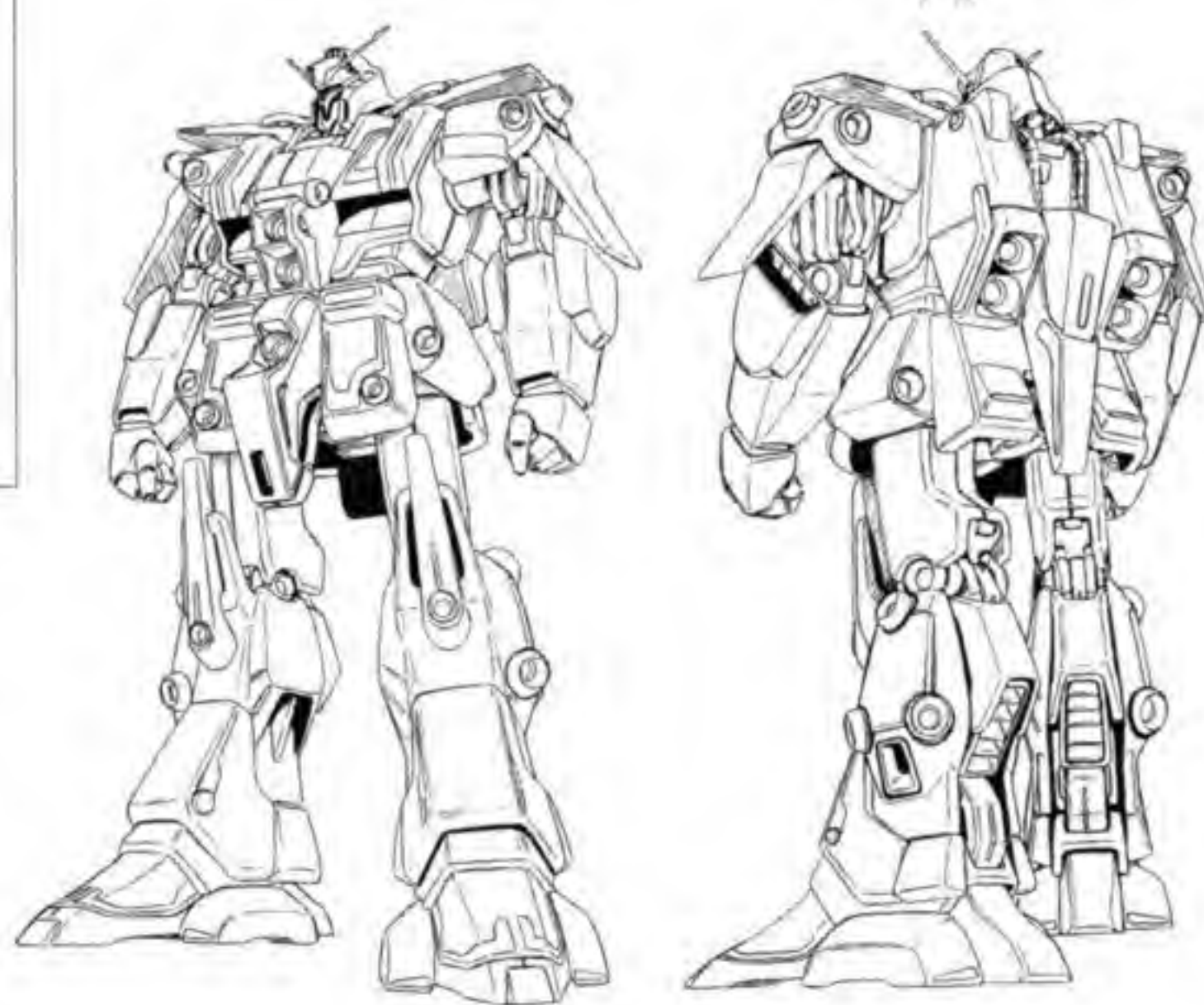
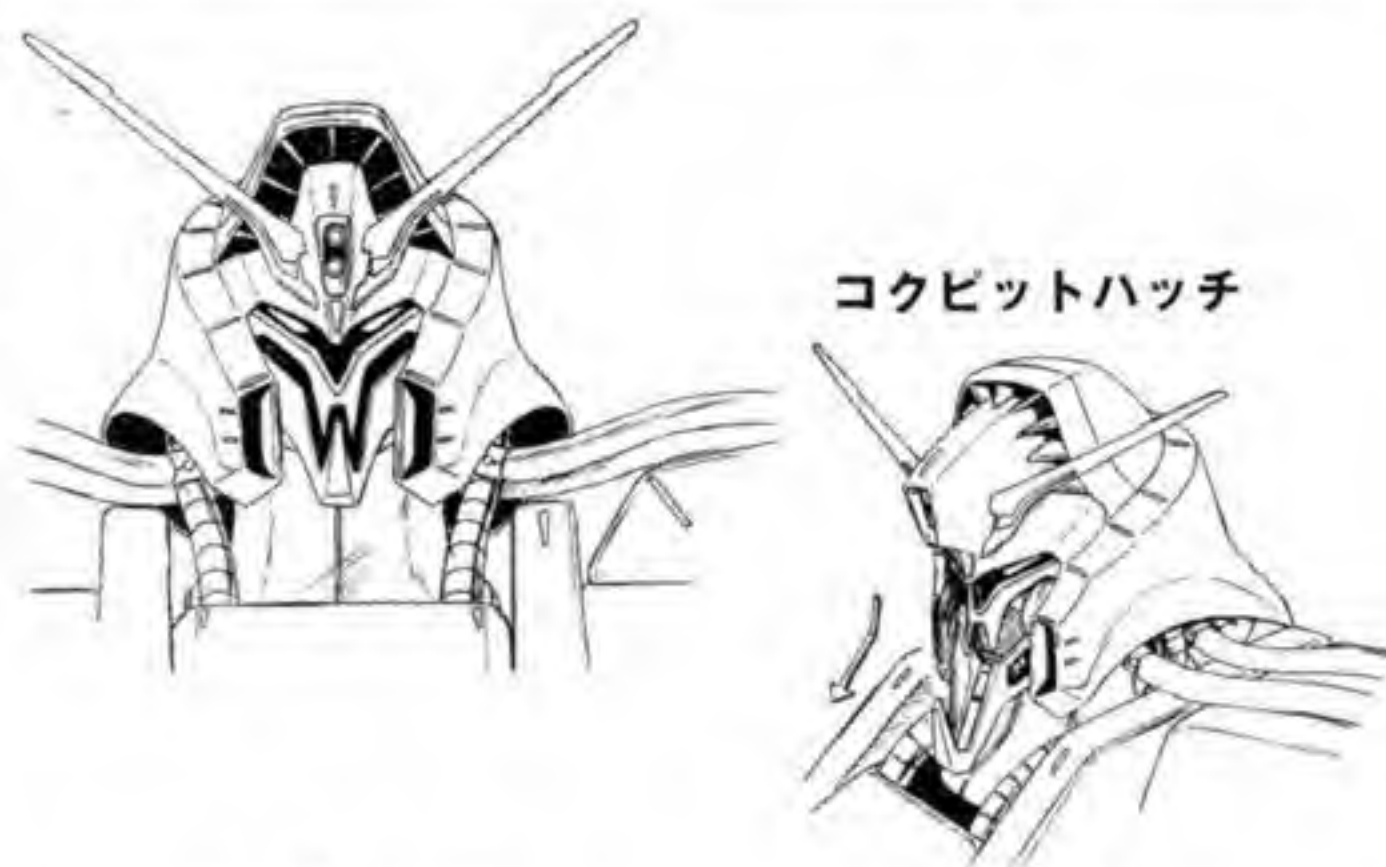
モビル・フォートレス形態 / リフレクター・ビットなど



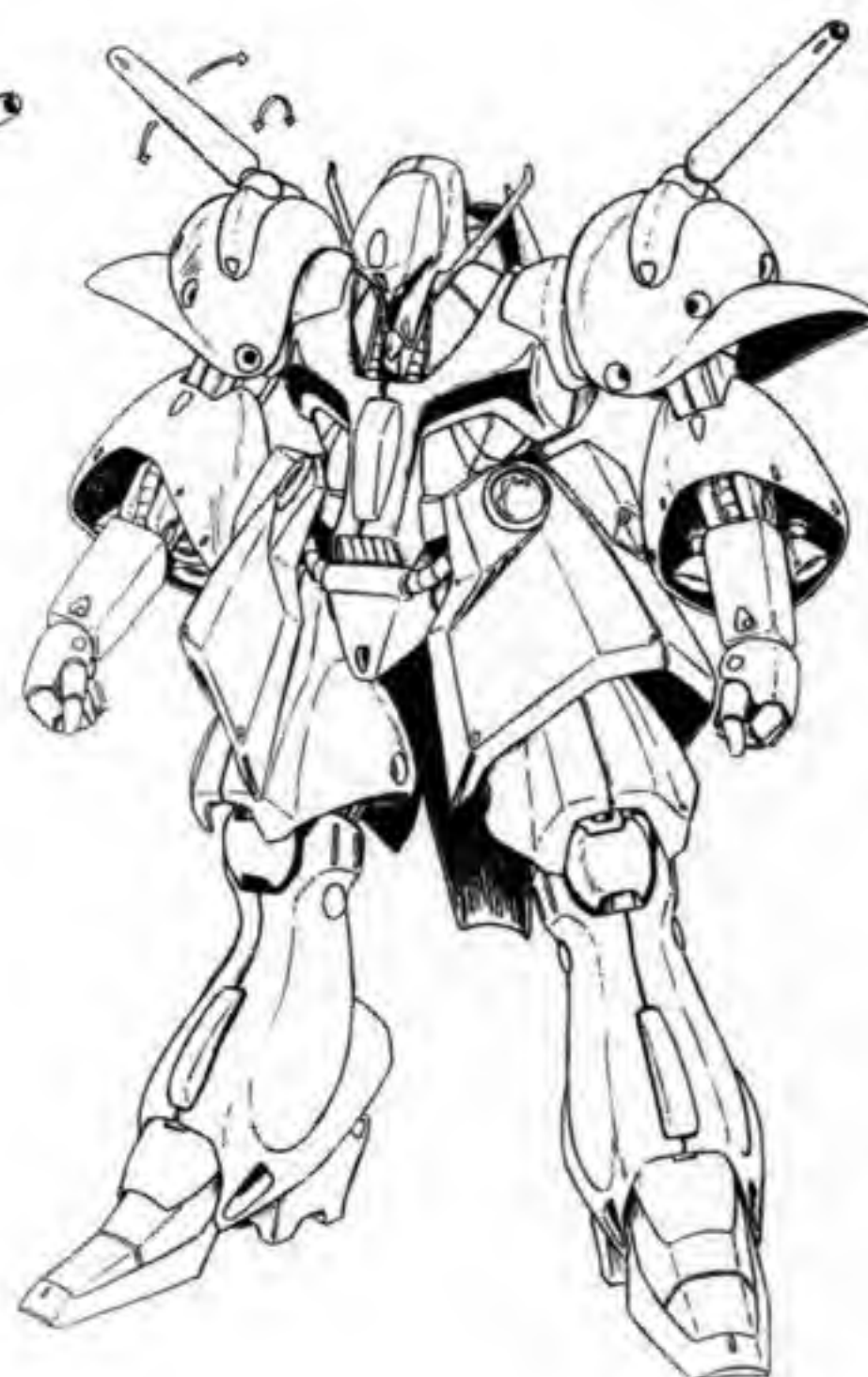
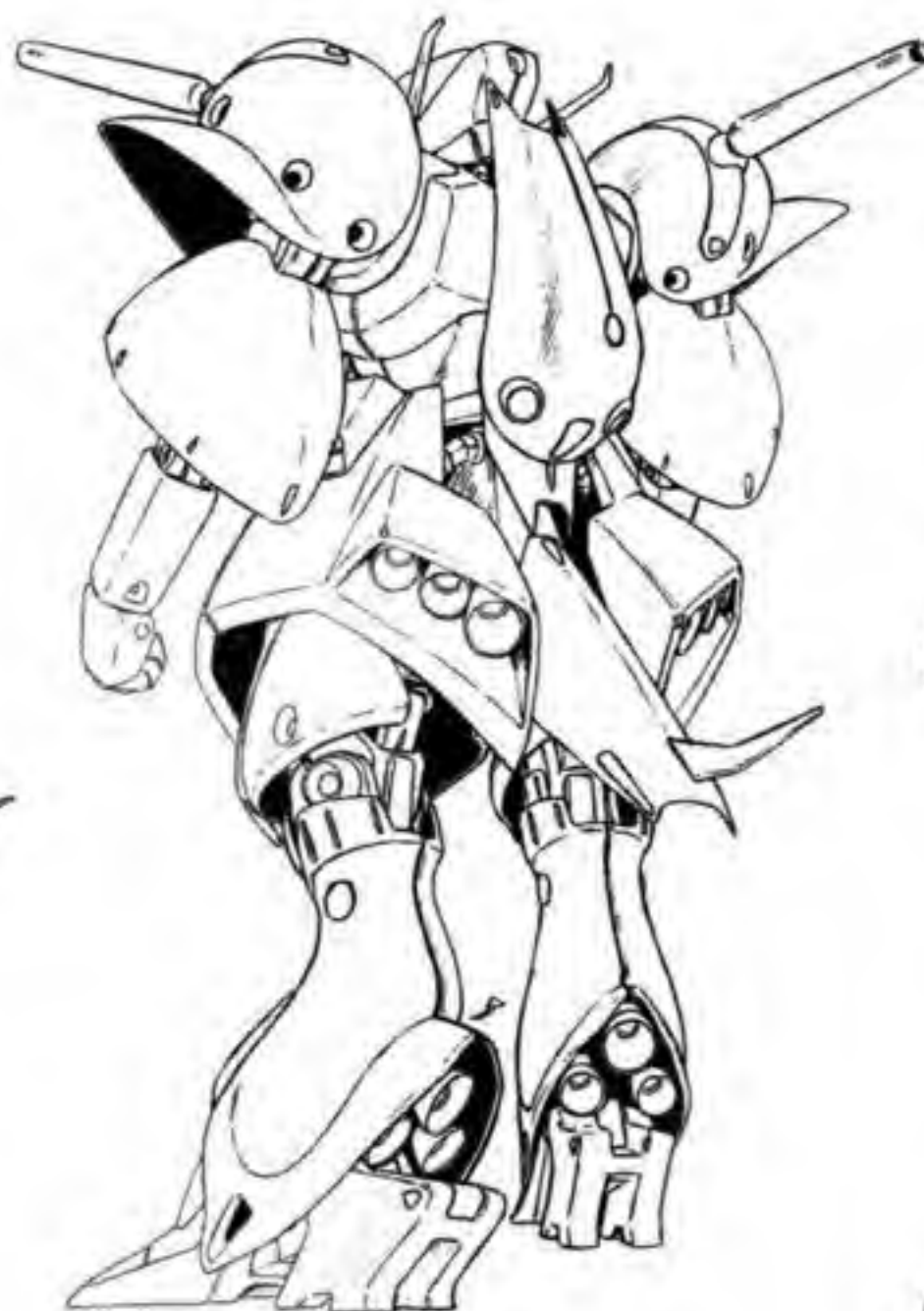
シールド



コクビットハッチ



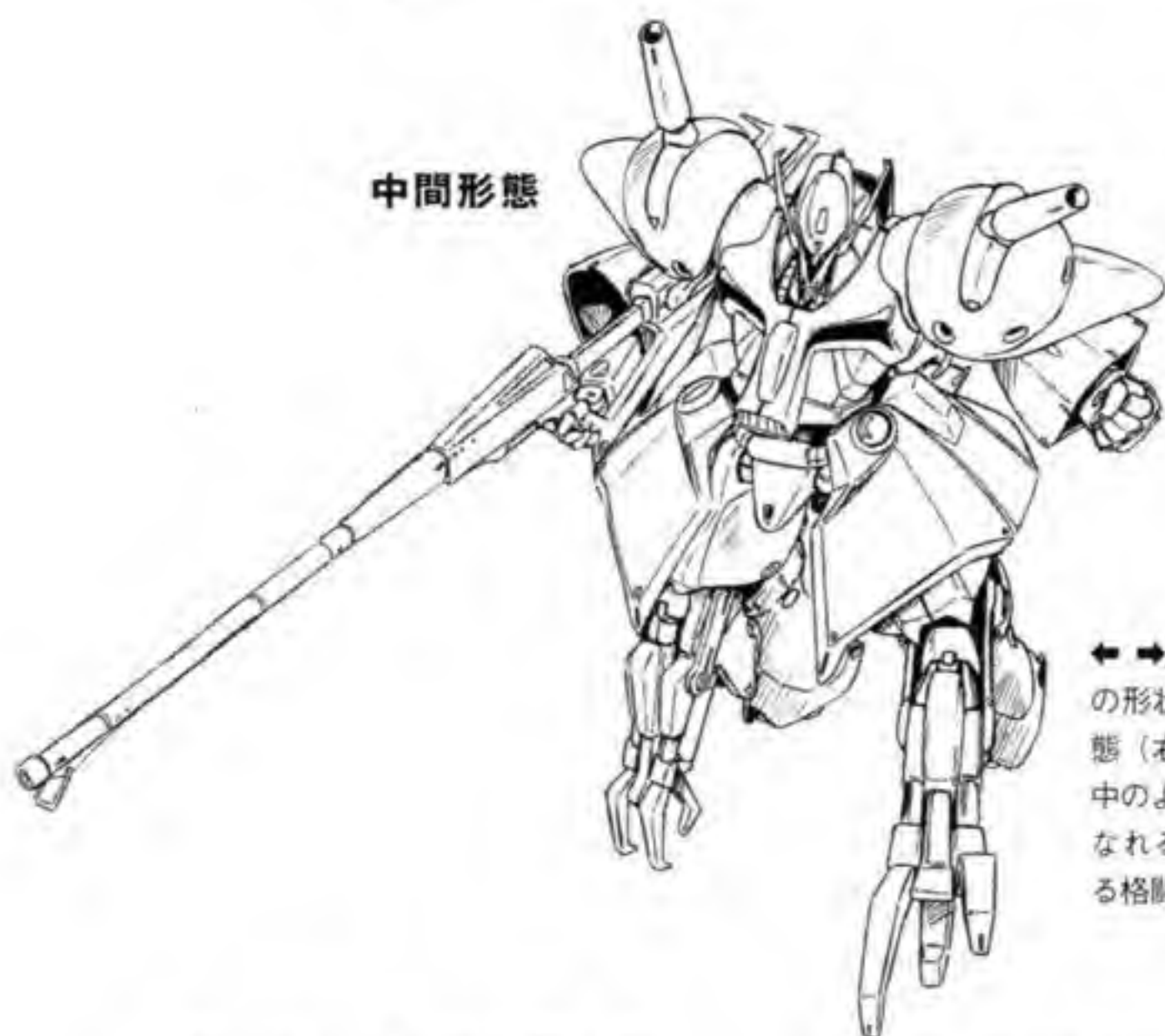




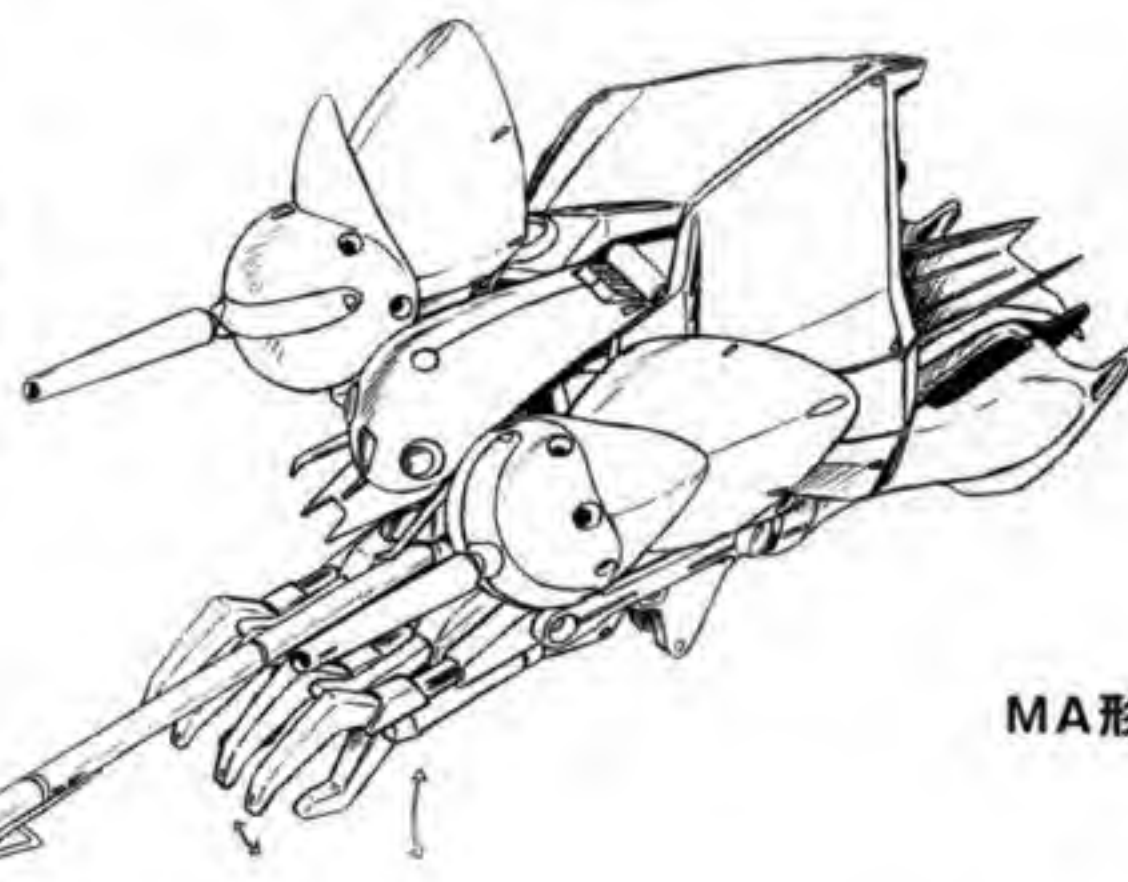
## RX-110 ガブスレイ

ティターンズの変態MS。型式番号からもわかるように開発はルナツーで行われた試作機である（シロッコの設計案が元になっているという）。機動性が高く、戦闘においては、マウアー・ファラオやジェリド・メサが搭乗し、ジェリドの乗機はカミーユ・ビダンのガンダムMK-IIを戦闘不能に追い込んだ。しかし、量産化はされることはなかった。

中間形態



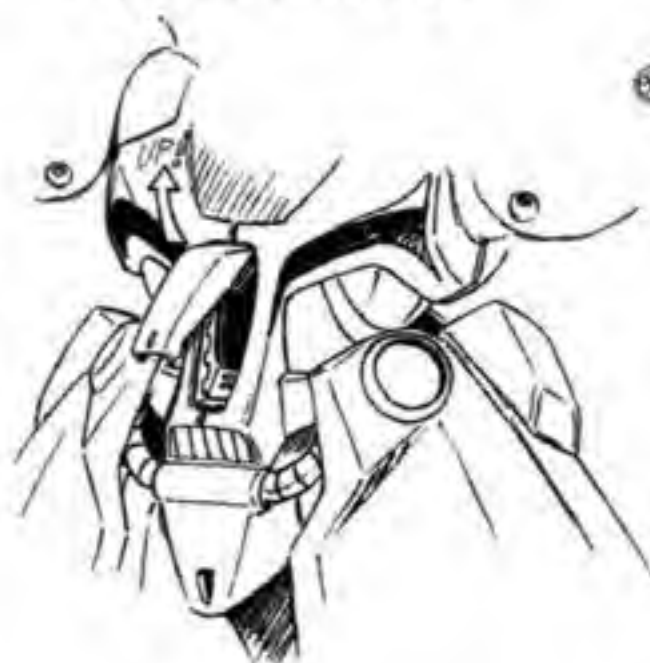
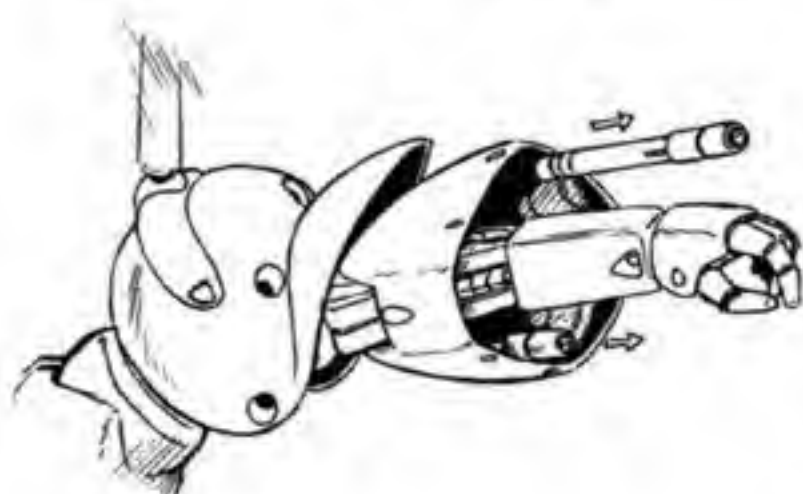
←→昆虫のような独特の形状が特徴的なMA形態（右）。また、変形途中のような中間形態にもなれる（左）。これによる格闘戦も可能だ。



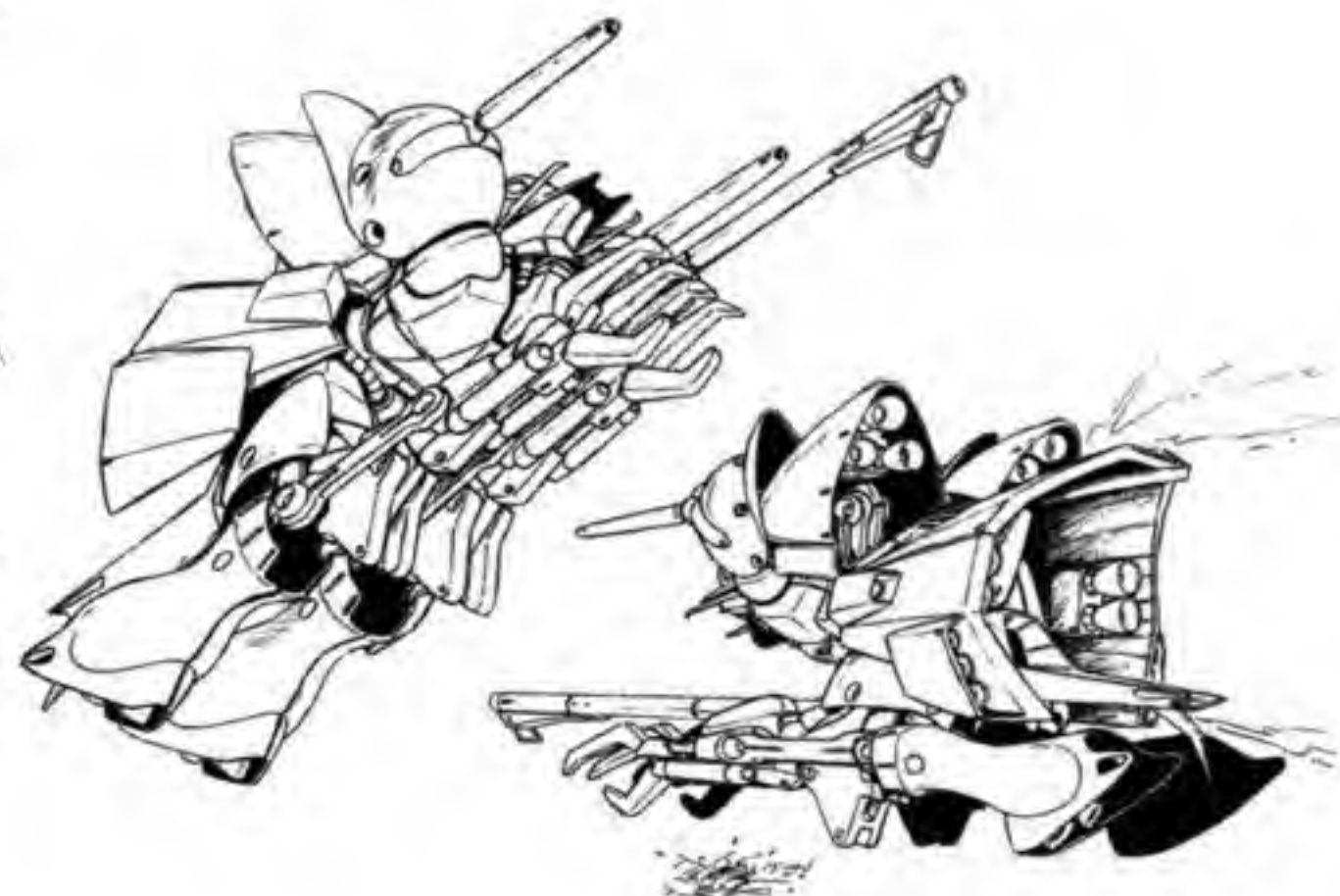
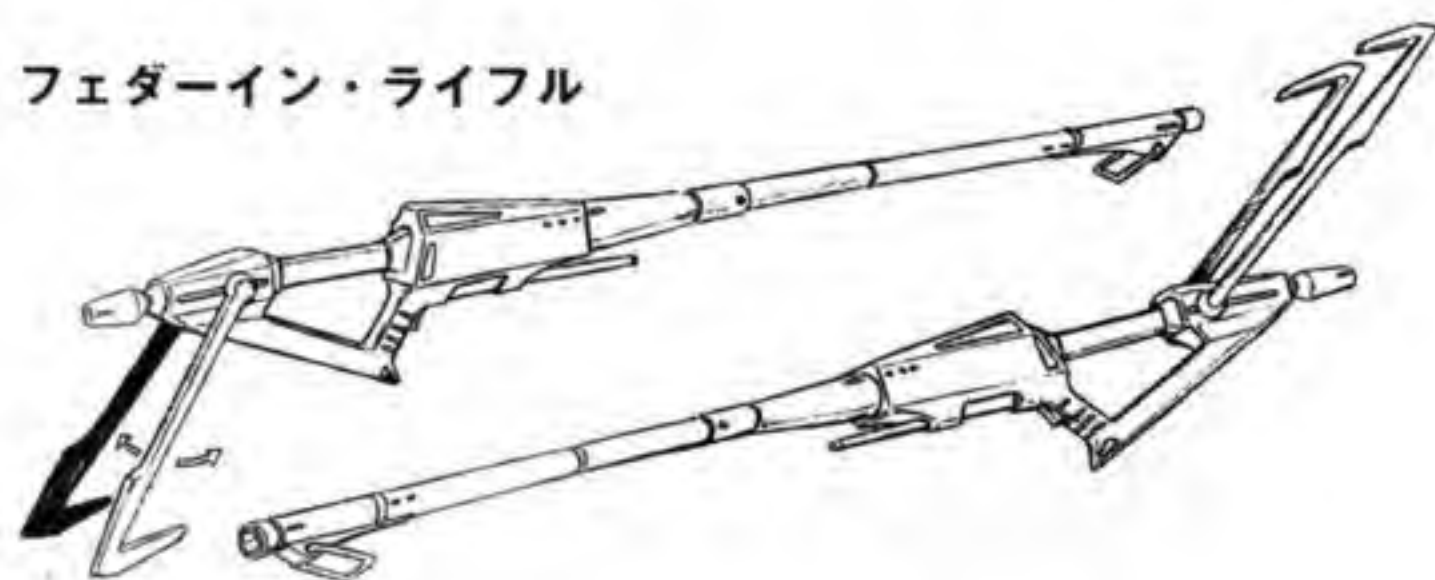
ビーム・サーベルラック

コクピットハッチ

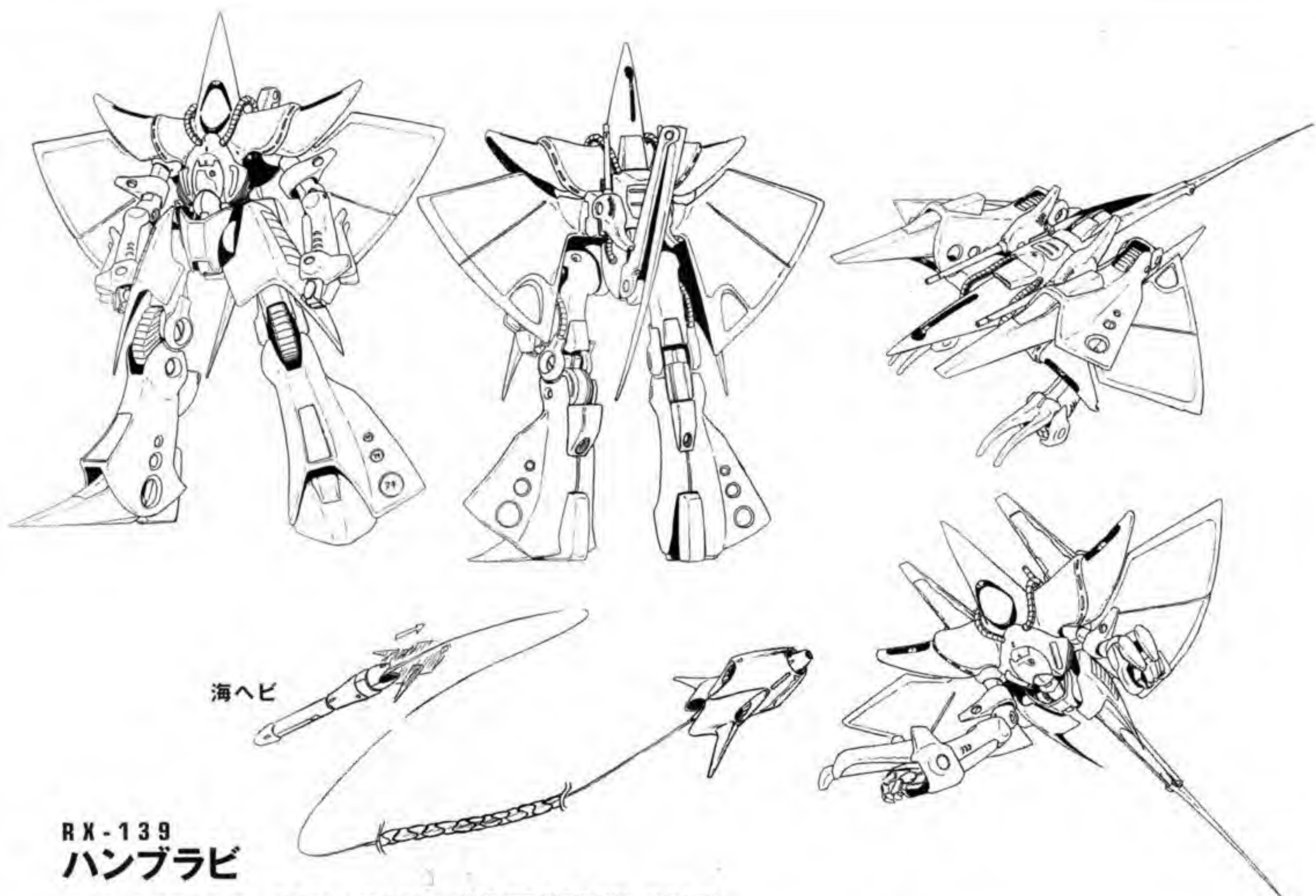
MA形態



フェダーイン・ライフル





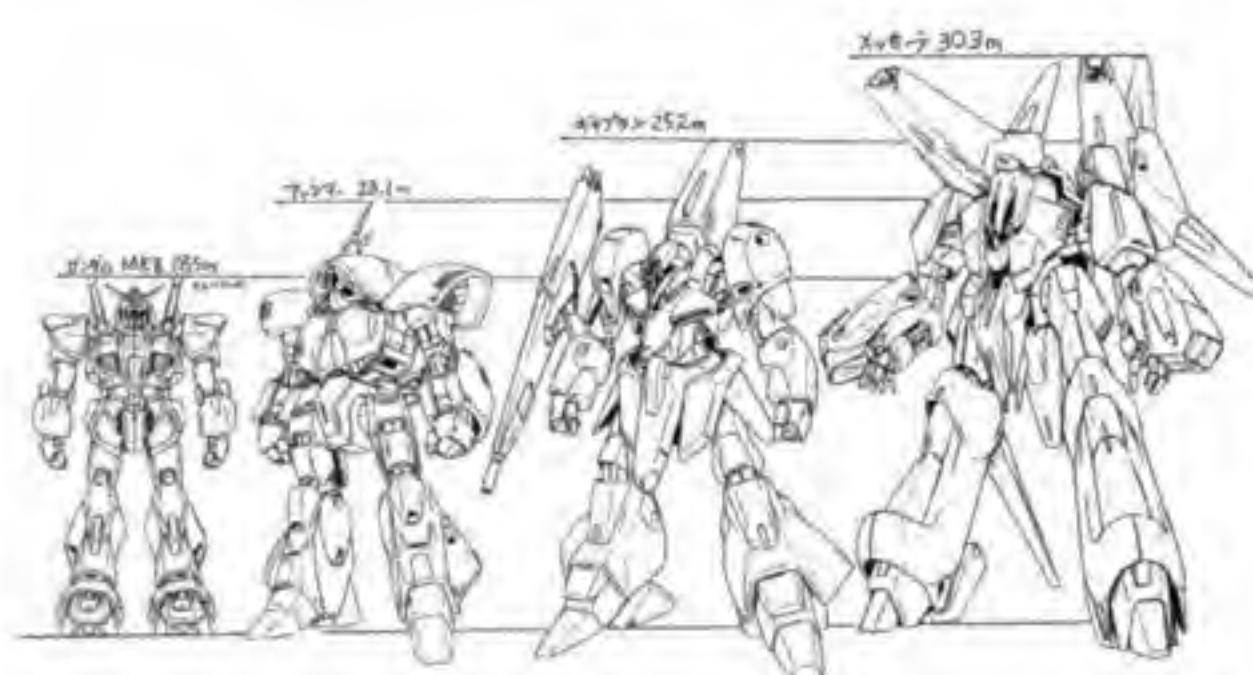


## RX-139 ハンブラビ

ティターンズの可変MS。ガブスレイなどと比べて簡易な可変機構だが、かなり高い機動性を発揮する。海ヘビやクモの巣といった特殊兵器を装備し、敵を翻弄する戦法が得意。主な搭乗者は、三位一体のコンビネーション攻撃で知られる、ヤザン・ゲートル、ラムサス・サハ、ダンケル・クーバーなど。なおヤザン以外はグリプス戦役で戦死している。

### MA形態

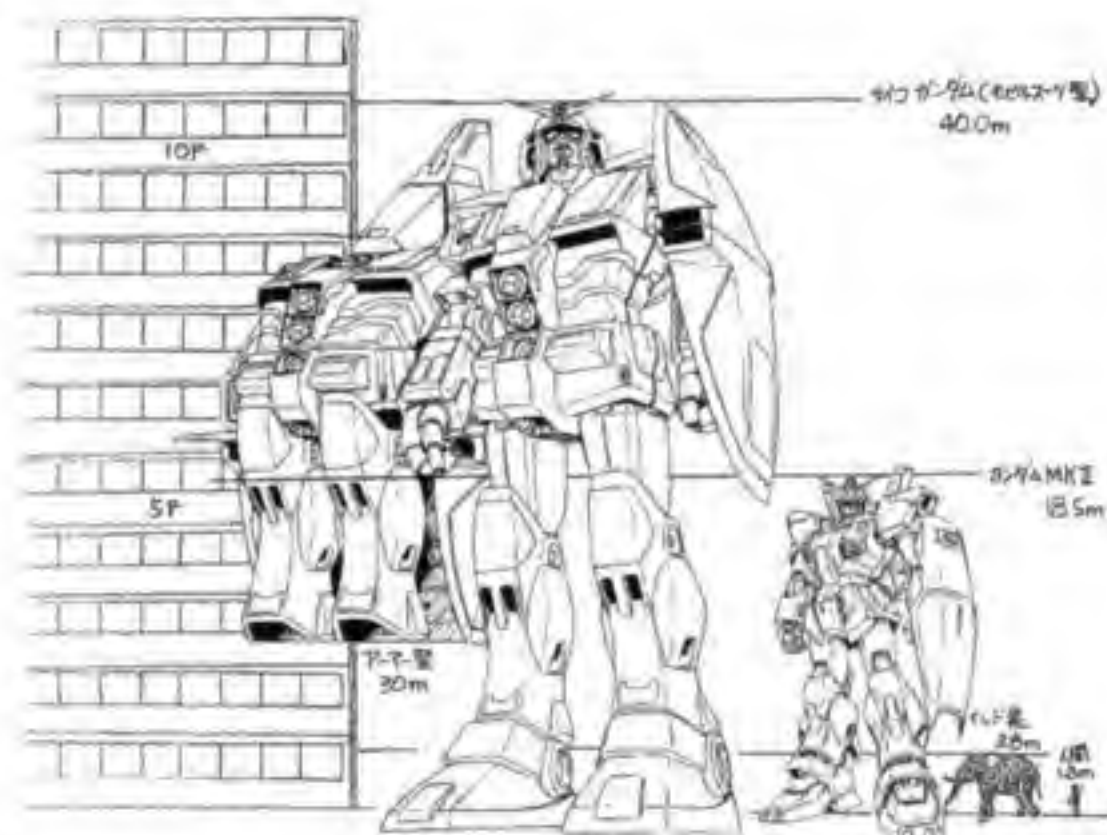
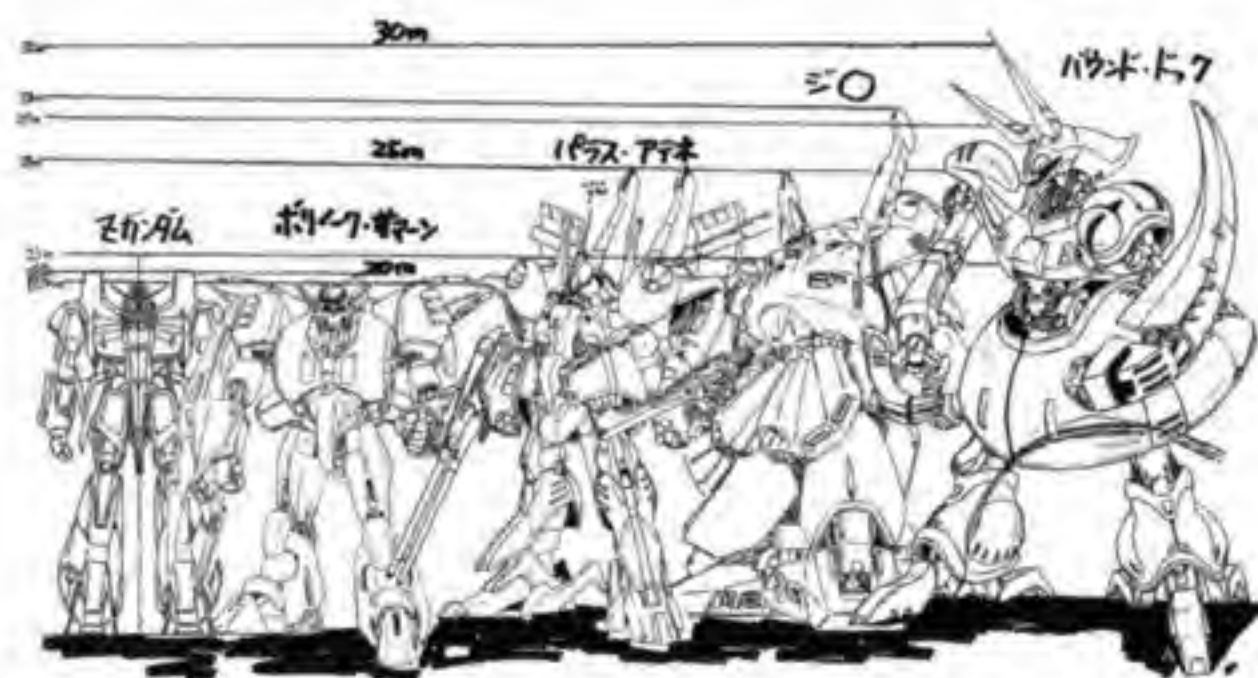
↑エイのような形状が特徴といえるハンブラビのMA形態。機体後部に伸びるテール・ランスはMS形態でも使用可能である。



←作中に登場する各機体のサイズによる対比を表した設定線画。あくまで作画参考用に描かれたものだが、メッサーラが群を抜いて高いのがわかるだろう。ガンダムMk-IIとは大人と子供ほどのサイズ差を感じる。

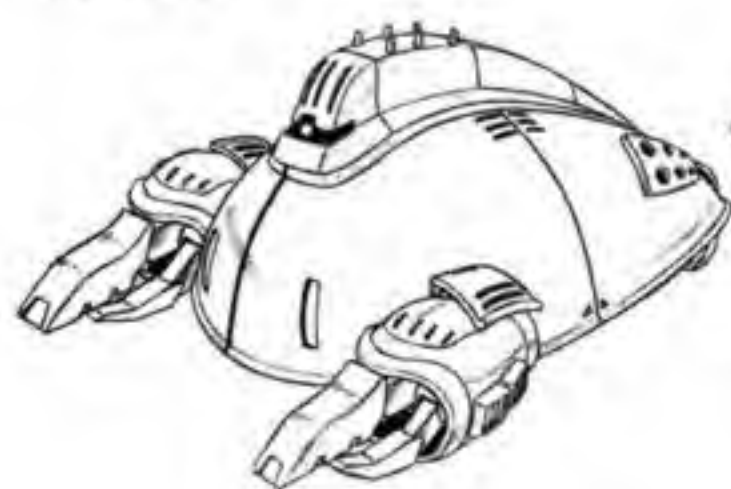
## MS サイズ対比

↓下は作中でも破格のサイズといえるサイコ・ガンダムのサイズを表した対比表である。とにかく巨大というのがわかる。インド象と人の対比が面白い。左下は作中終盤に登場する機体を比較した設定画だ。やはりバウンド・ドックは飛び抜けて大きい。

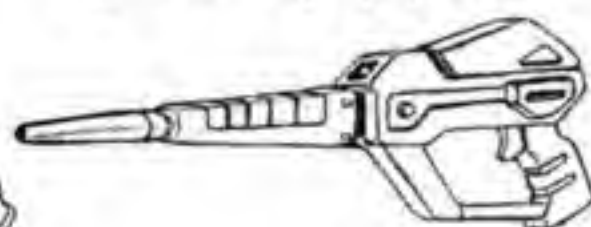




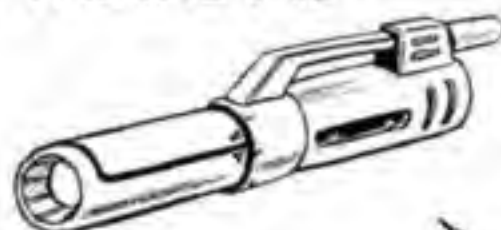
MA形態



ビーム・ライフル

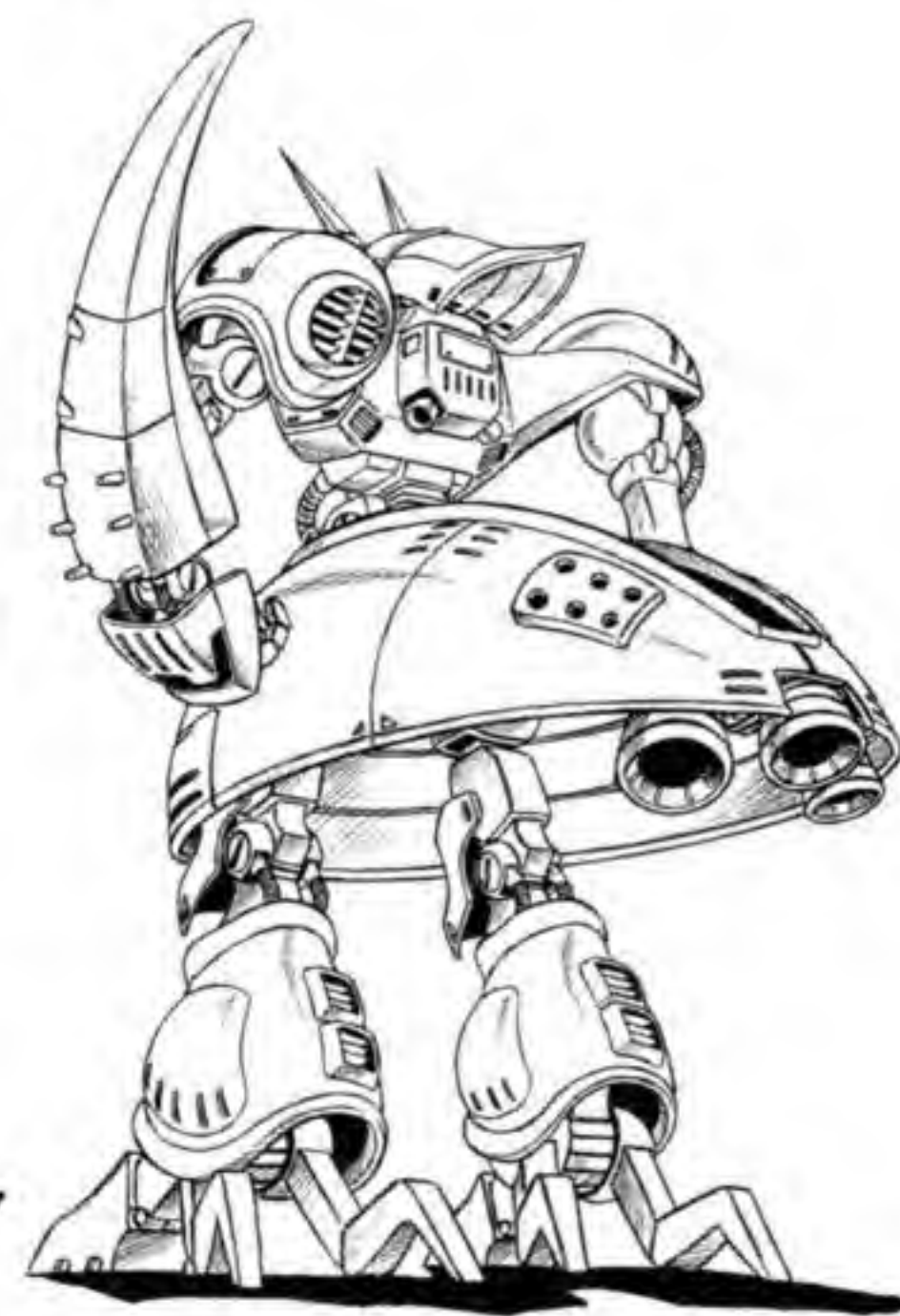
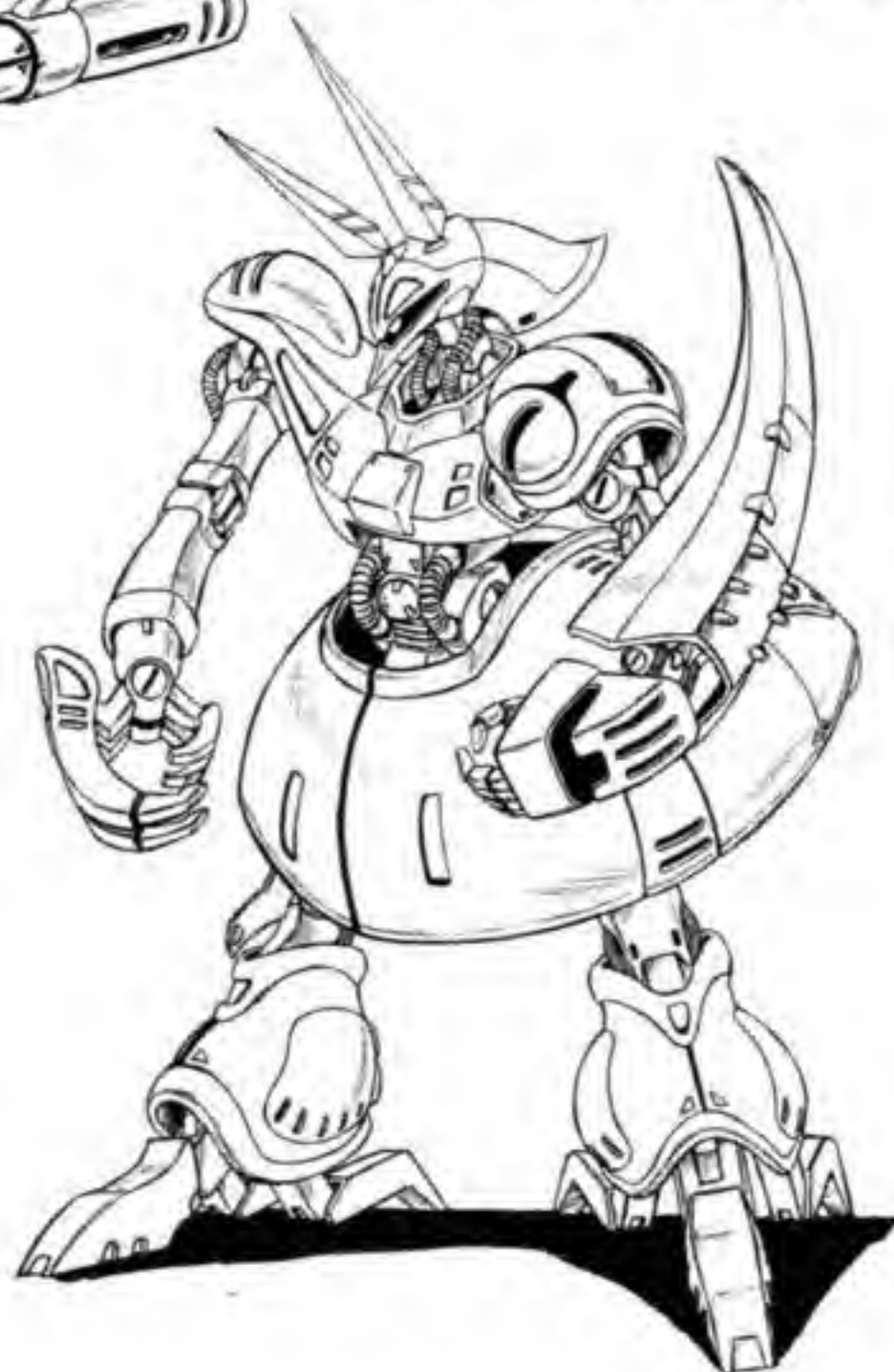
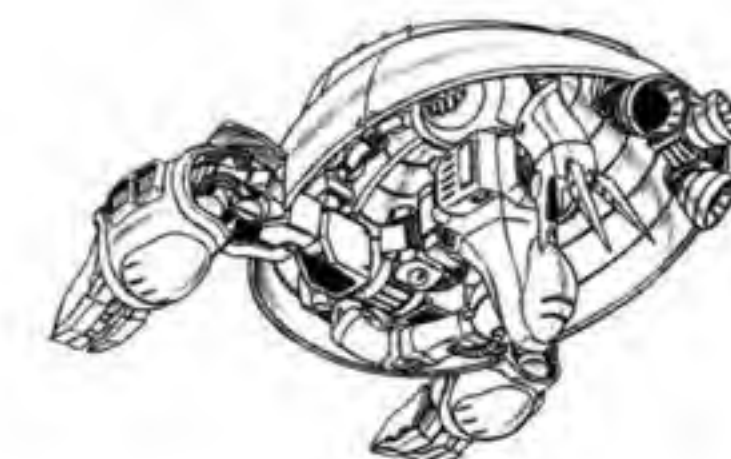


メガ拡散粒子砲



## NRX-055 バウンド・ドック

地球連邦軍の可変MA。ニュータイプ専用機として開発され、機体制御用デバイスにサイコミュを用いている。テスト機にはサブパイロット用のシートが設置されていた。ロザミア・バダムやジェリド・メサなどが搭乗した。ジェリドの最後の乗機でもある本機だが、彼のニュータイプ能力の有無に関して、その詳細は明らかにされていない。



## 機動戦士ガンダムZZ [86年]

MA形態

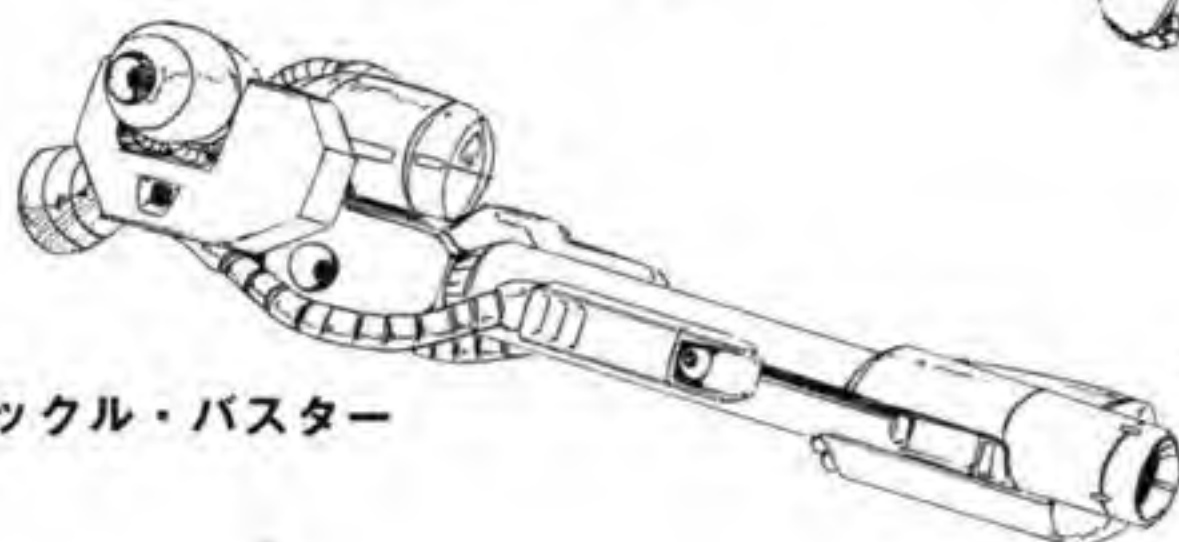
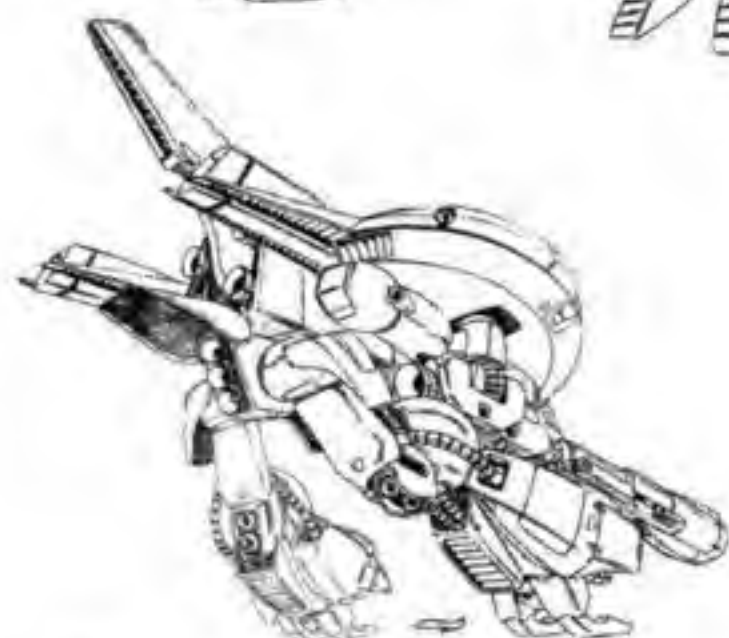


ミサイル弾体

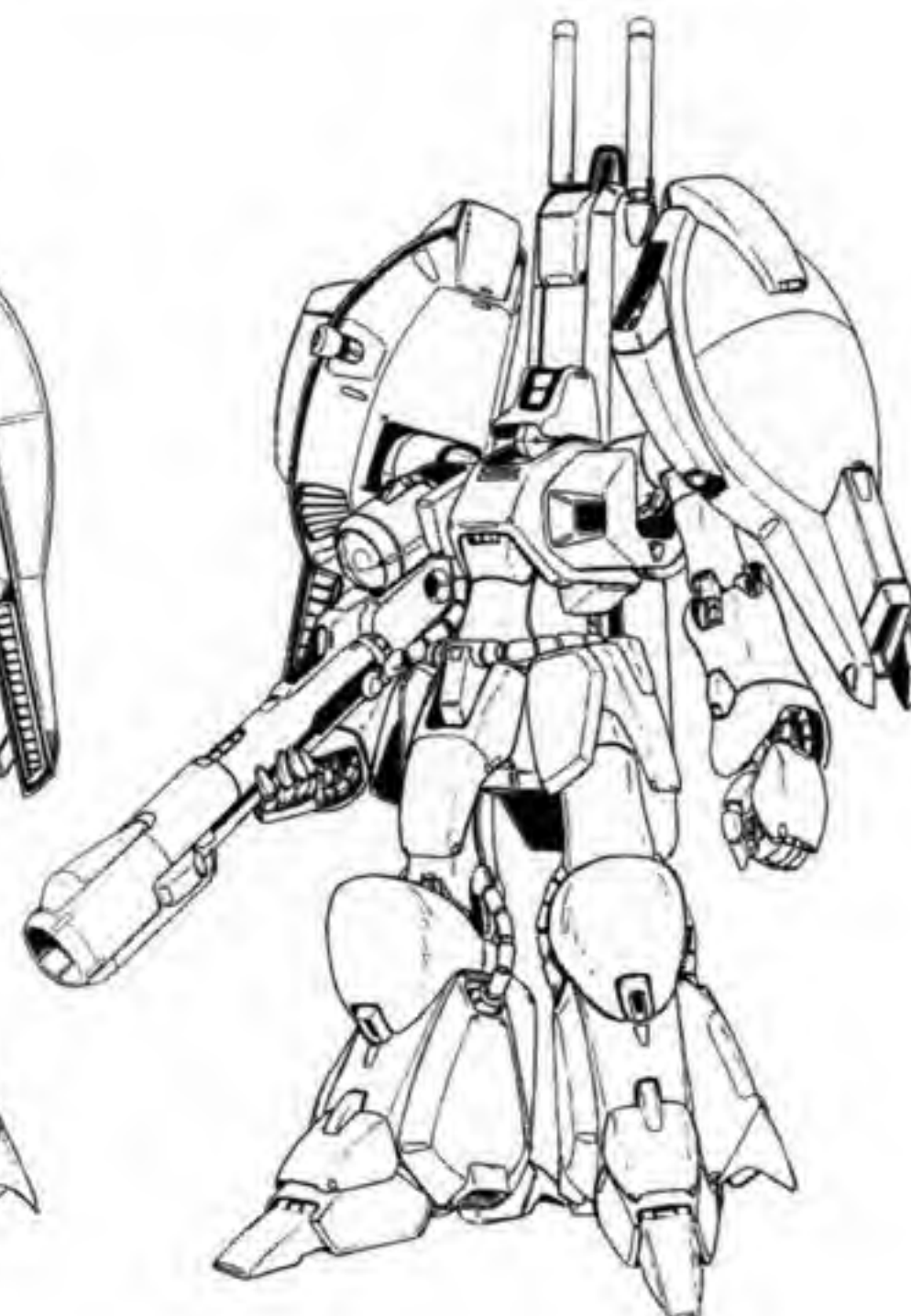
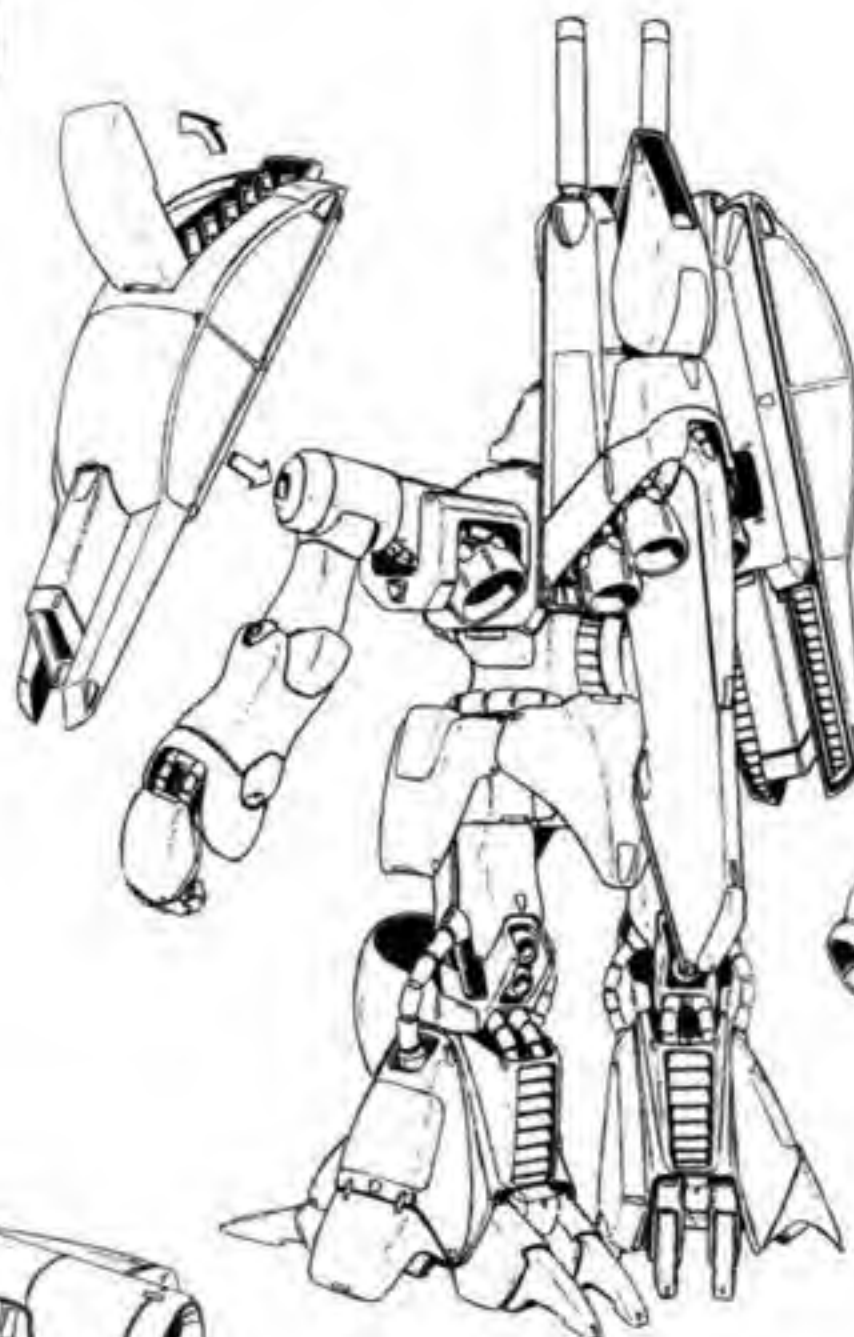


## AMX-006 ガザD

全体の機体構成などは、前身のガザCを踏襲する強化型の後継機。ミサイル・ポッドを備えたシールドの装着位置やMA時に追加されたセンサーユニット、ナックル・バスターの形状など細かい点で改修されている。エンドラ隊所属の「ガザの嵐隊（バンバ・リダ、ワイム、ピアン）」などが搭乗している。



ナックル・バスター



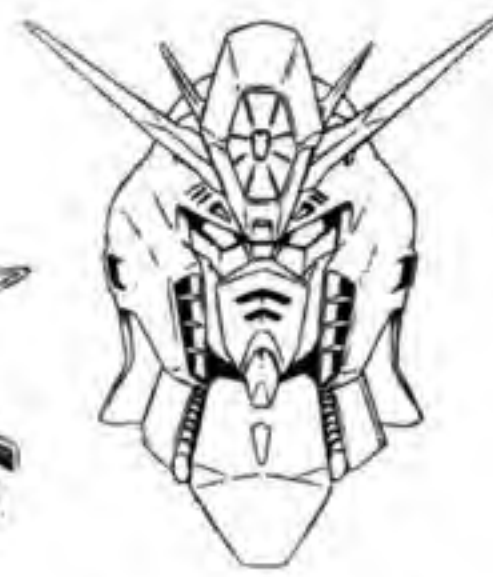




コア・トップ



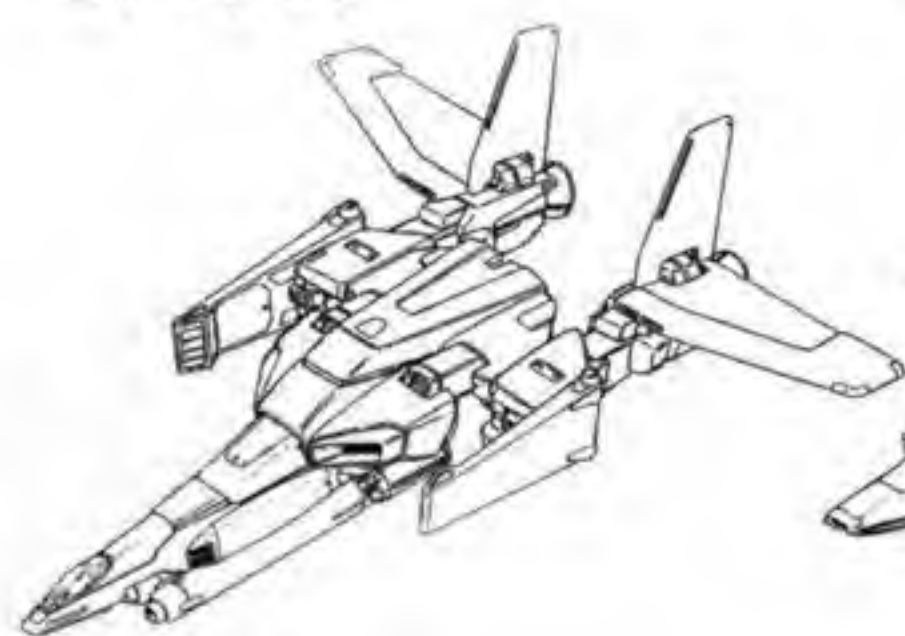
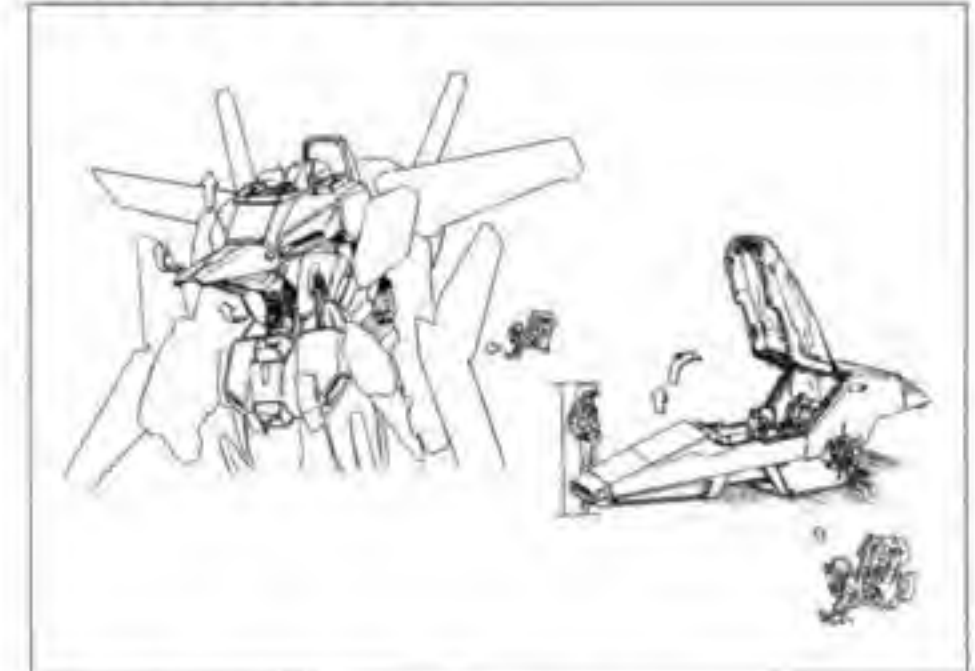
コア・ベース



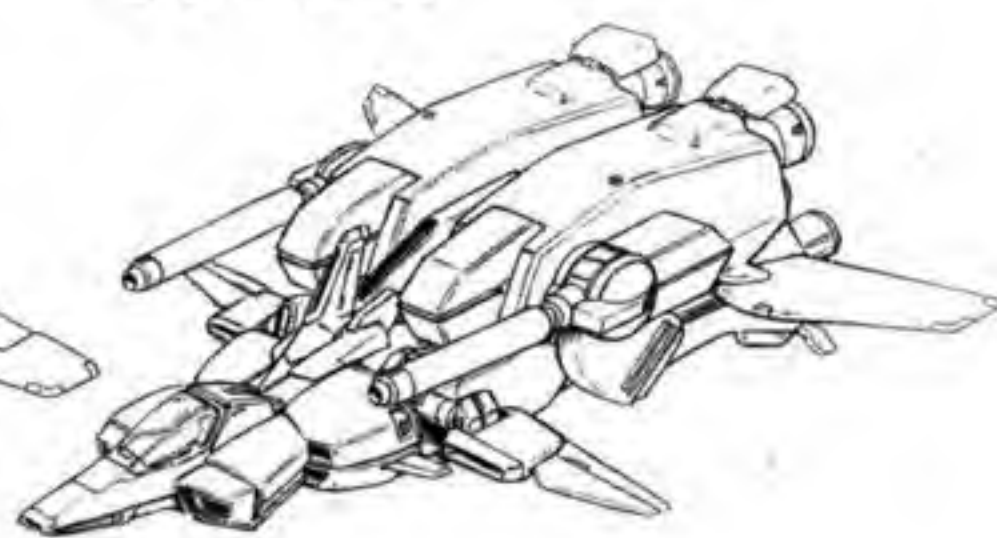
## MSZ-010 ZZガンダム

エウーゴの開発した合体可変MSでコア・ブロック・システムを採用する。ネオ・コア・ファイターを中心にした戦闘機3機構成で合体する。主な搭乗者はジドー・アーシタ、ビーチャ・オーレグ、イーノ・アッパブ、モンド・アカゲなど。『ZZ』における二代目主役メカで、登場は第11話「始動! ダブルゼータ」より。

コクピットハッチ

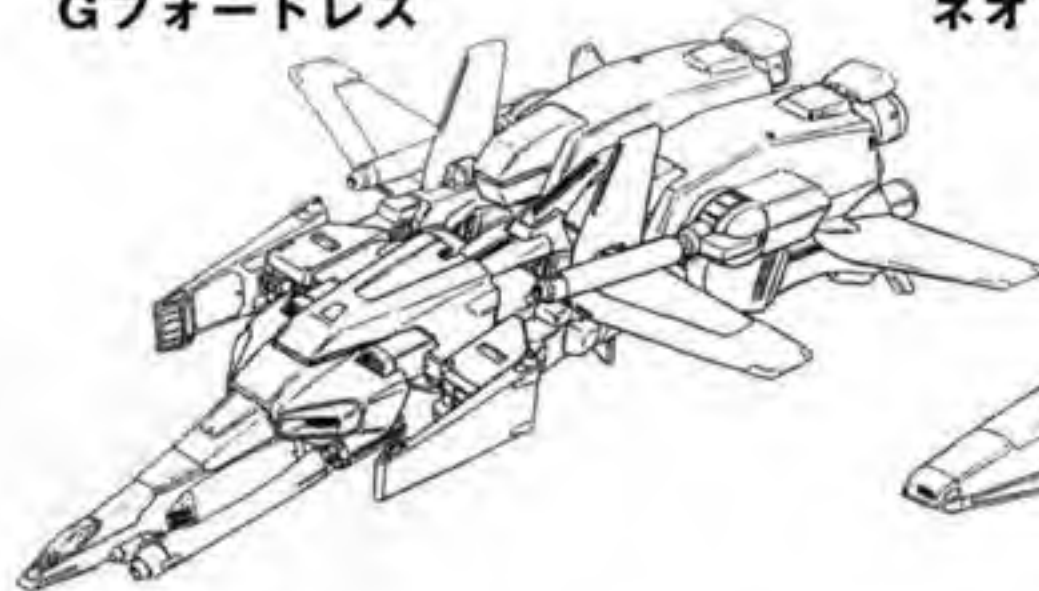


Gフォートレス

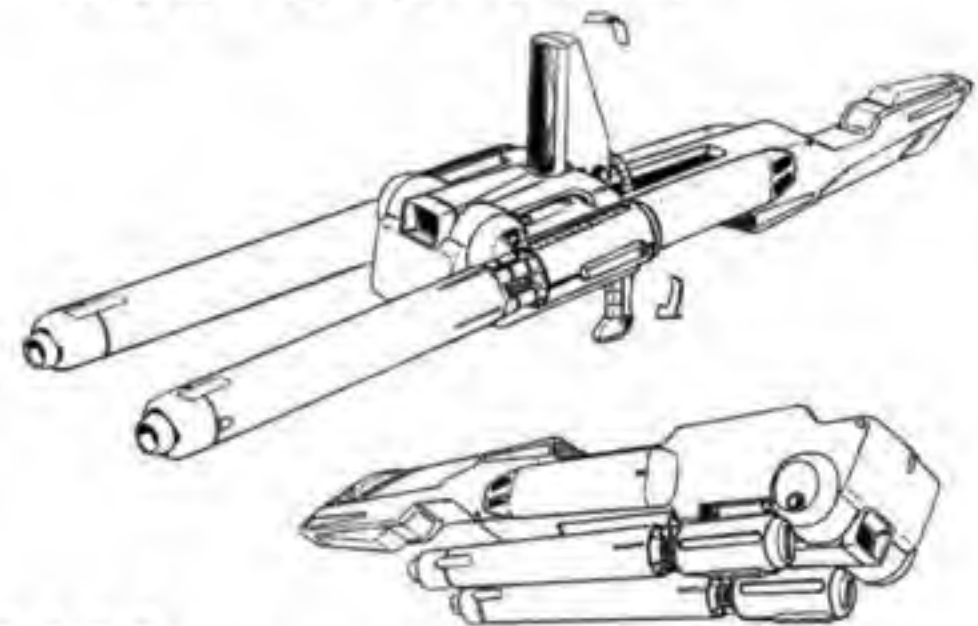


ネオ・コア・ファイター

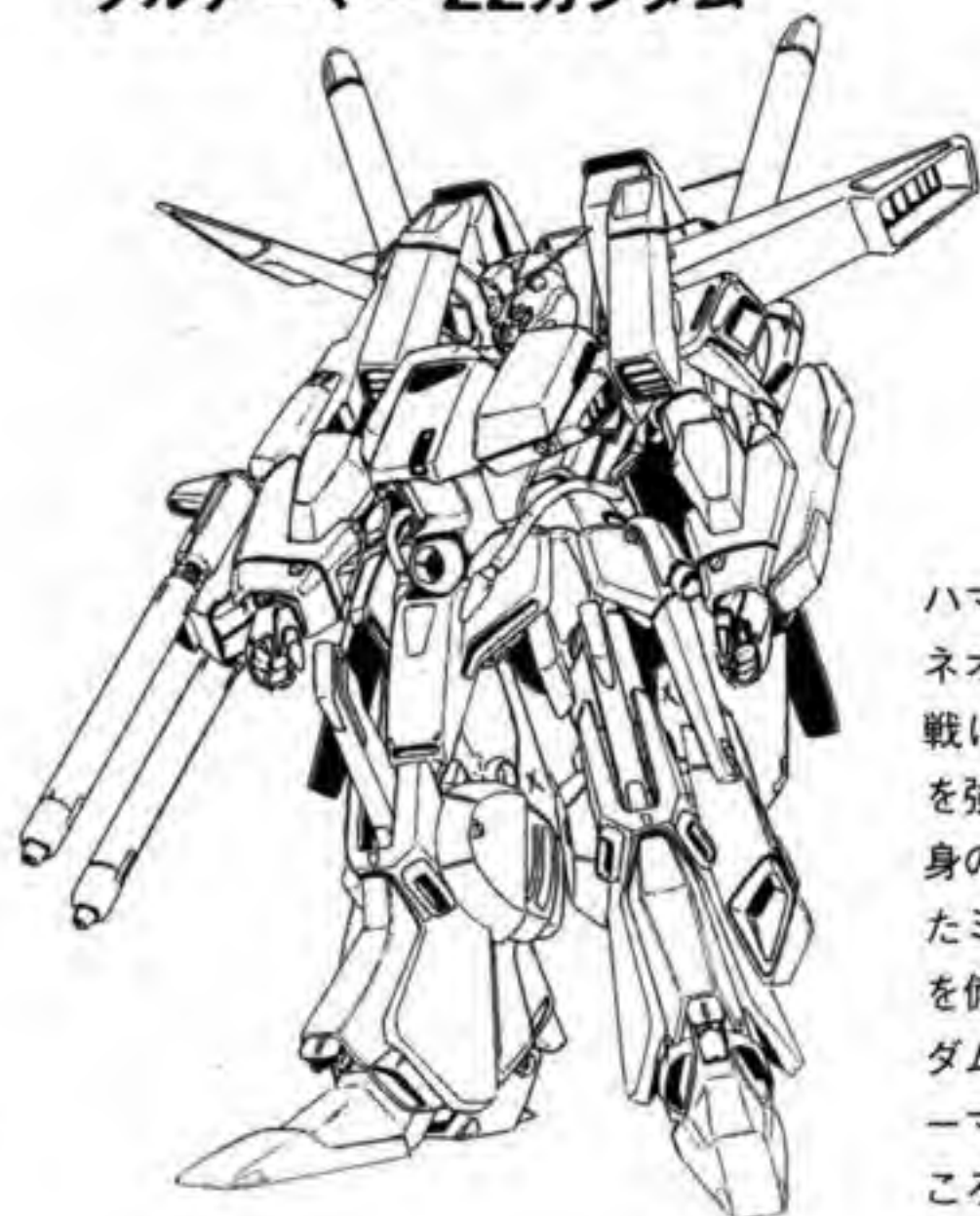
ダブル・ビーム・ライフル



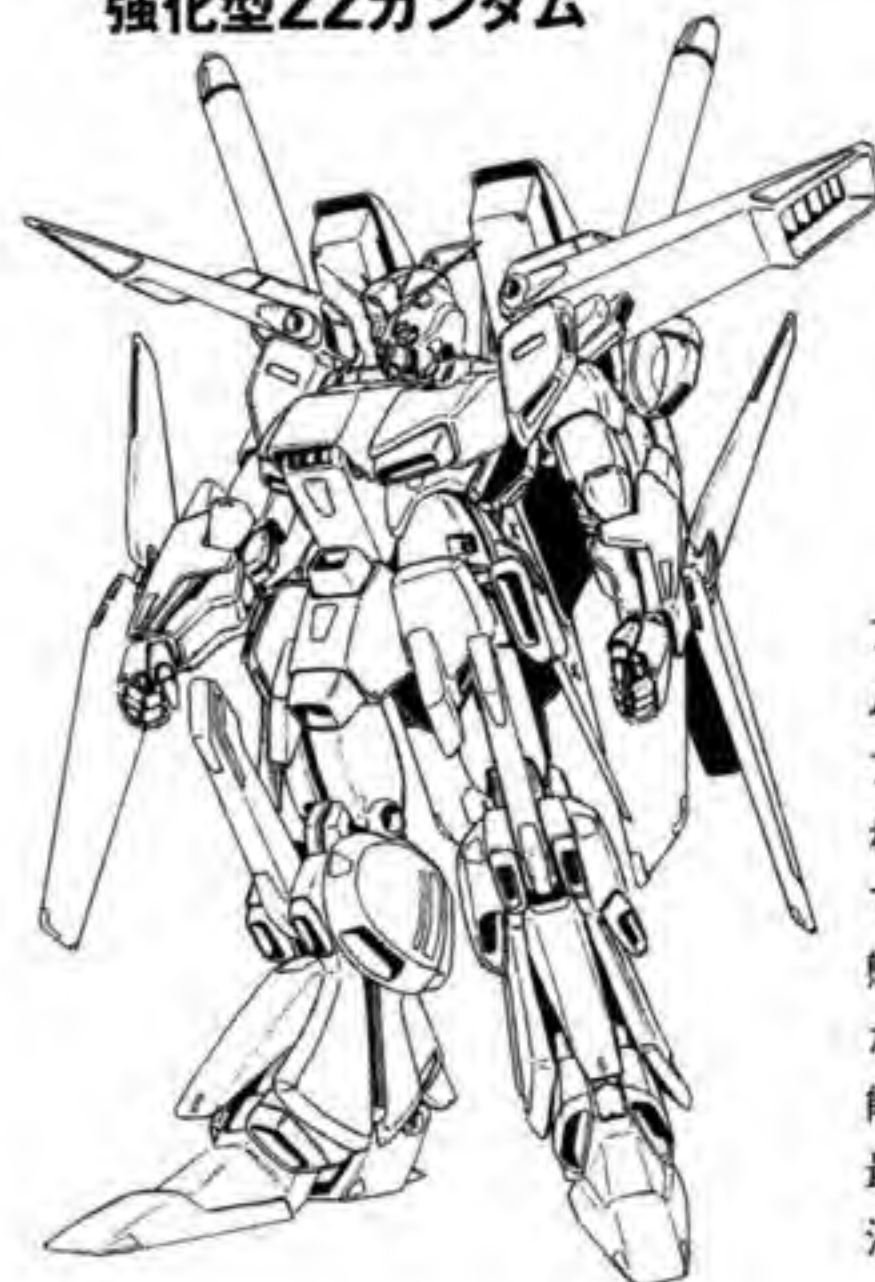
FA-010S  
フルアーマー ZZガンダム



MSZ-010S  
強化型ZZガンダム



ハマーン・カーン率いるネオ・ジオンとの最終決戦に向け、ZZガンダムを強化改造した機体。全身の増加装甲や追加されたミサイル・ポッドなどを備えている姿は、ガンダム作品におけるフルアーマーの伝統といったところだ。



フルアーマーZZガンダムの素体にあたる機体。フルアーマー化に耐えられるよう各部改修を行っている。フルアーマー状態では変形合体は不可能だが、この形態ならば可能である。ハマーンとの最終決戦ではこの機能が活かしている。



## AMX-107

### バウ

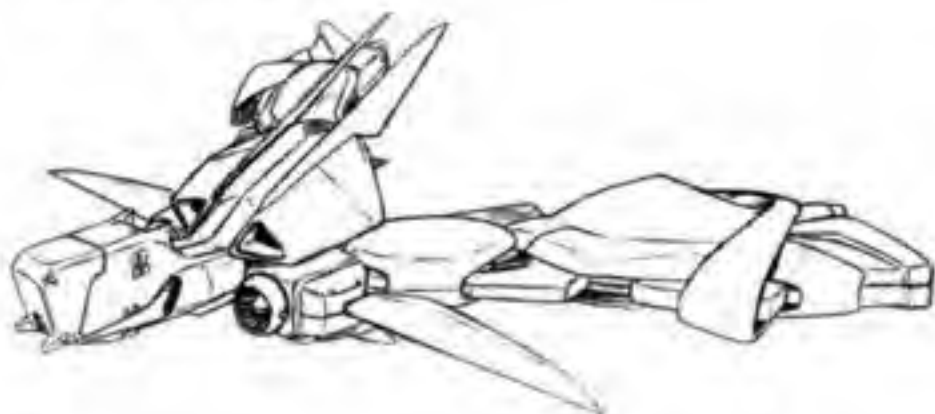
アクシズ（ネオ・ジオン）が開発した合体可変MS。上半身と下半身はそれぞれ戦闘機形態に変形する。グレミー・トトの専用機のほか、少数だが量産化もされアリアス・モマ率いる地球進攻部隊などに配備されている。しかしいずれの機体も実戦においてはMS形態で運用されることが多かったようだ。意外と使い勝手が悪かった？

#### バウ・アタッカー

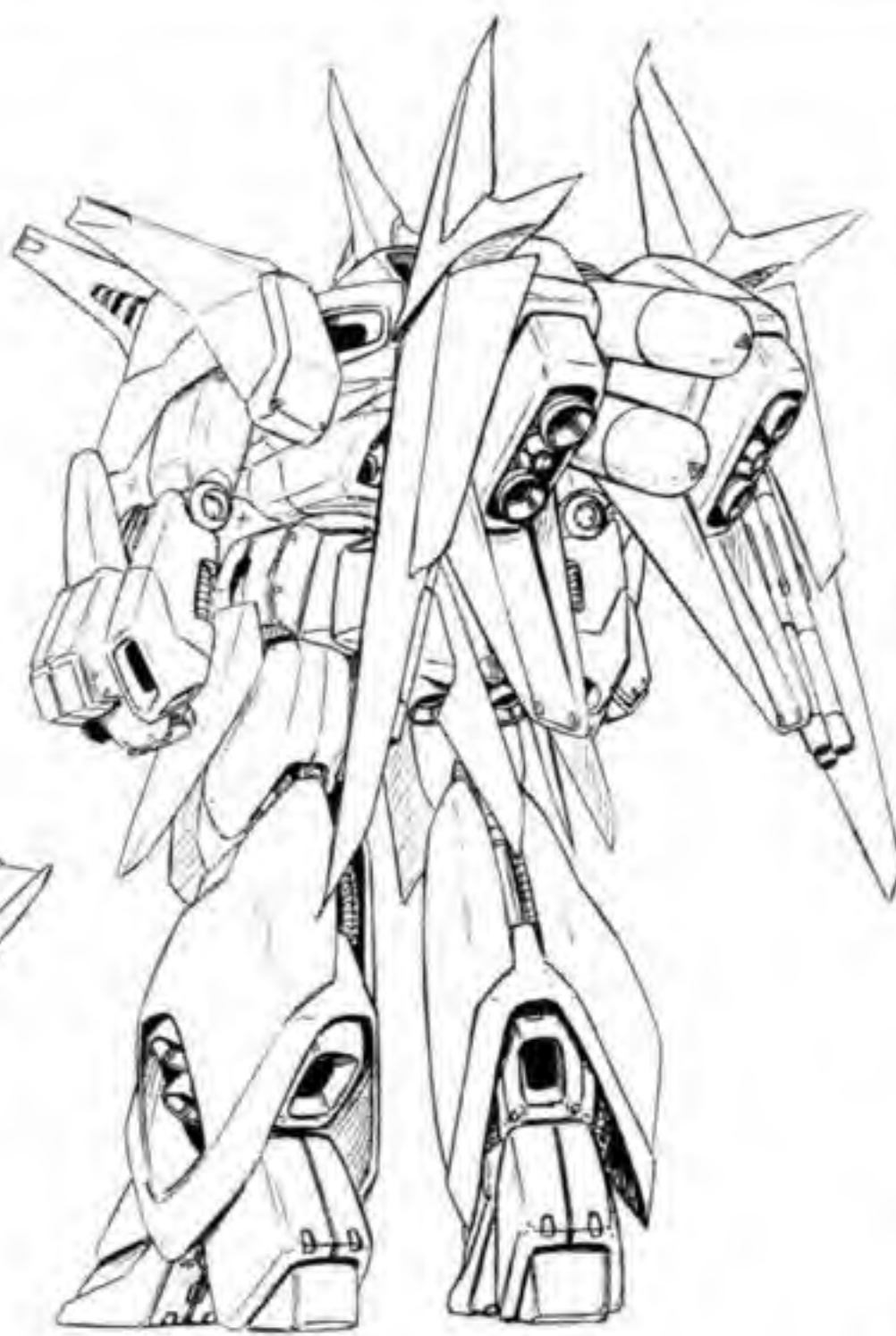


↑バウの上半身に相当する戦闘機。翼下にはミサイルを懸架している。

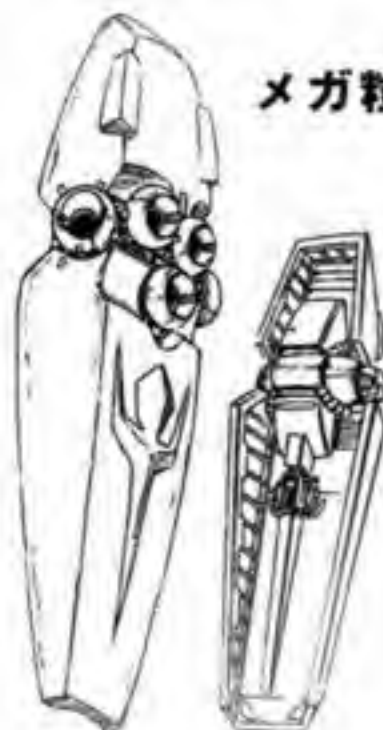
#### バウ・ナッター



↑バウの下半身で構成される無線誘導装置などを搭載した無人機。



#### メガ粒子砲内蔵シールド



#### ビーム・ライフル

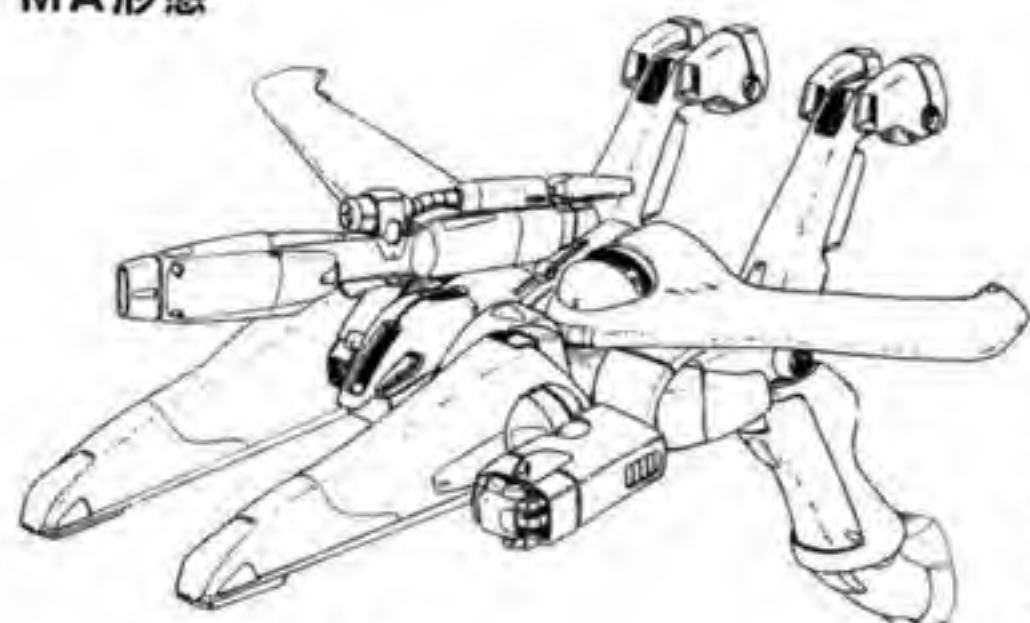


## AMX-008

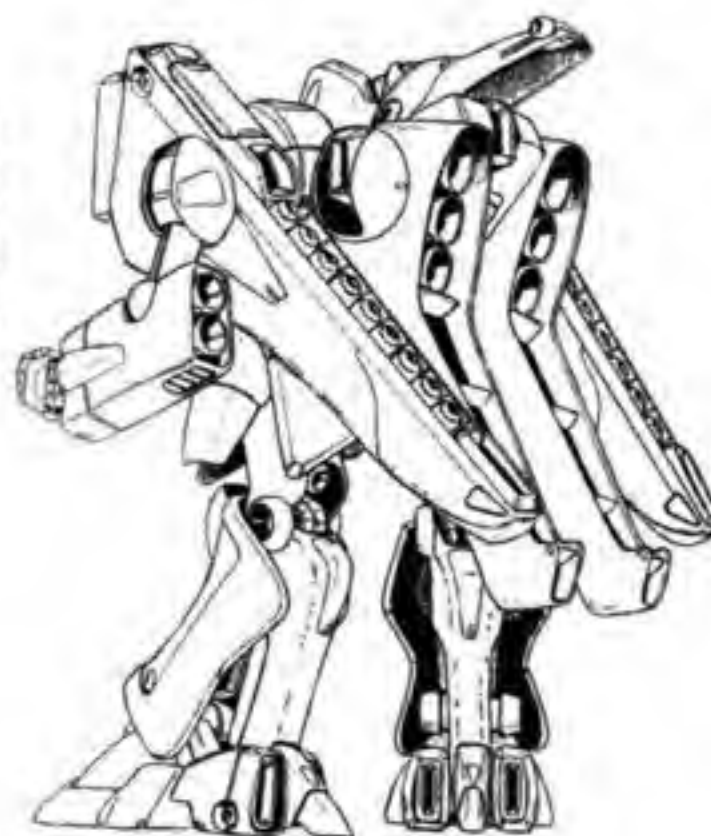
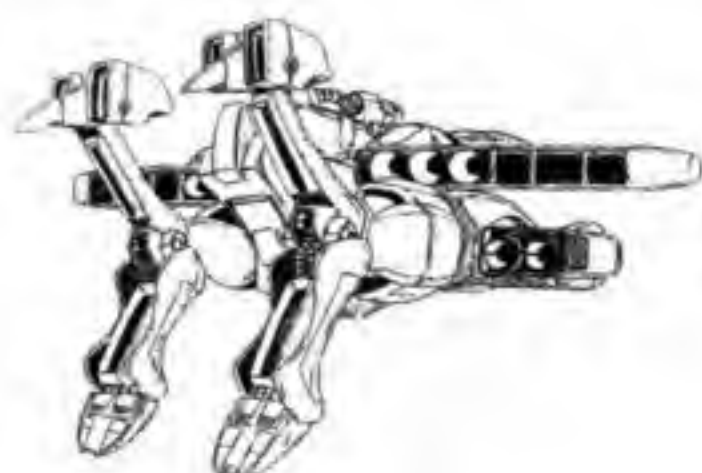
### ガ・ゾウム

アクシズ（ネオ・ジオン）の開発した可変MS。ガザCから連なる、いわゆるガザシリーズの最終形である。ただ、可変機構などは複雑になり、武装の名称こそハイパー・ナックル・バスターだが、ビーム・ライフル同様の携行式になるなど、これまでのガザシリーズとは異なる点も多い。作中では上官に恵まれない苦労人、ゴットン・ゴーなどが搭乗している。

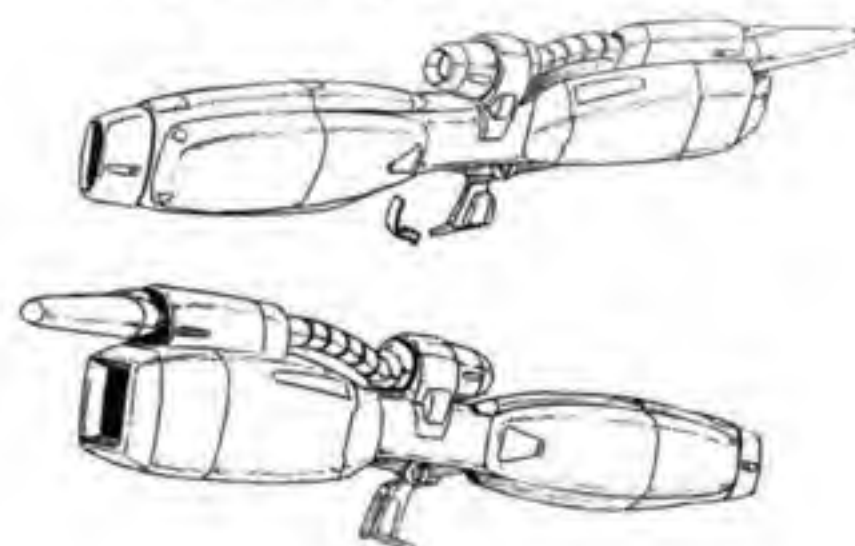
#### MA形態



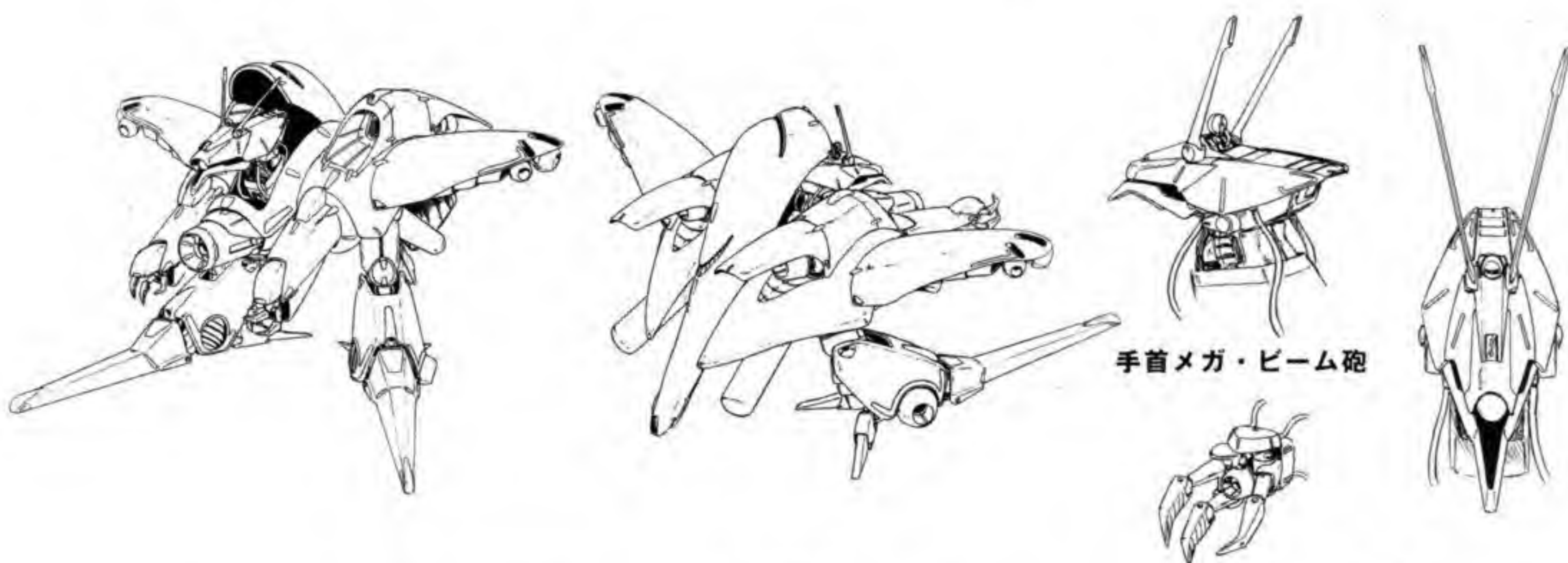
←爪先と踵部分が分離変形する特異な構造のMA形態。



#### ハイパー・ナックル・バスター

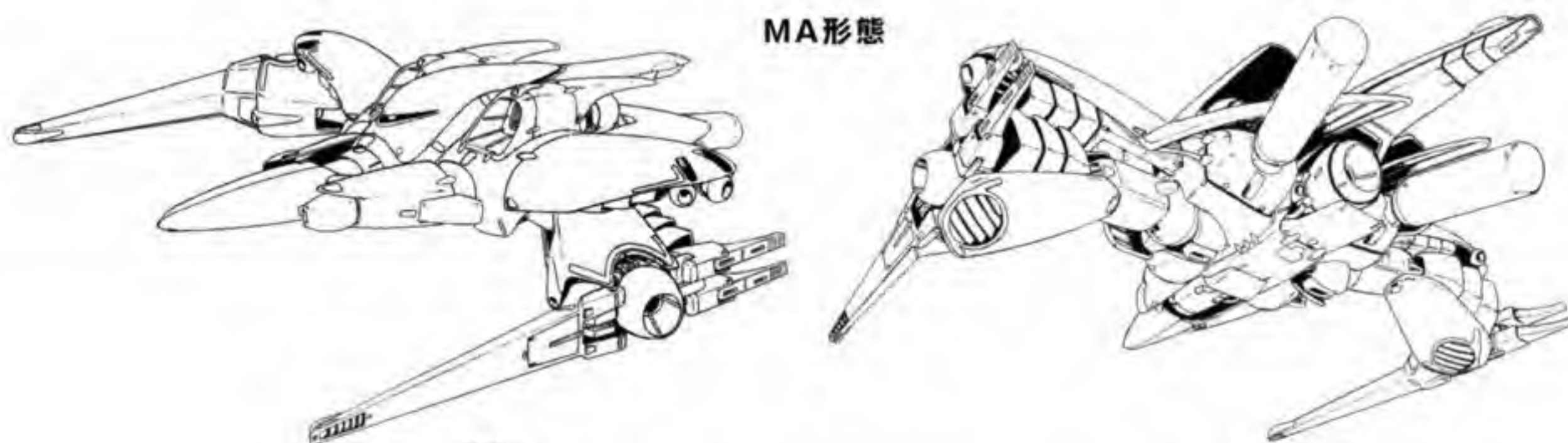






手首メガ・ビーム砲

MA形態



メガ・ファイター形態



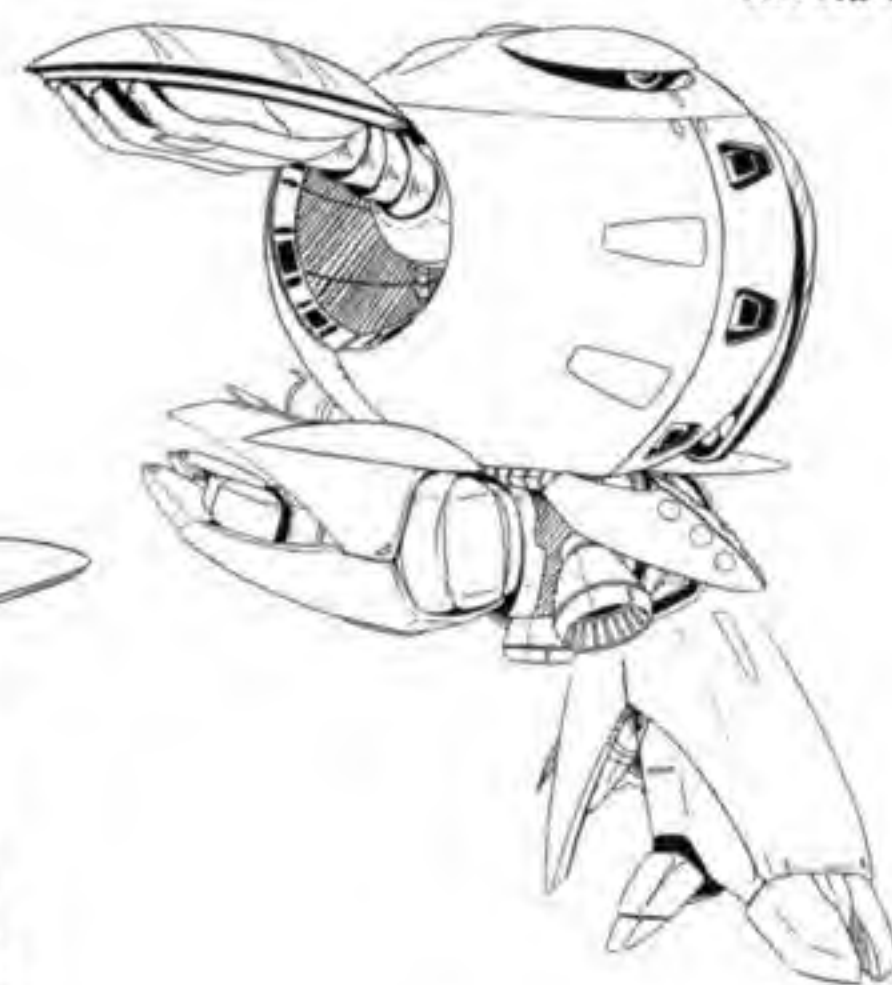
## AMA-01X ジャムル・フィン

ネオ・ジオンが開発した試作MA。TMAからMA形態へ変形するという少々変わった機体。ただ戦闘力は高く、高速戦闘を得意とする。ブースターを装着してメガ・ファイター形態にもなる。搭乗者であるチーム3D（ダニー、デル、デューン）のコンビネーションは鉄壁と呼ばれるほど強力。しかし登場は『ZZ』第38話「鉄壁、ジャムル・フィン」のみ。

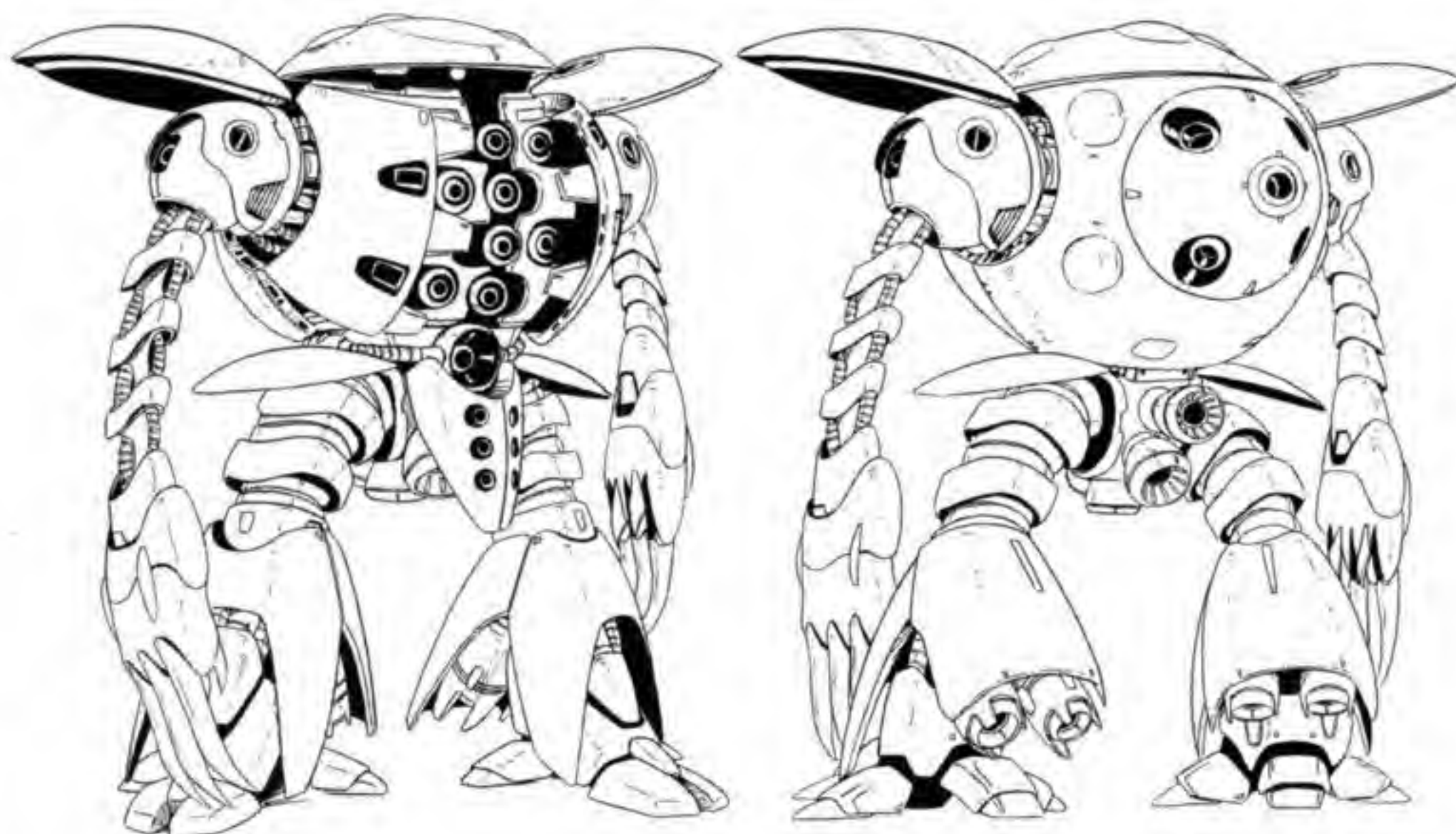
## AMX-109 カプール

アクシズ（ネオ・ジオン）が開発した水陸両用MS。水中巡航時は限りなく球形になる。機体の信頼性はともかく、第一次ネオ・ジオン戦争では、運用される現場の兵の評判は芳しくなかった。『ZZ』第24話「海中に咲く兄弟愛」で旧式機のザク・マリナーと共に活躍する。後の『ガンダムUC』（10年）ep 4「重力の井戸の底で」にも登場。

MA形態

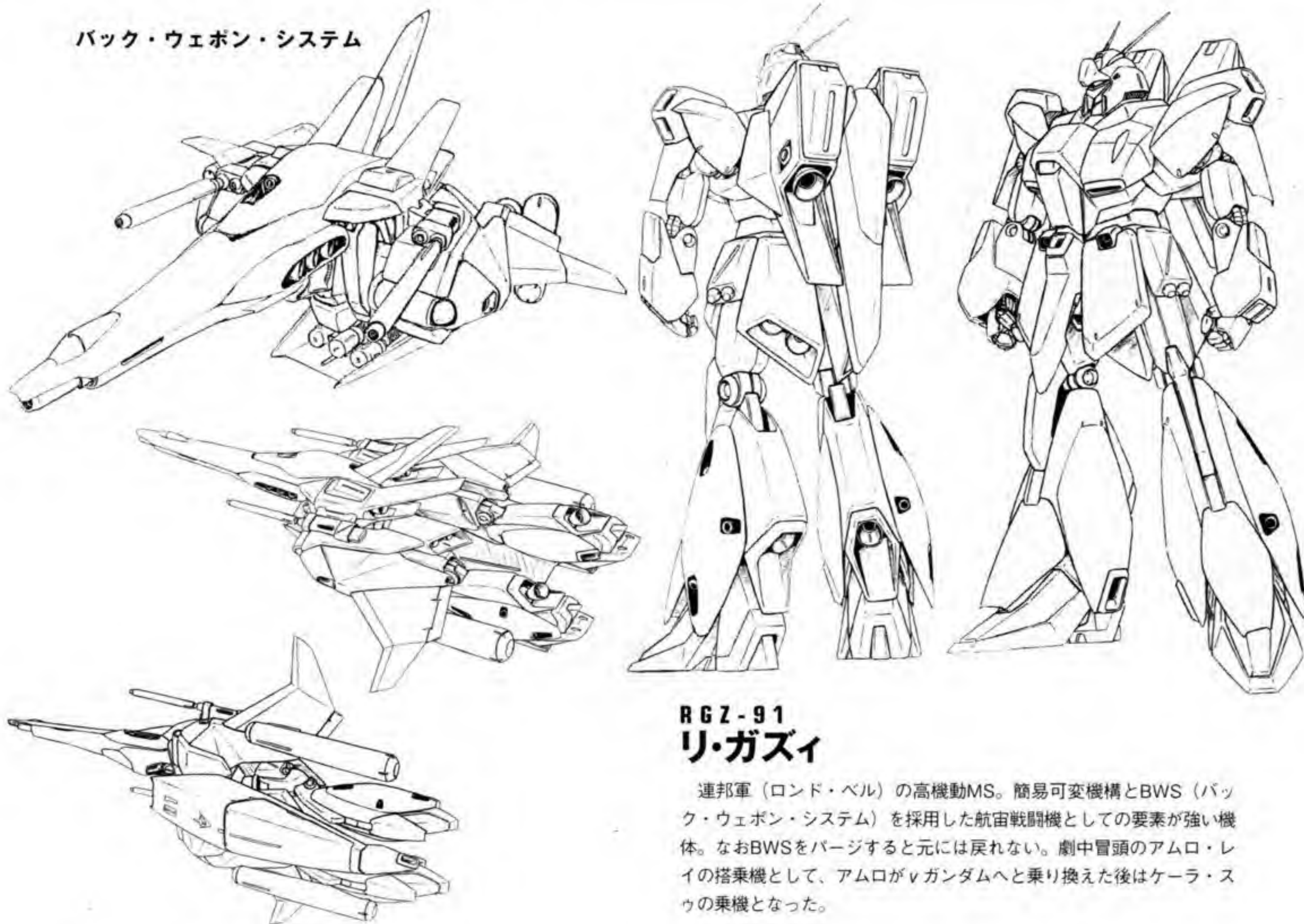


レーザー・アイ展開時





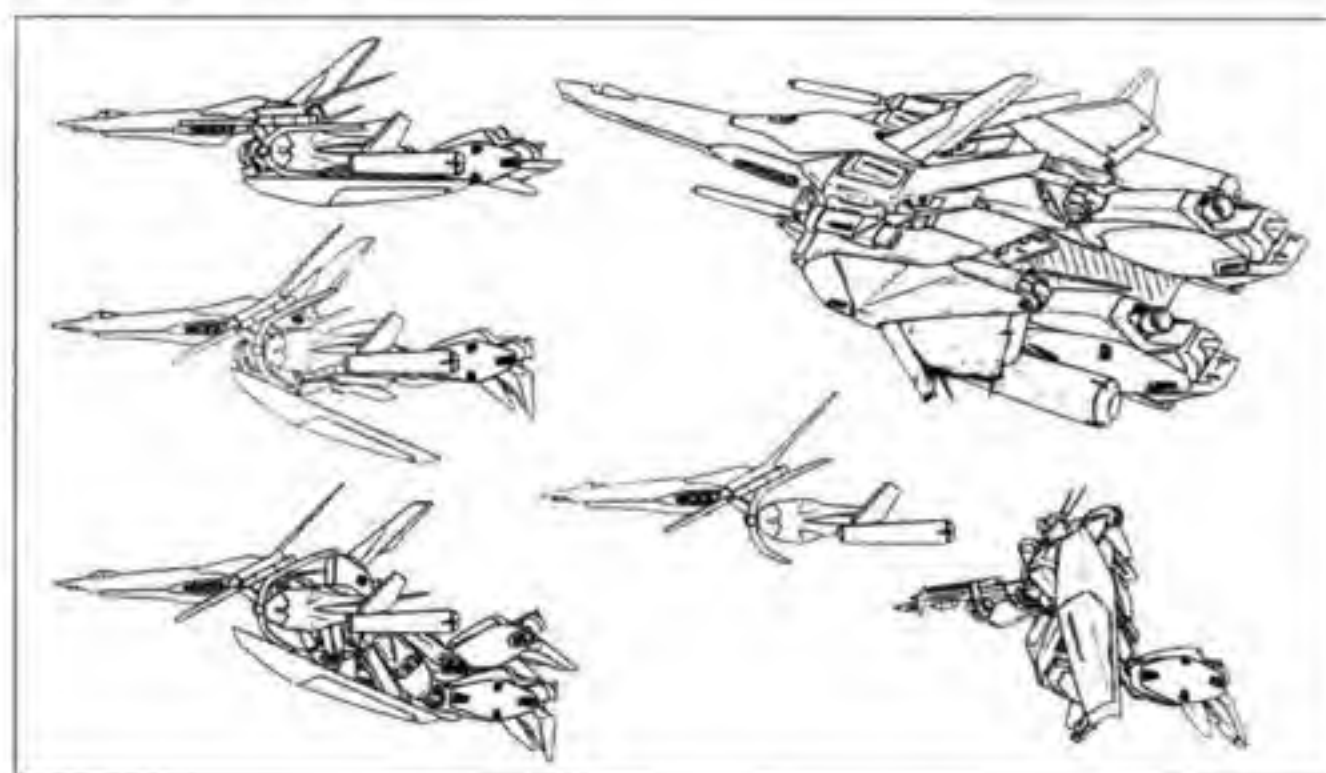
バック・ウェポン・システム



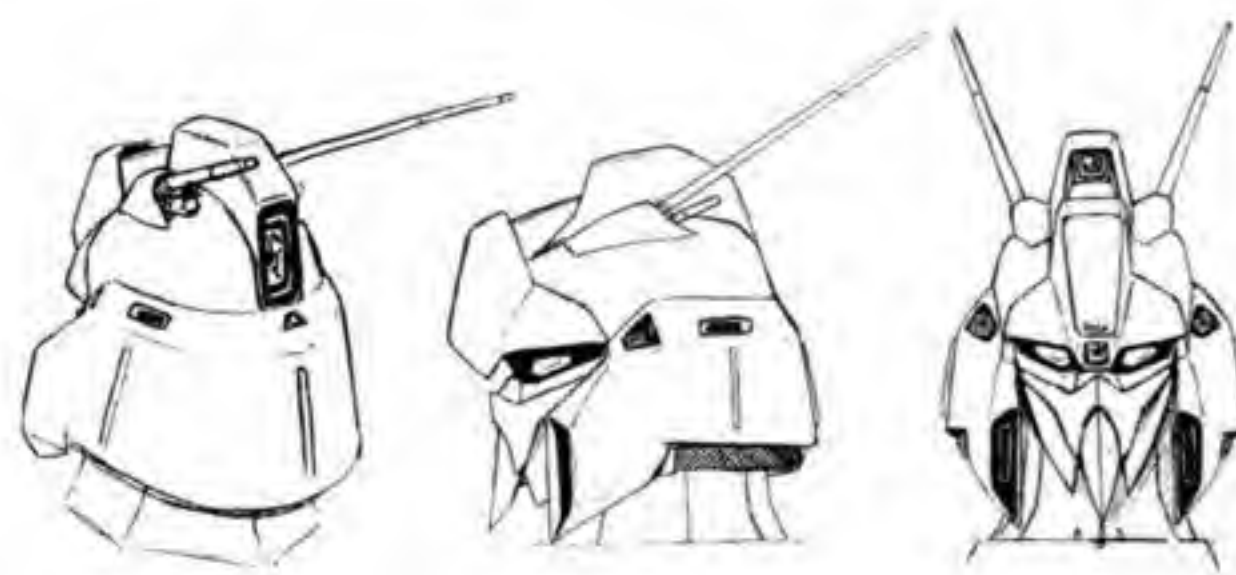
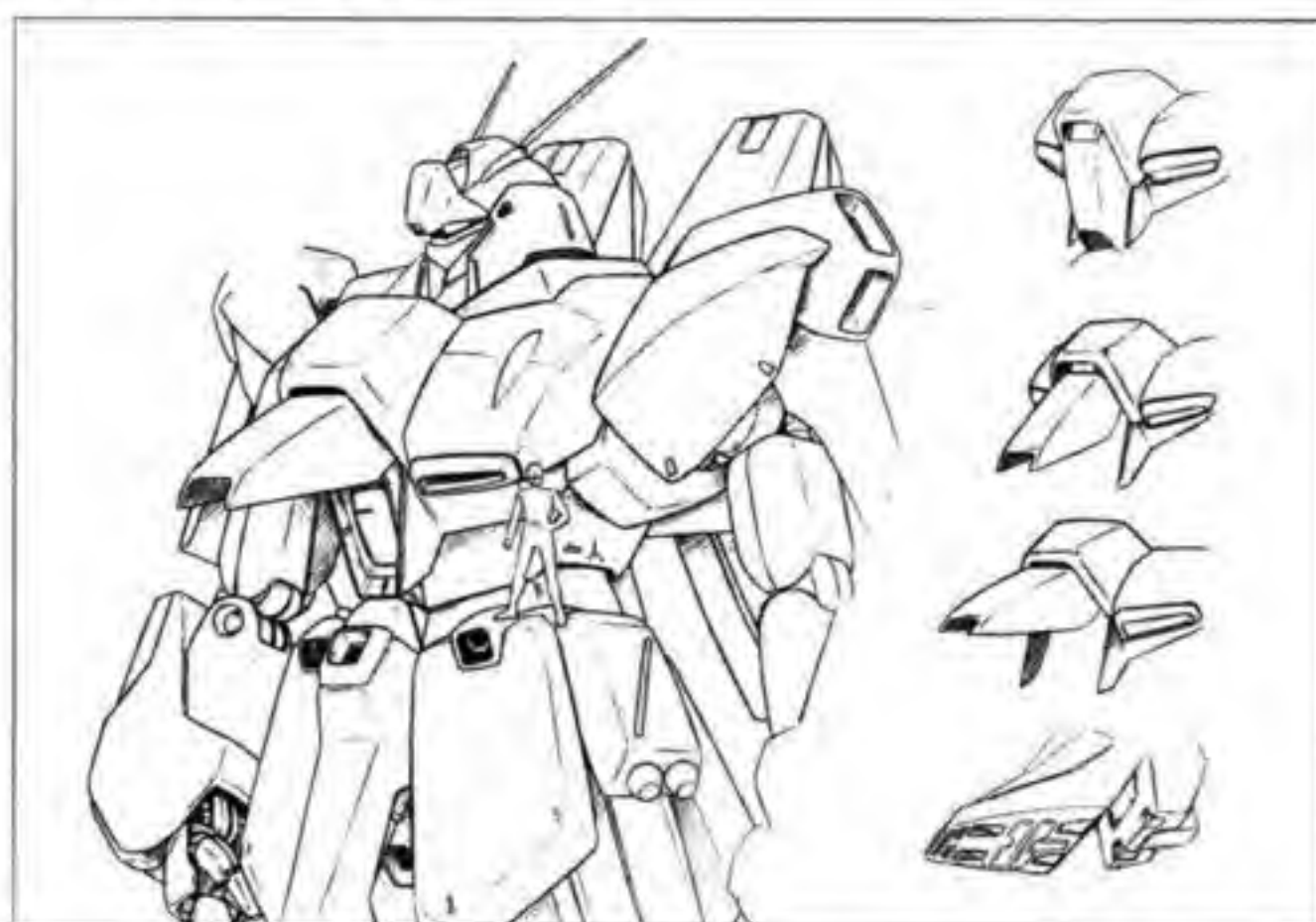
RGZ-91  
リ・ガズィ

連邦軍（ロンド・ベル）の高機動MS。簡易可変機構とBWS（バック・ウェポン・システム）を採用した宇宙戦闘機としての要素が強い機体。なおBWSをパージすると元には戻れない。劇中冒頭のアムロ・レイの搭乗機として、アムロがΖガンダムへと乗り換えた後はケーラ・スウの乗機となった。

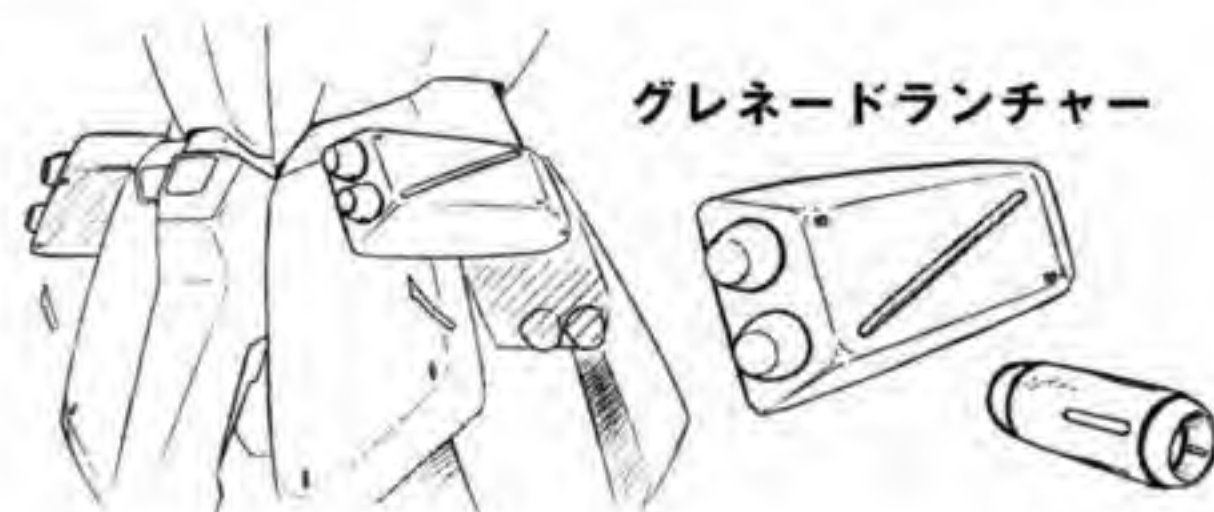
変形パターン



コクピットハッチ

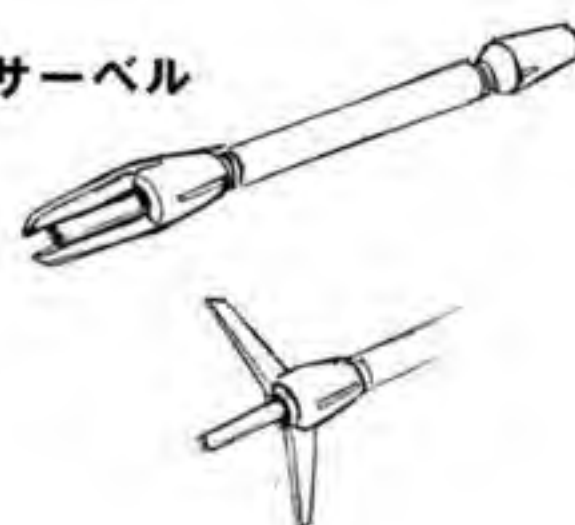


ビーム・ライフル



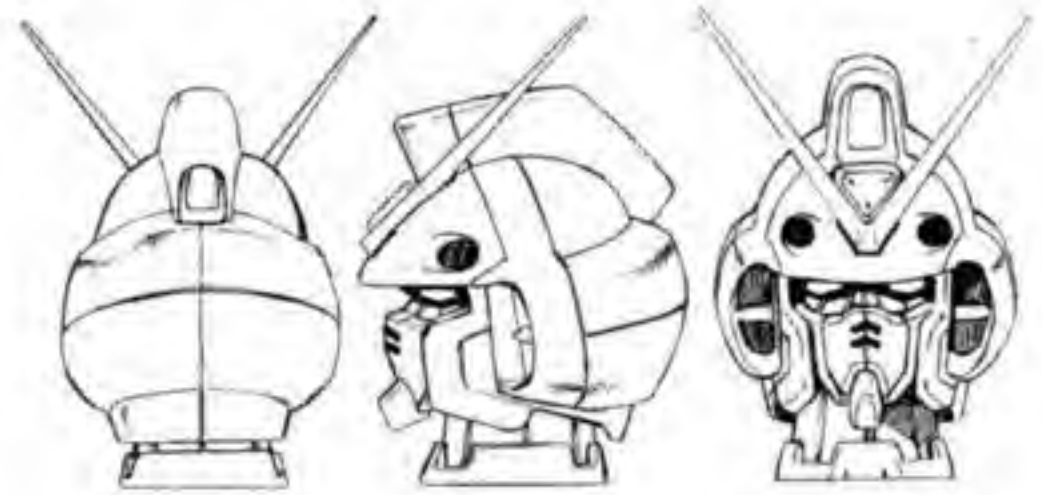
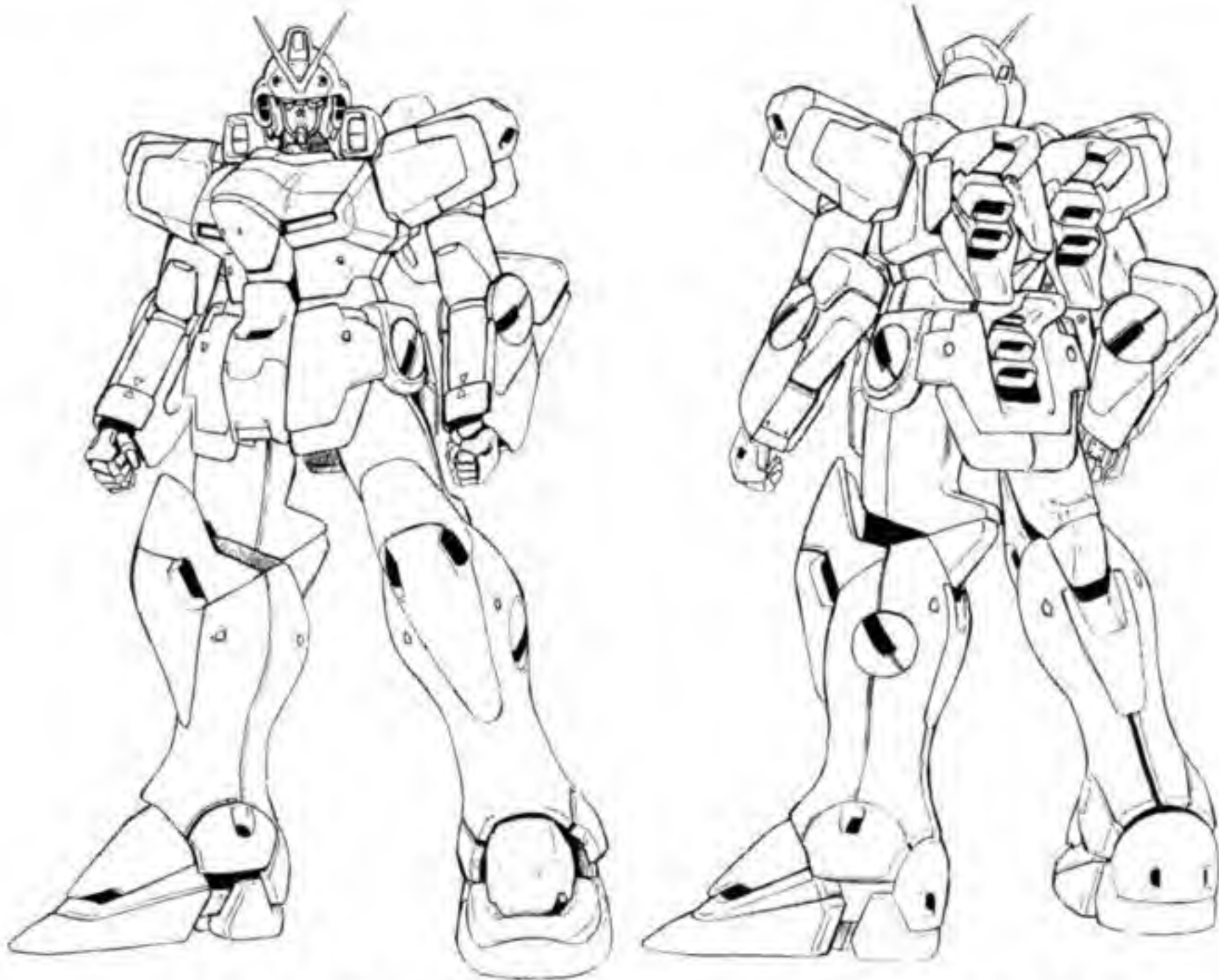
グレネードランチャー

ビーム・サーベル



←↑リ・ガズィに装備される武器類の構成は、同時代の機体と比べてみても非常にオーソドックス。



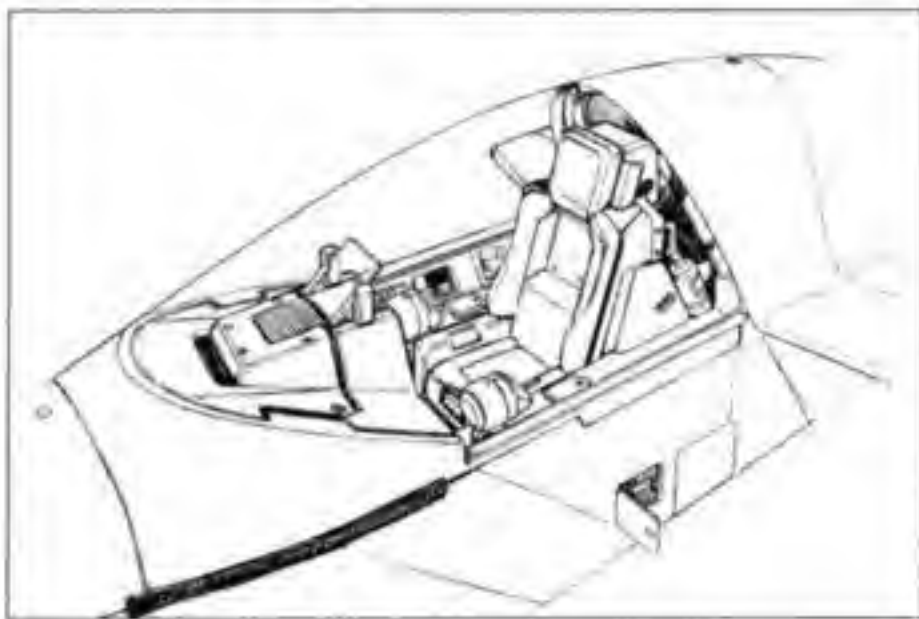


LM312V04

## ヴィクトリーガンダム

リガ・ミリティアの汎用型の合体可変MS。ザンスカール帝国（ベスバ）に対抗するため開発され、機体は頭部となるコア・ファイター、上半身のトップ・リム（ハンガー）、下半身のボトム・リム（ブーツ）で構成される。トップ、ボトムはそれぞれコア・ファイターに装着でき、破損した場合には換装が可能である。ウッソ・エヴィンなどが搭乗した。

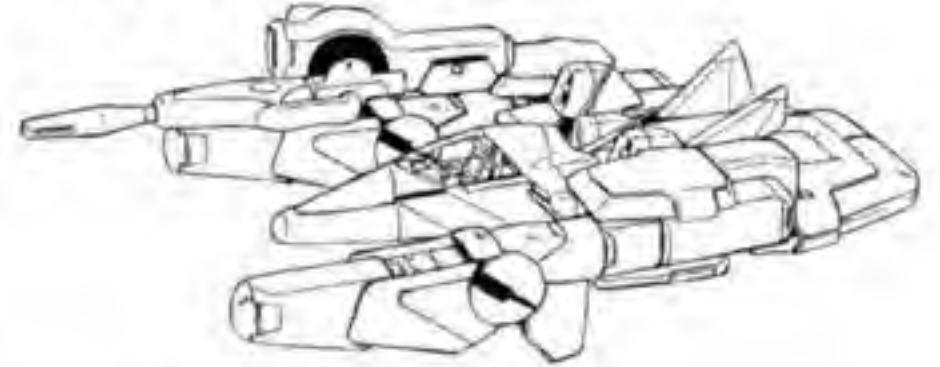
コクピット全景



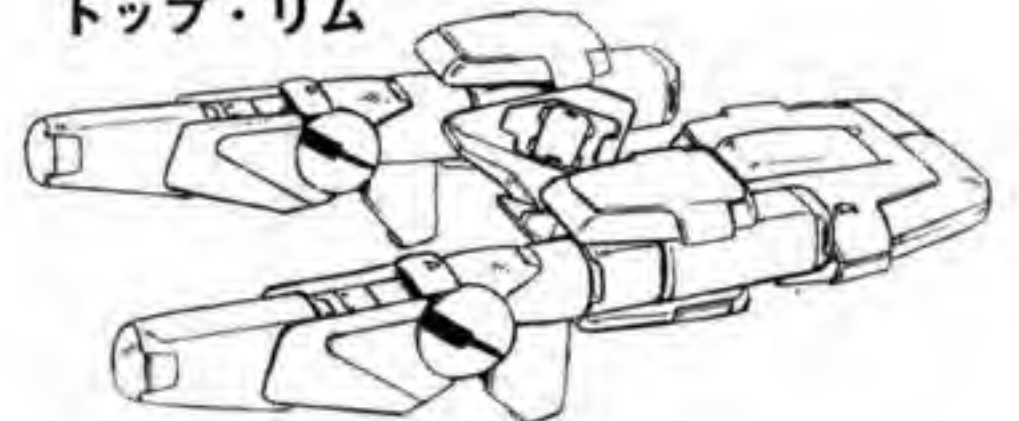
コア・ファイター



トップ・ファイター



トップ・リム



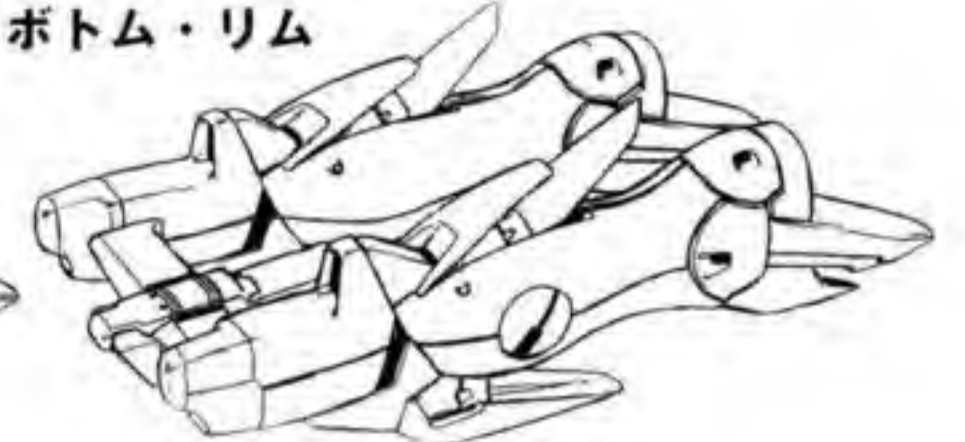
ビーム・ライフル



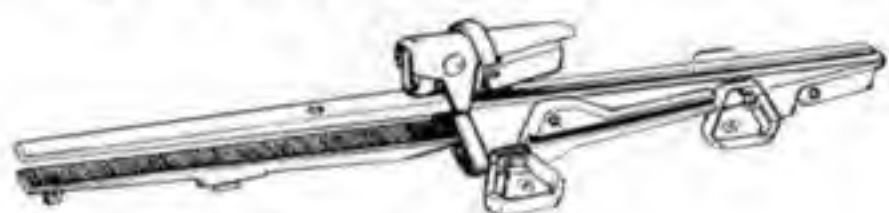
ボトム・ファイター



ボトム・リム



ビーム・スマートガン



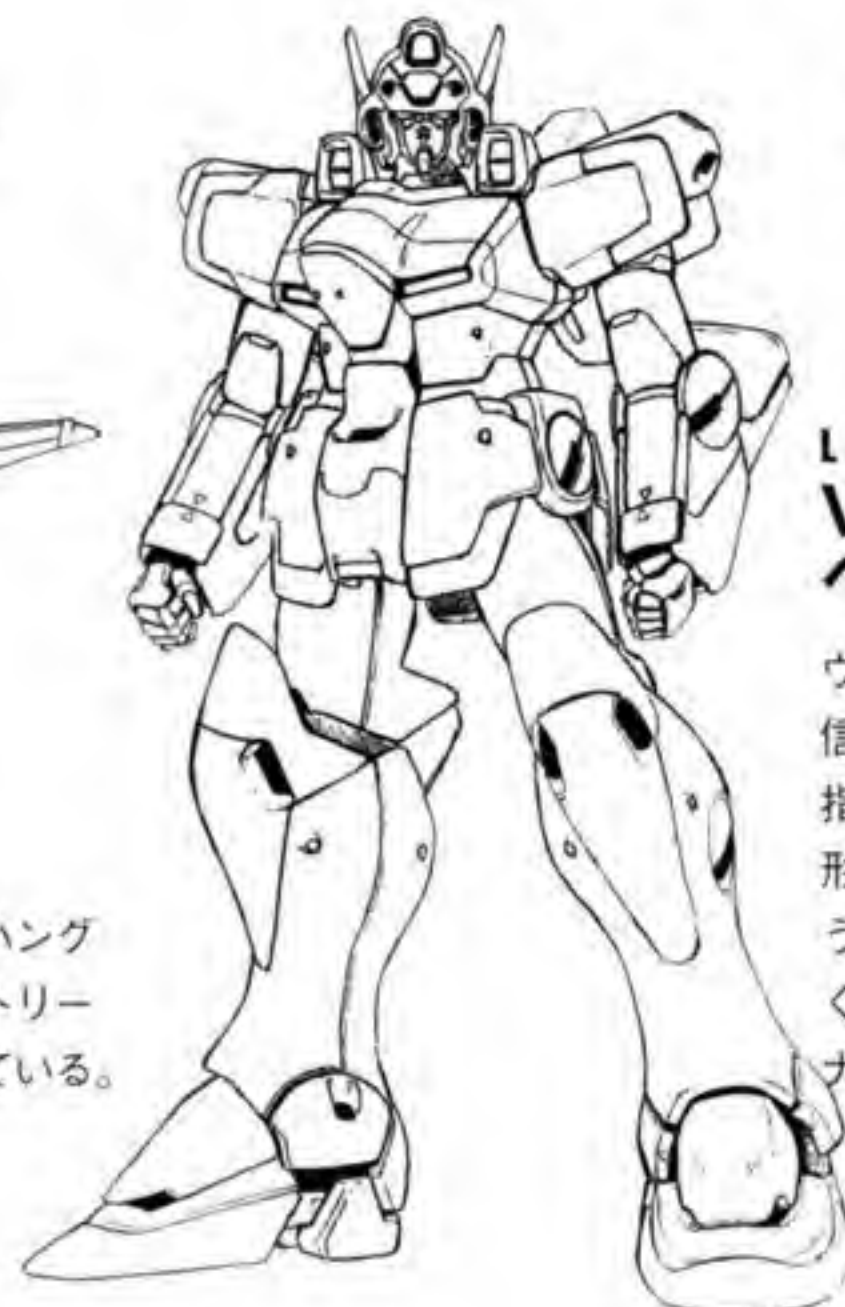
コア・ブラスター

LM312V04+SD-VB03A  
Vダッシュガンダム

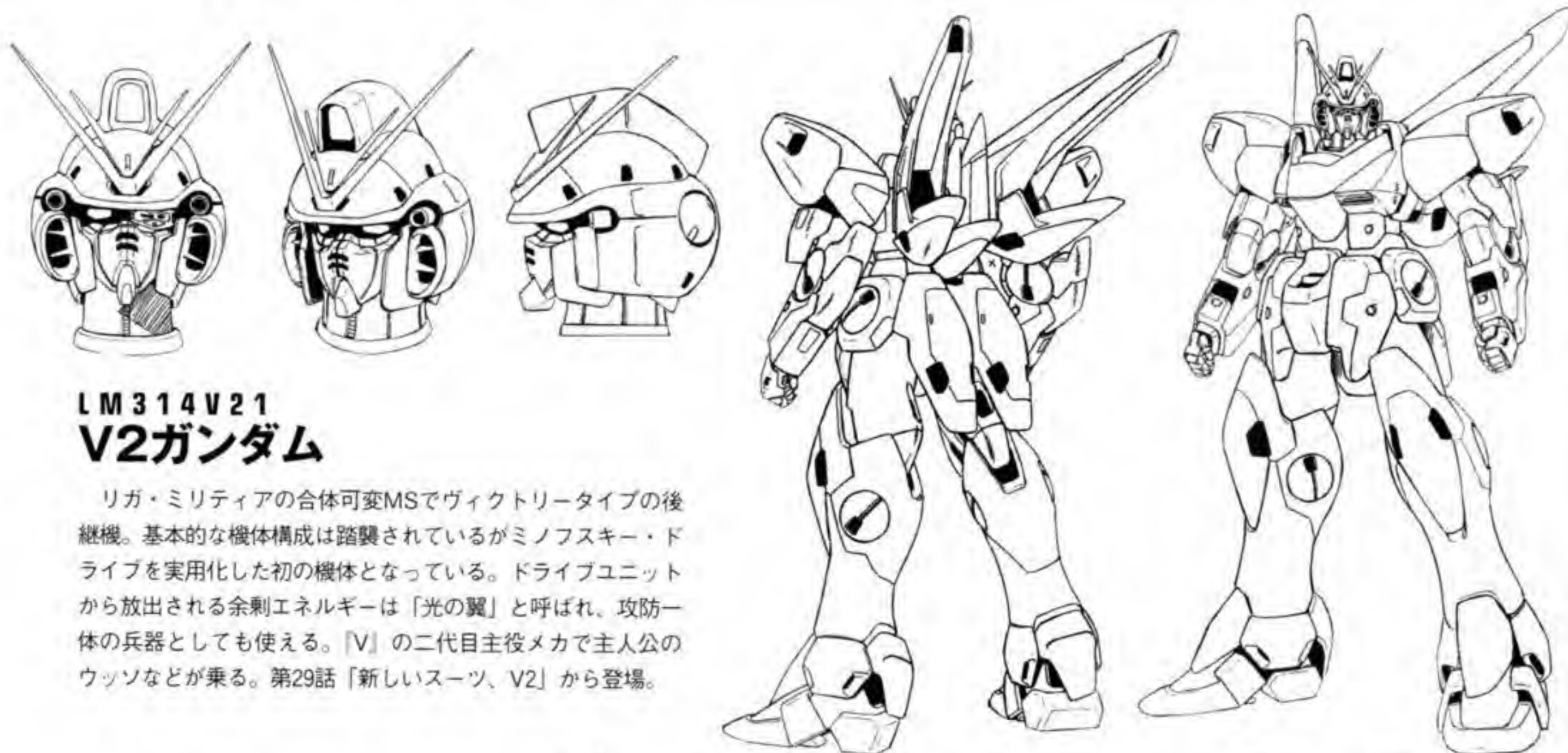
コア・ファイターに砲撃用ユニットのオーバー・ハンγκキャノン装着した（コア・ブースター）ヴィクトリータイプの砲撃仕様。ヘキサにも装備が可能となっている。

LM312V06  
Vガンダム  
ヘキサ

ヴィクトリータイプの通信強化タイプ。いわゆる指揮官機といえる機体。形状から見てわかるようにV字アンテナではなく頭部両サイドのアンテナが特徴である。



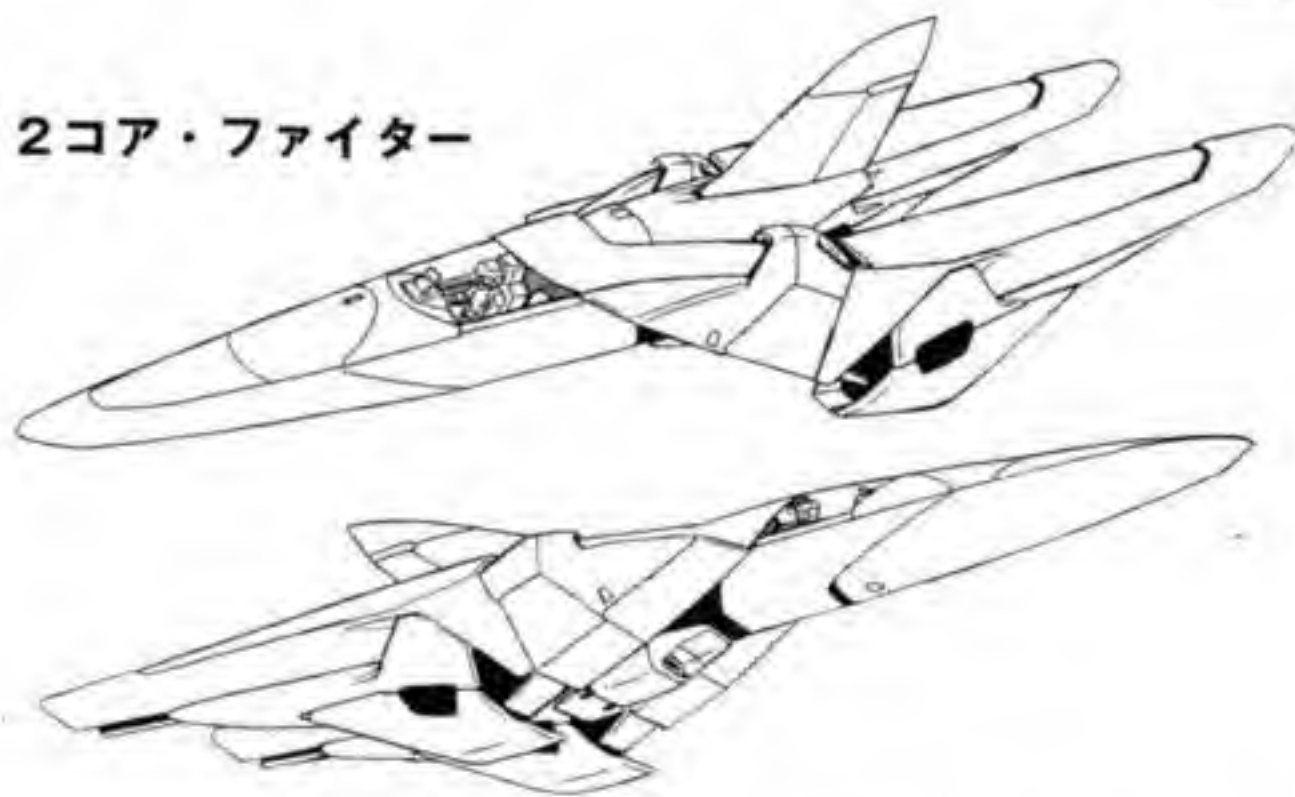




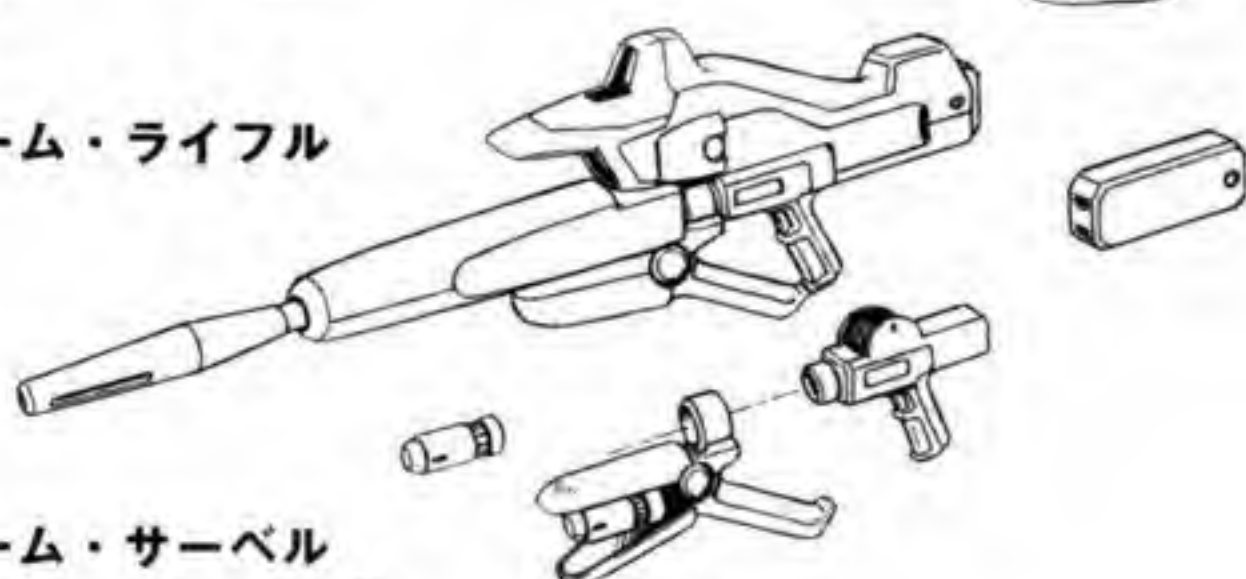
## LM314V21 V2ガンダム

リガ・ミリティアの合体可変MSでヴィクトリータイプの後継機。基本的な機体構成は踏襲されているがミノフスキー・ドライブを実用化した初の機体となっている。ドライブユニットから放出される余剰エネルギーは「光の翼」と呼ばれ、攻防一体の兵器としても使える。『V』の二代目主役メカで主人公のウッソなどが乗る。第29話「新しいスーツ、V2」から登場。

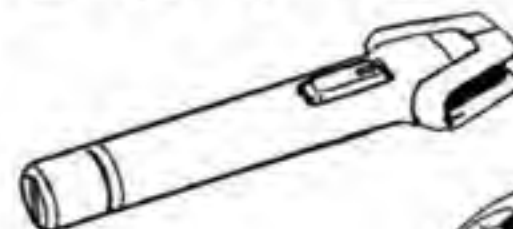
### V2コア・ファイター



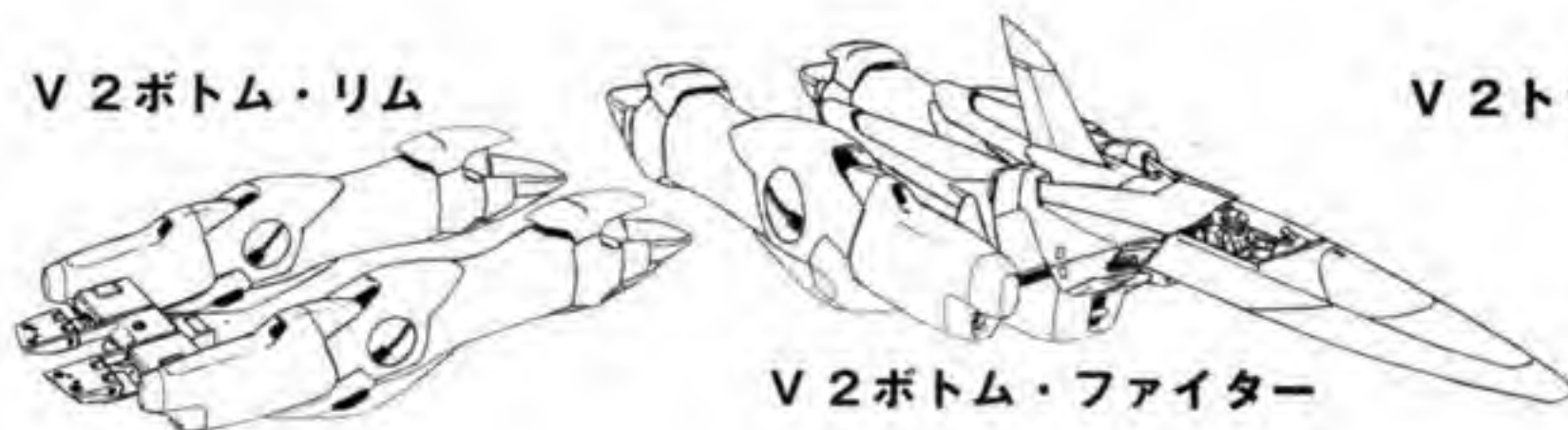
### ビーム・ライフル



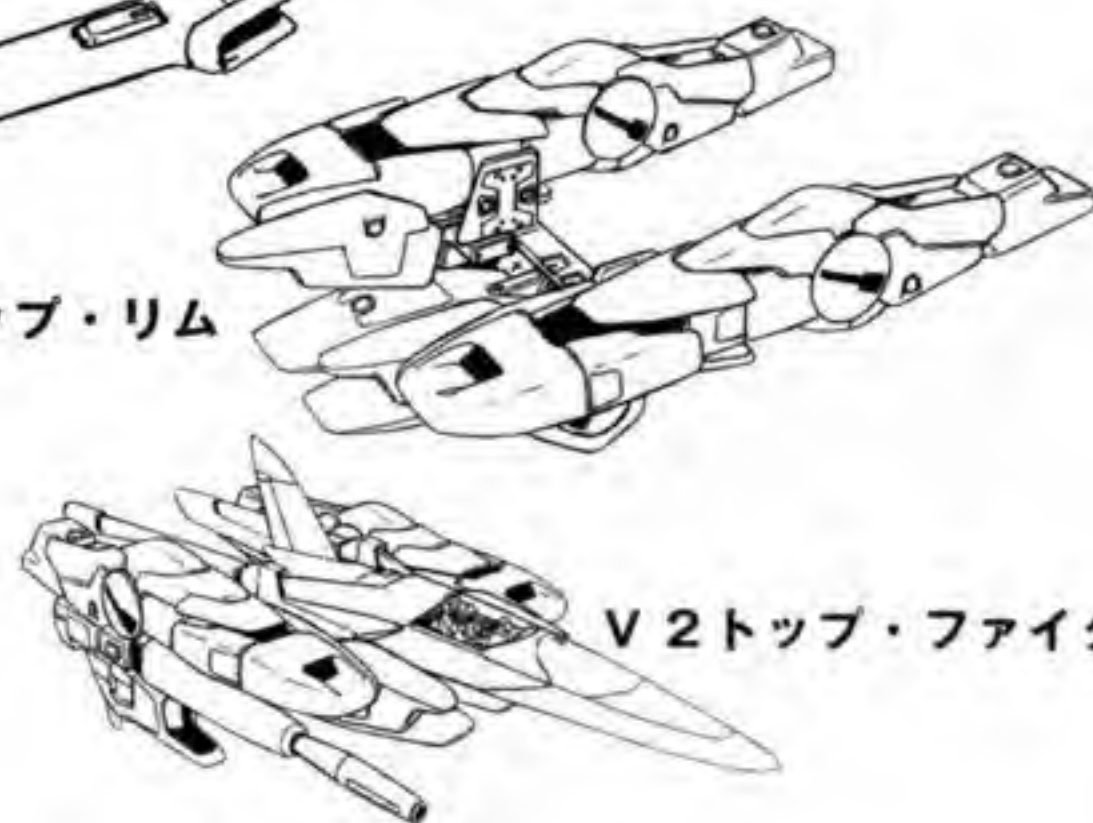
### ビーム・サーベル



### V2ボトム・リム



### V2トップ・リム



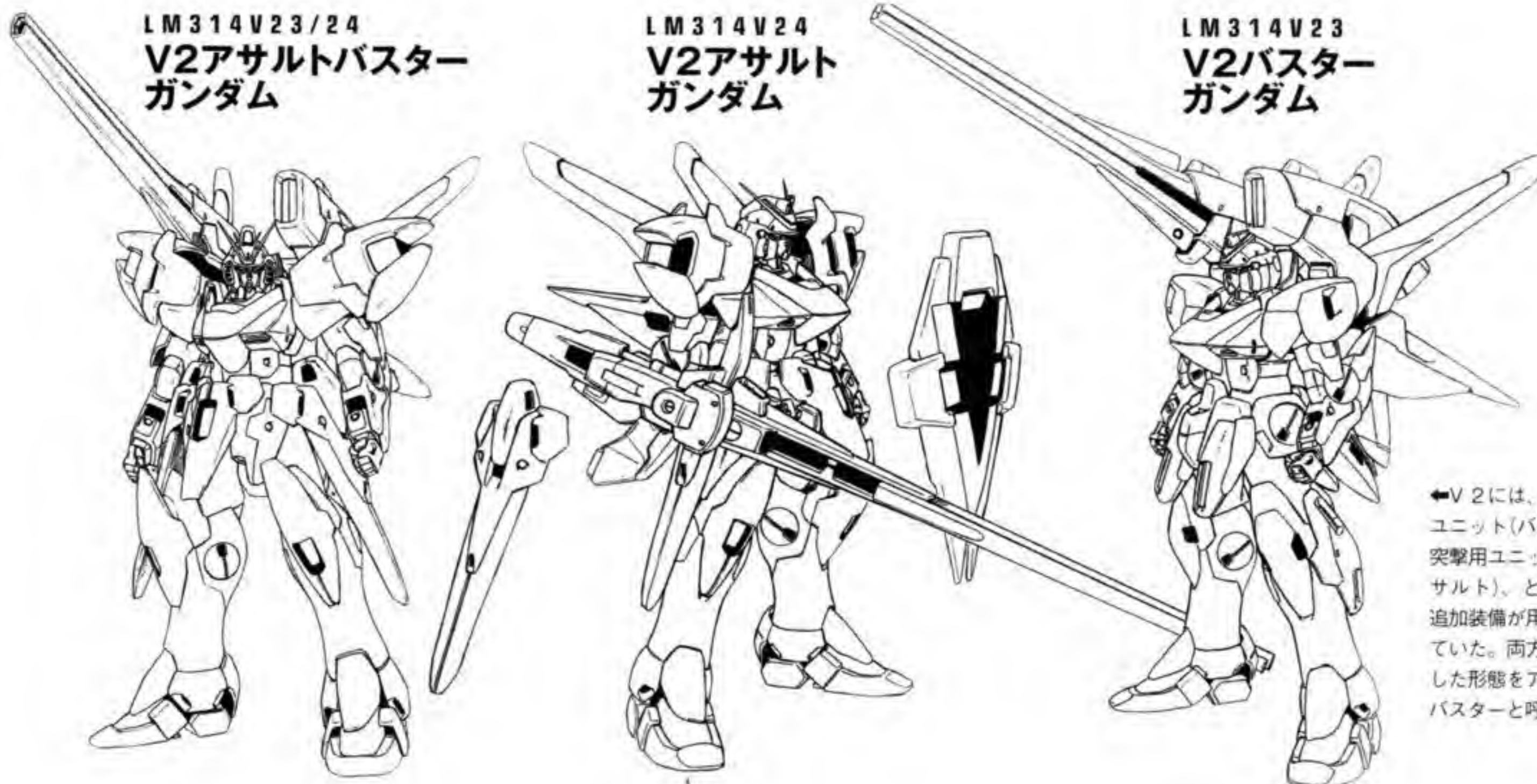
### V2ボトム・ファイター

### V2トップ・ファイター

## LM314V23/24 V2アサルトバスター ガンダム

## LM314V24 V2アサルト ガンダム

## LM314V23 V2バスター ガンダム



◀V2には、砲撃用ユニット(バスター)、突撃用ユニット(アサルト)、といった追加装備が用意されていた。両方を装備した形態をアサルトバスターと呼ぶ。

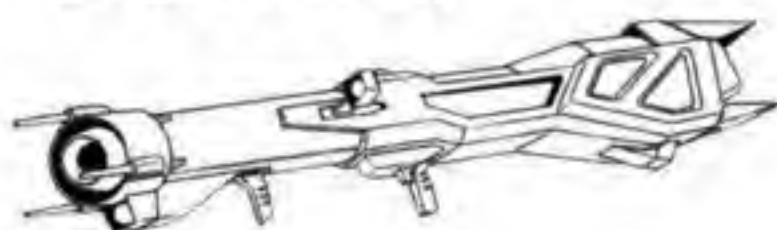




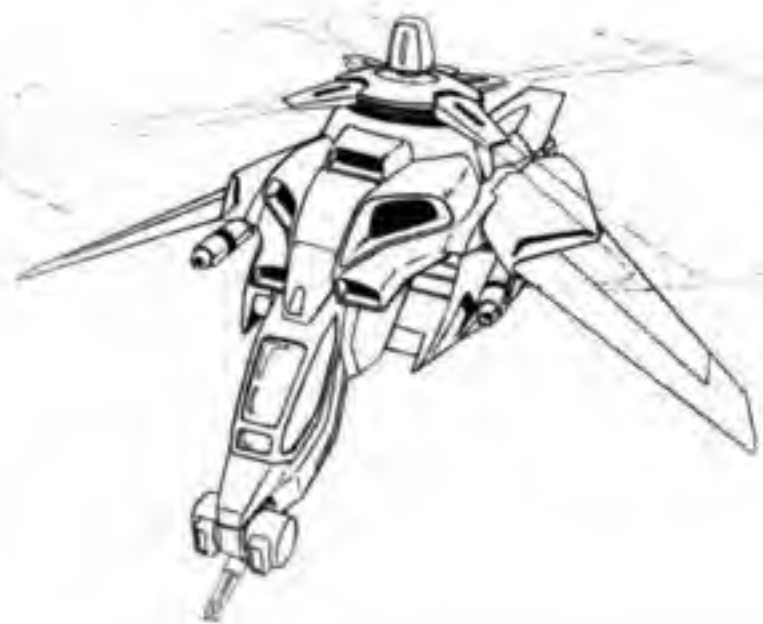
ビーム・ライフル



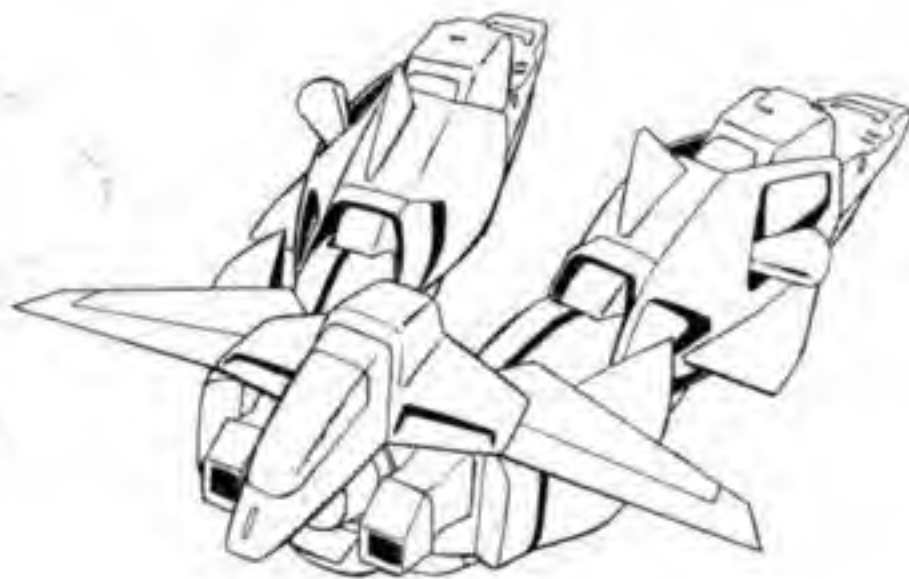
ビーム・バズーカ



トップ・ターミナル



ボトム・ターミナル



## ZM-S086

### ゾロ

イエロージャケットことベスバの開発した合体可変MS。宇宙用のゾロアットをベースに、地上での運用に適した機体を目指して開発された。シールドや飛行装置としても機能するビーム・ローターを装備する。ザンスカール帝国の地球侵攻における尖兵といえる。クロノクル・アシャーの専用機はカスタマイズが施され、機体色のカラーリングも赤系に塗られている。ただ、帝国全般で見ると他の機体の進化スピードが早く、機体としては旧式の部類に入りつつある。

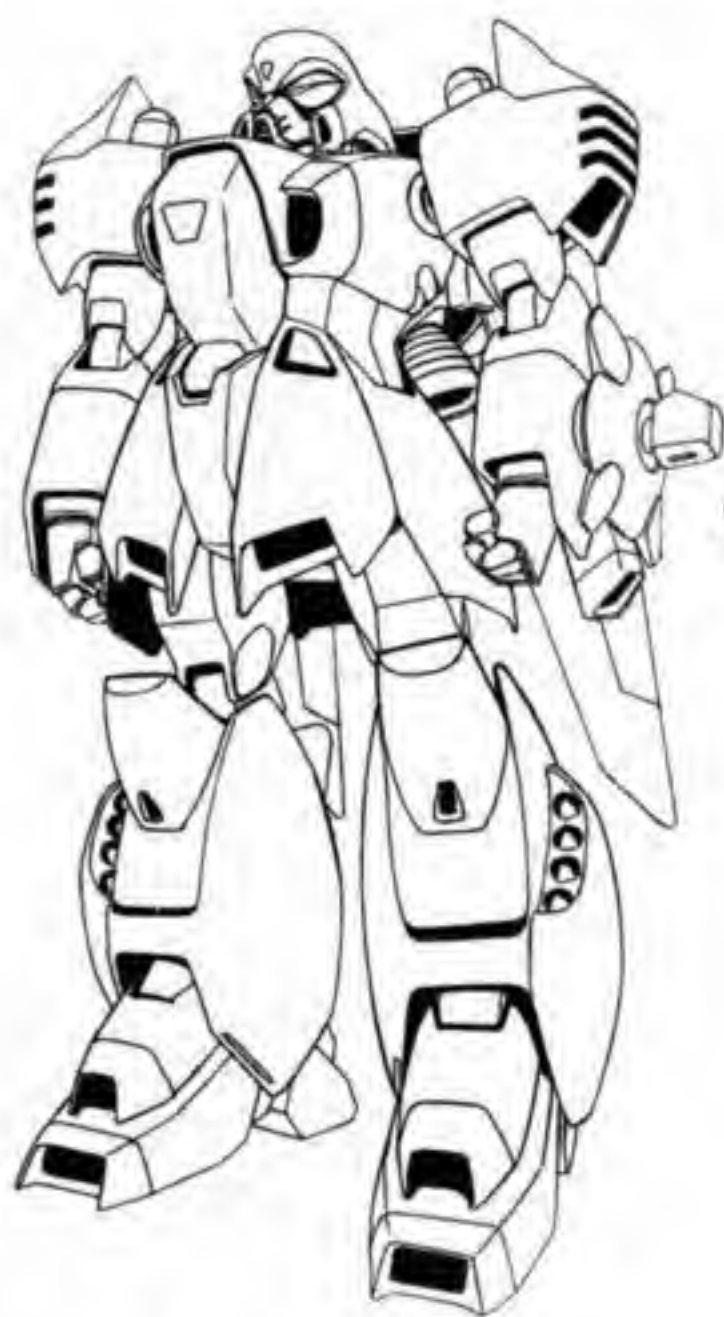
ガトリング・ガン



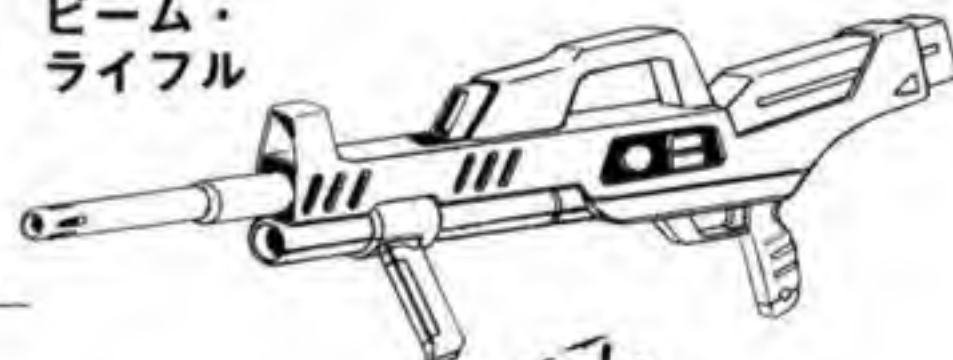
## ZM-S086S

### ゾロ改

ラゲーン基地に駐留する部隊の指揮官、マチス・ワーカーの搭乗機。頭部センサーが改装され索敵能力の向上が図られているが、それ以外は通常機と同じ。



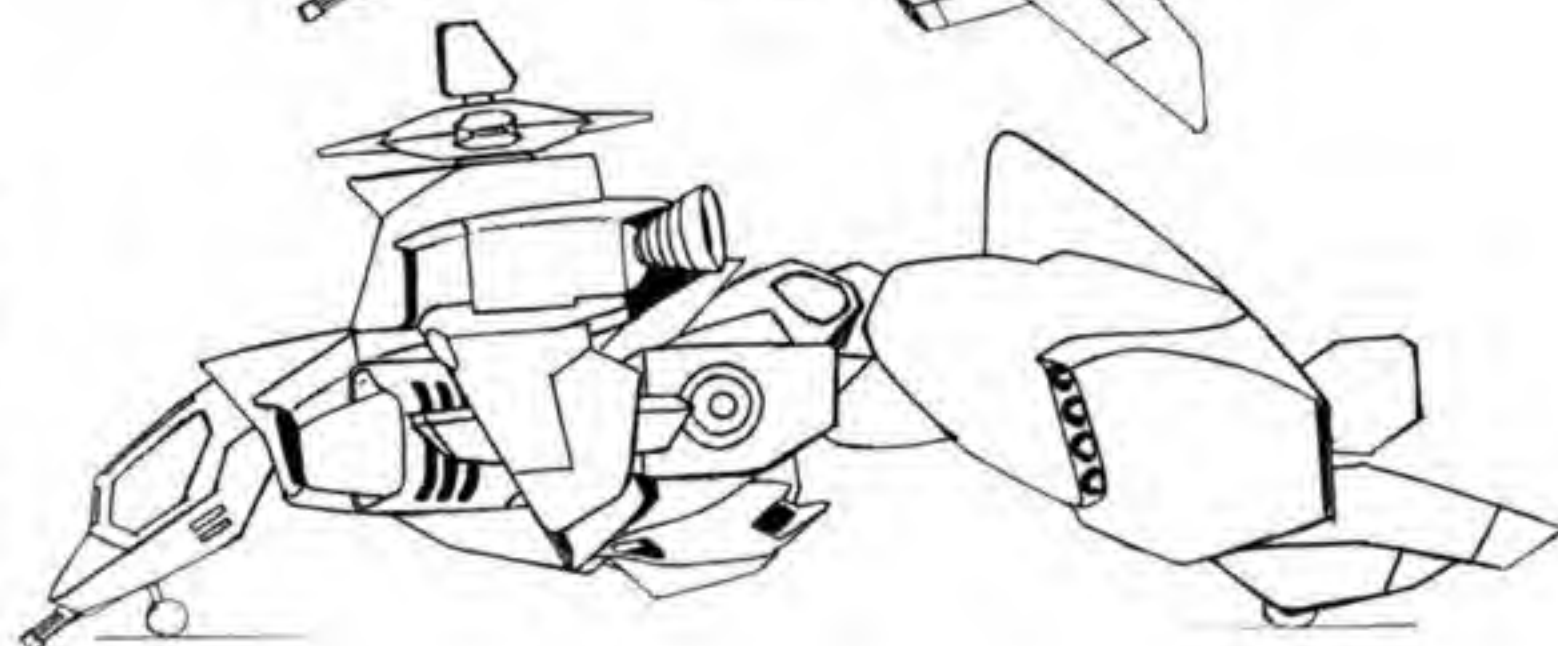
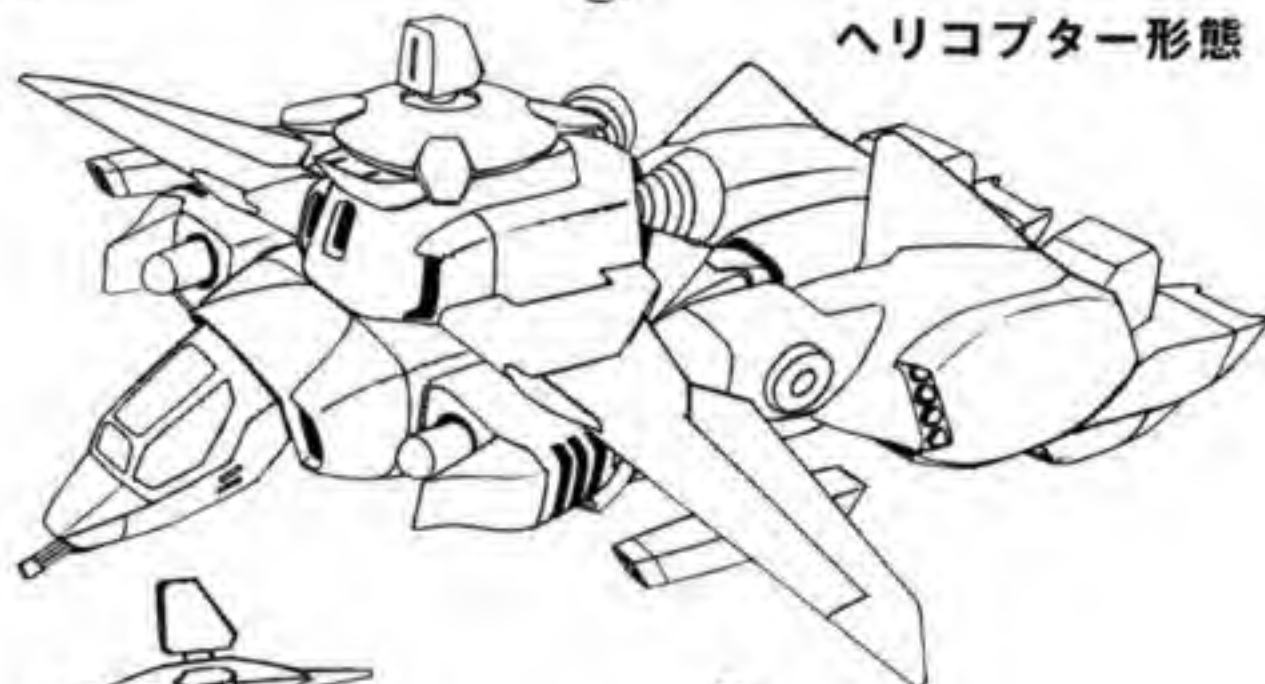
ビーム・ライフル



ビーム・トマホーク



ヘリコプター形態



## ZM-S096

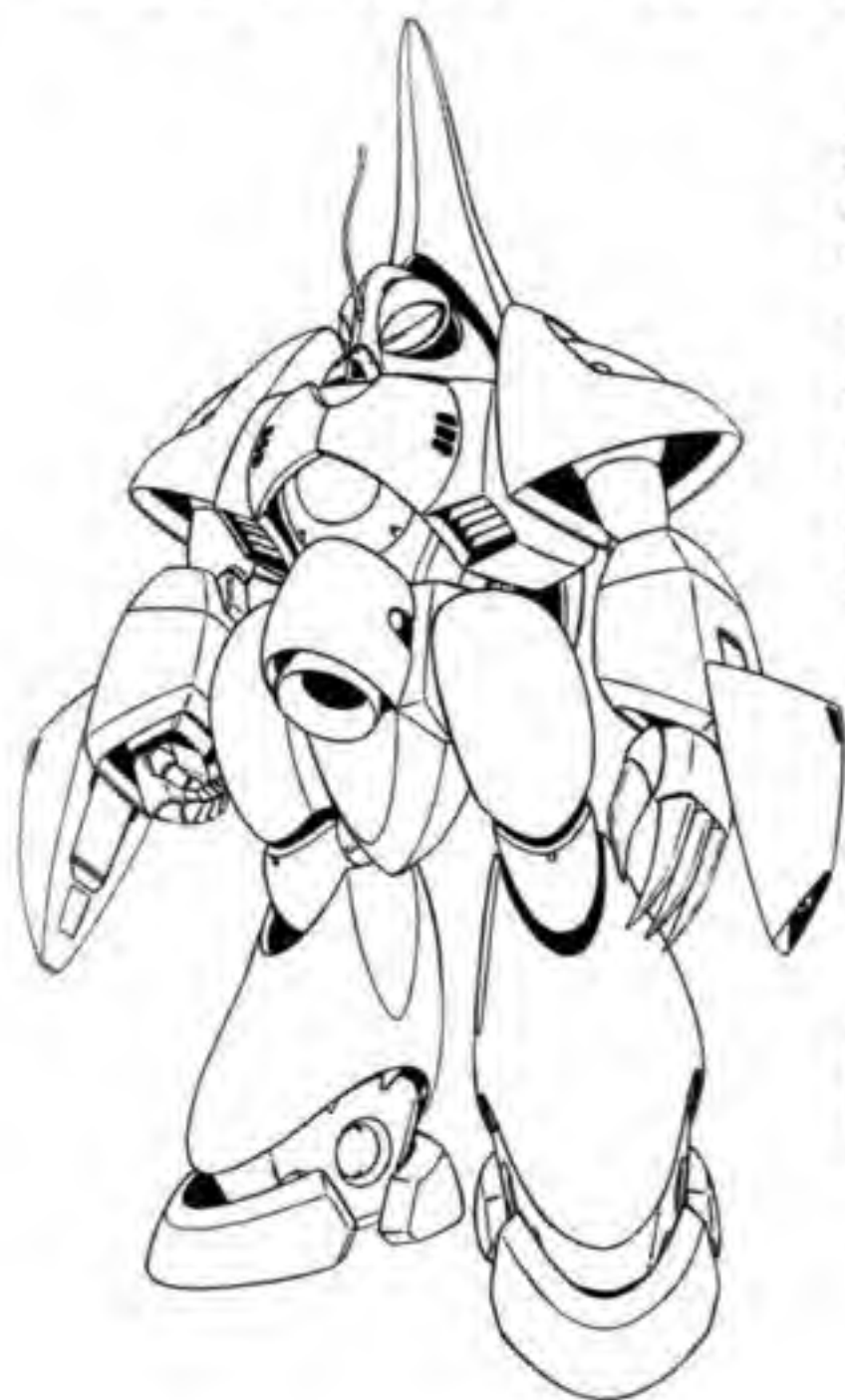
### トムリアット

ゾロの後継機。特徴的なビーム・ローターは共通しているが分離合体機能は廃され、単体による可変機構を採用している。ゾロとの武装共有も可能で、幅広い戦況に対応できるので汎用性も高く、基本地上戦用だが宇宙での運用も可能である。クロノクルも搭乗しているが、その際には機体色などは改められておらず一般機で出撃した。

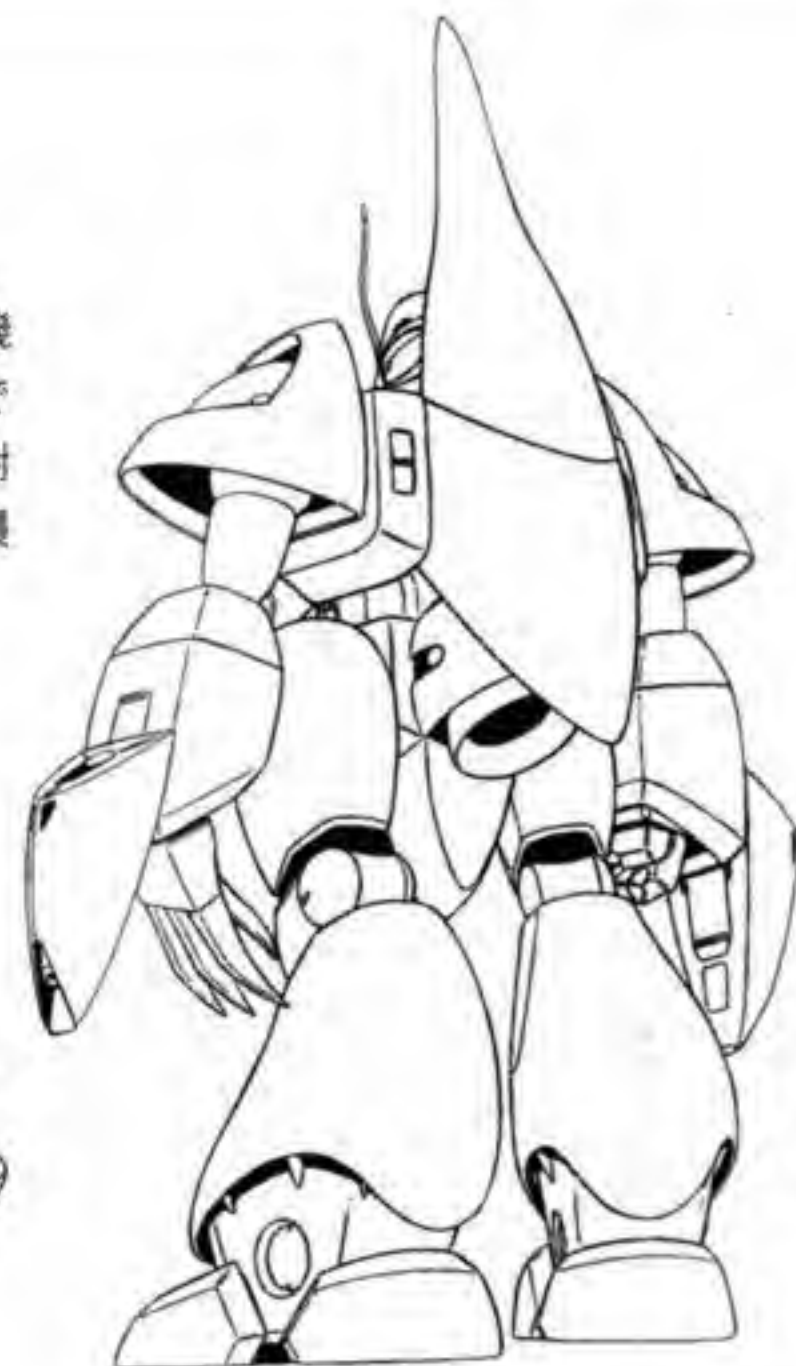
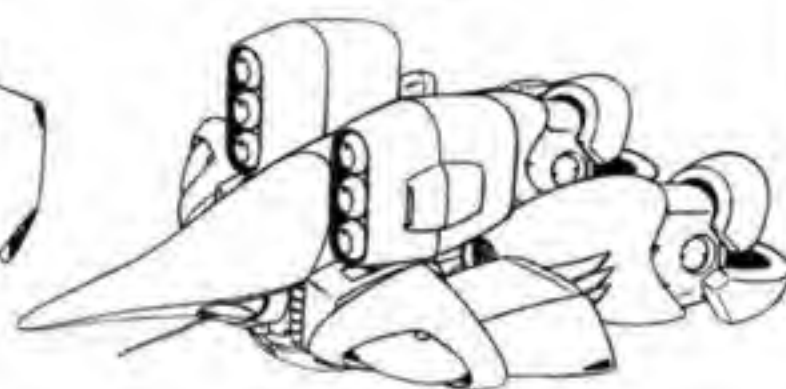


## ZMT-D15M ガルグイユ

ザンスカール帝国の水陸両用MS。試作機というか現場で急造された機体ゆえ、コクピット内は配線が剥きだしで、防水シーリングも不完全である（浸水もする！）。バイクをこよなく愛する、ドゥカー・イク大尉が夜通しで完成させたものの、宇宙へ上がろうとするリーンホースの襲撃には失敗してしまった。第16話「リーンホース浮上」から登場。



MA形態



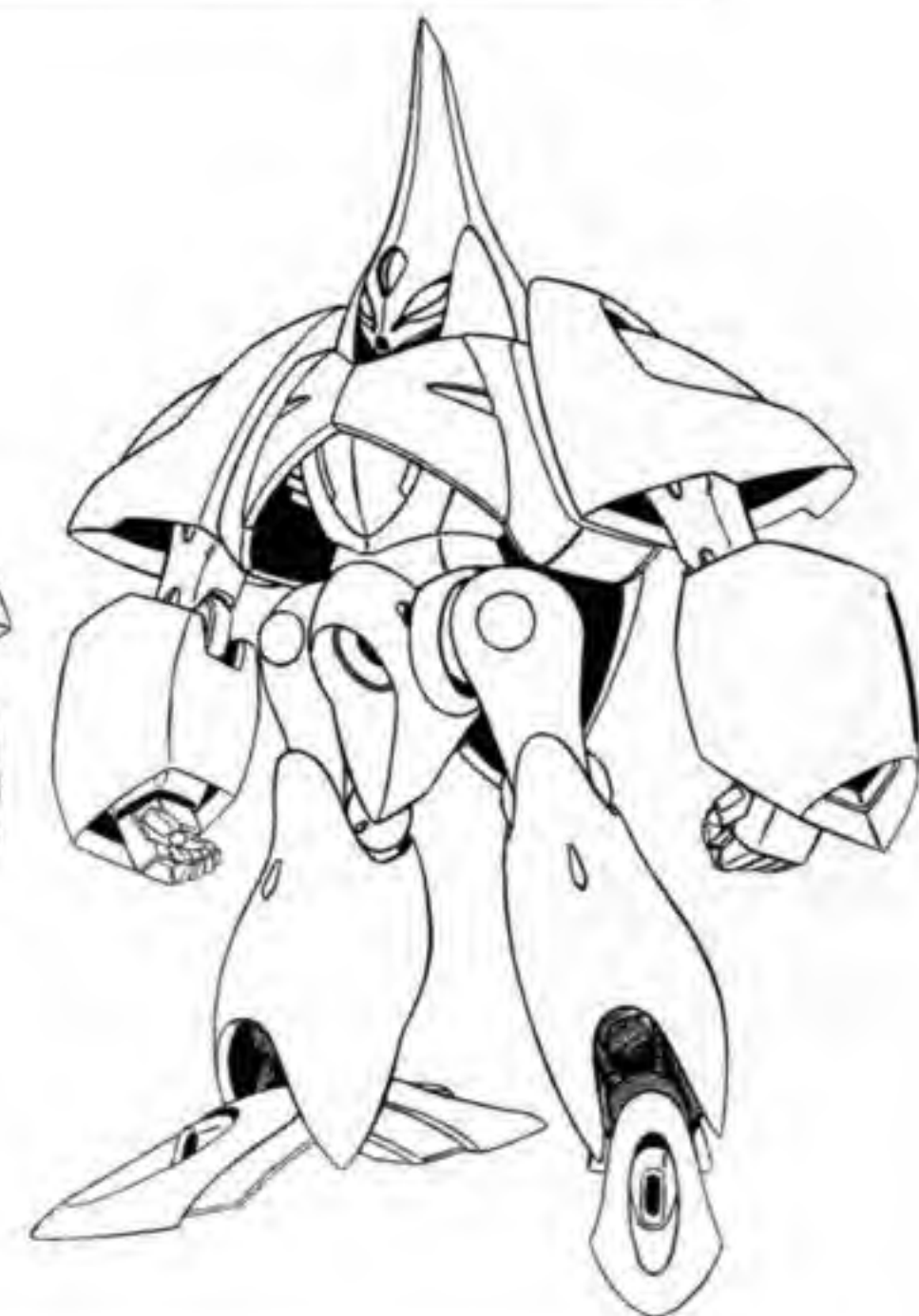
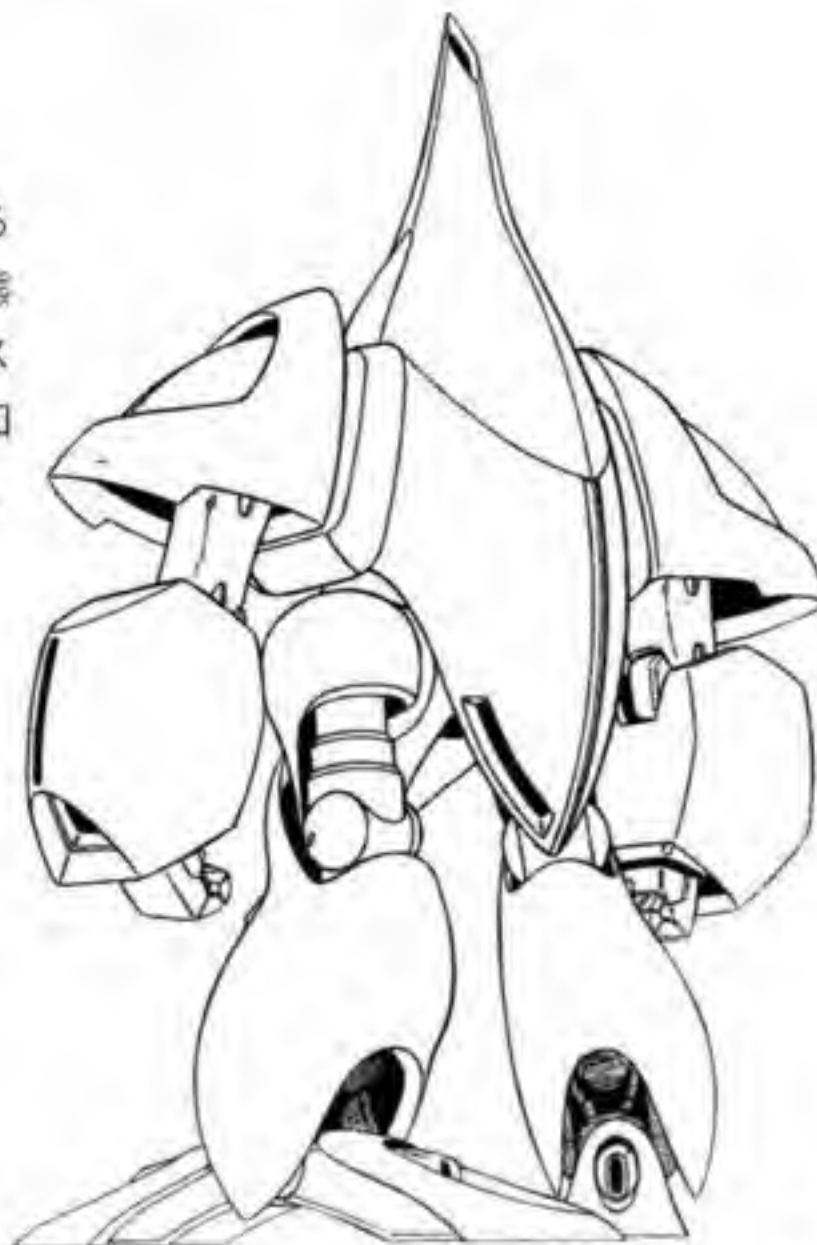
## ZM-D11S アビゴル

ザンスカール帝国の試作可変MS。MSの小型化が主流となる時代において全長22.6メートルと巨大な機体である。MA形態への変形が可能で搭載される武器も豊富だが、試作機らしくテスト中に故障するケースもみられた。搭乗者は人食い虎の通称で知られるゴットワルト・ハイン。第22話「宇宙の虎」に登場する。

MA形態

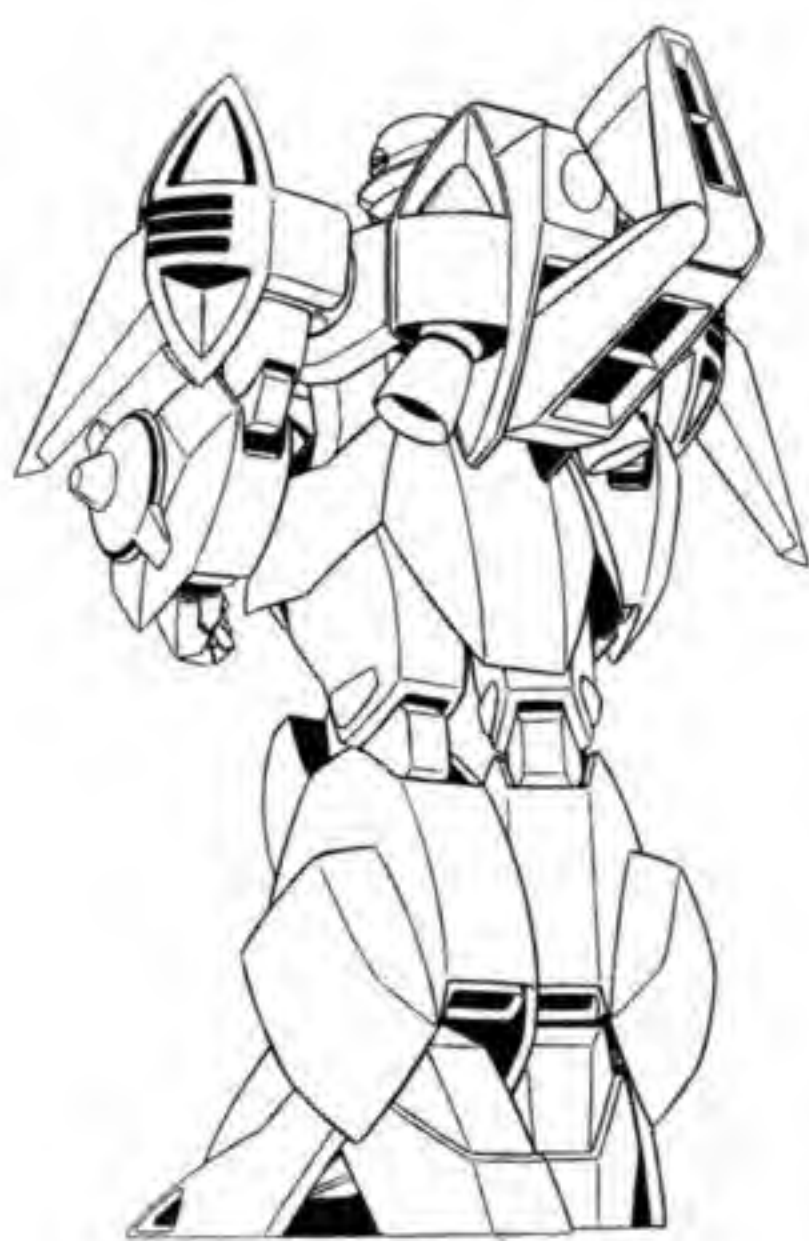


ビーム・サイ

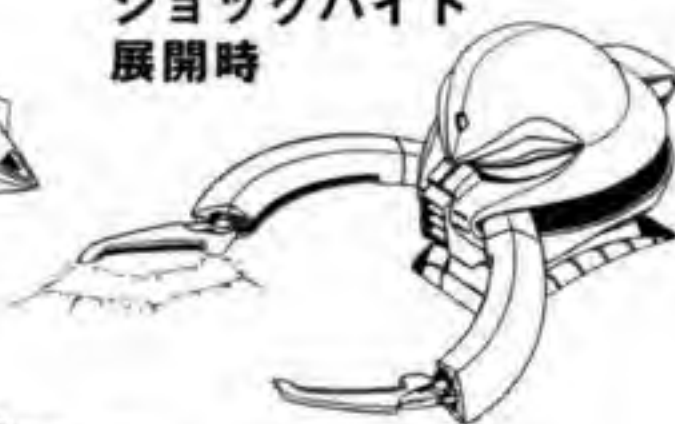


## ZM-S27G ドムットリア

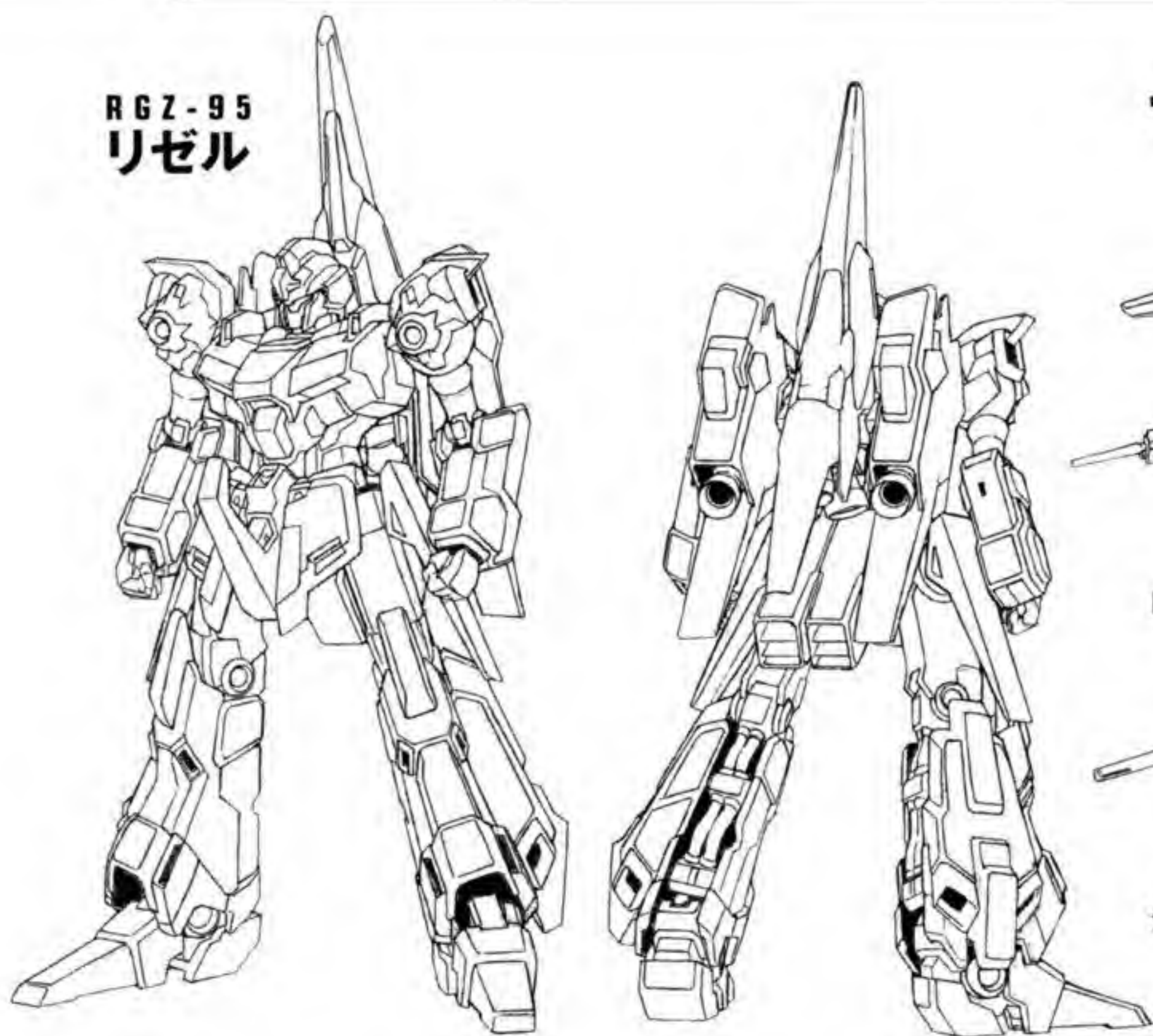
ザンスカール帝国の可変MS。トムリアットの後継発展型とはいえ、やはりビーム・ローターを装備している。頭部には特殊兵器であるショックバイトを備えている。地球クリーン作戦で初めて実戦投入されている。事実上、ビーム・ローターを装備した最後の機体である。主なパイロットはバイク乗りの魂を持つ女傑、レンダ・デ・パロマなど。第34話「巨大ローラー作戦」から登場。



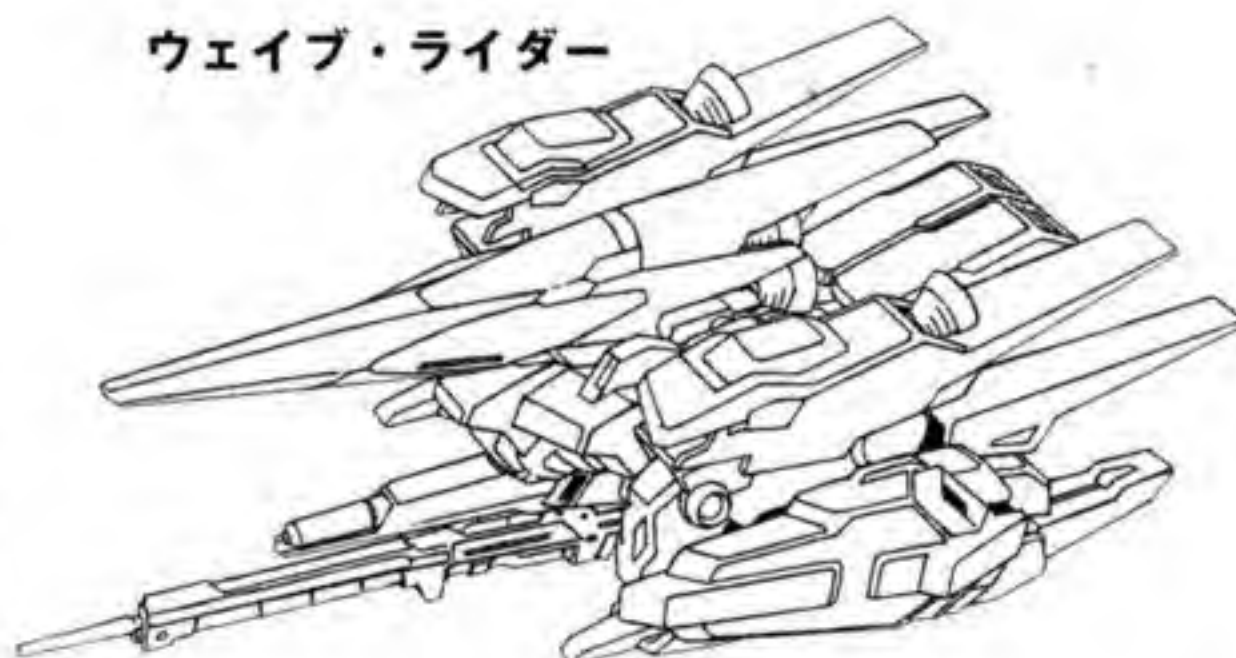
ヘリコプター形態

ショックバイト  
展開時

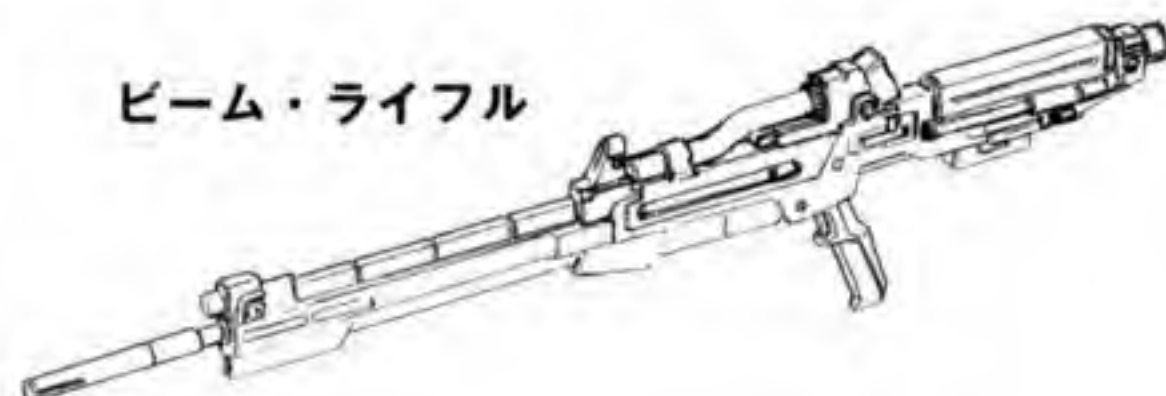


RGZ-95  
リゼル

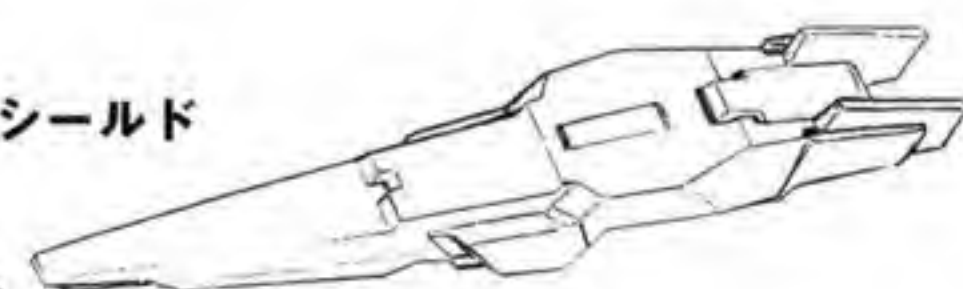
ウェイブ・ライダー



ビーム・ライフル

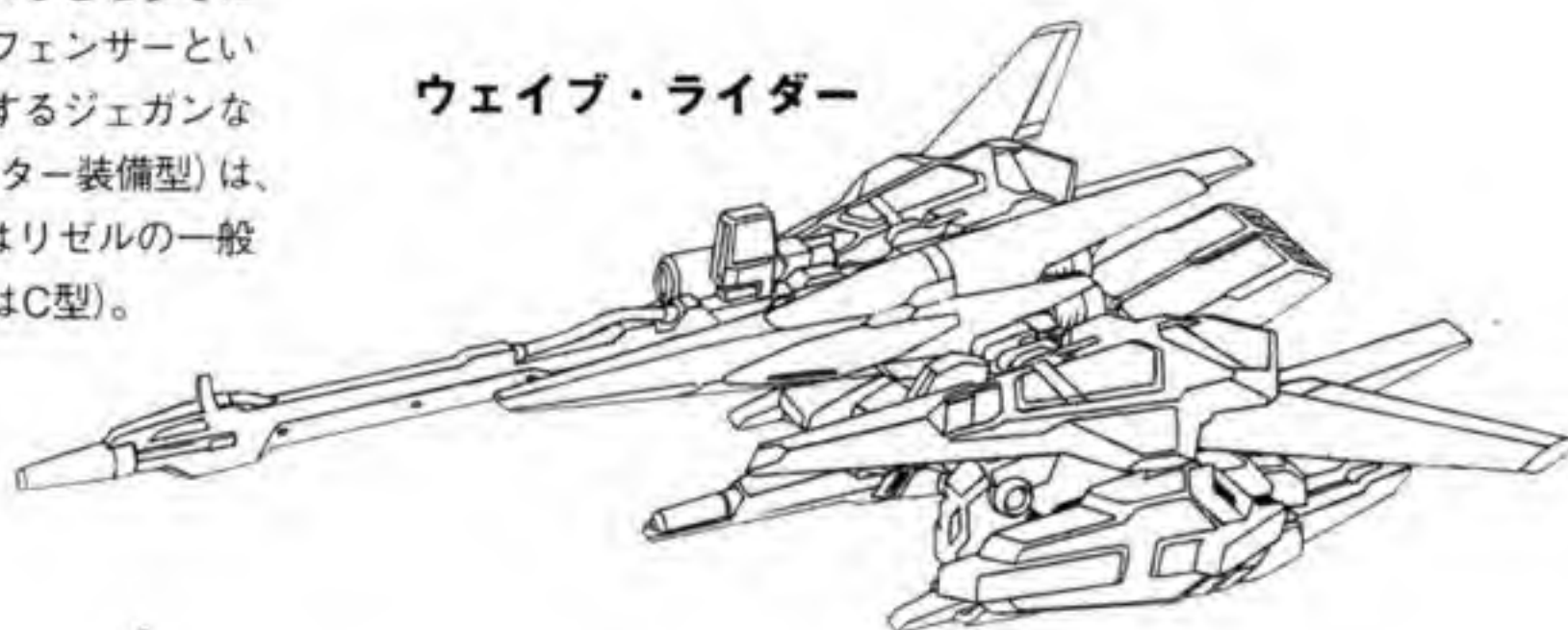


シールド

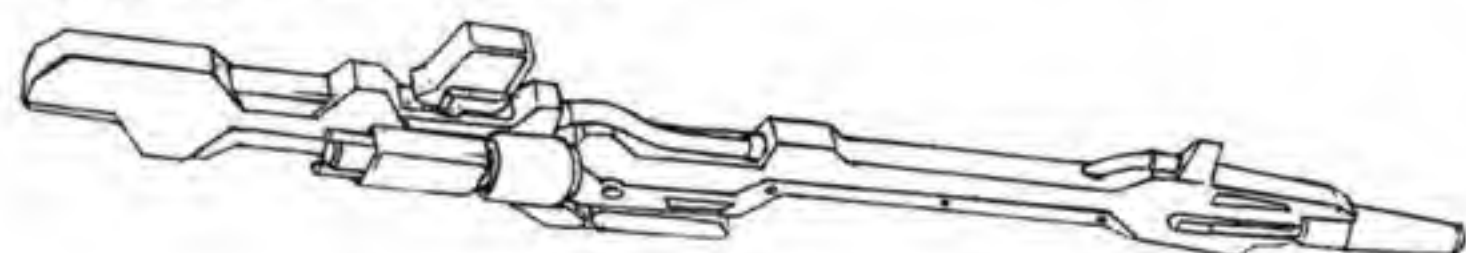


リ・ガズィの後継機にあたる連邦軍の可変MS。可変機構などはメタスなどを参考に  
して開発された。背部ユニットの換装により大気圏内での運用や、ディフェンサーとい  
った武装ユニットの追加装備が可能。またウェイブ・ライダーでは随伴するジェガンな  
どを現場へ運ぶこともできる。通称C型と呼ばれる性能向上型(非リミッター装備型)は、  
部隊の指揮官機として運用される例が多かった。『UC』作中でリディはリゼルの一般  
機に搭乗していた。他にもゼネラル・レビル配備機などが登場(こちらはC型)。

ウェイブ・ライダー

RGZ-95C  
リゼル(隊長機)

メガ・ビーム・ランチャー

RGZ-95  
リゼルC型  
ディフェンサー  
bユニット

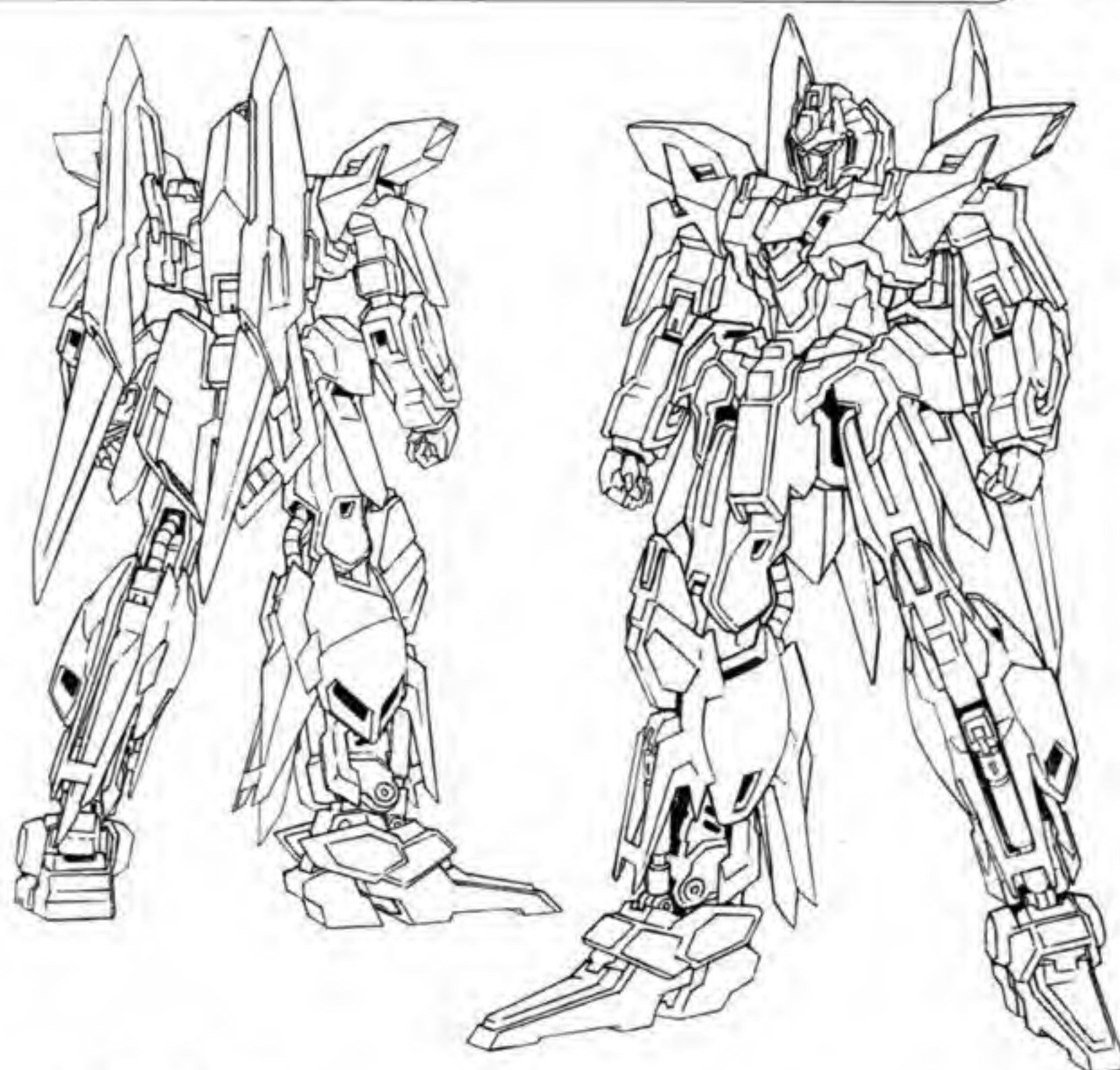


## MSN-001A1 デルタプラス

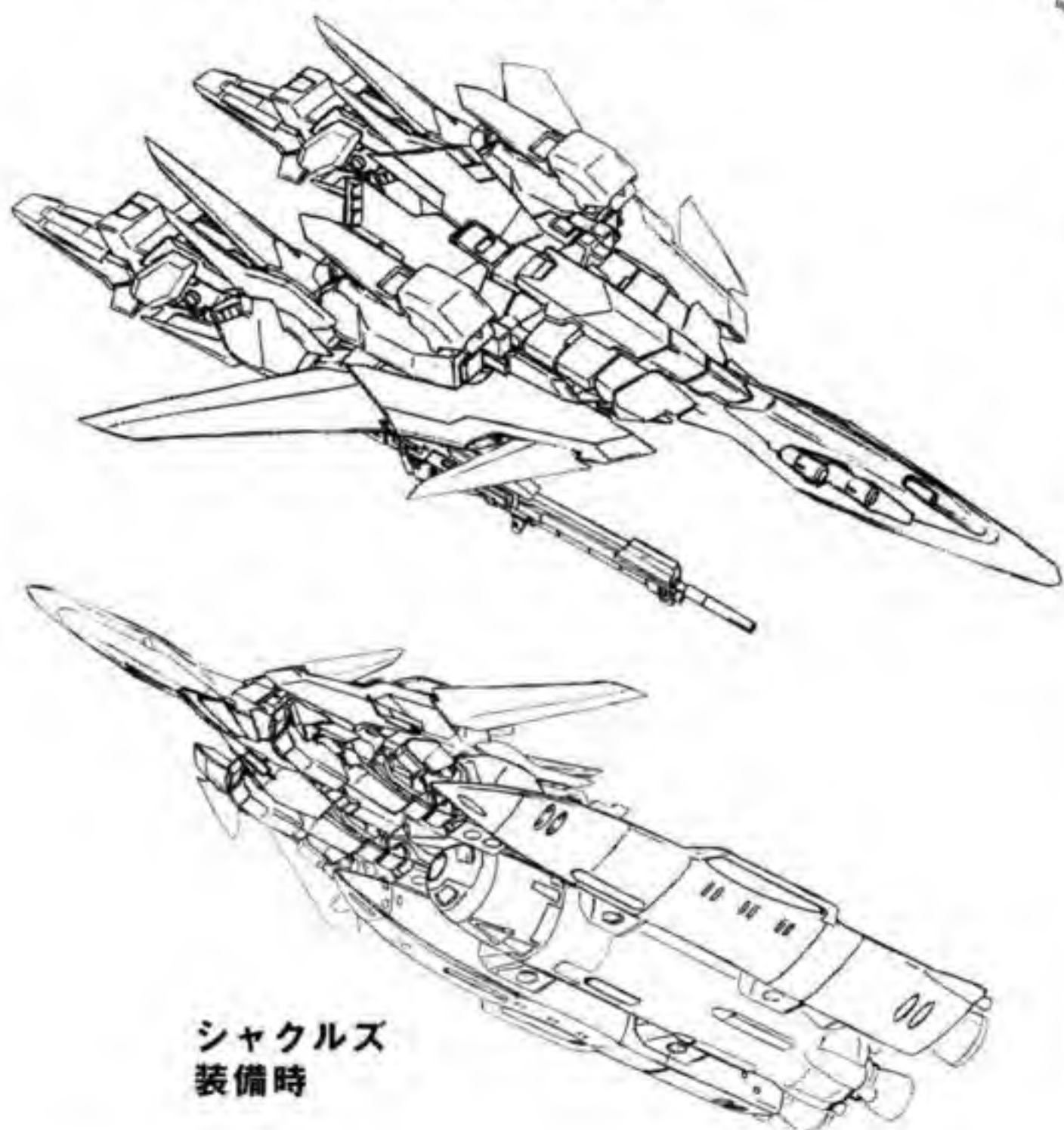
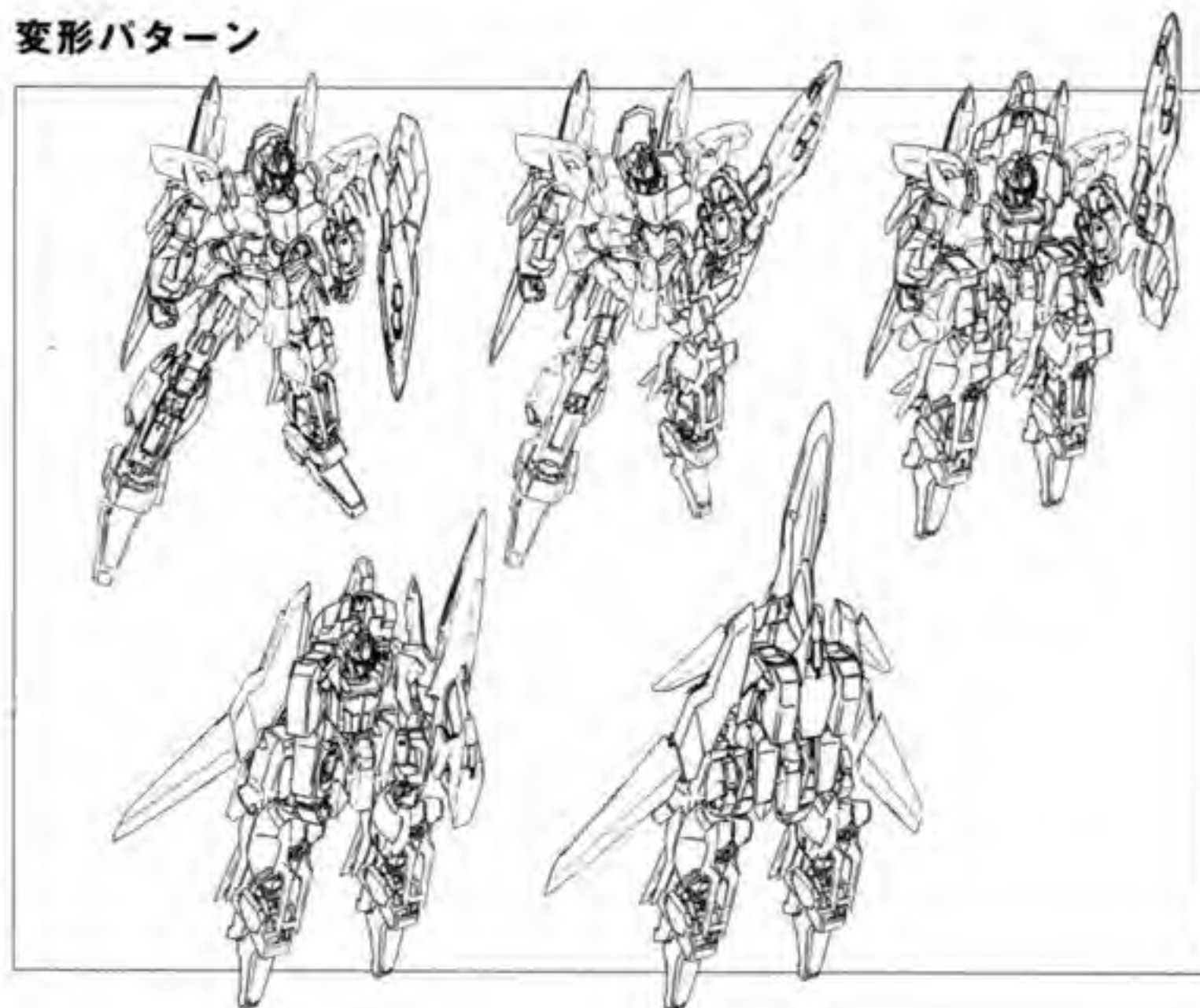
グリプス戦役時の「Z計画」にて、δガンダムの系統として開発が進められていた試作可変MS。機体不足に窮した Rond・ベル隊の要請で急ぎょ配備され、リディ・マーセナスの機体として戦場へ投入された。機体性能は高いが、ユニコーンガンダム2号機バンシィにより破壊されてしまった。

### ウェイブ・ライダー

↓オードリーを乗せたりディは、地球圏に向かうため、「袖付き」の拠点、パラオにあったシャクルズをブースター代わりに装着した姿。プロペラント不足を補うための非常手段といったところだろう。



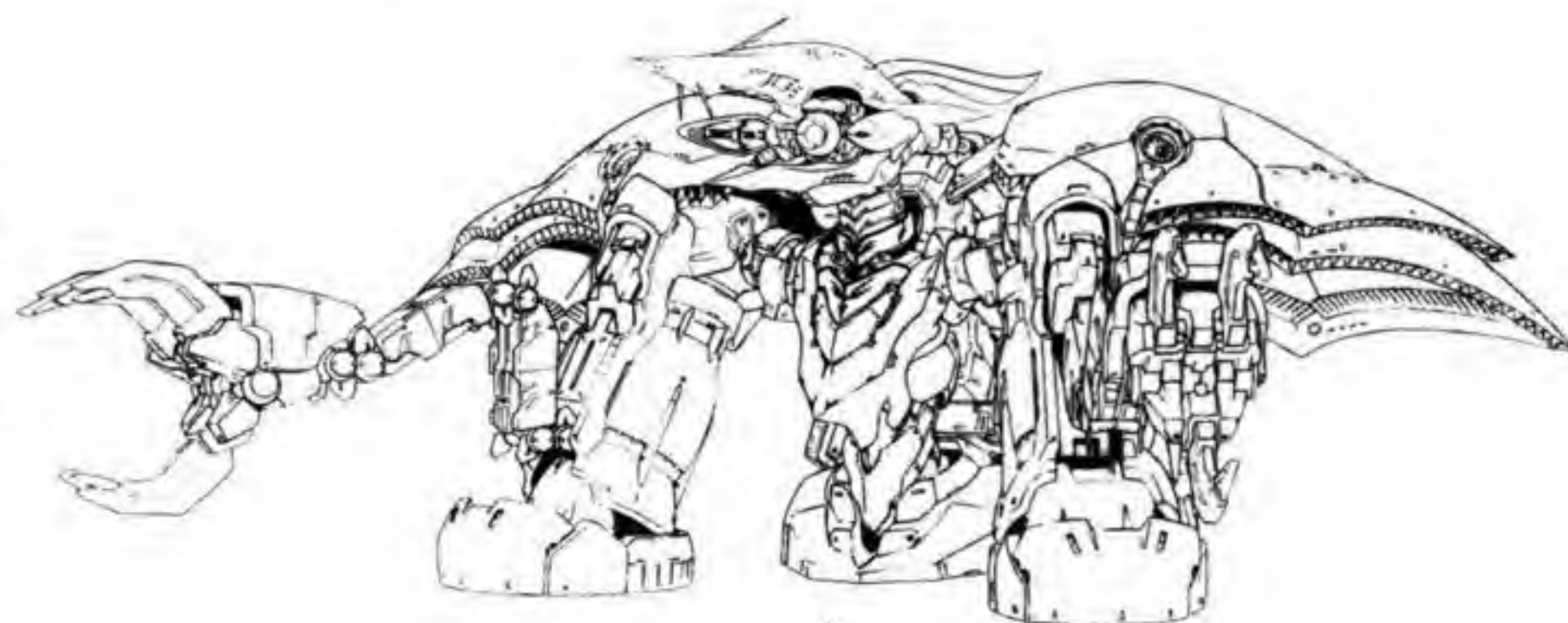
### 変形パターン



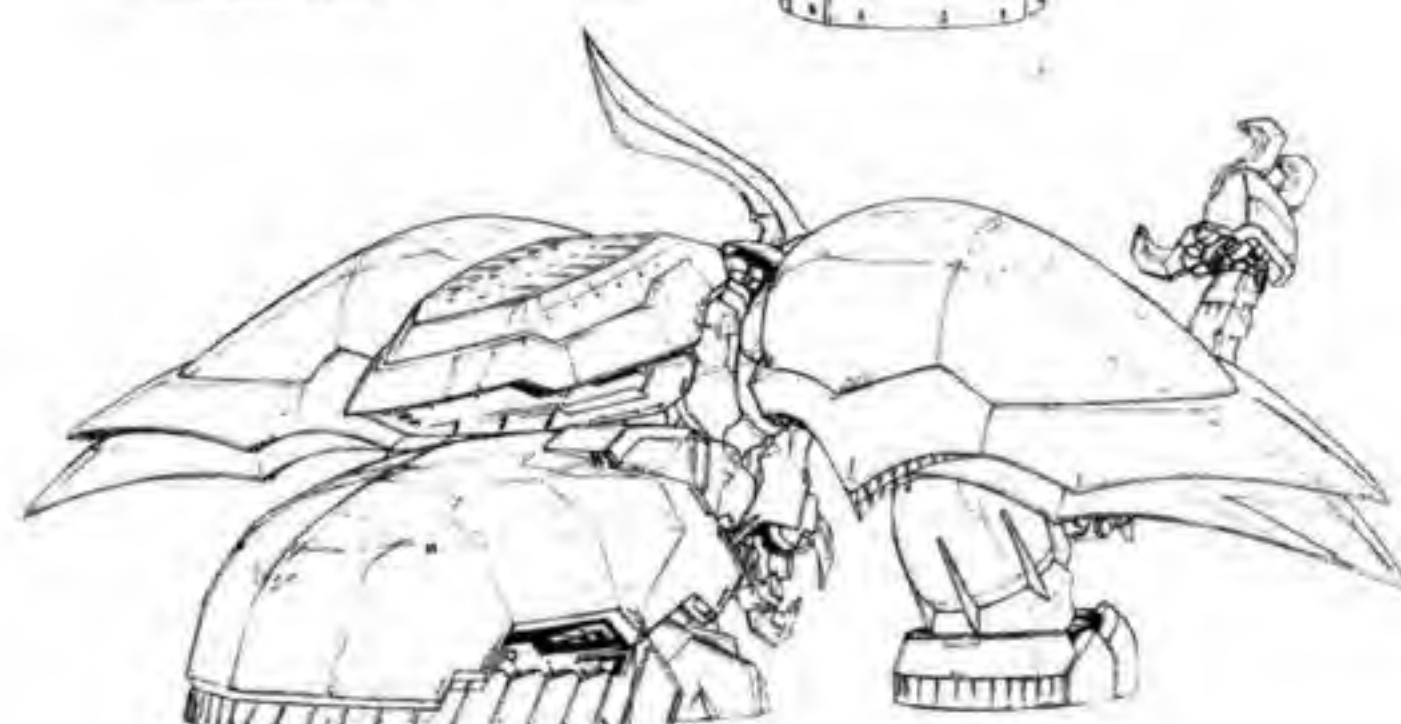
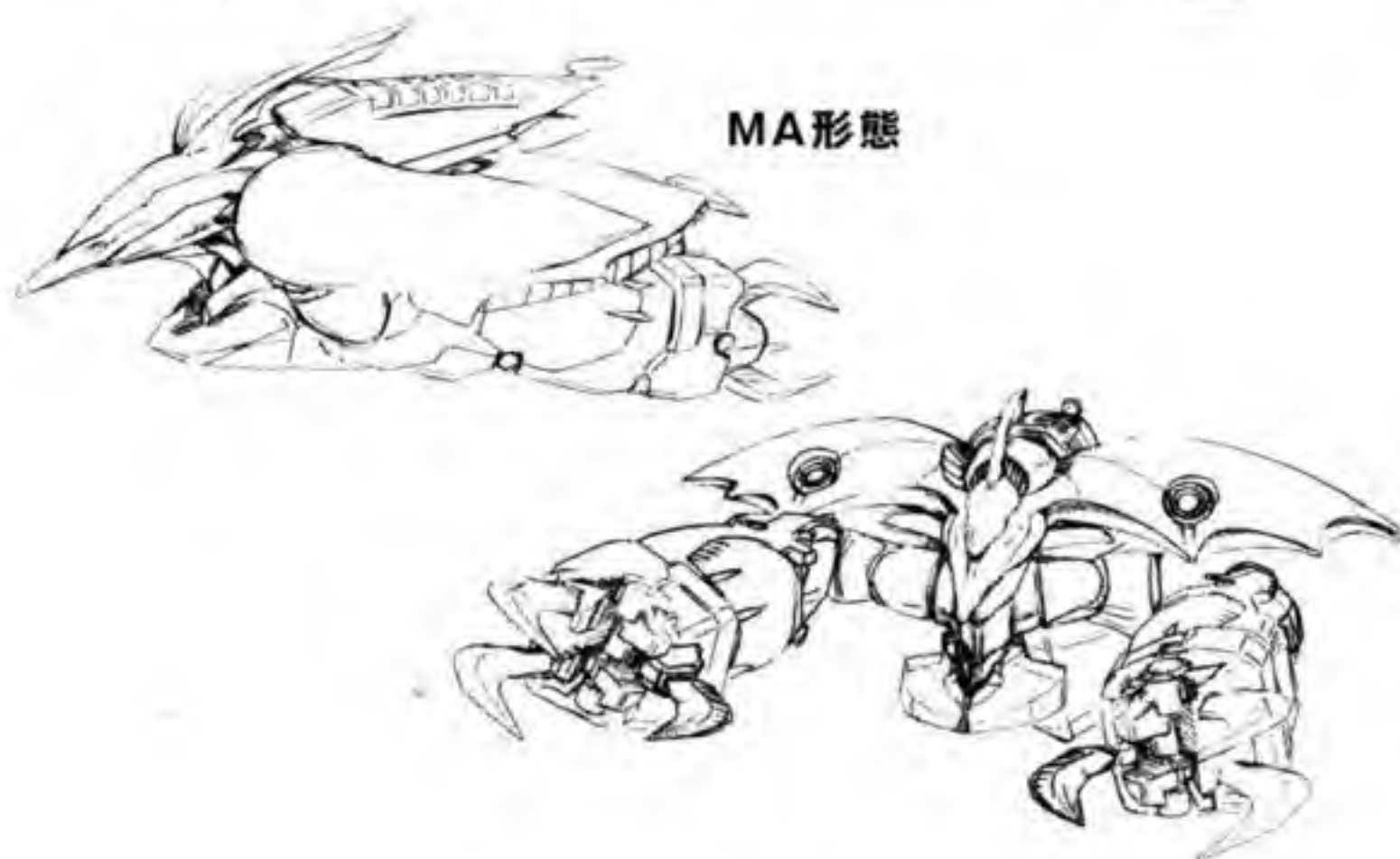
シャクルズ  
装備時

## AMA-X7 シャンブロ

地球圏の旧ジオン軍残党の手により作られた水陸両用MA。機体制御にサイコミュを用いたニュータイプ専用機でもある。巨大なクロー・アームとアイアン・ネイルによる攻撃力は高く、その一撃に艦艇はひとたまりもない。機体はロニ・ガーベが駆り、ダカールやトリントン基地を襲撃した。

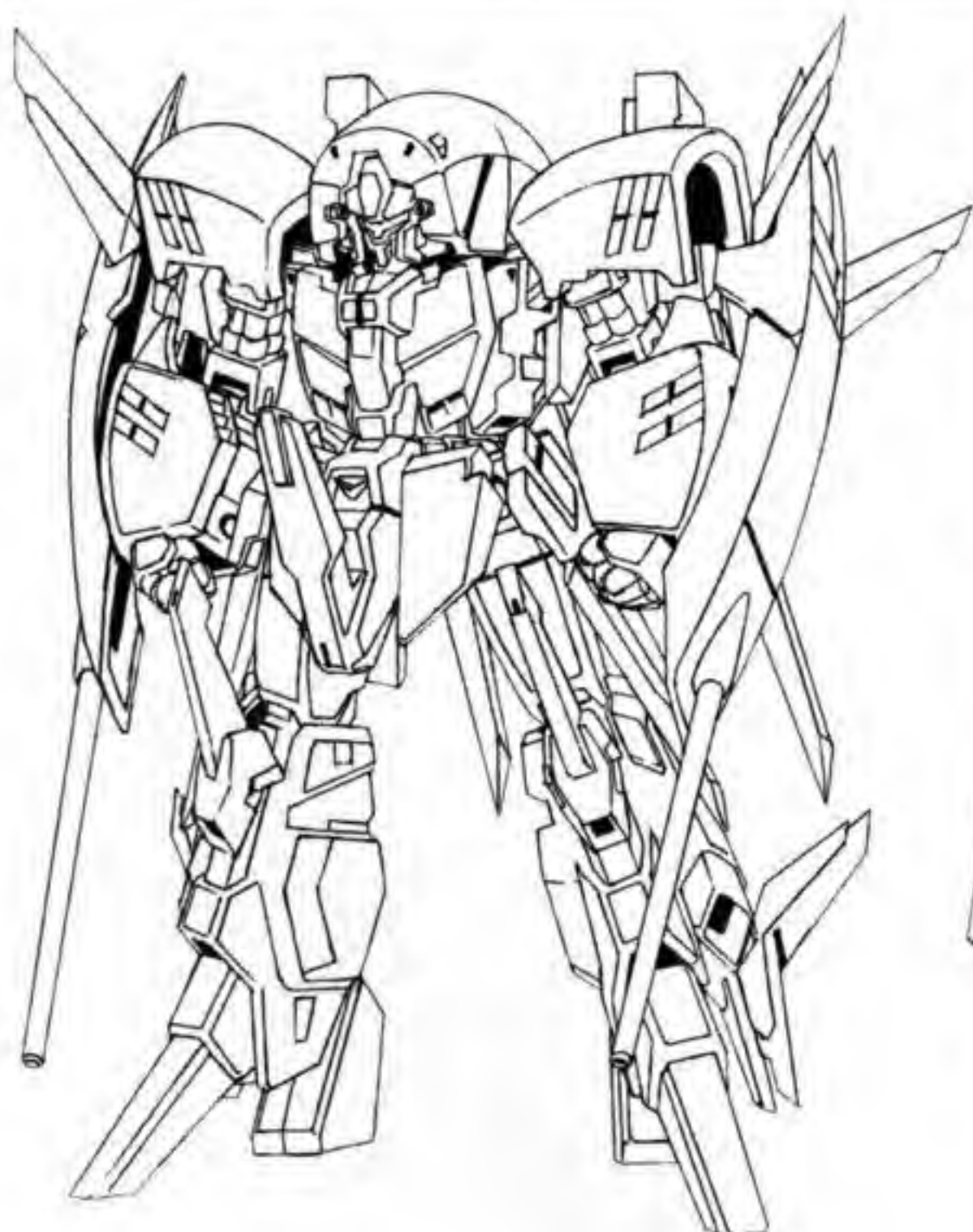


MA形態



※上下ともハイディテール版の設定画。





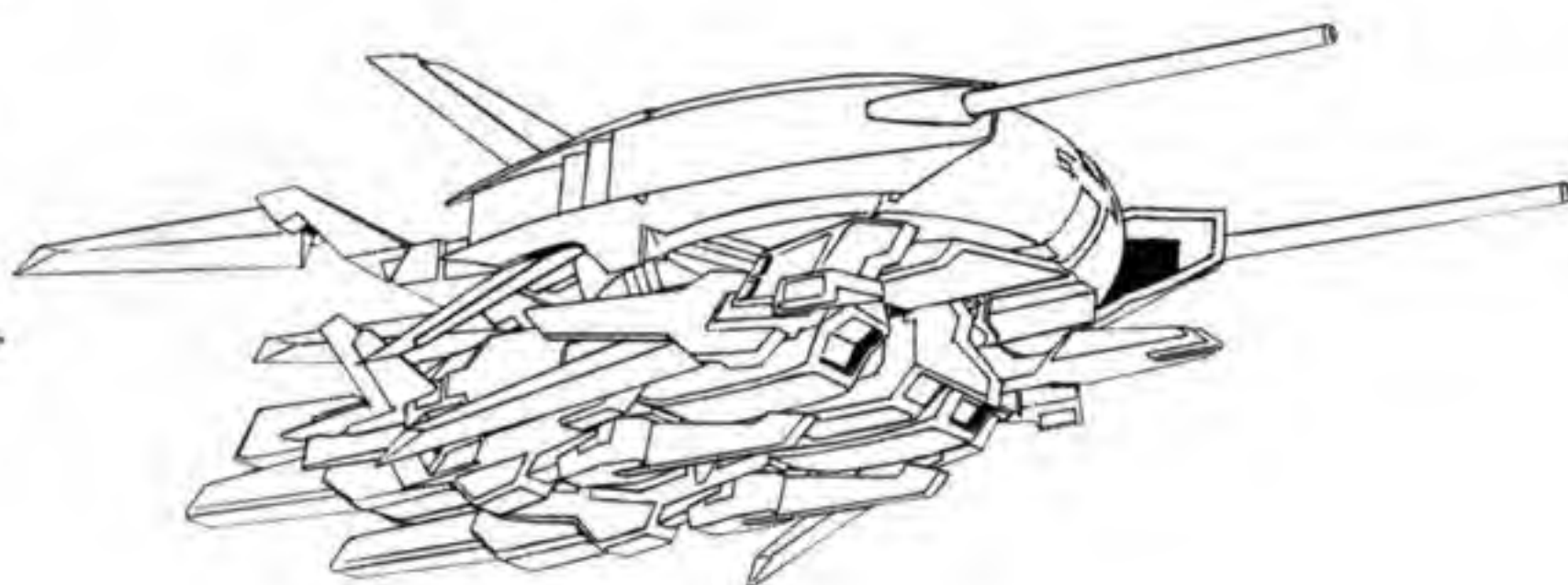
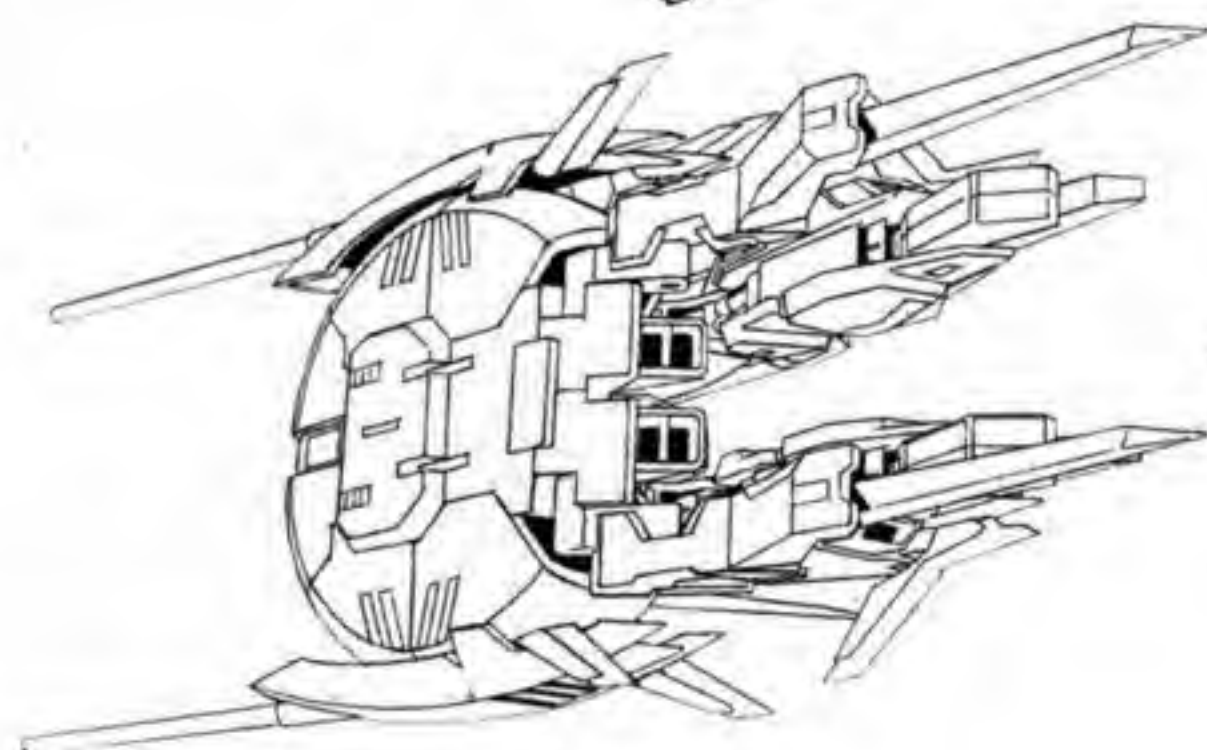
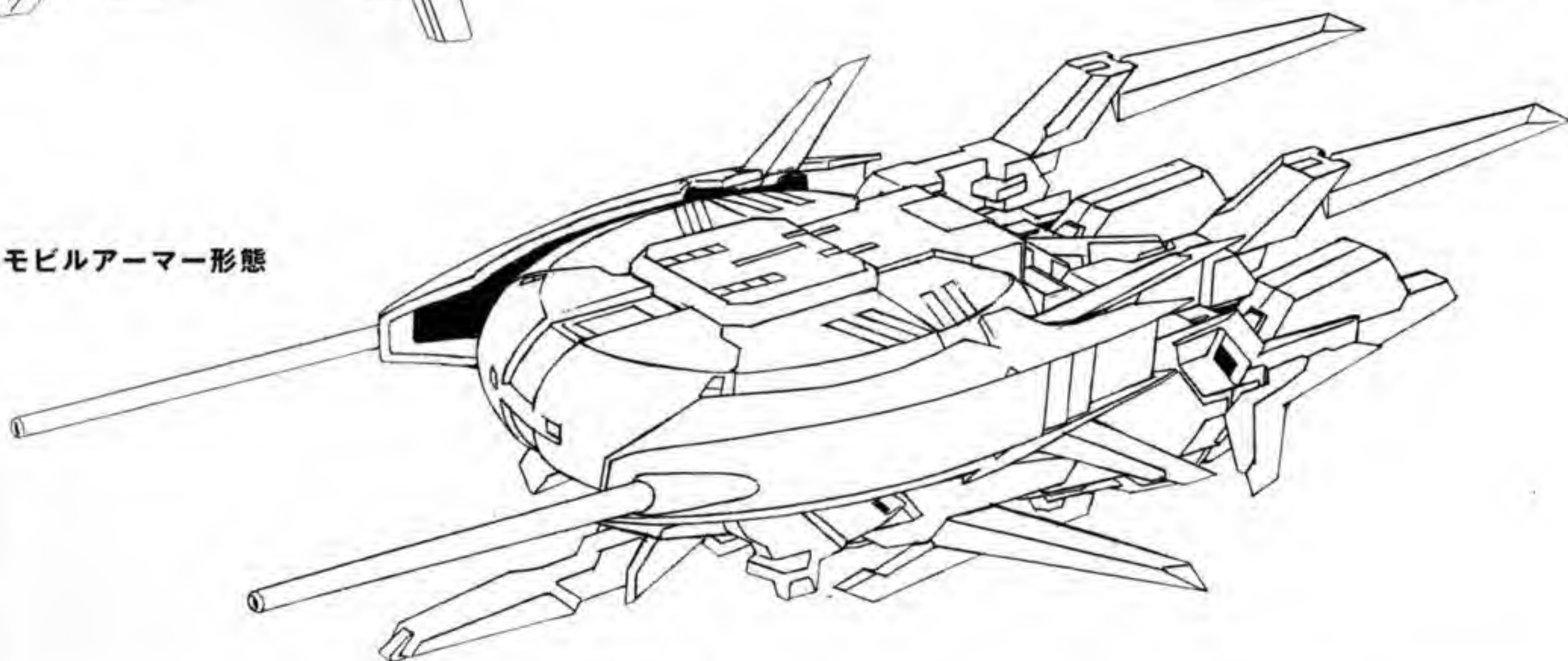
## RAS-96 アングシャ

地球連邦軍の可変MS。MA時の形状からもうかがえるが、可変MAのアッシマーの発展型といえる。機体そのものはアッシマーのデータを再設計したといわれる。ギャブランのように両腕にはムーバブル・シールド・バインダーを備えている。ジェガンと部品の共通化が図られ、運用効率の面も向上している。

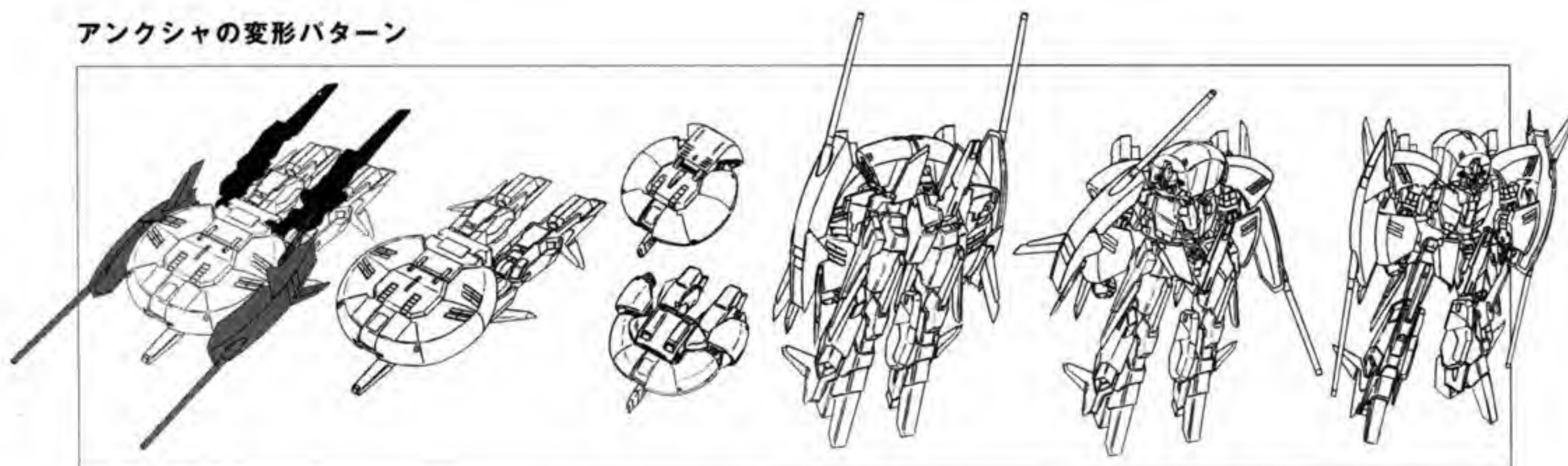
頭部



モビルアーマー形態

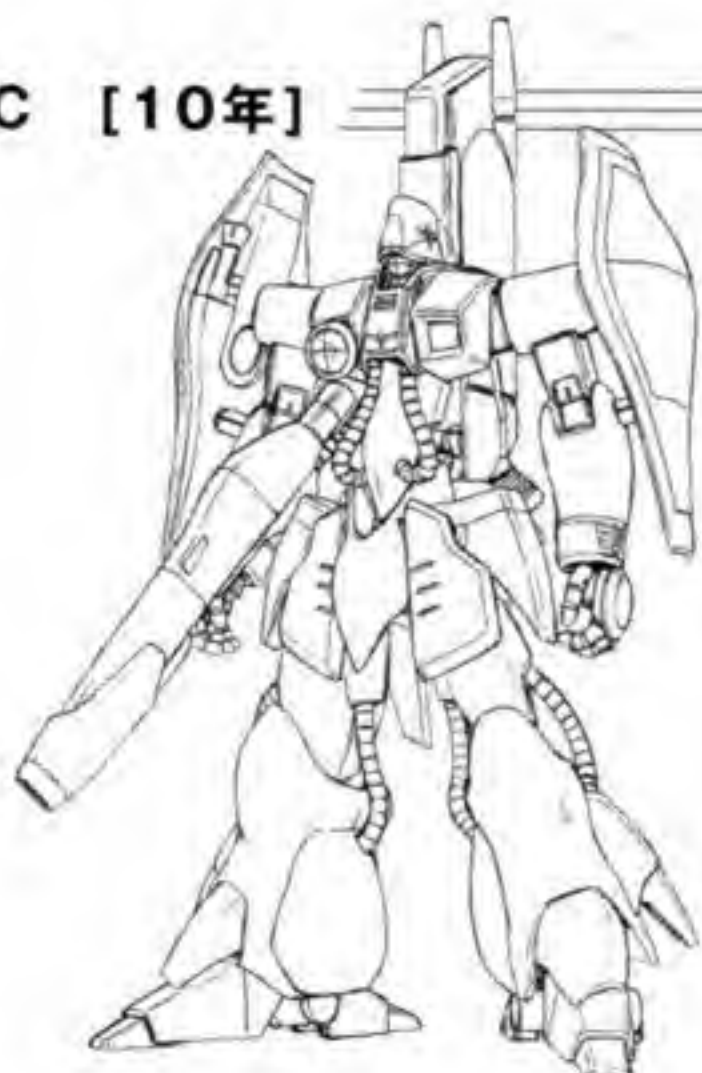


アングシャの変形パターン





AMX-003  
ガザC  
「袖付き」仕様

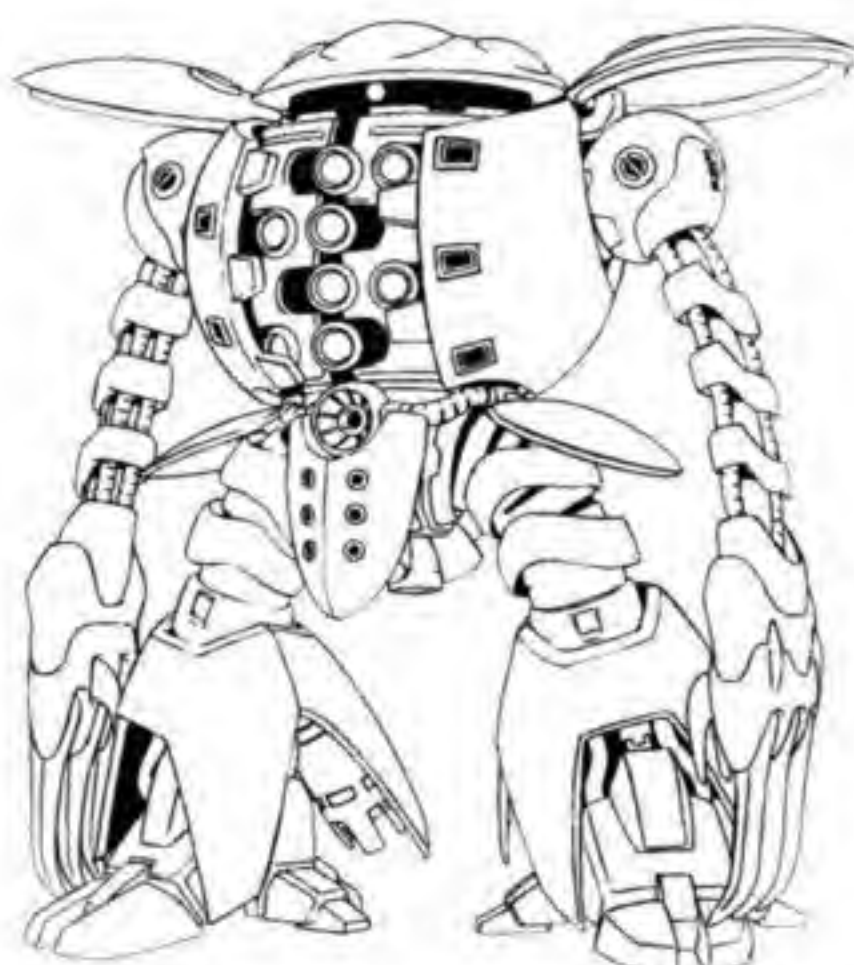


※ep3に登場。

## ガンダムUCに 登場する可変MS

宇宙世紀を描くガンダム作品の一つである『ガンダムUC』には数多くの可変MSが登場する。それらはリゼルのように最新の劇中オリジナルのバリエーション機であったり、過去の映像作品や関連企画で登場した機体であったりと、多岐にわたる。ここではそんな中からゲストとして登場した可変MSの数々を紹介する。

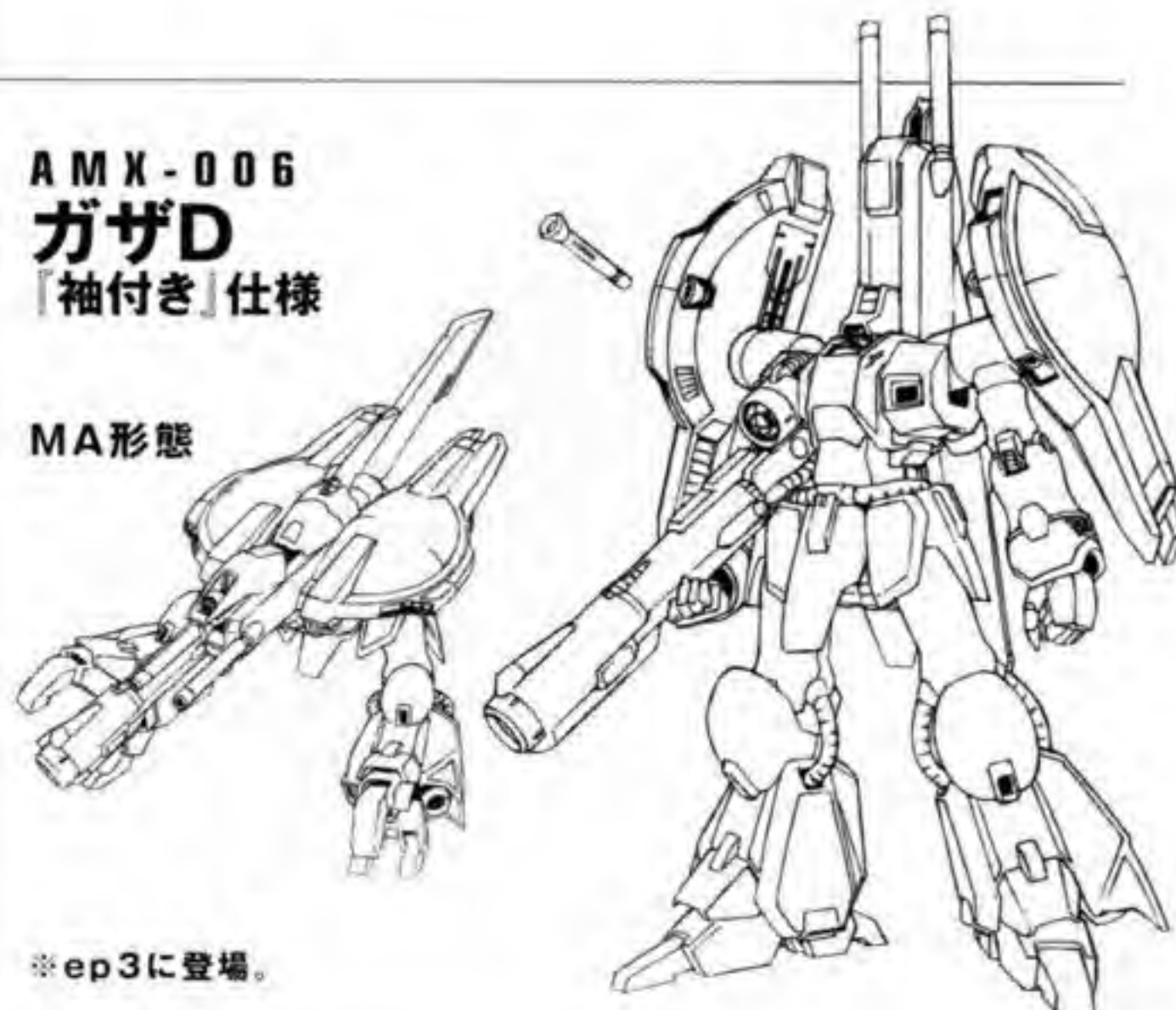
AMX-109  
カプール



※ep4に登場。

AMX-006  
ガザD  
「袖付き」仕様

MA形態



※ep3に登場。

AMX-107  
バウ  
「袖付き」仕様

バウ・  
アタッカー

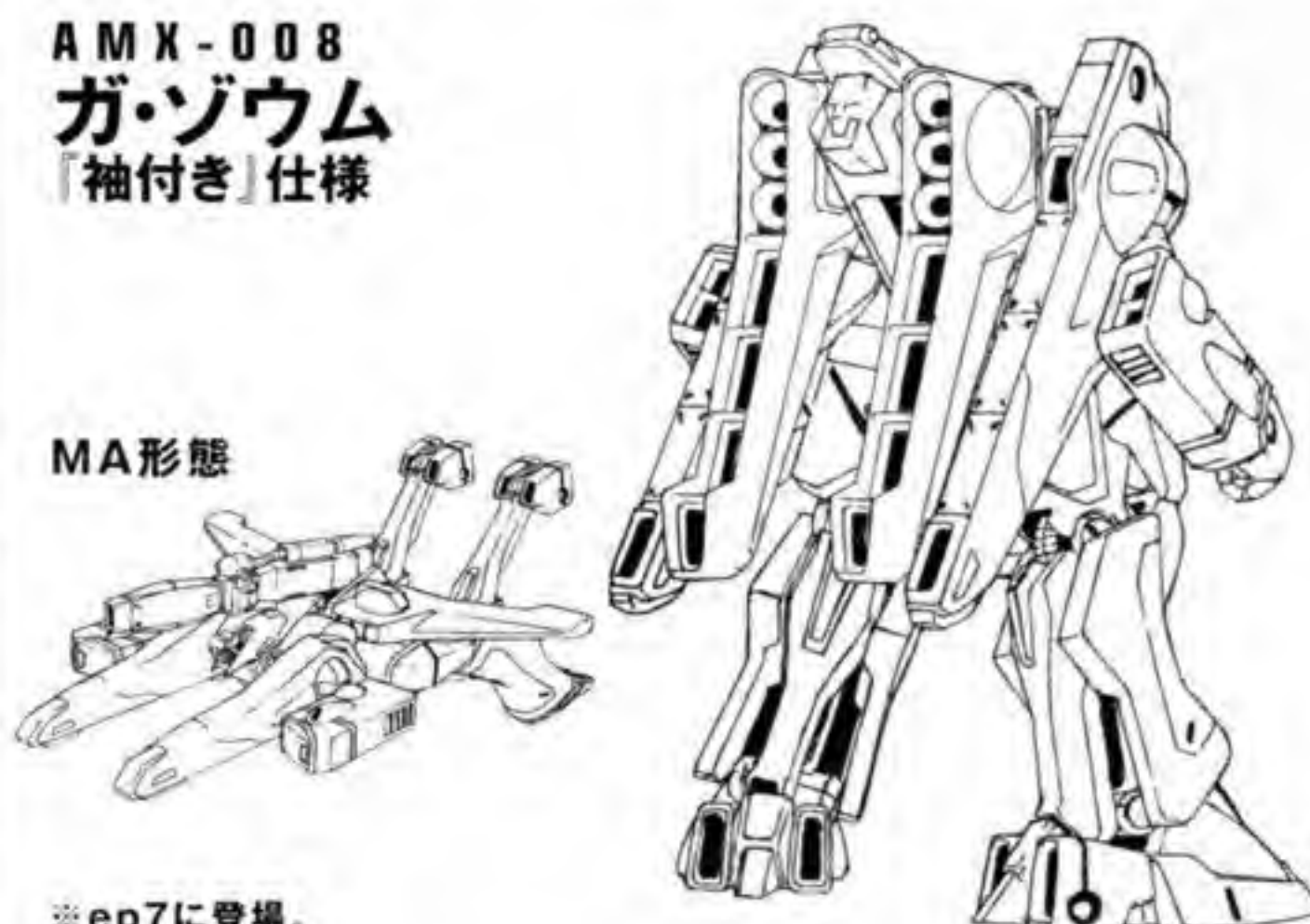
バウ・  
ナッター



※ep7に登場。

AMX-008  
ガ・ゾウム  
「袖付き」仕様

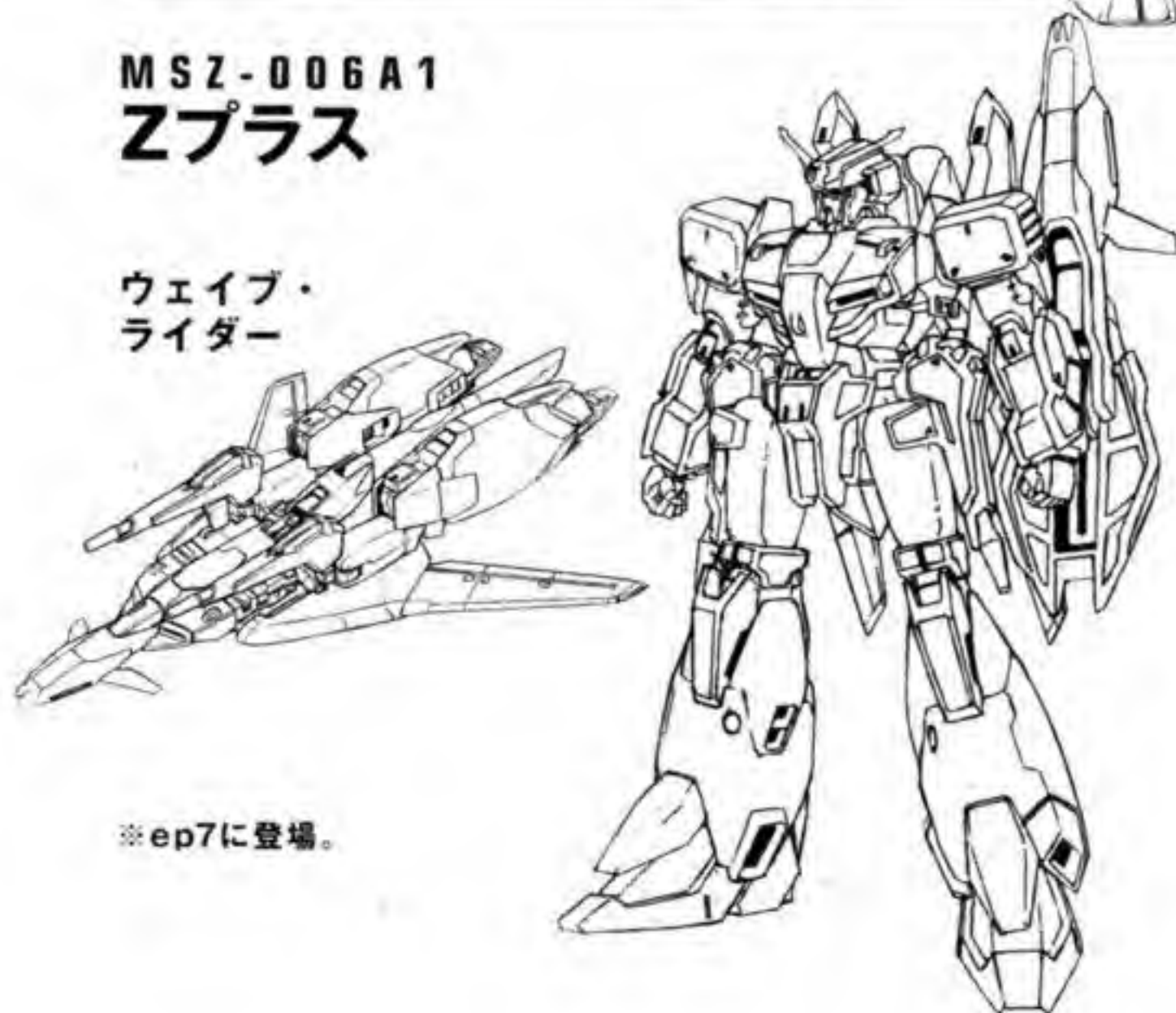
MA形態



※ep7に登場。

MSZ-006A1  
Zプラス

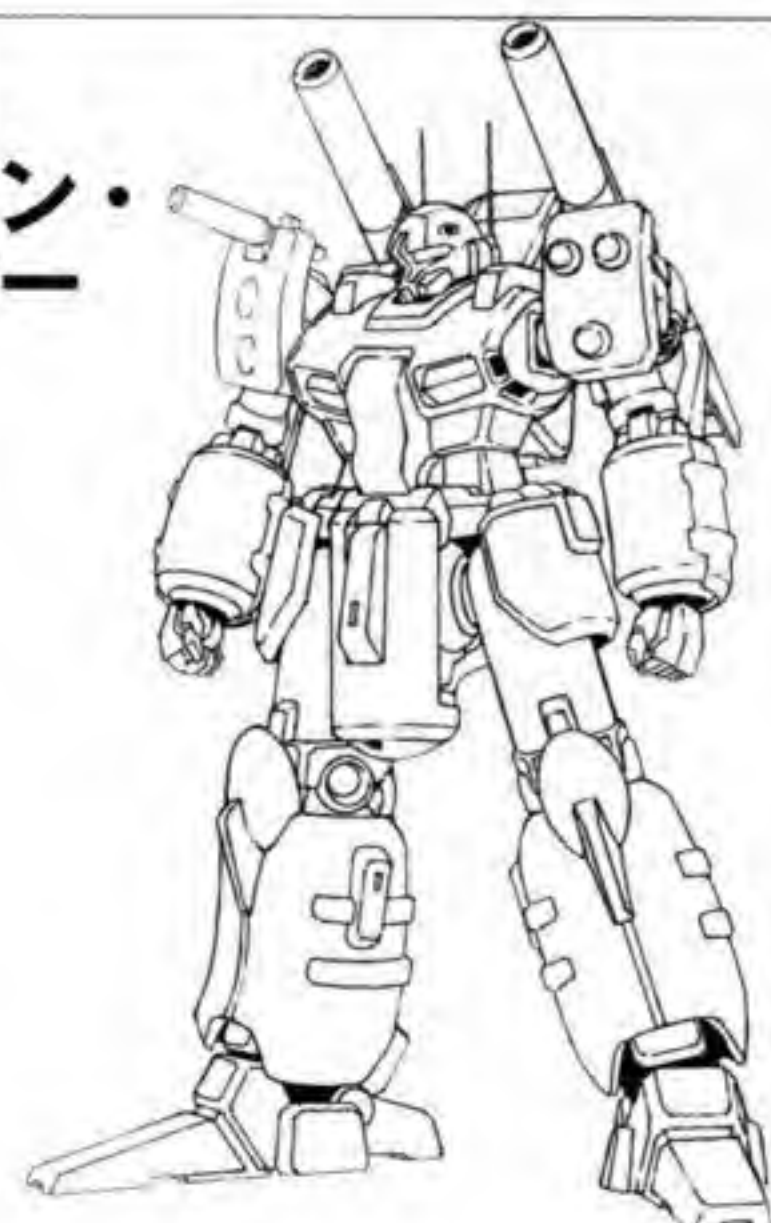
ウェイブ・  
ライダー



※ep7に登場。

MSA-005K  
ガンキャノン・  
ディテクター

※ep4に登場。

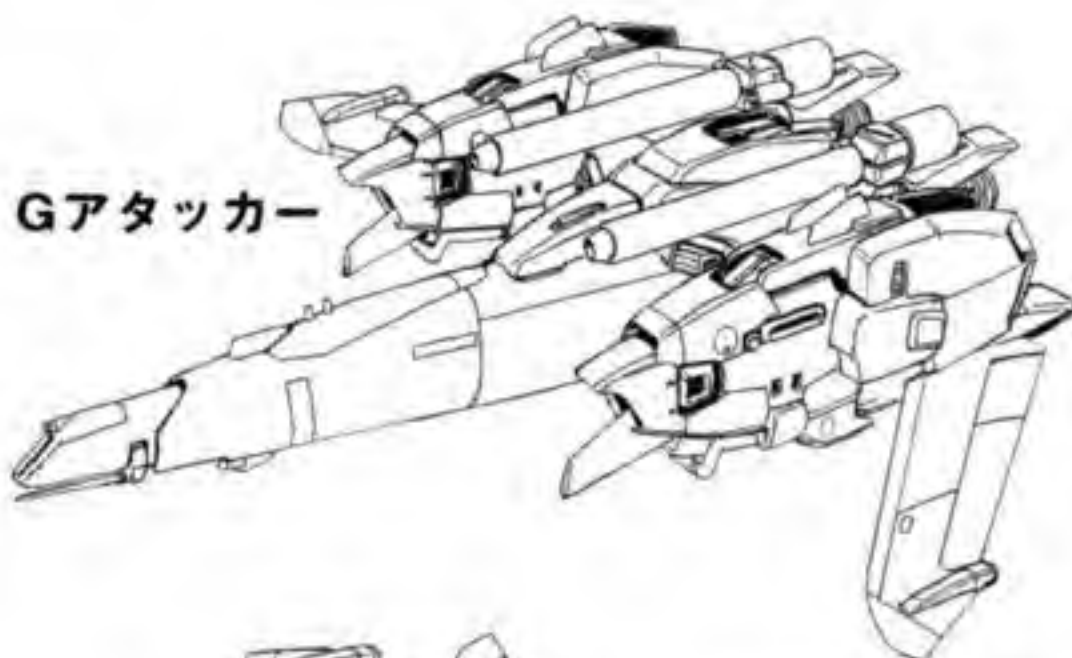




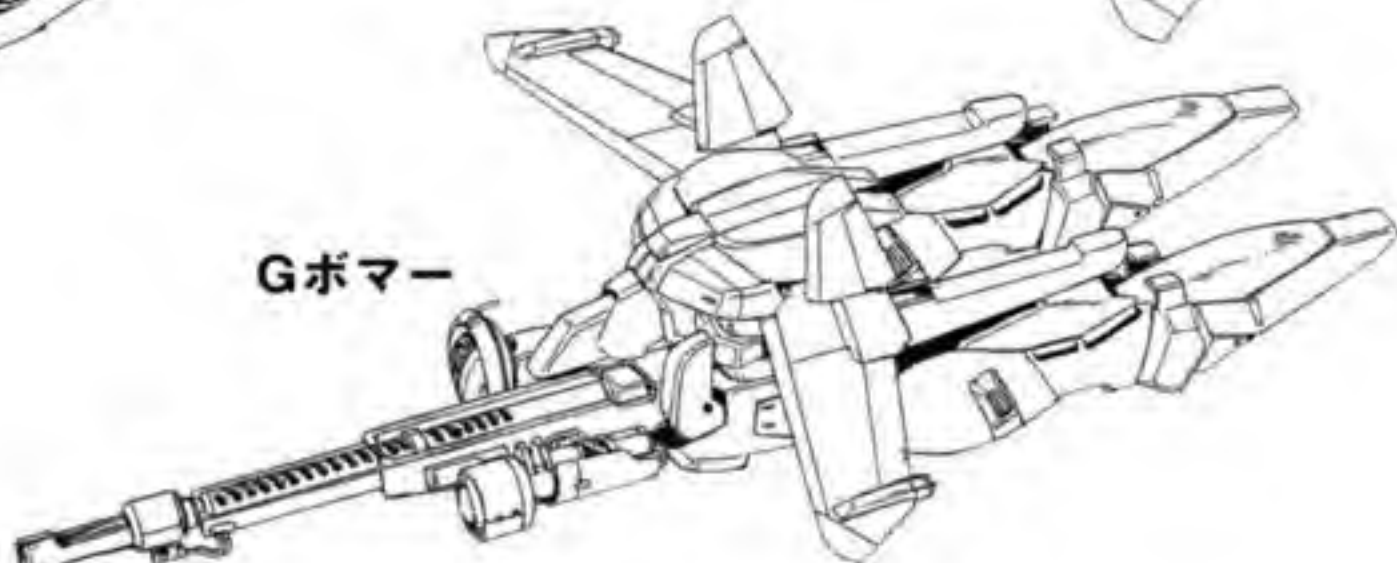
## MSA-0011 Sガンダム

ZガンダムやZZガンダムと同じく、エウーゴとアナハイム・エレクトロニクス社共同によるMS開発計画の「Z計画」で開発された合体可変MSだ。コア・ブロック・システム搭載機だが、ZZガンダムのように一人で操縦せず、3人で操作にあたる。また、サポートのために人工知能「ALICE」を搭載している。模型誌の連載『ガンダムセンチネル』に登場する主人公メカ。

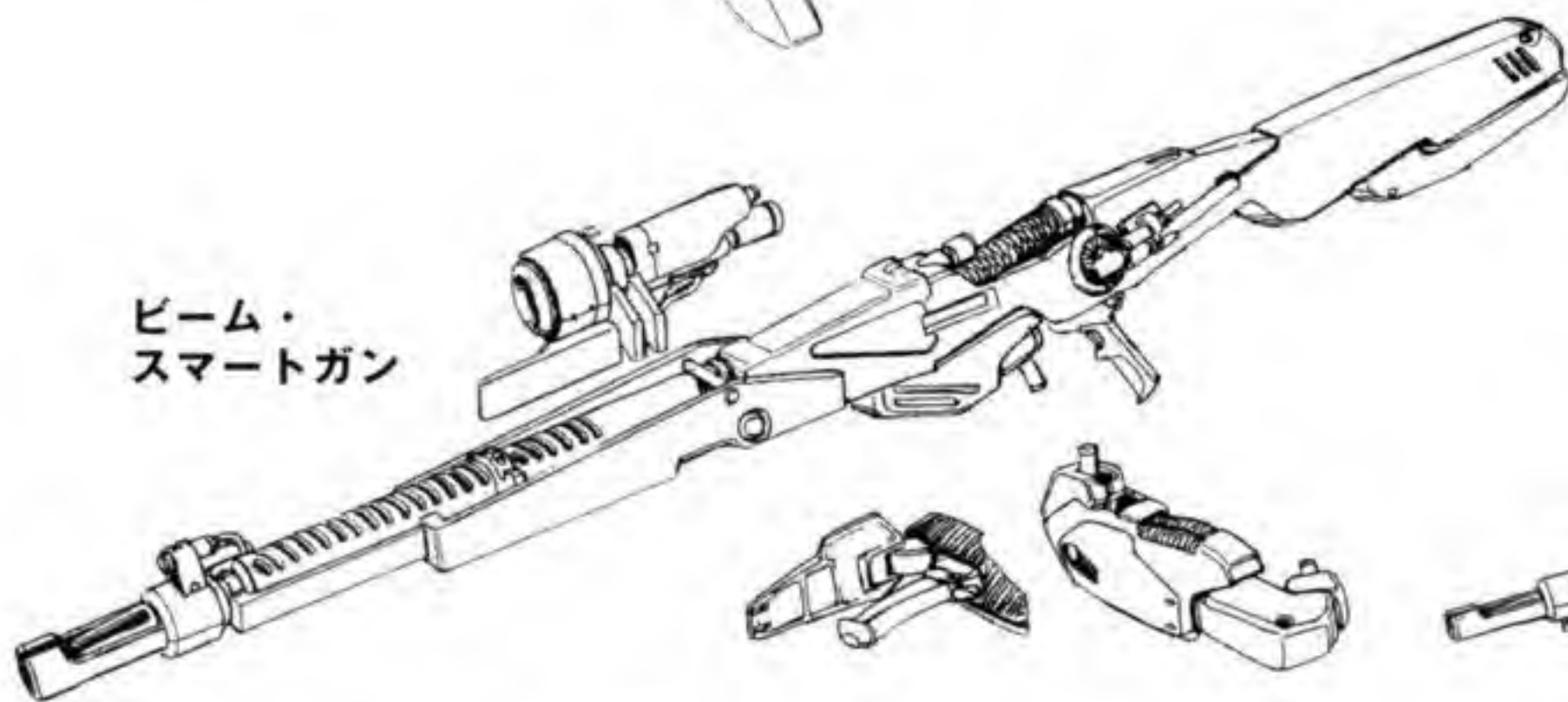
Gアタッカー



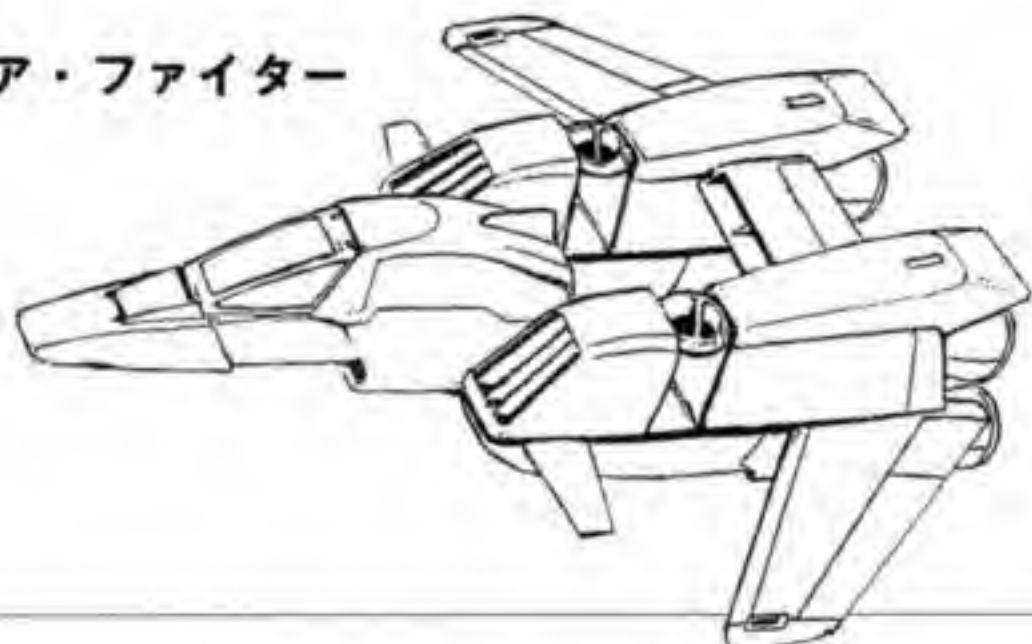
Gボマー



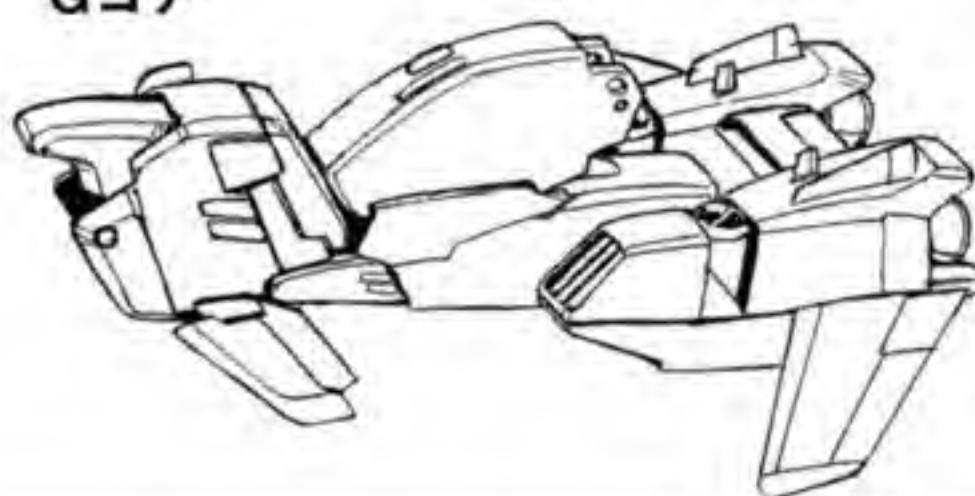
ビーム・スマートガン



コア・ファイター

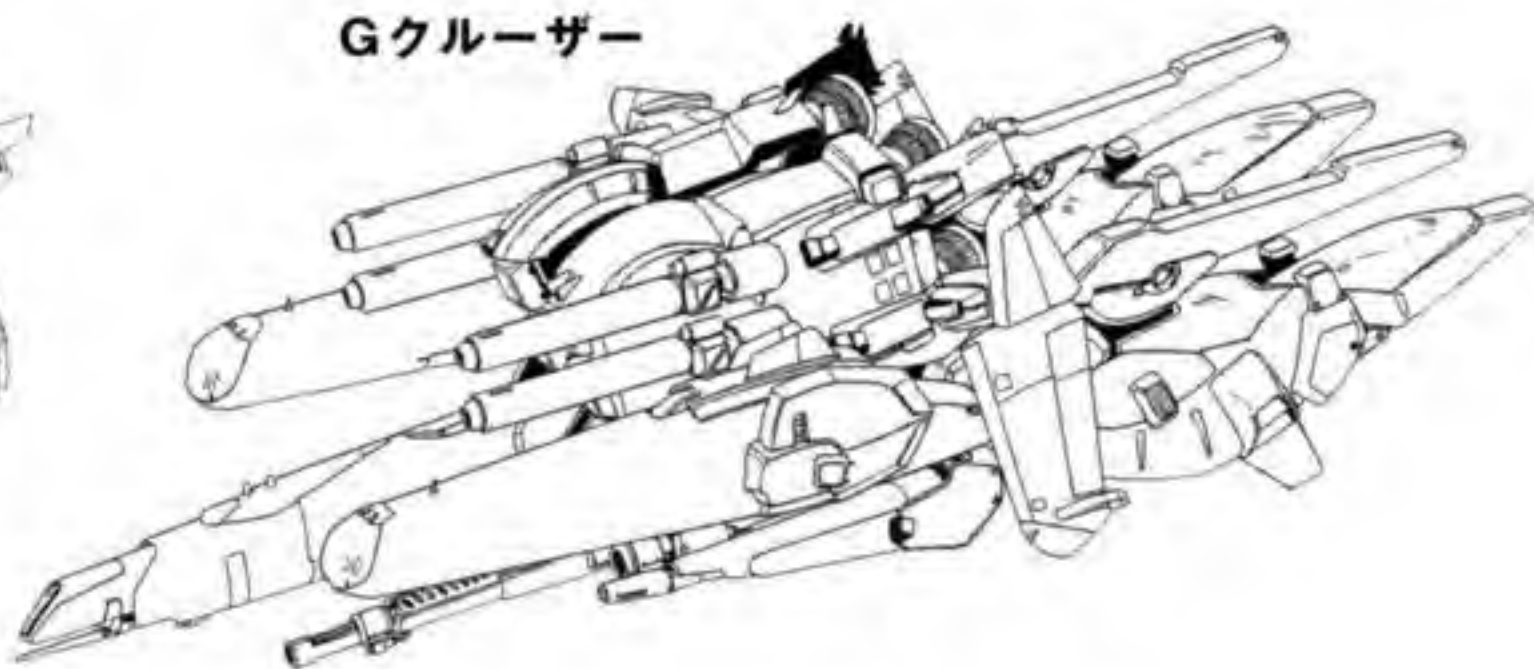


Gコア



←Sガンダムのコクピットブロックが結合した状態をGコアと呼び、機体が大破した際、ブロックごと射出され母艦へと帰投する。

Gクルーザー



## MSA-0011 [Ext] Ex-Sガンダム

Sガンダムの強化タイプ。胸部中央にはフィールド・ジェネレーターを備え、ビーム攻撃の脅威に応じて展開される。また合体機能は強化パーツにより不能だが、本体の変換機構を利用して高速巡航を行えるGクルーザーへと変形する。この形態になることで大気圏突入が可能となり月軌道から月面への降下、離脱も行えるようになる。

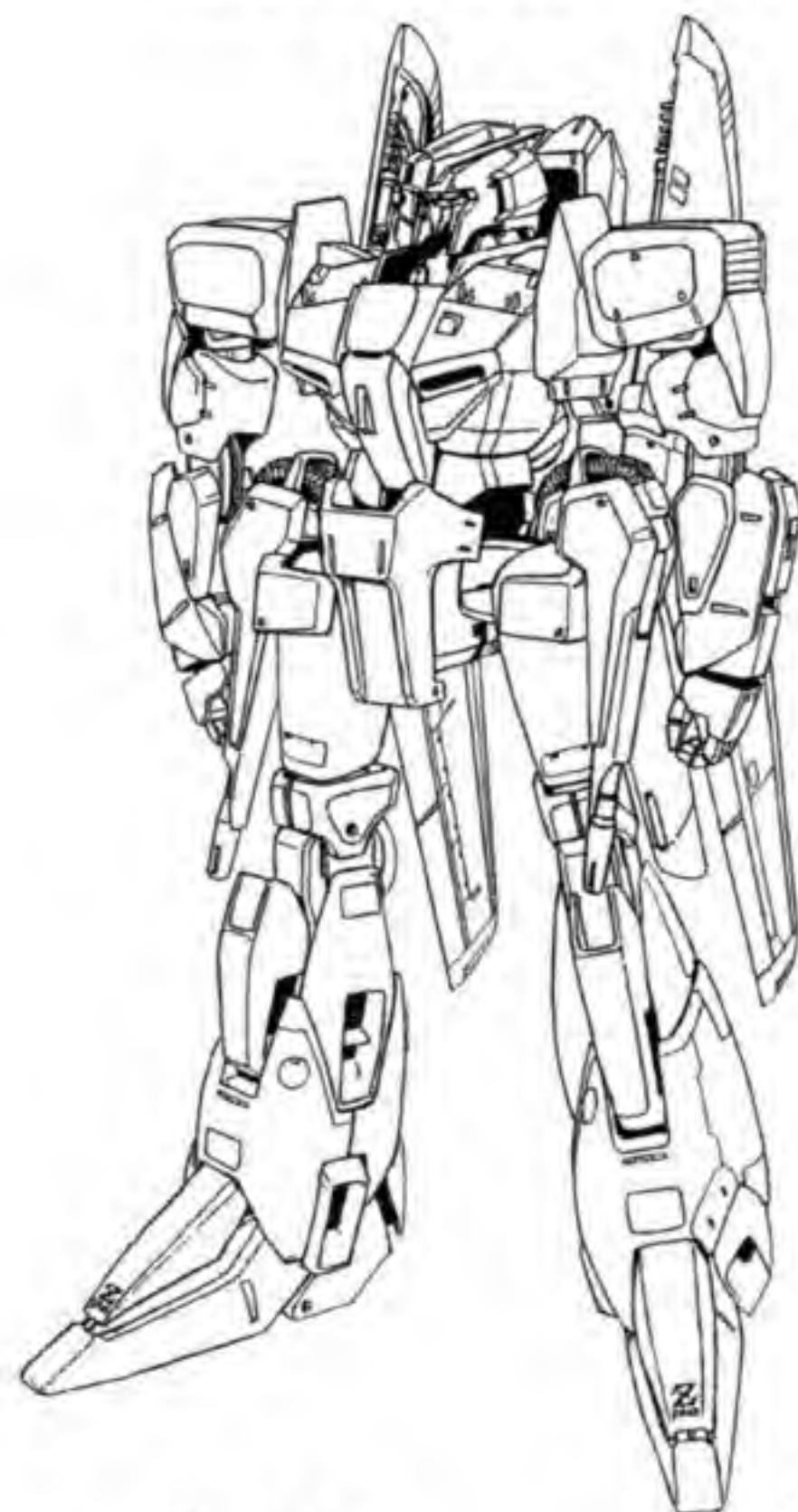




MSZ-006C / A1

## Zプラス

Zガンダムを使用用途に応じて最適化を図ったのがZプラスだが、多くの機体バリエーションが存在する。もともとはウェイブ・ライダーの機能に着目したカラバの発注でアナハイム・エレクトロニクス社が開発したという機体だ（これをA型と呼ぶ）。ウェイブ・ライダー時（右下図）、機首に備えた長距離射撃が可能となるビーム・スマートガンが特徴のC型は宇宙用で、地球連邦軍が開発を発注したという。

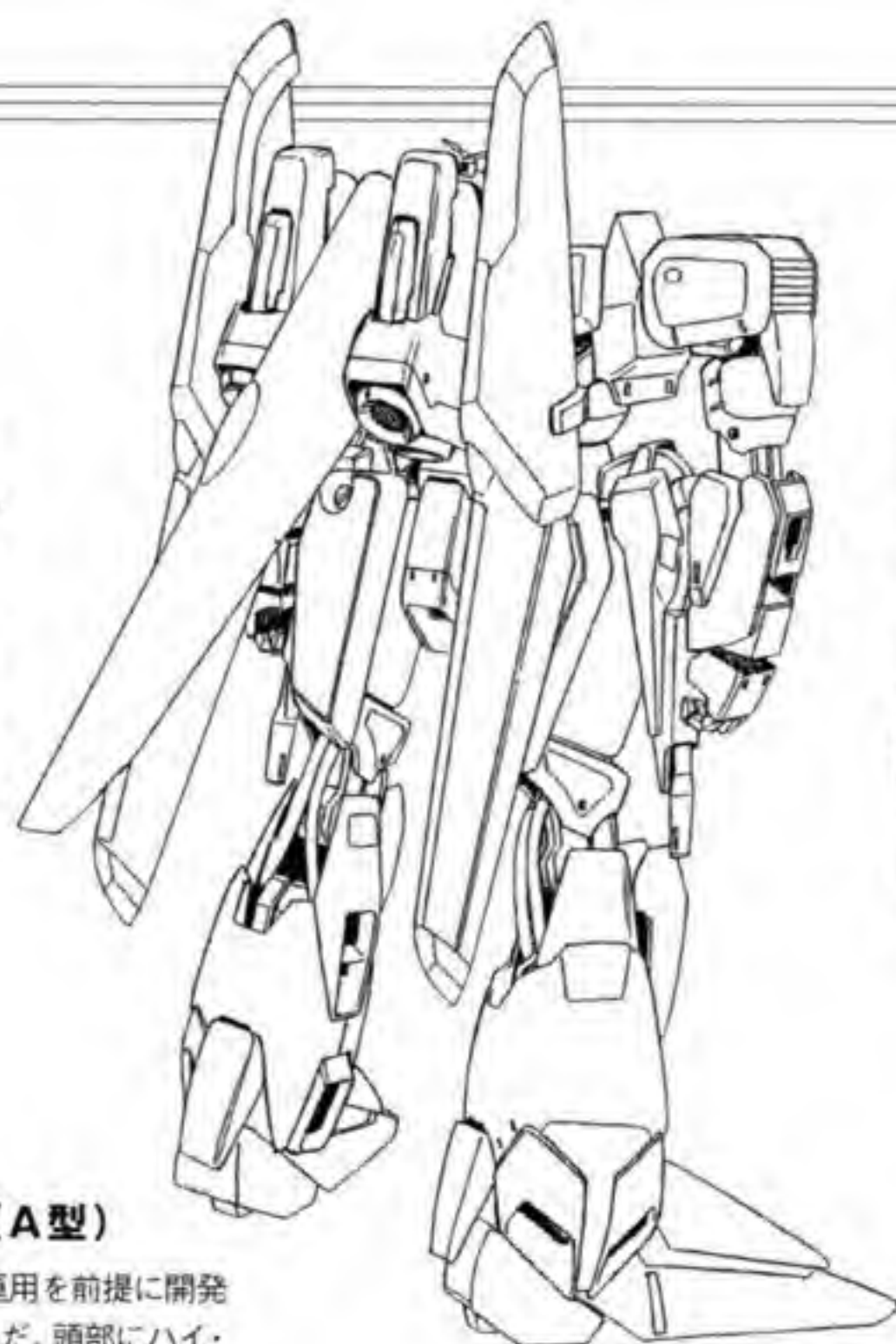


Zプラス (A型)

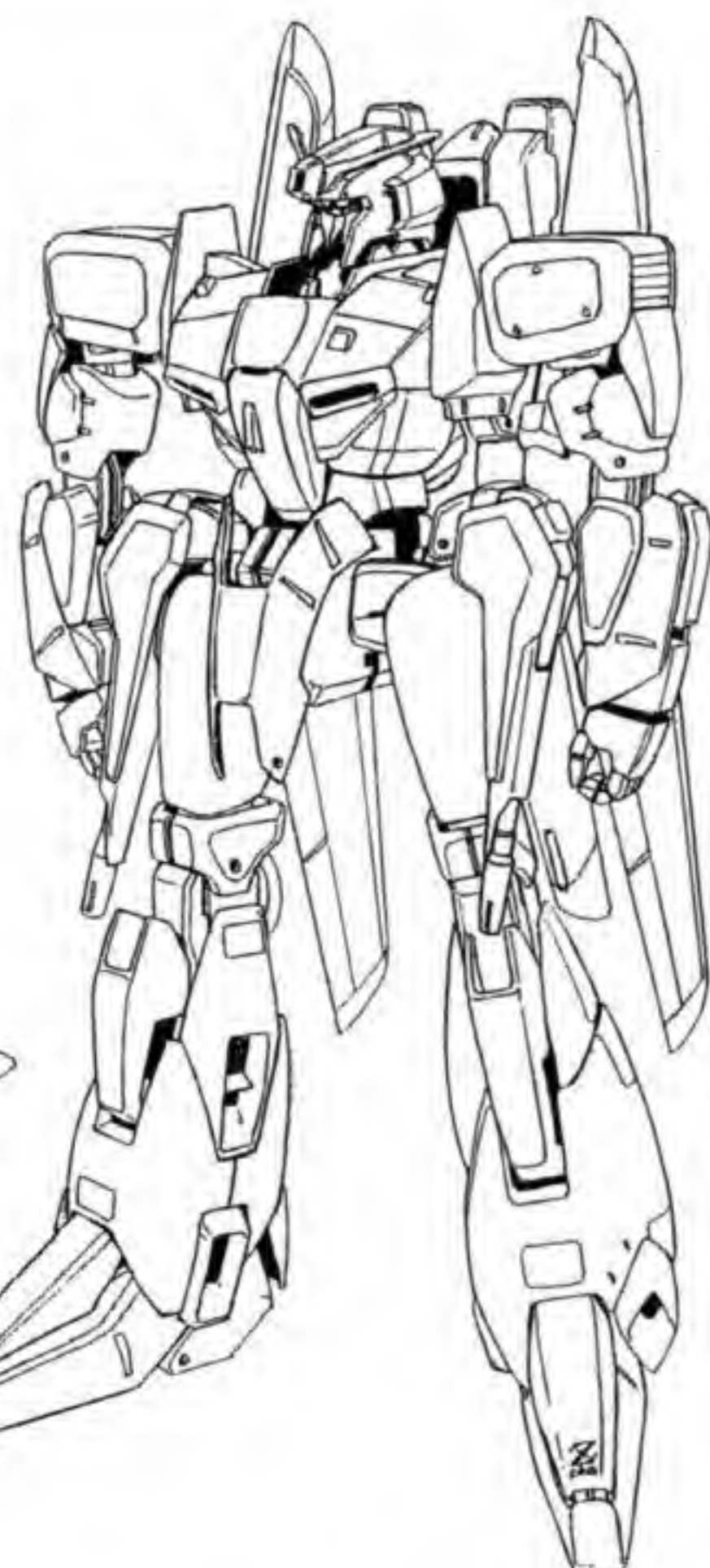
←地球圏での運用を前提に開発されたのがA型だ。頭部にハイ・メガ・キャノンを備えたタイプ（下図）はA2型で、これ以外にも多くの派生機がある。



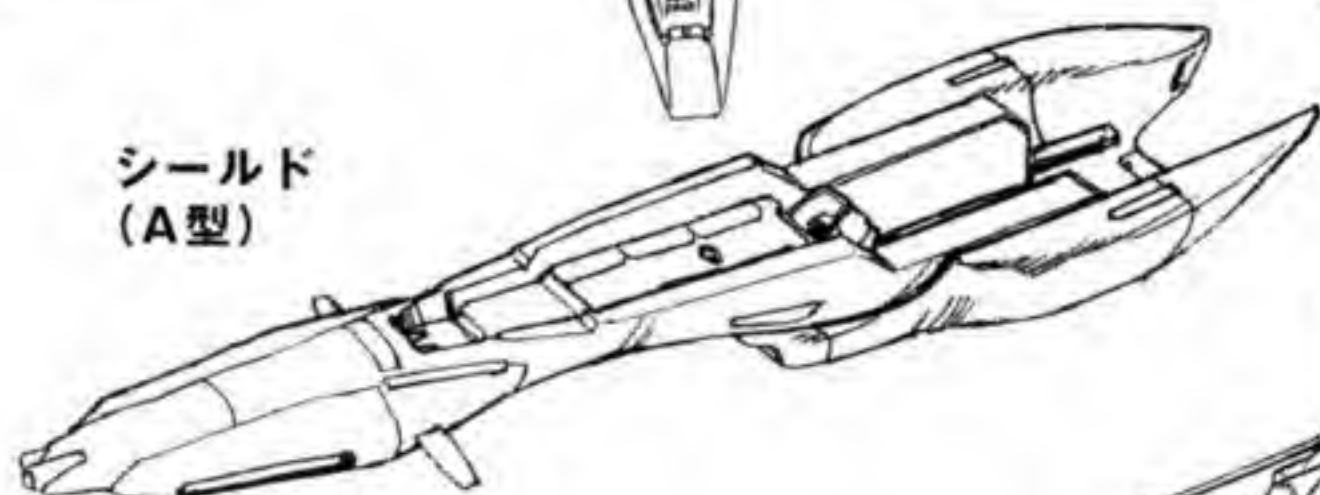
Zプラス  
A2型頭部



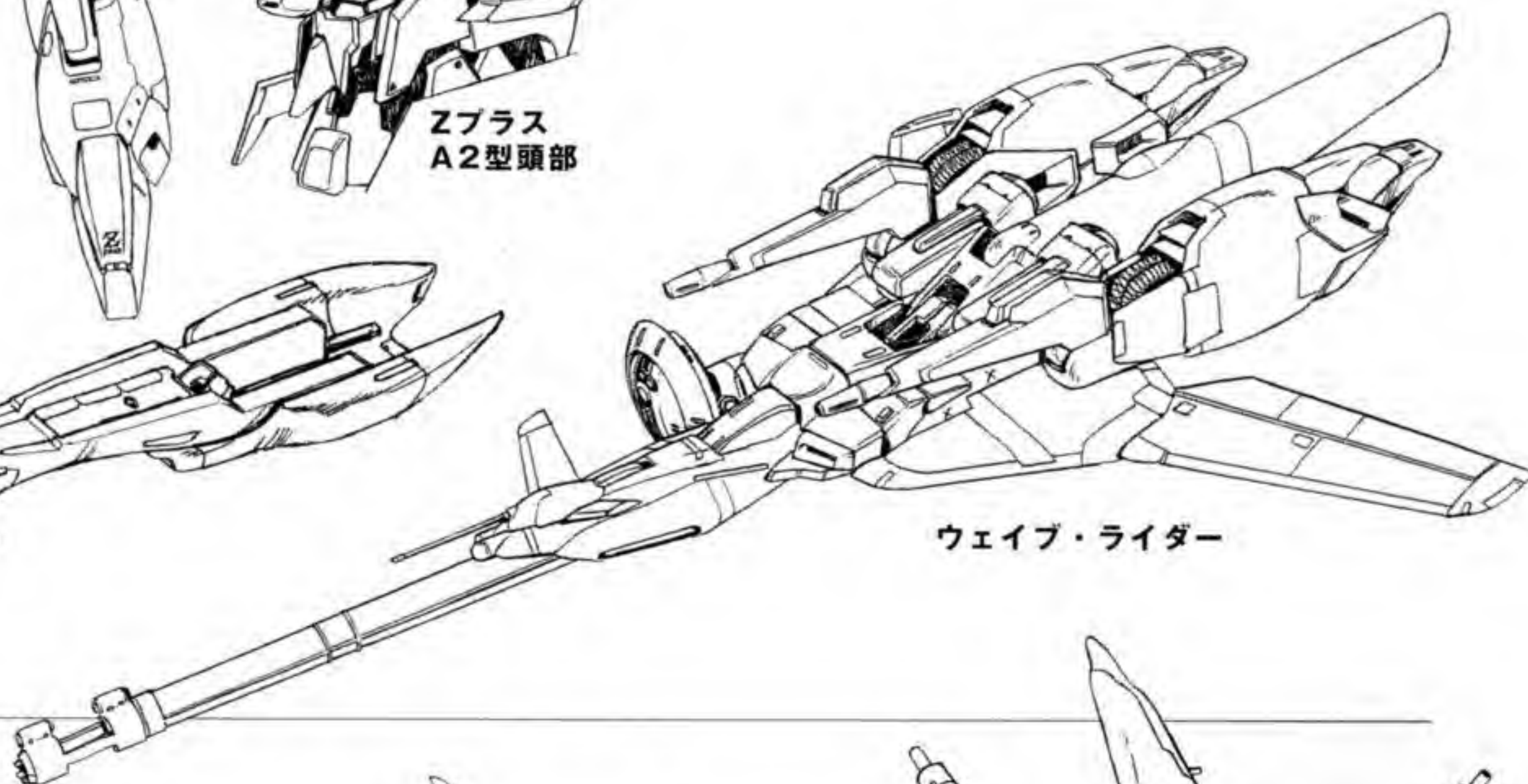
MSZ-006C1  
Zプラス (C型)



シールド  
(A型)



ウェイブ・ライダー

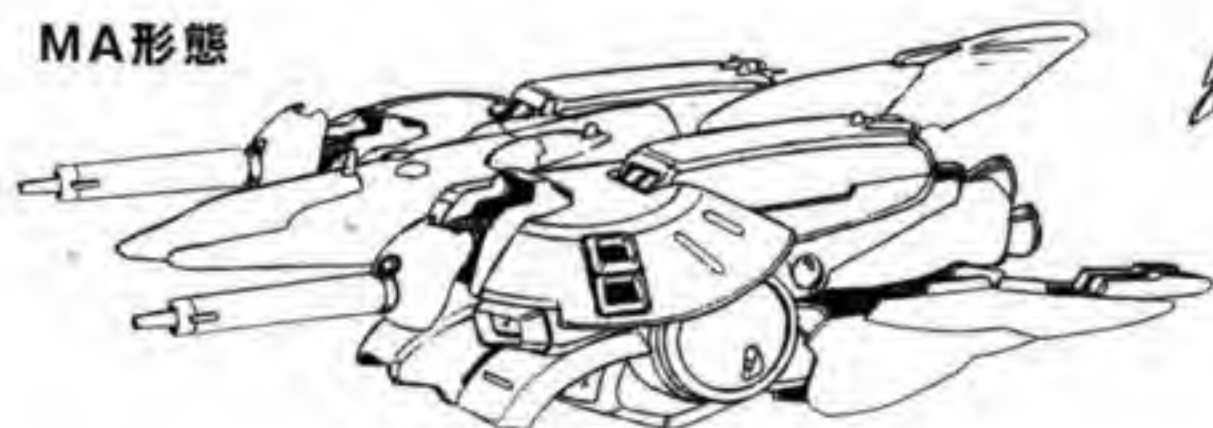


AMX-007

## ガザE

アクシズ（ネオ・ジオン）の可変MS。同陣営で運用されるガザCの発展型で、いわゆるガザシリーズの系列機である。しかし、MSの機能よりも宇宙空間における航行力の強化を主眼にしている機体のため、ナックル・バスターなどは装備していないのが特長といえる。模型誌の連載企画「ガンダムセンチネル」のみに登場するMSだったが、06年に公開の劇場版「Z Ⅲ 星の鼓動は愛」でスクリーンデビューを果たした。

MA形態





## MSZ-008

## ZII

「Z計画」により開発された可変MS。Zガンダムの後継機として開発されるが、可変機構は簡略化され、純粋な航宙戦闘機としての機能強化に注力しているため、大気圏突入能力は持っていない。MSV企画に登場する機体らしく、実機の実在については諸説あるが、14年9月にはバンダイからプラモデルとして製品化された。

## ウェイブ・ライダー



## MSA-005K

## ガンキャノン・ディテクター

カラバの開発した砲撃型の試作MS。型式番号からもわかるように、メタスの可変機構を応用し、砲撃姿勢への変形が可能。名前のガンキャノンはカラバに所属するハヤト・コバヤシが命名したとされる。11年にイベント上映などがされた『UC』「ep 4重力の井戸の底」では、連邦軍の機体として登場した。

## MSA-005S

## メタス改

メタスの改修型。エウゴから供与された機体をカラバが改良を行ったとされる。腹部のアクチュエーターパイプにはカバーを設け、防御面の脆弱性の向上を図っている。MAの機首部にあたる背部スラスタユニットにハイ・メガ・キャノンを装備する。これ自体はMS時でも射撃が可能。戦闘記録やMA形態など不明な点も多い機体である。

## ガンダムダブルフェイク アンダー・ザ・ガンダム [90年]

## AMX-003S

## ガザC改

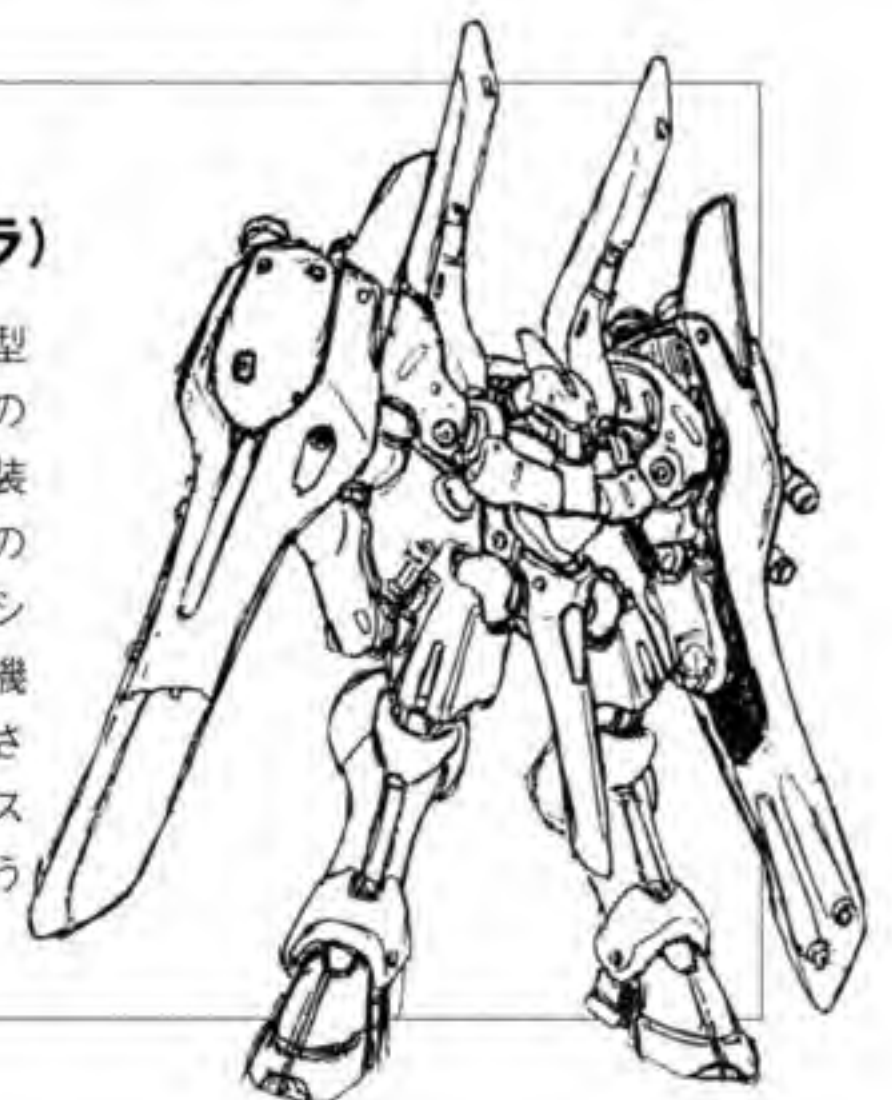
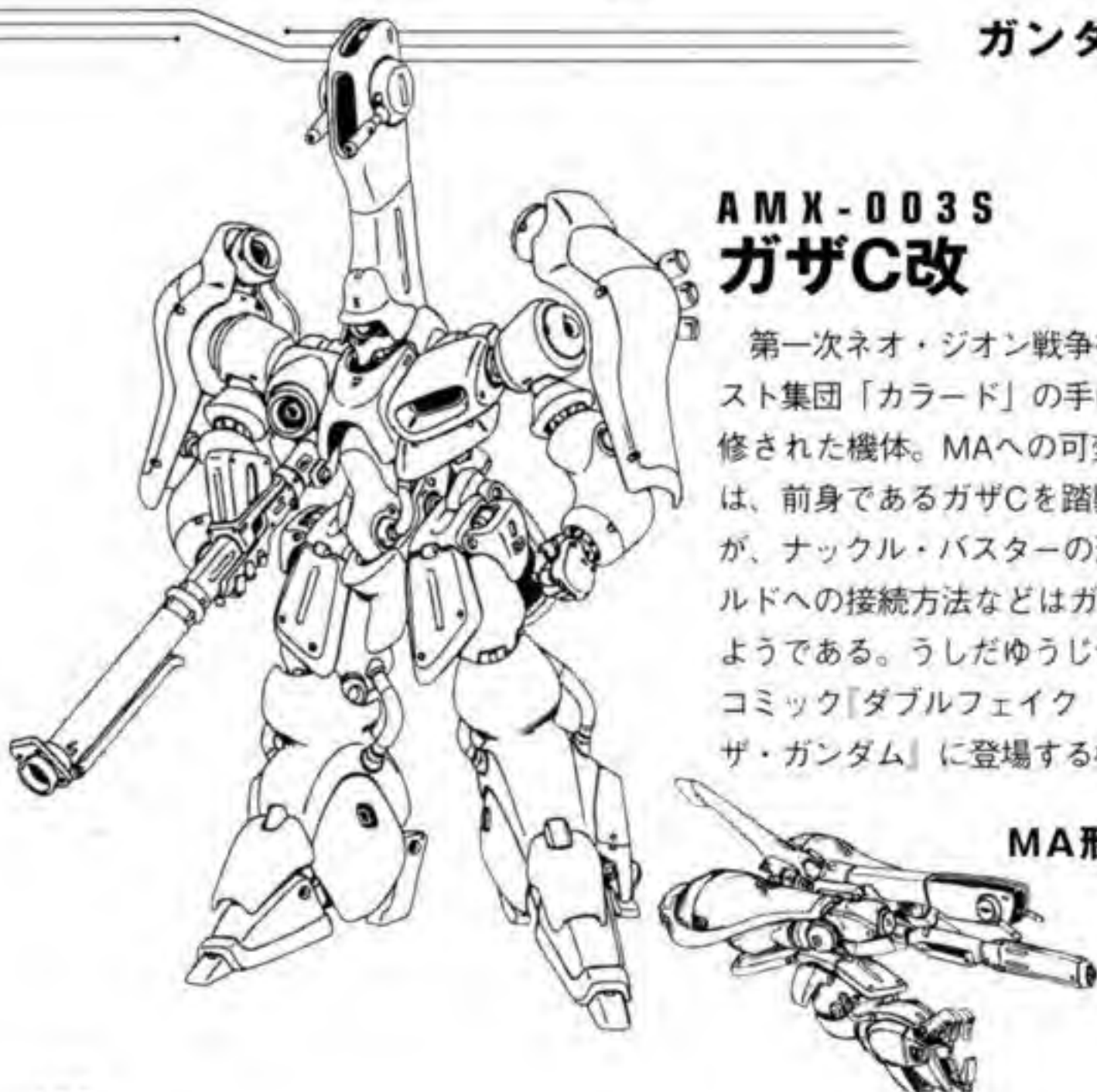
第一次ネオ・ジオン戦争後、テロリスト集団「カラード」の手によって改修された機体。MAへの可変機構などは、前身であるガザCを踏襲しているが、ナックル・バスターの形状やシールドへの接続方法などはガザDに近いようである。うしだゆうじ作画によるコミック『ダブルフェイク アンダー・ザ・ガンダム』に登場する機体だ。

## MA形態

## AMX-016

## ガザW (ウィラ)

ガザシリーズの最終型といわれる機体。両肩のシールドには多くの武装を搭載し、大気圏内での飛行も可能とされ、同シリーズとは一線を画す機体である。ここに掲載された画はガザWのラフスケッチ（デザインは、うしだゆうじ）。





	武装	※全備重量 出力	※全備重量 推力	備考
	ビーム・サーベル×6、アーム・ビームガン×2	31.95	0.68	次回作『ZZ』にも引き続き登場（第10話で退場）。
	バルカン砲×2、ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、 ハイパー・メガ・ランチャー、グレネード・ランチャー×2	30.84	0.55	ビルスーツから変形した状態はウェイブ・ライダー。 次回作『ZZ』にも引き続き登場。
	ビーム・サーベル×2、9連装ミサイル・ポッド×2、 メガ粒子砲×2、腕部クロー×2、他	18.18	0.93	可変モビルアーマー。
	大型ビーム・ライフル	31.74	0.94	可変モビルアーマー。
	ビーム・サーベル×2、メガ粒子砲×2	30.99	0.51	可変モビルアーマー。
	ビーム砲×10、拡散メガ粒子砲×3、小型メガ・ビーム砲	11.57	2.31	変モビルアーマーだが変形状態は モビルフォートレスという。ニュータイプ専用機。
	サイコミュ式ビーム・ソード×2、メガ拡散ビーム砲、 レフレクター・ビット、他	14.37	1.16	サイコ・ガンダム同様、変形状態はモビルフォートレス。 ニュータイプ専用機。『ZZ』にも登場。
	ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、脚部クロー、他	57.26	0.89	可変モビルアーマーでニュータイプ専用機。
	バルカン砲、ビーム・サーベル×2、フェダーイン・ライフル、 脚部クロー×2、他	31.22	0.45	-
	ビーム・サーベル×2、背部ビーム・ライフル×2、 フェダーイン・ライフル、海ヘビ、他	36.95	0.95	-
	ダブルバルカン、ハイパー・ビーム・サーベル、ダブル・ビーム・ライフル、 ハイ・メガ・キャノン、ダブル・キャノン、21連装ミサイル・ランチャー×2	9.32	0.68	-
	ビーム・サーベル×2、ナックル・バスター、ビーム・ガン×2	42.15	0.92	『ZZ』、『ガンダムUC』にも登場。
	ビーム・サーベル×2、ハイパー・ナックル・バスター、 ミサイル・ランチャー×4、他	31.96	0.70	『ガンダムUC』に「袖付き」仕様が登場。
	ハイパー・ナックル・バスター、9連装ミサイル・ランチャー×2、他	31.63	0.63	『ガンダムUC』に「袖付き」仕様が登場。
	ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、メガ粒子砲内蔵シールド、 ミサイル×6	28.01	0.90	『ガンダムUC』には「袖付き」仕様の 派生機が登場。
	アイアン・ネイル×2、レーザー・ビーム、ソニックブラスト、ミサイル×8	15.63	8.46	『ガンダムUC』にも登場。
	ハイ・メガ・キャノン、2連装小型ミサイル・ランチャー×2、ビーム砲×2	12.32	0.71	-
	ビーム・サーベル×2、ハイ・メガ・キャノン	25.45	0.61	-
	バルカン砲×2、ビーム・ガン、ビーム・ライフル、ビーム・キャノン×2	30.62	0.84	『ガンダムUC』に連邦軍カラーが登場。
	ビーム・サーベル、メガ・ビーム・ライフル	32.72	0.61	-
	ハイパー・ビーム・サーベル×2、ダブル・ビーム・ライフル、 ハイ・メガ・キャノン、他	8.75	0.63	-
	バルカン砲×4、ビーム・スマートガン、背部ビーム・キャノン×2、 インコム、他	10.17	0.51	-
	バルカン砲×4、ビーム・サーベル、ビーム・キャノン×2、 ビーム・スマートガン、他	22.63	0.14	-
	バルカン砲×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・キャノン×2、 ビーム・スマートガン	37.39	0.62	後にA型は『ガンダムUC』に登場。
	ビーム・サーベル×2、バインダー武装ポッド×2、ビーム・カノン×2	29.91	1.15	劇場版『Z』に登場。
	ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、 2連装グレネード・ランチャー×2、他	21.65	0.82	バック・ウェポン・システム装備。
	バルカン砲×2、ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、 グレネード・ランチャー、他	25.95	0.71	可変時の呼称はウェイブ・ライダー。
	バルカン砲×2、ビーム・サーベル、グレネード・ランチャー、 ビーム・ランチャー、他	27.25	0.71	-
	バルカン砲、ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、 シールド・ビーム・ガン、他	25.76	0.66	-
	60mmバルカン砲×2、ビーム・サーベル×2、 ムーバブル・シールド・バインダー×2、他	19.95	0.55	-
	大型アイアン・ネイル×2、大口径メガ粒子砲、 レフレクター・ビット×10、他	13.23	1.25	ニュータイプ専用機。
	ビーム・サーベル×2、ロング・メガ・バスター、 プロト・フィン・ファンネル×2、他	19.49	0.68	-
	ビーム・サーベル、ビーム・アックス、ビーム・ライフル、マシン・キャノン、 フレキシブル・ビーム・ガン、他	23.58	0.63	-
	頭部バルカン砲×2、ビーム・サーベル×4、ビーム・ライフル、 メガ・ビーム・ライフル、他	3.70	0.22	ビーム・シールド装備。アポジモーター数は34。
	頭部バルカン砲×2、ビーム・サーベル×4、 マルチプルランチャー付ビーム・ライフル、他	2.12	0.24 (実質的数値は不明)	ビーム・シールド装備。アポジモーター数は42。
	ビーム・ガン兼用ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、 ビーム・バズーカ、他	4.14	0.54	ビーム・ローター装備。アポジモーター数は30。
	ビーム・トマホーク×2、ビーム・ライフル、 4連装マルチミサイル・ポッド×2、他	3.81	0.56	ビーム・ローター装備。アポジモーター数は29。
	ショックバイト、ビーム・トマホーク×2、ビーム・ライフル、 4連マルチ・ポッド×2、他	3.34	0.26	ビーム・ローター装備。アポジモーター数は31。
	頭部ビーム・キャノン、ビーム・カッター×3、 ビーム・ネット発生器×60、他	6.17	0.24	アポジモーター数は16。
	ショット・クロー、背部大型ミサイル、背部3連魚雷ポッド×2、 ビーム・ライフル、他	4.83	0.43	アポジモーター数は6。

※作品名の見方…Zガンダム／ガンダムZZは「機動戦士Zガンダム」と「機動戦士ガンダムZZ」、MSV系は「Z-MSV」、「ZZCCA-MSV」と「M-MSV（ミッシングモビルスーツバリエーション）」、センチネルは「ガンダムセンチネル」、逆シャア／UC／UMSVは「機動戦士ガンダム 逆襲のシャア」、「機動戦士ガンダムUC」、「機動戦士ガンダムUC MSV」、Vガンダムは「機動戦士Vガンダム」を表している。



# 可変MS&MAスペック一覧

この項では本誌で扱った代表的な機体の性能を一覧にまとめた。宇宙世紀年代(U.C.)を軸に登場した映像作品、MSVなどの関連作品ごとで分類した。なお、作品名分類には略称を用いており、その詳細はページ右下の略称記号参考のこと。

年代	作品名	名称	型式番号	頭頂高／ 全高／全長 (m)	本体重量 (t)	全備重量 (t)	ジェネレーター 出力(kW)	スラスター 総推力(kg)	センサー 有効半径 (m)	装甲材質	
U.C.0087～U.C.0088	Zガンダム／ガンダムZZ	メタス	MSA-005	頭頂高 18.1m	27.8 t	52.4t	1,640kW	77,000kg	11,300m	ガンダリウム合金	
		Zガンダム	MSZ-006	頭頂高 19.8m	28.7t	62.3t	2,020kW	112,600kg	14,000m	ガンダリウム合金	
		メッサーラ	PMX-000	頭頂高 23.0m	37.3t	89.1t	4,900kW	96,000kg	11,300m	不明	
		アッシマー	NRX-044	頭頂高 19.3m	41.1t	63.8t	2,010kW	68,200kg	10,200m	チタン合金 セラミック複合材	
		ギャブラン	ORX-005	頭頂高 19.8m	50.7t	94.2t	3,040kW	183,000kg	13,000m	ガンダリウム合金	
		サイコ・ガンダム	MRX-009	頭頂高 40.0m	214.1t	388.6t	33,600kW	168,000kg	10,200m	不明	
		サイコ・ガンダム Mk-II	MRX-010	頭頂高 39.98m	187.8t	283.9t	19,760kW	244,240kg	16,230m	ガンダリウム合金	
		バウンド・ドック	NRX-055	頭頂高 27.3m	82.7t	129.4t	2,260kW	145,800kg	9,840m	ガンダリウム合金	
		ガブスレイ	RX-110	頭頂高 18.5m	32.6t	56.2t	1,800kW	125,200kg	10,900m	ガンダリウム合金	
		ハンブラビ	RX-139	頭頂高 19.9m	34.6t	56.9t	1,540kW	59,800kg	10,020m	ガンダリウム合金	
		ZZガンダム	MSZ-010	頭頂高 19.86m	32.7t	68.4t	7,340kW	101,000kg	16,200m	ガンダリウム合金	
		ガザC	AMX-003 (MMT-1)	頭頂高 18.3m	40.8t	72.5t	1,720kW	79,200kg	10,600m	ガンダリウム合金	
		ガザD	AMX-006	頭頂高 17.0m	28.7t	68.4t	2,140kW	98,200kg	10,800m	ガンダリウム合金	
		ガ・ゾウム	AMX-008	頭頂高 18.0m	31.6t	58.2t	1,840kW	92,280kg	11,200m	ガンダリウム合金	
		パウ	AMX-107	頭頂高 18.5m	34.7t	67.5t	2,410kW	75,040kg	12,200m	ガンダリウム合金	
MSV系		カプール	AMX-109	頭頂高 16.5m	38.7t	57.5t	3,680kW	ロケット総推力 6,800kg	12,300m(大気中) 7,600m(水中)	ガンダリウム合金 (二重装甲)	
		ジャムル・フィン	AMA-01X	頭頂高 15.0m	24.7t	58.5t	4,750kW	82,600kg	13,400m	ガンダリウム合金	
		メタス改	MSA-005S	頭頂高 18.3m	34.9t	50.9t	2,000kW	83,000kg	12,000m	ガンダリウム合金	
		ガンキャノン・ ディテクター	MSA-005K	頭頂高 18.5m	34.5t	54.5t	1,780kW	64,600kg	9,200m	ガンダリウム合金	
		ZⅡ (ゼッツー)	MSZ-008	頭頂高 18.3m	不明	69.7t	2,130kW	114,300kg	14,000m	ガンダリウム合金	
センチネル		プロトタイプ ZZガンダム	MSZ-009 (B)	頭頂高 19.02m	31.7t (A型29.5t)	63.0t (A型60.3t)	7,200kW (A型3,140kW)	100,300kg	15,480m	ガンダリウム合金	
		Sガンダム	MSA-0011	頭頂高 21.73m	38.4t	73.0t	7,180kW	143,600kg	18,800m	ガンダリウム・ コンボジット	
		Ex-Sガンダム	MSA-0011 [Ext]	頭頂高 21.3m	69.4t	162.5t	7,180kW	1,182,000kg	18,800m	ガンダリウム・ コンボジット	
		Zプラス (C型)	MSZ-006C1	頭頂高 19.86m	36.18t	77.4t	2,070kW	124,200kg	21,000m	ガンダリウム合金	
		ガザE	AMX-007	頭頂高 16.29m	34.8t	68.2t	2,280kW	59,300kg	11,690m	—	
逆シャア／U.C.0093～U.C.0096	逆シャア／U.C.0093～U.C.0096	リ・ガズィ	RGZ-91	頭頂高 20.5m	24.7t	55.2t	2,550kW	67,600kg	18,900m	ガンダリウム合金	
		リゼル	RGZ-95	頭頂高 20.5m	25.8t	57.6t	2,220kW	81,500kg	14,920m	ガンダリウム合金	
		リゼル (隊長機／C型)	RGZ-95C	頭頂高 20.5m	27.0t	60.5t	2,220kW	85,400kg	14,920m	ガンダリウム合金	
		デルタプラス	MSN-001A1	頭頂高 19.6m	27.2t	60.8t	2,360kW	92,400kg	16,200m	ガンダリウム合金	
		アンクシャ	RAS-96	頭頂高 22.3m	28.3t	43.9t	2,200kW	79,600kg	14,200m	ガンダリウム合金	
		シャンプロ	AMA-X7	全高 31.8m(陸上機形態時) 全長 77.8m(水中巡航時)	196.8t	283.9t	21,460kW	226,480kg	12,800m(陸上) 240,000m(ソナー・水中)	ガンダリウム合金	
		ガンダムデルタカイ	MSN-001K	頭頂高 19.6m	28.0t	68.6t	3,520kW	101,500kg	16,200m	ガンダリウム合金	
		リバウ	AMX-107R	頭頂高 19.6m	40.4t	71.2t	3,020kW	112,240kg	20,300m	ガンダリウム合金	
Vガンダム -U.C.0153	Vガンダム	ヴィクトリー ガンダム	LM312V04	頭頂高 15.2m	7.6t	17.7t	4,780kW	79,700kg	—	ガンダリウム合金 スーパーセラミック複合材	
		V2ガンダム	LM314V21	頭頂高 15.5m	11.5t	15.9t	7,510kW	66,790kg+ミノフスキー ドライブ(計測不能)	—	ガンダリウム合金 スーパーセラミック複合材	
		ゾロ	ZM-S08G	頭頂高 14.8m	8.9t	21.2t	5,120kW	39,040kg	—	チタン合金 ネオセラミック複合材	
		トムリアット	ZM-S09G	頭頂高 15.0m	8.6t	20.7t	5,440kW	36,940kg	—	チタン合金 ネオセラミック複合材	
		ドムットリア	ZM-S27G	頭頂高 14.8m	8.2t	19.9t	5,960kW	75,820kg	—	ハイチタン合金 ネオセラミック複合材	
		アビゴル	ZM-D11S	頭頂高 22.6m	18.4t	45.3t	7,340kW	185,740kg	—	ハイチタン合金 ネオセラミック複合材	
		ガルグイユ	ZMT-D15M	頭頂高 14.2m	9.8t	26.2t	5,420kW	60,260kg	—	チタン合金 ネオセラミック複合材	

※あくまで目安でしかないが全備重量／出力の比は、数値が低ければ実質的なパワーがあり、全備重量／推力の比は、低い数値ならば機動性が高い(速い)と考えられる。  
 どちらの数値もkg換算で計算している。



# グレートメカニック&関連書籍シリーズ

## グレートメカニックG 2015 WINTER

A4サイズ/定価1,000円+税



**大特集**  
**機動戦士ガンダム 鉄血のオルフェンズ**  
海老川兼武&鷲尾直広が語るMSデザインの秘密

劇場版 ガルバンまつり!

- マクロスΔ
  - 機動戦士ガンダム サンダーボルト
  - コードギアス 亡国のアキト
  - 機動戦士ガンダム THE ORIGIN
  - コンクリート・レボルティオ〜超人幻想〜
  - コメット・ルシファー
  - INTERVIEWS
- 赤根和樹/會川昇/河森正治/菊地康仁 他



## グレートメカニックG 2015 AUTUMN

A4サイズ/定価1,000円+税



### 機動戦士ガンダム 鉄血のオルフェンズ プレビュー

35周年! ガンプラ大特集!

秋の河森正治メカまつり!

- 超時空要塞マクロス
- 新世紀GPXサイバーフォーミュラ
- 機動戦士ガンダム THE ORIGIN
- ガンダムビルドファイターズトライ
- コードギアス 亡国のアキト
- コンクリート・レボルティオ〜超人幻想〜
- コメット・ルシファー

## グレートメカニックG 2015 SUMMER

A4サイズ/定価1,000円+税



### 『ガンダム Gのレコンギスタ』完結! 富野由悠季 Gレコを語る!!

- 超時空要塞マクロス 魂のアーマード バルキリー大特集!
  - 機動戦士ガンダム THE ORIGIN
  - コードギアス 亡国のアキト
  - 攻殻機動隊 新劇場版
  - 翠星のガルガンティア 〜めぐる航路、遥か〜
  - アクエリオンロギス
  - INTERVIEWS
- 河森正治/今西隆志/村田和也 他

## グレートメカニックG 2015 SPRING

A4サイズ/定価1,000円+税



### 機動戦士ガンダム THE ORIGIN

- ガンダムビルドファイターズトライ
  - ガンダムGのレコンギスタ
  - 聖戦士ダンバイン
  - 魂のドラムロ大特集! 宮武一貴 インタビュー
  - コードギアス 亡国のアキト
  - 白銀の意思 アルジェヴォルン
  - クロスアンジュ 天使と竜の輪舞
  - テンカイナイト
  - INTERVIEWS
- 今西隆志/大槻敦史/柳瀬敬之 他

バックナンバーをご希望の方は、お近くの書店にご注文ください。

## 双葉社

〒162-8540  
東京都新宿区東五軒町3-28  
☎ 03-5261-4818 (営業)  
<http://www.futabasha.co.jp/>  
(双葉社の書籍・コミック・ムックが買えます)

※書店・HP以外に、電話・FAX・はがきでもご購入いただけます。  
ブックサービス (営業時間: 9~18時)

- 電話 : 0120-29-9625 (携帯電話も可)
- FAX : 0120-29-9635

いずれの場合も「社名(双葉社)、タイトル、購入冊数、定価および住所、氏名、電話番号」をお知らせください。



# Mobile Suit Gundam UC Mechanic&World ep 1-3 / ep 4-6 / ep 7

グレートメカニックススペシャル

機動戦士ガンダムUC メカニック&ワールド  
ep 1-3 / ep 4-6 / ep 7



A4判カバー付／定価各1,600円+税

## 宇宙世紀の 最新モード

『機動戦士ガンダムUC』を完全解説



# Gundam Build Fighters

Gunpla Mechanics & Animation Art Work

グレートメカニックススペシャル

ガンダムビルドファイターズ

ガンブラメカニックス&アニメーション・アートワーク



A4判カバー付／定価2,000円+税

## 激闘のガンブラバトルの 猛者たちが 再び集結!?



# Mobile Suit Gundam AGE Mechanic&World

グレートメカニックススペシャル

機動戦士ガンダムAGE  
メカニック&ワールド

A4判カバー付／定価1,900円+税

## A.G.という世界、 百年の物語の モビルスーツたち



# Gundam SEED C.E. Mechanic& The World

グレートメカニックススペシャル

機動戦士ガンダムSEED  
コスミック・イラ  
メカニック&ワールド

A4判カバー付／定価2,500円+税

## 第一次連合・ プラント大戦 メカニックと世界完全ガイド!

### グレートメカニック・スペシャル モビルスーツ全集



#### モビルスーツ全集 ① RGM-79 ジムBOOK

B5判カバー付  
定価1,200円+税



#### モビルスーツ全集 ② 水陸両用モビルスーツ BOOK

B5判カバー付  
定価1,400円+税



#### モビルスーツ全集 ③ MS-06 ザクBOOK

B5判カバー付  
定価1,400円+税



#### モビルスーツ全集 ④ MS-07/09 グフ&ドムBOOK

B5判カバー付  
定価1,400円+税



#### モビルスーツ全集 ⑨ ニュータイプ専用 モビルスーツBOOK

B5判カバー付  
定価1,400円+税



#### モビルスーツ全集 ⑤ RX-78 ガンダム& V作戦BOOK

B5判カバー付  
定価1,400円+税



#### モビルスーツ全集 ⑥ MS-14 ゲルググ& ジオン特殊機BOOK

B5判カバー付  
定価1,400円+税



#### モビルスーツ全集 ⑦ Z計画&アナハイム・ エレクトロニクス社製 モビルスーツBOOK

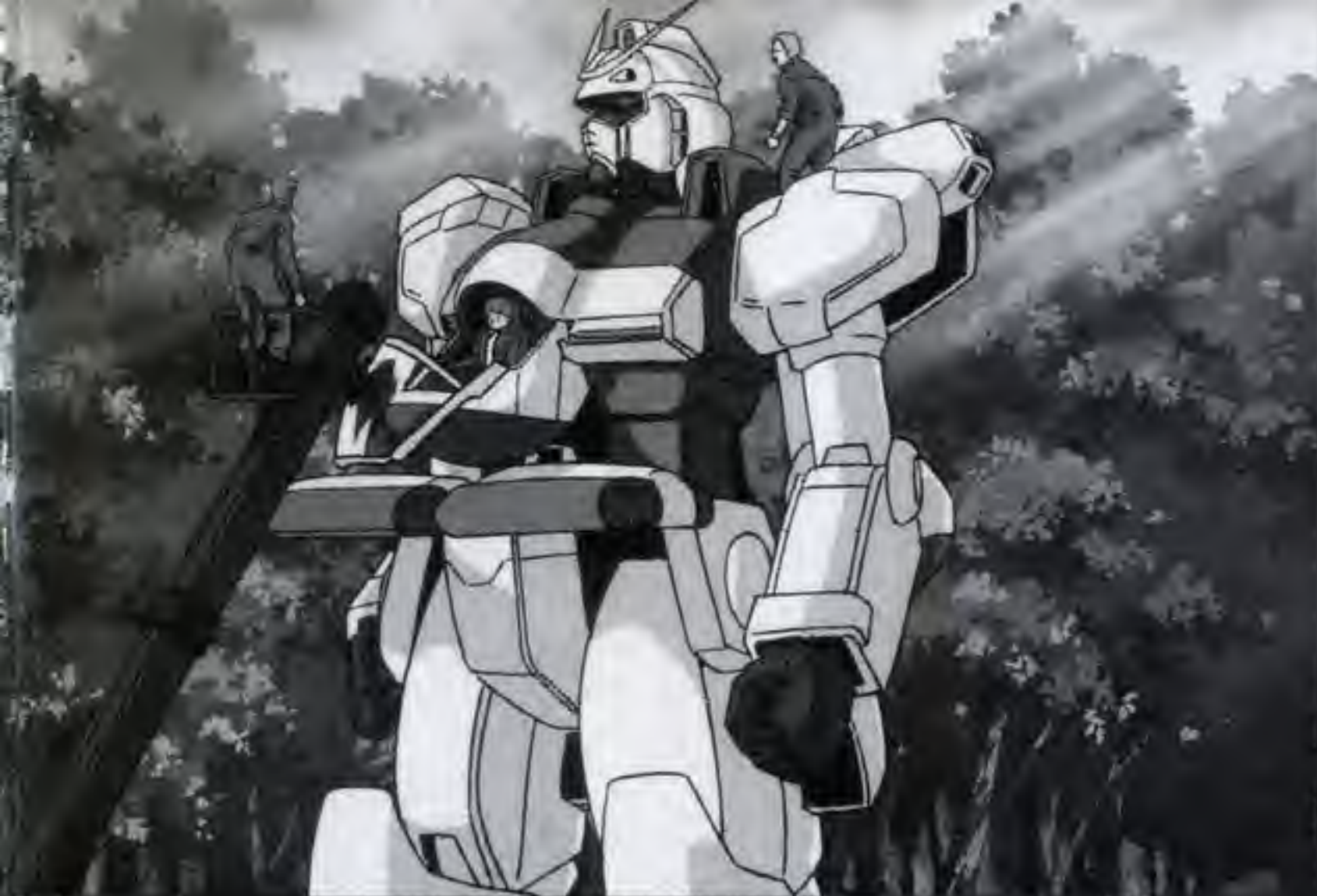
B5判カバー付  
定価1,400円+税



#### モビルスーツ全集 ⑧ U.C.0083-U.C.0096 ネオ・ジオン製 モビルスーツBOOK

B5判カバー付  
定価1,400円+税





#### 編集

オフィスJ.B

旭和則（双葉社）

#### 執筆

河合宏之

星★馨介

市ヶ谷ハジメ

南波健一郎

やすゆきゆたか

#### 表紙／本文イラスト

森下直親

#### 本文MSイラスト

船越裕

#### デジラマ

Robographer

#### Art Director

成富英俊

(I'll Products)

#### Designer

園田茜

鶴田裕樹

森屋珠音

谷村風沙

(I'll Products)

#### スーパーバイザー

山崎努

#### 協力

(株)バンダイ ホビー事業部

#### 監修・協力

(株)サンライズ

双葉社MOOK

グレートメカニック・スペシャル

モビルスーツ全集⑩

## 可変モビルスーツ／ モビルアーマー BOOK

2016年3月9日発行

編集人 二之宮隆

発行人 稲垣潔

発行所 株式会社双葉社

〒162-8540

東京都新宿区東五軒町3-28

営業☎03-5261-4818

編集☎03-5261-4869

<http://www.futabasha.co.jp/>

（双葉社の書籍・コミック・ムックが買えます）

印刷所 三晃印刷株式会社

製本所 株式会社若林製本工場

※落丁・乱丁の場合は送料双葉社負担でお取り替えいたします。「製作部」あてにお送りください。ただし、古書店で購入したものについてはお取り替えできません。

☎03-5261-4822（製作部）

※本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製・転載は著作権法上の例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。

※定価はカバーに表示してあります。

©創通・サンライズ

©FUTABASHA 2016 Printed in Japan









©創通・サンライズ

定価： **本体1400円** +税

雑誌63982-70  
Printed in Japan ©Futabasha 2016

ISBN978-4-575-46493-1  
C9476 ¥1400E



9784575464931



1929476014009





©創通・サンライズ

定価： 本体1400円 + 税

雑誌63982-70  
Printed in Japan ©Futabasha 2016

ISBN978-4-575-46493-1  
C9476 ¥1400E



9784575464931



1929476014009